

研究成果報告 2019 年度

都市文明の本質

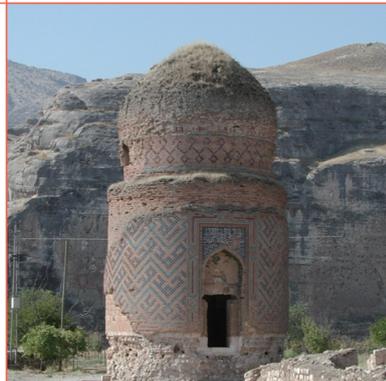
The Essence of Urban Civilization

古代西アジアにおける都市の発生と変容の学際研究

An Interdisciplinary Study of the Origin and Transformation of Ancient West Asian Cities



2



山田重郎 編

表紙写真

石製スタンプ印章（シリア新石器時代：テル・エル・ケルク遺跡）（左上）

アルプス山脈の褶曲構造（イラン）（右上）

ゼイネル・ベイ廟（トルコ 15 世紀・ハッサンケイフ遺跡）（下）

科研費新学術領域研究

都市文明の本質：

古代西アジアにおける都市の発生と変容の学際研究

2

研究成果報告 2019 年度

山田重郎 編

2020 年 3 月

例言

本書は、文部科学省科学研究費補助金新学術領域研究（研究領域提案型）平成 30 年度～ 34 年度「都市文明の本質：古代西アジアにおける都市の発生と変容の学際研究」による 2019 年度研究成果報告書である。

文部科学省科学研究費補助金新学術領域研究（研究領域提案型）平成 30 年度～平成 34 年度
「都市文明の本質：古代西アジアにおける都市の発生と変容の学際研究」

領域略称名：西アジア都市

領域番号：5001

領域代表者：山田重郎（筑波大学人文社会系）

URL: <http://rcwasia.hass.tsukuba.ac.jp/city/>

MEXT Grant-in-Aid for Scientific Research on Innovative Areas 2018-2022

The Essence of Urban Civilization: An Interdisciplinary Study of the Origin and Transformation of Ancient West Asian Cities

Number of Research Area: 5001

Head Investigator: Shigeo Yamada (University of Tsukuba, Faculty of Humanities and Social Sciences)

URL: http://rcwasia.hass.tsukuba.ac.jp/city_EN

目 次

都市文明の本質：古代西アジアにおける都市の発生と変容の学際研究 2019年度年次報告書 巻頭言	山田重郎	1
--	------	---

A01 計画研究 01 西アジア先史時代における生業と社会構造

ハッサンケイフ・ホユック遺跡周辺の地質	久田健一郎	7
新石器時代のシンボリズム —ハッサンケイフ・ホユック遺跡出土資料を中心に—	三宅 裕	13
象徴の容器としての土器と石製容器 —テル・エル・ケルクの事例にもとづいて—	常木 晃	21
新石器革命、“Broad spectrum revolution”、定住、栽培化、家畜化	本郷一美	31
西アジア新石器時代の食物共有と埋葬 —人骨の安定同位体比分析による食性還元—	板橋 悠	39
日本初の皮性小麦品種「発掘のごほうび（デュラムコムギ）」の 収穫後調整方法に関するメモ	丹野研一	45
地中海世界の脱穀櫓	有村 誠	51
イラク・クルディスタン地方シャカル・テペ遺跡出土石器の検討	前田 修	57

A02 計画研究 02 古代西アジアにおける都市の景観と機能

古代西アジア都市の景観と構造	三津間康幸	67
ユーフラテス川中流の氾濫原に建設された古代都市マリ —発掘調査からわかる都市マリの景観と歴史—	中田一郎	73
エマル・エカルテ文書における財産相続用語 <i>kašādu</i>	山田雅道	87
都市・行政州・領土：アッシリア先帝国期における国家形成と領土支配 — 研究途上の覚書—	山田重郎	103
To a Distant Place: the Sebetu in the City, the Steppe, and the Service of the King	Gina Konstantopoulos	117

A02 計画研究 03 古代エジプトにおける都市の景観と構造

計画研究 03「古代エジプトにおける都市の景観と構造」 2019 年度活動報告	近藤二郎・河合 望	131
新王国時代の文字資料にみられる「居住地」の呼称について	内田杉彦	145
エジプト地方都市の通時的盛衰 —アコリスの場合—	周藤芳幸	151
マルカタ都市王宮における景観と構造	西本真一	157

B01 計画研究 04 古代西アジアをめぐる水と土と都市の相生・相克と都市鉱山の起源

アイソスケープと考古学	中野孝教	163
古代西アジアにおける金属利用と都市鉱山の起源に関する 基礎的検討	黒澤正紀・池端 慶・荒川洋二	173
イラン 8 都市の月別降水の化学組成	横尾頼子・浅井公輔・堀井彩衣・濱口弘平 申 基澈・安間 了・メラバニ シバ	181
イラン北西部アリ・サドル洞窟のつらら石の U/Th 年代、 ¹⁴ C 年代、炭素・酸素安定同位体比	堀川恵司・南 雅代・安間 了	187
イラク国北部 Jarmo 遺跡およびトルコ国南東部 Hasankeyf 遺跡 出土の石器材黒曜石の化学組成と原産地推定	安間 了・常木 晃・三宅 裕	197

C01 計画研究 05 中世から近代の西アジア・イスラーム都市の構造に関する歴史学的研究

近世イランの王都の中のキャラバンサライ —『イスファハーンのキャラバンサライ案内』を中心に—	守川知子	207
マムルーク朝時代のアインターブ —アイニー兄弟の「自己語り」を通して—	中町信孝	223

C01 計画研究 06 西アジア地域の都市空間の重層性に関する計画論的研究

オールド・ダマスカスの重層的空間と観光ルート	松原康介	237
カッパドキア遺跡におけるビザンティン壁画の技法材料とヴァンダリズム	谷口陽子	253

都市におけるモノのエージェンシーに関するノート —イスタンブルの耐震都市再開発プロジェクトを事例に—	木村周平	259
オスマン都市史・建築史に関する 2019 年の成果報告	川本智史	271
Khiva: An Islamic City	塩谷哲史	277
アンタルヤ旧市街カレイチ (Kaleiçi) における文化遺産保護をめぐる動き	田中英資	281
Fayçal Mokhtari 氏講演 “The Political and social change in Algeria before and after Arab spring” (議事録)	渡邊祥子	295
2019 年度に開催した研究会・シンポジウム・講演会		297

平成 30-34 年度 文部科学省科学研究費補助金「新学術領域研究（研究領域提案型）」
都市文明の本質：古代西アジアにおける都市の発生と変容の学際研究

研究組織

領域代表

山田 重郎（筑波大学人文社会系・教授）

総括班「西アジア都市文明論」

山田 重郎（全体の統括・研究連携支援）

安間 了（編集・出版活動）

黒澤 正紀（編集・出版活動）

近藤 二郎（広報・教育活動）

柴田 大輔（研究会・シンポジウム企画）

谷口 陽子（広報・教育活動）

前田 修（総務・研究連携支援）

松原 康介（研究会・シンポジウム企画）

三宅 裕（編集・出版活動）

守川 知子（研究会・シンポジウム企画）

事務局

上原 妙子（会計・総務）

廣永 尚子（会計・総務）

研究項目 A01「都市文明への胎動」

計画研究 01「西アジア先史時代における生業と社会構造」

研究代表者

三宅 裕（筑波大学人文社会系・教授、新石器時代社会）

研究分担者

有村 誠（東海大学文学部・准教授、先史時代の専門化）

丹野 研一（龍谷大学文学部・准教授、植物考古学）

常木 晃（筑波大学人文社会系・教授、銅石器時代社会）

久田 健一郎（筑波大学生命環境系・教授、地質学・先史時代における石材利用）

本郷 一美（総合研究大学院大学先導科学研究科・准教授、動物考古学）

前田 修（筑波大学人文社会系・助教、先史時代の物資流通）

研究協力者

板橋 悠（筑波大学人文社会系・助教、食性分析・人や物の移動の研究）

千本 真生（筑波大学人文社会系・研究員、土器の生産と流通）

研究項目 A02「古代西アジア都市の景観と構造」

計画研究 02「古代西アジアにおける都市の景観と機能」

研究代表者

山田 重郎（筑波大学人文社会系・教授、楔形文字学・歴史研究）

研究分担者

池田 潤（筑波大学人文社会系・教授、セム語学）

唐橋 文（中央大学文学部・教授、楔形文字学・シュメル研究）

柴田 大輔（筑波大学人文社会系・准教授、楔形文字学・宗教文化史）

西山 伸一（中部大学人文学部・准教授、西アジア考古学・青銅器・鉄器時代）

春田 晴郎（東海大学文化社会学部・教授、古代イラン史）

研究協力者

伊藤 早苗（上智大学神学部・学振特別研究員、楔形文字学・アッシリア史）

ジーナ コンスタントポロス（筑波大学人文社会系・助教、楔形文字学）

佐野 克司（筑波大学人文社会系・学振特別研究員、楔形文字学・アッシリア史）

下釜 和也（古代オリエント博物館・研究員、西アジア考古学）

高井 啓介（関東学院大学国際文化学部・准教授、北西セム語文献）

辰巳 祐樹（筑波大学人文社会系・研究員、考古学・地中探査）

辻田 明子（ライデン大学・大学院生、楔形文字学・メソポタミア宗教史）

津本 英利（古代オリエント博物館・主任研究員、考古学・青銅器・鉄器時代）

中田 一郎（中央大学・名誉教授、楔形文字学・前二千年紀前半メソポタミア史）

沼本 宏俊（国土舘大学体育学部・教授、メソポタミア考古学）

前川 和也（京都大学・名誉教授、楔形文字学・シュメル研究）

前田 徹（早稲田大学・名誉教授、楔形文字学・前三千年紀メソポタミア史）

三津間 康幸（筑波大学人文社会系・助教、セレウコス朝期の歴史）

森 若葉（国土舘大学・研究員、楔形文字学・シュメル語学）

渡井 葉子（筑波大学人文社会系・学振特別研究員、楔形文字学・新バビロニア時代）

渡辺 千香子（大阪学院大学国際学部・教授、メソポタミア美術・環境史研究）

渡部 展也（中部大学人文学部・准教授、考古学・地理情報学）

山田 雅道（中央大学・非常勤講師、楔形文字学・前二千年紀後半メソポタミア史）

計画研究 03「古代エジプトにおける都市の景観と構造」

研究代表者

近藤 二郎（早稲田大学文学学術院・教授、エジプト学・エジプト考古学）

研究分担者

内田 杉彦（明倫短期大学歯科衛生士学科・准教授、エジプト学・文献研究）
 柏木 裕之（東日本国際大学エジプト考古学研究所・客員教授、古代エジプト建築史）
 河合 望（金沢大学新学術創成研究機構・教授、エジプト学・エジプト考古学）
 周藤 芳幸（名古屋大学人文学研究科・教授、古代ギリシア史・考古学）
 高宮 いづみ（近畿大学文芸学部・教授、エジプト考古学・先王朝時代）
 田澤 恵子（古代オリエント博物館・主任研究員、エジプト学・宗教文化史）
 辻村 純代（古代学協会・プトレマイオス朝の都市研究）
 中野 智章（中部大学国際関係学部・教授、エジプト学・エジプト考古学）
 西本 真一（日本工業大学建築学部・教授、古代エジプト建築史）
 長谷川 奏（早稲田大学総合研究機構・客員教授、エジプト考古学・ヘレニズム～古代末期）
 矢澤 健（東日本国際大学エジプト考古学研究所・客員准教授、エジプト考古学）

研究協力者

恵多谷 雅弘（東海大学情報技術センター・主任研究員、衛星画像解析）
 高橋 寿光（東日本国際大学エジプト考古学研究所・客員講師、エジプト考古学）
 馬場 匡浩（早稲田大学高等研究所・招聘研究員、エジプト考古学・先王朝時代）
 藤井 信之（関西大学・前1千年紀のエジプト都市研究）
 和田 浩一郎（國學院大学・プトレマイオス朝の都市研究）

研究項目 B01「西アジアの環境と資源」

計画研究 04「古代西アジアをめぐる水と土と都市の相生・相克と都市鉱山の起源」

研究代表者

安間 了（徳島大学社会産業理工学研究部・教授、地質学・研究の総括）

研究分担者

浅原 良浩（名古屋大学大学院環境学研究科・准教授、岩石学・同位体分析）
 荒川 洋二（筑波大学生命環境系・教授、岩石学・金属同位体分析）
 池端 慶（筑波大学生命環境系・助教、鉱床学・金属同位体分析）
 黒澤 正紀（筑波大学生命環境系・准教授、鉱物学・微量領域分析）
 昆 慶明（産業技術総合研究所地圏資源環境研究部門・主任研究員、地球化学・ICP-MS 分析）
 佐野 貴司（国立科学博物館地学研究部・研究主幹、岩石学・XRF 全岩組成分析）
 下岡 順直（立正大学地球環境科学部・助教、地球年代学・OSL 年代測定）
 申 基澈（総合地球環境学研究所研究基盤国際センター・准教授、同位体地球科学・ICP-MS 分析）
 中野 孝教（総合地球環境学研究所・名誉教授、環境科学・環境同位体分析）
 堀川 恵司（富山大学大学院理工学研究部・准教授、古環境学・鍾乳石の分析）
 丸岡 照幸（筑波大学生命環境系・准教授、地球化学・硫黄同位体分析）
 八木 勇治（筑波大学生命環境系・教授、地震学・災害科学研究）

横尾 頼子（同志社大学理工学部・助教、環境科学・水質および土壌化学分析）

若狭 幸（弘前大学地域戦略研究所・助教、地形学・地形面の年代測定）

研究協力者

笹 公和（筑波大学数理工学系・准教授、加速器分析学・加速器分析）

辻 彰洋（国立科学博物館植物研究部・研究主幹、微化石学・珪藻分析）

パークナー トーマス（筑波大学生命環境系・助教、地形学・GIS およびリモートセンシング）

南 雅代（名古屋大学宇宙地球環境研究所・教授、文化財科学・放射性炭素年代測定）

渡辺 千香子（大阪学院大学国際学部・教授、メソポタミア美術・環境史研究）

研究項目 C01 「中世～現代の西アジア都市」

計画研究 05 「中世から近代の西アジア・イスラーム都市の構造に関する歴史学的研究」

研究代表者

守川 知子（東京大学大学院人文社会系研究科・准教授、西アジア史：イラン・ペルシア湾岸の都市）

研究分担者

稲葉 穰（京都大学人文科学研究所・教授、中央アジア史：アフガニスタン・中央アジアの都市）

中町 信孝（甲南大学文学部・教授、アラブ中世史：エジプト・シリアの都市）

深見 奈緒子（国士舘大学イラク古代文化研究所・共同研究員、イスラーム建築史：イラク・エジプト都市）

山口 昭彦（聖心女子大学現代教養学部・教授、クルド史研究：クルド山岳地域の都市）

研究協力者

黒木 英充（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所・教授、地域研究：シリア・レバノンの都市）

計画研究 06 「西アジア地域の都市空間の重層性に関する計画論的研究」

研究代表者

松原 康介（筑波大学システム情報系・准教授、都市計画学：シリア・レバノン・アルジェリアの都市）

研究分担者

川本 智史（金沢星稜大学教養教育部・講師、トルコ都市建築研究）

木村 周平（筑波大学人文社会系・准教授、文化人類学：トルコ・シリアの都市）

塩谷 哲史（筑波大学人文社会系・助教、中央アジア都市との比較）

杉本 悠子（早稲田大学文学学術院・助手、アレppo都市史研究）

田中 暁子（後藤・安田記念東京都市研究所・主任研究員、ダマスカス マスタープラン研究）

田中 英資（福岡女学院大学人文学部・准教授、文化財学：トルコ、ギリシアの都市）

谷口 守（筑波大学システム情報系・教授、近未来交通研究）

谷口 陽子（筑波大学人文社会系・准教授、文化財科学：アフガニスタン・トルコ・エジプトの都市）

中島 直人（東京大学大学院工学系研究科・准教授、アジアと西アジアの比較）

中野 茂夫（大阪市立大学大学院生活科学研究科・教授、都市計画史）
廣井 悠（東京大学大学院工学系研究科・准教授、防災・復興計画）
藤田 康仁（東京工業大学環境・社会理工学院・准教授、アナトリア地域との比較）
武藤 亜子（国際協力機構・主任研究員、国際協力分野）
守田 正志（横浜国立大学大学院都市イノベーション研究院・准教授、トルコ、エジプト都市論研究）
安田 慎（高崎経済大学地域政策学部・准教授、観光研究）
柳沢 究（京都大学工学研究科・准教授、南アジア都市との比較）
山内 和也（帝京大学付置研究所・教授、文化財研究）
渡邊 祥子（日本貿易振興機構アジア経済研究所 地域研究センター中東研究グループ・研究員、
北アフリカ地域研究）

研究協力者

アルカズイー アツラーム（筑波大学システム情報工学研究科・大学院生、都市計画）
池田 昭光（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所・研究員、社会人類学）
伊庭 千恵美（京都大学工学系・准教授、建築環境）
佐倉 弘祐（信州大学工学部・助教、都市計画）
志摩 憲寿（東洋大学国際学部・准教授、国際協力分野）
新保 奈穂美（筑波大学生命環境系・助教、ランドスケープ研究）
藤川 昌樹（筑波大学システム情報系・教授、都市建築史）
三田村 哲哉（兵庫県立大学環境人間学部・准教授、建築史）
村上 薫（ジェトロ・アジア経済研究所新領域研究センター、トルコ地域研究）

公募研究 2019-2020 年度

研究項目 A01 関連

足立 拓朗（金沢大学歴史言語文化学系・教授）
「西アジアの都市化と遊牧民交易」
板橋 悠（筑波大学人文社会系・助教）
「化学分析で評価する西アジア先史社会のヒト・穀物・動物の移動と社会構造」
上杉 彰紀（金沢大学国際文化資源学研究センター・特任准教授）
「前3千年紀におけるインダス文明とアラビア半島の交流関係に関する考古学的研究」
小高 敬寛（金沢大学国際文化資源学研究センター・特任准教授）
「メソポタミア外縁における新石器化から都市化への移行に関する研究」

研究項目 A02 関連

青木 健（静岡文化芸術大学文化芸術研究センター・教授）
「サーサーン朝時代の都市とキャラバン・ルートに於けるゾロアスター教拝火神殿」

研究項目 B01 関連

南 雅代（名古屋大学宇宙地球環境研究所・教授）

「イランの石筍・トラバーチンを用いた西アジアの古気候復元の試み」

研究項目 C01 関連

阿部 尚史（お茶の水女子大学基幹研究院・助教）

「寛容」と先例：近世・近代のタブリーズにおけるアルメニア教徒とムスリム社会」

大稔 哲也（早稲田大学文学学術院・教授）

「イスラーム期の西アジアにおける墓地と都市」

杉山 雅樹（京都外国語大学国際言語平和研究所・研究員）

「15世紀後半のヘラートにおけるタリーカの活動と都市文化の発展」

伊庭 千恵美（京都大学大学院工学研究科・准教授）

「トルコ・カッパドキアの都市文化・景観保全に向けた岩窟教会の風化対策に関する研究」

佐倉 弘祐（信州大学工学部・助教）

「近代化にともなう灌漑水路と都市拡張の関係についての地中海都市比較研究」

三田村 哲哉（兵庫県立大学環境人間学部・准教授）

「西アジア及び周辺都市に尽力したフランスの都市計画家ユルバニストに関する研究」

都市文明の本質： 古代西アジアにおける都市の発生と変容の学際研究

2019 年度年次報告書 巻頭言

山田重郎（領域代表）

筑波大学人文社会系

1. テーマとしての西アジア都市

前年度に書いたことと繰り返しになるが、本領域研究の課題について簡潔に触れておきたい。

西アジアは、農耕、牧畜、冶金、文字記録、一神教、そして都市文明といった人類史に大きな影響を与えた文化的革新が地球上で最も早く生じた地域であり、西欧世界の思想的源流であるユダヤ・キリスト教文化の故地でもある。そのため 19 世紀以来、西欧諸国主導の多くの考古学的調査がおこなわれ、各地で古代の都市遺構が調査・研究されてきた。

前 3200 年ごろの南メソポタミアに成立した都市ウルクでは、粘土板に文字を記す技術が行政運営のために発明され、その後、この書字技術は、楔形文字システムとして洗練されながら西アジア各地に伝播し、シュメル語、アッカド語、ヒッタイト語、エラム語など種々の言語で様々な文書記録が残された。この結果、前 3 千年紀から紀元前後の時代に至るまでの長期間、古代世界においては出色の文字記録をともなう都市文明が西アジアにおいて繁栄した。

こうして、古代西アジアは、都市主導型の文明が地球上で最も早く高度に発達した地域であったことが明らかにされてきた。豊富な考古学的資料と保存性の高い媒体（粘土板）に書かれた多くの

文字史料によって、西アジアでは、都市文明の発生とその変容に関する大量のデータが得られており、現在も研究は進展している。人類の都市との関わりの原点であり、人類史上最古の都市文明をめぐる濃密な歴史的経験であった古代西アジア都市の諸相の理解は、都市の本質を問うために決定的な価値がある。

西アジアにおける都市の発生と変容、都市とそれを取り巻く環境や人間社会との相互影響関係、都市の景観と機能を種々の史資料に照らして実証的に解明し、現代に至るまでの都市のタイロロジーに照らして、西アジアの都市文明を歴史的に評価し、ひいては現代の都市型社会の理解と維持・発展に貢献することが、本領域研究の目論見である。

2. 本領域研究の分野的広がり

本領域研究は、多分野の研究者の学際的連携によって人間社会の都市化という歴史的現象の解明を目指すプロジェクトであり、関連する分野は多岐に及んでいる。西アジア考古学、楔形文字学、エジプト学といった古代研究の諸分野、ならびに地球科学・分析化学という都市を育んだ古環境と天然資源を研究する自然科学分野がその中心にある。さらに「都市とは何か」という大きな命題を

古代西アジアに探る試みは、後代の西アジア都市も視野におさめ、古代西アジア都市の特徴を相対的に評価することによって補完される。中世以降の西アジアでは、しばしば古代の都市プランを継承しながら、イスラーム都市、近代都市として変容を遂げた都市もあれば、新たな歴史的環境において発生し発達した都市も見られる。こうした過程をカバーすべく、イスラーム学、西アジア史学、社会人類学、都市計画学、都市社会学、文化遺産学等の研究者が本領域研究に参画している。こうして、本領域は、異なる学問分野がそれぞれの分野内に孤立しては獲得できない広い視野に立って、古代西アジア都市という大きなテーマに臨み、そこに都市文明の本質を考究する実証研究と理論研究を実践しようとしている。

3. 大きなテーマを前にどのように協力するか？

今年度2019年10月26日（土）に筑波大学春日キャンパス（7A106 会議室）でおこなった領域全体研究会では、6つの計画研究から一件ずつ、以下の題目で発表をいただいた。

- ・ 計画研究 01 三宅 裕
「西アジア新石器時代の集落構造について」
- ・ 計画研究 02 三津間 康幸
「古代西アジア都市の景観と構造」
- ・ 計画研究 03 河合 望
「古代エジプトの都市の景観と構造」
- ・ 計画研究 04 黒澤 正紀
「古代西アジアの自然環境と都市鉱山の起源」
- ・ 計画研究 05 山口 昭彦
「近世西アジアにおける都市景観の変容」
- ・ 計画研究 06 松原 康介
「イスラーム都市論から現代都市計画へ：都市研究の流れと構造」

これらの発表は、各計画研究が実施する内容と性格を概括的に専門領域外の他の計画研究のメンバーに伝えるべくして、おこなわれた。先史時代から現代まで、多様な分野を専門とする研究者が、西アジアの都市文明をキーワードにどのように知恵を出し合えるのか、協働の在り方を探る一助になったと思う。



領域全体研究会の様子（2019年10月26日）

領域研究 2 年目の本年は、2023 年 3 月までの領域研究の実施期間とその後一年間の成果取りまとめ期間を通して、私たちが領域全体としてどのような成果を学界と一般社会に示そうとしているのかを明確にイメージし、それに向けて何をなすべきかという議論を本格的に開始した年度でもあった。その結果、具体化してきた案件を 2 件あげておきたい。すなわち (1) 2020 年に計画されている第一回の国際シンポジウム、ならびに (2) 領域研究終了後にシリーズとして世に送り出す刊行物、である。

第一回の国際シンポジウムは、2020 年 6 月 20・21 日（土・日）に池袋サンシャインシティ文化会館 7 階会議室において、City Landscape and Urban Morphology in West Asia: Ancient to Modern（仮題）をテーマに開催予定である。このシンポジウムでは、特に都市とその周辺の景観に焦点を当て、都市空間の形態とそれと連動する都市の諸機能について考察する。考古学、文献学、歴史学、地球環境科学、都市計画学、文化保存科学等の分野に関わる研究者を 10 名ほど海外から招聘し、先史時代における都市文明への胎動、古代西アジアと古代エジプトの諸都市、西アジアの自然環境ならびに天然資源と都市、中世と現代の西アジア都市をめぐる、合計 20 件ほどの研究発表をおこない、領域研究の進展をはかり、これまでの活動のレビューをおこなう。

出版物に関しては、シンポジウムや各計画研究主導で実施される調査や研究会の参加者を主要な執筆者とし、領域研究の成果の一部として、Historical Aspects of West Asian Cities というシリーズ名で、5 巻一組の英文の出版物を刊行する計画が具体化されつつある。それぞれの巻のタイトルとそれに関わる計画研究の組み合わせは、おおよ

そ以下のようなだろう。

1. Toward the City: Environment and Complex Society in the Prehistoric Period
(計画研究 1 + 4)
2. Cities in the Ancient Mesopotamia and Its Surroundings: Development and Variation
(計画研究 2 + 4)
3. Cities in the Ancient Egypt: The Structure of the Cities and Its Cultic Meaning
(研究計画 3)
4. Medieval to Modern Cities in West Asia: Characteristics and Issues
(計画研究 5)
5. Modern Cities in West Asia: Problems and Countermeasures
(計画研究 6)

出版物の内容については、以下の点に配慮しながらさらに議論を重ねていくこととした。

1. 都市景観や都市構造を視点の中心に据えたいうえで、景観・構造と自然環境・人間社会の相互関係を探る。
2. 年代的な視点をもって、時代の変遷とともに生じる都市空間と都市社会の有り様を俯瞰する内容を持たせ、書物として通読することで、西アジア（ならびにエジプト）の諸都市の歴史の変遷と興亡、ならびに都市ごとの特徴が理解できる。
3. 西アジア地域全体を俯瞰する意識を持って作成するが、地域によって扱いにある程度濃淡が出ることは当然であり、これを許容する。
4. 各巻の目次・構成は、巻ごとに違ってもよく、それぞれの巻の特徴にしたがって、時代、地域、論点に配慮して構成を決める。

4. 結び

以上、最終成果の取りまとめに向けた意識が前面に出すぎた感もあるが、共有すべき備忘録として書き留めておく意味があると考えた。我々は従来の研究の単なる「まとめ屋」にとどまるべきでないのは言うまでもない。西アジア都市とそれを取り巻く研究の最前線にたって、その理解を深めるための「オタク的」な専門的基礎研究や先端的研究こそ学問の屋台骨を支えるものであり、大型科研費によって生かされるべき仕事は、そうした基礎研究・先端研究であってほしい。大いに重箱の隅をつついて、そこに穴を穿ち、新しい学知

の地平を切り開いていただきたいと思います。その上で、大きな課題を展望し、既成の分野を超越して新たな理解にも至る、自由で活発な研究者集団でありたいものだ。以上、言うは易く、おこなうは難しだが、今年度中に、本領域研究の推進を助ける研究者3名（三津間康幸、板橋悠、Gina Konstantopoulos の各氏）が助教として筑波大学に着任し、12件の公募研究も開始され、各計画研究の活動も本格化している。今後、それぞれの研究の進展をはかり、連携を強化しながら、本領域研究関係者の皆さんと共に大いに奮闘したい。

研究項目 A01 「都市文明への胎動」

計画研究 01

西アジア先史時代における生業と社会構造

ハッサンケイフ・ホユック遺跡周辺の地質

久田 健一郎

筑波大学生命環境系

はじめに

トルコ共和国南東部のティグリス川上流域に位置するハッサンケイフ・ホユック遺跡周辺において地質概査を2019年9月1日から8日までおこなった。ハッサンケイフ・ホユック遺跡は新石器時代初頭に年代づけられる初期定住集落であり、出土した動植物資料の分析から、この時期にはまだ農耕・牧畜は営まれておらず、狩猟・採集に基盤を置く社会であったことが確認されている。その一方で、公共建造物、複雑な葬送儀礼、高度な工芸技術、長距離交易、シンボリズムの発達を示す数多くの資料が得られ、農耕・牧畜の開始以前にすでに複雑な社会が形成されていた状況が知られている（三宅2019など）。

このようなティグリス川上流での新石器時代の状況下である一方、ティグリス川の渓谷は資源豊富なアナトリアと資源に恵まれないメソポタミア・南シリアの通路となっていた。すなわち人々の行き交いが頻繁におこなわれ、その結果様々な文化を育んだことが考えられる。そのようなティグリス川の渓谷とはどのような地形地質状況とみることができるだろうか。

今回ハッサンケイフ・ホユック遺跡周辺の地形地質状況を把握するために調査をおこなった。調査範囲は、ハッサンケイフ・ホユック遺跡を中心

に、半径約2 kmの範囲である。とくに、ティグリス川が作る峡谷とハッサンケイフ・ホユック遺跡のある河床平坦面（テラス）の地形的地質的關係に注目した（図1）。

1. ハッサンケイフから上流域の地質状況

ハッサンケイフからティグリス川上流に向かって、約30 kmにバトマン、約70 kmにピスマル、さらに上流130 kmにディヤルバクルの市街地が広がる。バトマン川とティグリス川の合流点近くは、ティグリス川流域の地質の状況が一変する。ハッサンケイフからバトマンにかけては、General Directorate of Mineral Research and Explorationによる2011年発行Geological Map of Turkey 1/1250000によれば、始新世浅海性石灰岩、バトマンからディヤルバクルまでは中新世碎屑岩、ディヤルバクルより上流は鮮新世玄武岩が広く分布する。これらの岩石の形成年代を加味して侵食に対する抵抗性を比較すると、玄武岩>石灰岩>碎屑岩となる。より堅固な岩石に挟まれてより軟弱な岩石がバトマンからディヤルバクルまでの流域に分布することになる。実際ハッサンケイフからバトマンまでと、それより上流のピスマルにかけてのティグリス川流域の景観は異なる。すなわちこれは、おそらく更新世前期に、バトマ



図1 ハッサンケイフ・ホユック遺跡（赤丸）とティグリス川（写真左上から右下へ流れる）

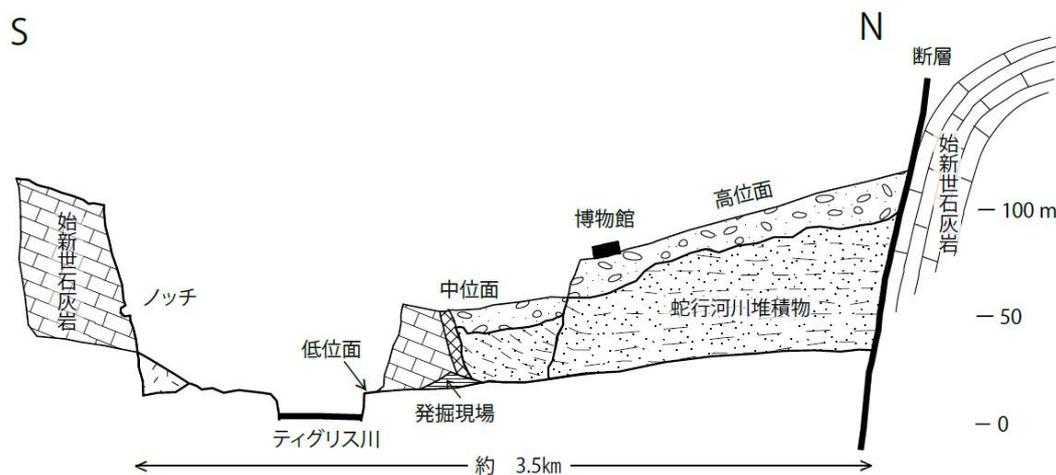


図2 ハッサンケイフ・ホユック遺跡を通過する南北地形断面スケッチ

ン川から大量の土砂がティグリス川に流れ込み、ティグリス川のより堅固な岩石でできた溪谷を埋め立てるようになったものと思われる。その様子は図1で読み取ることができる。

2. ティグリス川溪谷の蛇行河川堆積物

ハッサンケイフ・ホユック遺跡は東西に流れる現ティグリス川岸から最短で約160 m、水面から約9 mの高さにある（図1, 図2）。南北両側の山



図3 赤褐色層と灰白色層の互層 蛇行河川の堆積物

麓部間の距離は約 3.5 km におよび、現ティグリス川流路はほぼ南側山麓に寄って流れる。図2はハッサンケイフ・ホユック遺跡付近を通る南北の地形地質断面スケッチである。ハッサンケイフ・ホユック遺跡周辺には、低位、中位、高位の3面が発達している、ティグリス川の水面から、およそ 5-10 m、40-50 m、60-80 m の高さになる。中位、高位のテラスは、地表から数 m から 10 m 近くまで中礫からなる河床礫と思われる礫層でおおわれている。表層礫層の下位には低位、中位、高位のいずれのテラスとも、灰白色の細粒—中砂岩層と赤褐色のシルト岩の互層できている（図3）。これらの地層は厚さ数 m から 10 m ある。

これらの堆積物中で特徴的な堆積構造はまれにみられるカリーチ (caliche) と呼ばれる構造である。カリーチは古土壌と呼ばれる堆積物に二次的に形成された炭酸塩凝固物である（図4）。カリーチは乾燥気候条件下において、地表近くまで上昇してきた地下水が蒸発する過程

で、土壌中に $\text{CaCO}_3 \cdot \text{MgCO}_3$ が沈積・成長することによって膠結された不規則な形態の白色を呈する石灰質の塊である。古土壌は蛇行河川周囲の氾濫原と呼ばれる部分で生成される。古土壌の元の物質は、河川氾濫で流路からあふれ出した細粒土砂が植生などにより土壌化したものである。気温の高い日中は、葉や茎といった器官から蒸散が盛んにおこなわれ、植物の地上部の水分含量が低下する。これにより地上部と地下部との水ポテン



図4 カリーチ 古土壌中に二次的に形成



図5 ティグリス川ハッサンケイフ・ホクック遺跡（白色の矢印）。周辺の低位テラスと高位テラス（黄色の矢印）

シャル勾配が大きくなると、水は木部を介して根から吸い上げられる。根においては、水分は植物体と土壌との浸透圧差により移動し、無機塩類やその他の養分と共に土中から植物体へ吸収される。その際、余剰の炭酸塩は根の部分周辺に沈殿する。このカーリーチがティグリス川水面から高度約 50 m の付近の高位テラスの赤褐色のシルト岩層に発達している。カーリーチが横一列に配列するようになる場合と、厚さ数メートルで密集する場合がある。一般にこのような蛇行河川堆積物は、灰白色の流路堆積物（シルト岩～中粒砂岩）とその上位の赤褐色の氾濫原堆積物（シルト岩）で 1 セットを構成し、全体的に上方細粒化を示すことが知られている。これらのセットを、低位、中位、高位テラスを通じてみることができ、その数は全部で 20 セット以上になる。

図 5 に示すように、発掘現場がある低位テラスの面の断面においても、同様な赤褐色氾濫原堆積物と灰白色流路堆積物の互層を見ることができ。しかしながら低位テラスのこれらの堆積物は、

断層や地滑り性の褶曲が頻繁に発達していることを特徴としている。ハッサンケイフ付近のティグリス川の溪谷は、この種の堆積物で埋積されている。

また地形地質上の特徴の一つとして、図 2 で示すように、現在のティグリス川流路の直ぐ北側に基盤岩である石灰岩の露出が見られる。これは中位テラスと同程度の高さとなっており、あたかも前述の堆積物の堰き止め障害物のようにになっている。またこの石灰岩の走向傾斜は、ティグリス川の南側岩体の延長であることを示唆している。さらに南側石灰岩岩体の高さ約 50 m 付近には、大規模なノッチが発達しており、ほぼ中位テラス形成時の水面の高さを表しているものと思われる。

ビスミルからバトマンに至るティグリス川沿いの地形地質を調べた Dogan (2005) によれば、最も高位のテラスは河床から 40 m の高さにある。次の 30 m の高さのテラスである。これらの分は極めて局所的である。中位テラスは 10 m の高さで、低位テラスは現水面より 2-3 m 高い面となっ

ている。これらのテラスの形成時期は 4-5 m の高さが 6000 ~ 5500 BC、1.5-2 m で 4000 ~ 2650 BC と見積もられている。一方中位テラスは後期更新世となる。

Dogan (2005) の高位、中位、低位テラスは、ハッサンケイフ遺跡周辺の高位、中位、低位テラスとは異なる。ハッサンケイフ遺跡周辺の低位テラスが Dogan (2005) の中位テラスに相当する。このような違いを生じたのは、バトマン川とティグリス川合流点を境にして流域の景観が異なることに関係する可能性がある。

ティグリス川のバトマン川合流直前の始新世石灰岩を横切る河川形態は、穿入蛇行である。した

がって、前述のティグリス川渓谷の埋め立てがいつ起きたのか、不明であるが、おそらく鮮新世から更新世前期まで遡る可能性がある。今後さらなる研究が必要である。

参考文献

Dogan, U. 2005 Holocene fluvial development of the Upper Tigris Valley (South Turkey) as documented by archaeological data. *Quaternary International* 19, 75-86.

三宅 裕 2019「西アジア先史時代の貝製ビーズ」
山田重郎編『科研費新学術領域研究 都市文明の本質：古代西アジアにおける都市の発生と変容の学際研究 1 研究成果報告 2018 年度』 9-15 頁。

新石器時代のシンボリズム

—ハッサンケイフ・ホユック遺跡出土資料を中心に—

三宅 裕

筑波大学人文社会系

はじめに

西アジアの新石器時代は、農耕牧畜が開始された時代とされている。これはマルクス主義的な唯物史観に深く共鳴していたG.チャイルドの主張にもとづくものである。食糧生産経済の開始による生産力の向上が社会を大きく変革する原動力となったとして、チャイルドはこれを「新石器革命」と呼んでその意義を高く評価した。このような歴史観はもはや「常識」として、考古学や歴史学だけでなく、経済学や社会学など幅広い分野で受け入れられているように見える。内閣府が策定した「第5期科学技術基本計画」において、Society 5.0という今後日本が目指すべき社会のあり方が提唱されているが、そこでSociety 1.0が狩猟社会（なぜ狩猟採集社会でないのかは不明）、Society 2.0が農耕社会とされているのも、こうした常識的な歴史観にもとづいていると考えられる。

しかし、農耕牧畜による生産経済への移行のみを重視するこうした姿勢に対して批判的な見解も認められる。フランスの考古学者であるJ.コヴァンは、人間の自然に対する認知の変化がまずおこり、それにより人間と動植物の関係が変化し、その結果として農耕牧畜が始まることになったという主張を展開した。こうした考えは「シンボリック革命」論と呼ばれ、農耕牧畜に先駆けて女神像

（土偶や岩偶）が出現し、ウシの角が特別に扱われていることなどがその証拠とされた。コヴァンが提示した論拠については検討の余地がかなりあると言わざるを得ないが、農耕牧畜が開始される以前の時期にシンボリズムに関連する資料が数多く認められるようになることは事実である。おそらく、これらの資料は人間の認知面の変化を直接的に示すというよりは、定住化の過程の進行などにもとない規模の大きな社会が形成されるようになる中で、社会を統合する役割を果たした儀礼祭祀やイデオロギーと深く関連している可能性が高く、社会の複雑化とも密接に関係していると考えられる。シンボリズムに関連する資料は、当時の社会のあり方を理解するためのひとつの手がかりになると言うことができる。

*

ハッサンケイフ・ホユック遺跡は、トルコ南東部のティグリス川上流域に位置する、新石器時代初頭を中心とする時期に居住の営まれた集落遺跡である（図1）。筑波大学アナトリア調査団では、この遺跡において2011年から2019年まで6次にわたる発掘調査を実施してきた。それによって明らかになったことは、この集落は定住度が高く、狩猟採集に基盤を置く集団によって居住されていたことである。これまでの調査によって住居跡と



図 1

考えられる半地下式の建物が 30 基以上検出され、その床下からは 150 基を超える埋葬が確認された。こうした墓の中には副葬品をともなう事例が少なからず存在し、石や骨を素材とした遺物に動物像などの図像が表現されている資料が得られている。これらの遺物は、新石器時代初頭の狩猟採集民の世界観と深く関係し、その当時のイデオロギーを可視化する役割を担っていたと評価することができる。本稿ではそうした資料を取り上げてみることにしたい。

1. ヘビ

図 2 の骨製品は、円形の半地下式遺構である 72 号建物の床下から検出された埋葬にともなって出土した。この 360 号墓の被葬者は成人で、

埋葬姿勢は脚を強く屈曲させ左側に倒す形の仰臥屈葬であった。両腕は体部上に置かれ、右前腕部の上からこの骨製品が出土した。こうした出土状況から、この骨製品は装身具として右前腕部に装着されていたと考えられる。全体は薄い板状を呈し、体部は波状に湾曲し、尾は鋭く尖っている。



図 2



図 3

体部に比して大きめに表現されている頭部には、刻文によって目や鼻孔が描かれている。体部には 2 つ穿孔が認められ、ここに紐を通すなどして、右腕に装着されていたと考えられる。頭部が大きく、顔の表現も写実的とは言えないものの、全体の形状からヘビを表現しているとしておきたい。

ハッサンケイフ・ホユック遺跡では、刻文の装飾をともなう板状の骨製品や石製品の中に本例とよく似た穿孔が認められる事例があり、これらも上記の骨製品と同様の方法で装着された装身具であったと考えることができる。その中には、列点文によって波状の文様が施されている例があり、かなり様式化されているとはいえ、これもヘビを表現したものである可能性がある。



図 4

図 3 の石製品は円柱状をした大型の石灰岩製のもので、側面に刻文によってヘビが表現されている。石の表面は風化による凹凸が顕著に認められるが、図像自体は太めの刻線によって描かれているため、明瞭に認識することができる。輪郭線のほかに、体部には 2 本の線が描かれており、体部を区画するような列点文も認められる。本例は円形の井戸状の遺構である 97 号遺構から出土したもので、大型の礫が大量に投棄されていた特異な遺構である。大型の矩形遺構である 3 号建物を壊して構築されていることから、新石器時代でも最も新しい時期の遺構であると評価していたが、2019 年の調査によって本遺構の下層から数点ではあるものの土器が出土し、新石器時代以降の遺構である可能性を考えなくてはならなくなった。その一方で、型的的にみて明らかに新石器時代のものである石製ビーズなどが出土しており、新石器時代の遺物も混入している。検討の余地が出てきたとはいえ、本例も新石器時代の所産である可能性は残されているとみている。

ほかにもヘビを表現した遺物は数点確認されており、図 4 はクロライト製の石製容器の破片を再利用したもので、表面に刻文による装飾が認めら

れる。図像自体はシンプルなもので、波状に屈曲する体部と矢印の先のような形の頭部が表現されている。また、破片であるため全体像を把握することはできないが、骨製品に刻文でへびを表現したと思われる事例も出土している。ここでも、へびの体部を列点文によって区画する表現が認められ、97号遺構から出土した図3の事例と共通する特徴を有している。表現上の規範、あるいは定型化された表現様式の存在をうかがうことができる。

2. サソリ

サソリは西アジアの広範な地域に生息しており、発掘調査の際にもよく遭遇することがある。その度に発掘作業が中断するほどの大騒ぎになるため、招かれざる客であるのだが、やはりその存在感は大きい。ハッサンケイフ・ホユック遺跡では、へら状の骨製品にサソリが刻文によって表現されている事例が出土している（図5）。公共建造物であったと考えられる3号建物の北西隅、この建物2枚目の床面下から検出された101号墓から出土した。被葬者は成人の女性である可能性が高いとされ、本骨製品は復元長が約24cmを測る大型品で、全体は三角形に近い形状を呈する。下端部には穿孔が認められ、被葬者の右腕付近から出土したことから、腕に装着する装身具であったと考えることができる。表面に刻文によって描かれているサソリは、目は同心円文によって表現されているなど様式化されている部分もあるが、鋏状をした触肢、4対の脚、尾のように見える終体と毒針をもつ尾節などが表現されており、全体的には対象を忠実に描いていると評価できる。

この101号墓からは、ほかにも頸部付近から石製ビーズ14点、左胸部付近から黒曜石製の石器



図5

1点、左腰部付近から石製のバトンが検出され、豊富な副葬品をともなっていることが注目される。特に、石製のバトンは長さ37.4cmを測る長大なもので、全体がていねいに磨かれ、鈍い光沢が認められる。公共建造物に埋葬されていることや多くの副葬品をともなっていることから、特別な扱いを受けた人物であったと評価することも可能である。

破片として出土したクロライト製の石製容器にもサソリが表現されている事例がある（図6）。これは墓の副葬品ではなく、遺物包含層から出土



図 6

した。破片の中央には鳥を様式化したと考えられる図像（人間であると解釈する意見もある）が描かれ、その左右にサソリが表現されている。大部分は欠損してしまっているが、鋏状をした触肢、4 対の脚、終体と毒針をもつ尾節を認めることができる。このほか、骨製品の破片にサソリと思われる図像が描かれているものがあり、その中には赤色顔料の痕跡をとどめている事例もある。

3. 正体不明の生物

101 号墓から出土したヘラ状骨製品とよく似たものが、もう 1 点 219 号墓から出土している（図 7）。この墓の被葬者は未成人で、男性である可能性が高いとされている。人骨は俯せの状態で、脚を後方へ投げ出すような形で検出されており、埋葬のために姿勢を整えているような様子が窺うことのできない興味深い事例である。ヘラ状骨製品以外に副葬品は認められず、副葬品というよりは、生前装着されていた装身具がそのままの状態に遺体とともに埋められたと考えられる。ヘラ状骨製品は右前腕部の内側から検出され、穿孔のある細い端部が手首側を向いていた。今のところ



図 7

ビーズ以外の装身具で装着状況を確認できる事例では、すべて右側に装着されていたことが明らかになっており、この種の装身具は右手側に装着するルールがあった可能性を考えることができる。

このヘラ状骨製品には刻文によって 2 体の生物が、背中合わせになるような形で表現されている。腕あるいは脚は 2 本のみ描かれ、下端部は昆虫の腹部を思わせるような形状をしている。頭部には大きめの目が描かれ、頭頂部には角のようにも見える突起が 2 本認められる。これを角と解釈してヤギやヒツジなどの四足動物と捉えることもでき

なくはないが、脚の数が足りないこと、体部末端の形状がそれにそぐわないこと、描かれている姿勢も四足動物のものとは考えにくいことなどが障害となる。実際、ティグリス川上流域の同時期の遺跡からは四足動物を表現した図像も確認されているが、それらはいずれも大地に4本の足で立つ姿勢で描かれており、表現の仕方が大きく異なっている。むしろ全体の形状からは昆虫に近い生物である可能性が高いと言え、その場合、頭頂部の突起は触角とみなすことができるようになる。ハチはひとつの有力な候補になると考えられるが、その場合、羽が表現されていないことが問題となる。

この図像の対象についてはこれまでも様々な議論があり、空想上の生物である可能性、蛹や幼生の可能性なども指摘されてきた。蛹や幼生の可能性については、目が表現されていること、触角と思われる部位が認められることから、対象から除外することができると考えられる。描かれた対象をうまく特定できない以上、空想上の生物であった可能性も完全に否定することはできないが、これとほぼ同じ図像の表現されている遺物がハッサンケイフ・ホユック遺跡のほかにも、キョルティック・テペ遺跡、グシル・ホユック遺跡など、ティグリス川上流域の遺跡から確認されている。その表現がお互いに大変よく似ていることから、明確な対象が存在していたとみることができ、他の図像はいずれも対象を特定することができ、実際に存在する動物を忠実に表現していることから、空想上の生物である可能性は低いように思われる。

トルコ南東部のマルディン博物館に収蔵されているクロライト製の石製容器にも、細部に違いが認められるとはいえ、よく似た生物が描かれている（Gündem and Erdoğan 2018）。この石製容器は



図 8

出土地不明であるものの、様式化された鳥やヘビが表現され、口縁部直下に穿孔が認められることなどから、先土器新石器時代に帰属すると考えてまず間違いない。その図像には頭部に触角と思われる突起が認められ、腕または脚も2本表現されている（図8）。ほかの事例と異なっている点は、体部が胸部と腹部から構成されていることと腹部から下方に長い尾のような表現が認められることである。この事例を含めて考えてみても、特定の生物と対応させることは依然として困難であるが、表現されている頻度から考えて、当時の人々にとって大変重要な意味をもった生物であったことは間違いない。

おわりに

ティグリス川上流域では、ハッサンケイフ・ホユック遺跡のほかにもキョルティック・テペ遺跡、

グシル・ホユック遺跡、ハラン・チェミ遺跡、デミルキョイ・ホユック遺跡など、前 10 千年紀後半を中心に居住された先土器新石器時代の集落が調査されている。試掘調査程度の面積しか発掘されていないデミルキョイ・ホユック遺跡を除いて、これらの遺跡からはシンボリズムに関係する資料が多数出土している。中でもキョルティック・テペ遺跡では、石製容器の器面とヘラ状骨製品を中心に、ヘビ、サソリ、様式化された鳥、正体不明の生物、ヤギかヒツジと思われる四足動物が描かれる事例が確認されている。四足動物以外はハッサンケイフ・ホユック遺跡でも確認されており、両遺跡の間での共通性が顕著に認められる。

新石器時代初頭のシンボリズムについては、ジャンル・ウルファ市近郊のギョベックリ・テペ

遺跡から第一級の資料が得られている。T 字形石柱に浮彫で表現される形で、ヘビ、キツネ、イノシシ、鳥が中心に認められる。このほかウシ、ヒツジ、ガゼル、数は少ないものの、猛禽類、クモ、サソリを表現した事例も認められる。このほか、テル・アバル 3 遺跡などユーフラテス中流域の遺跡からも多くの遺物が出土しており、特に先土器新石器時代の初頭（前 10 千年紀後半）を中心とする時期にその例が多いと指摘することができる。

参考文献

Gündem, C. Y. and N. Erdoğan 2018 A Neolithic stone cup with a sacred scene. *Arkeoloji Dergisi* XXIII: 55–64.

象徴の容器としての土器と石製容器

—テル・エル・ケルクの事例にもとづいて—

常木 晃

筑波大学人文社会系

はじめに

西アジアにおいて実用的で安定的な土器生産は前 7000 年前後に開始されている (Tsuneki et al. 2017)。その直後の前 7 千年紀には、土器作りは西アジア各地に広がり、様々な特徴を持った土器が各地で製作されるようになった。西アジアでの土器の開始を探るには、初期の土器そのものの研究とともに、土器がどのようなコンテキストで出土し、他の容器とどのような関係にあるのかを追究する必要がある。

「土器はなぜ発明された?」「いったい何に使われた?」「土器の機能とは?」など、土器の始まりについては、様々な疑問がある。もちろん土器は、何かのモノを入れるために作られているが、土器そのものを目的にして制作された可能性もある。芸術や象徴としての土器の役割も決して見落とすことはできない。

土器の出土コンテキストと、土製容器や石製容器、プラスター容器、革袋、バスケット、木製容器などの他の容器の出土コンテキストの比較研究は、土器の本質や意味を考察する一助になる。しかしながら、多くの土器や他の容器は、発掘中に覆土より出土し、コンテキストが不明なものも多い。土器などの容器は時には製作のコンテキストで発見されることはあるが、使用状態が分かる

ような消費のコンテキストで出土する例は稀である。

私たち筑波大学の調査隊は、北西シリアの巨大な新石器時代のメガサイトであるテル・エル・ケルクの発掘を長期間継続してきたが、幸いにも土器や石製容器などについて、使用のコンテキストが判明している事例に出会っている。その多くが埋葬に伴って出土した事例であるので、使用の第 1 のコンテキストと言うよりは、第 2、第 3 のコンテキストと言うべき事例であるが、それでも筆者は、こうした事例が新石器時代に土器を製作し使用し始めた西アジアの人々が、なぜ土器を作り出し、何に用いたのかについて、多くのヒントを与えてくれるものと思える。本稿では、こうした事例を紹介しながら、テル・エル・ケルクにおいて、人々が土器やその他の容器を、実用的及び象徴的に利用していた実態をまとめたい。

1. ケルクにおける粘土製容器と初期の土器

ケルクにおいて土器の出現に絡んで最も注目すべき事例は、土器出現直前のルージュ 1c 期に当たる PPNB 後期、前 8 千年紀後半の文化層から検出された粘土製容器 clay bin である (Tsuneki 2016)。大型の倉庫と想定される建物から 14 基以上の粘土製容器が連続して発見された。粘土製容

器は、40～60 cm 程の高さで、80 cm 内外の内径を持つ大型の容器が主体となっている。また胎土には多くのスサ（コムギの藁）を含み、器壁も極めて薄い。粘土製容器の一つからは200点以上の化石種タニシ *Viviparus syriacus* 製のビーズが出土している（千葉中央博物館黒住耐二氏による同定）。その規模と粘土製容器の数から、倉庫はとも個人が所有したものは思えず、集落全体あるいは大きな親族が協働して作っていた倉庫であろう。出土品からは、日常的な使用というよりも、集落共同での儀式などで使用されたものと考えてもよいと思われる。

これに対して、ルージュ 1c 期直後のルージュ 2a 期（土器新石器時代初頭）から出土するケルク土器は、径 14～16 cm 程度の概して小型の鉢型土器であり、大変よく磨研されている上に、器壁は 1 cm 内外と非常に厚く、また胎土にはカリサイトなどの鉱物粒を多数含んでいる (Miyake 2003)。一部に二次焼成痕も認められ、ケルク土器は主として煮沸などの調理に用いられたと想定される。つまり、1c 期の粘土製容器とは、サイズ、器形、胎土、器面調整など、あらゆる点で異なっており、貯蔵用に用いられたことが明らかな粘土製容器とは明らかに異なる属性ばかりの土器である。ケルク土器に類似した土器はほかに北シリアから南東アナトリアにかけての多くの遺跡から出土しており (Le Mièrè 2017)、小型で鉱物粒を多く含む暗色系の土器として、Black Series, (Faura and Le Mièrè 1998)、Early Dark Ware (Nishiaki and Le Mièrè 2005)、Early Mineral Ware (Nieuwenhuys et al. 2010) などと呼ばれている。つまり、前 7000 年前後に西アジアで開始される安定的に生産され始める土器は、明らかに貯蔵用に作られたものではなく、持ち運べるような、煮沸などに用いら

れたものと想定される。ただし、二次焼成がみられるものは決して多くないという指摘もあり (Walter Cruells pers. comm.)、その多くが煮沸用であったかどうかについては意見が分かれる。

2. ケルクの土器新石器時代墓地から出土した土器と石製容器

次に、本稿の主題である使用のコンテキストが明確な、前 6400～6100 年のルージュ 2c 期のケルク土器新石器時代墓地から出土した土器と石製容器について紹介していきながら、ケルク新石器時代社会における土器の意味を考えていきたい。前述したように墓地の時期はケルクで土器作りが開始されてから既に 500 年ほどが経過しており、墓地からの出土ということもあり、土器の開始についてや、実用的な使用（調理、食器、貯蔵、運搬など）について直接議論できる資料ではないが、土器や石製容器の使用コンテキストは明らかであり、土器新石器時代の土器使用の一端を明確に示す資料群と言える。

テル・アイン・エル・ケルク中央区から発見されたケルク新石器時代墓地からは、少なくとも 244 体の埋葬人骨が出土している (図 1)。人骨サンプルそのものから 25 点の ^{14}C 年代測定が実施されており、墓地の年代は 6415～6110 BC と算定されている (Itahashi and Yoneda n.d.)。

40 % 内外の埋葬に伴い、ビーズ類や土器、スタンプ印章、石器、骨角器などの副葬品が出土している。そのうち、土器は 13 基の墓から 16 点、石製容器は 2 基の墓から 2 点、ほぼ完形の状態で出土した。発見のコンテキストにもとづいて、土器と石製容器の用途に関して以下のような 3 つの使用のコンテキストに区分できた。

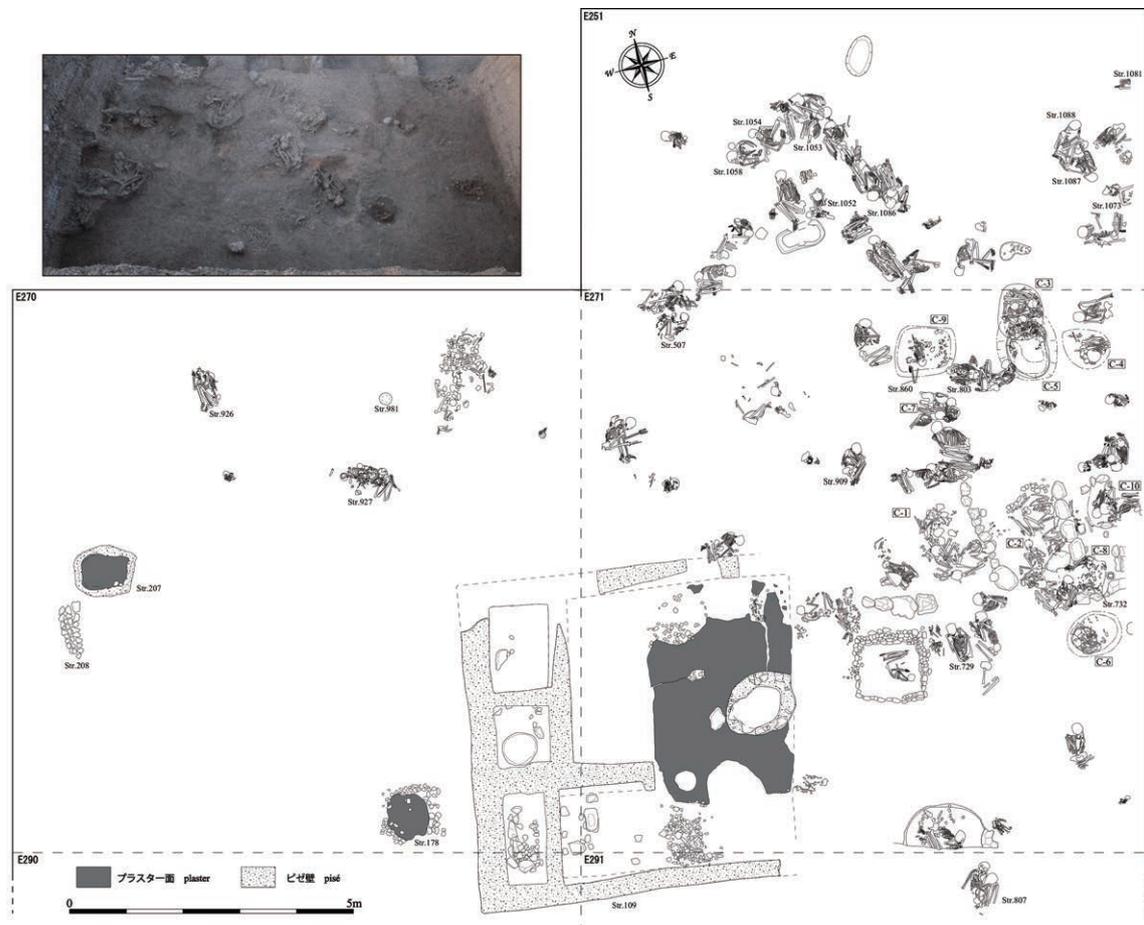


図 1 ケルク遺跡の新石器時代墓地（ルージュ 2c 期）

2-1. 子供の遺体あるいは骨を入れたり、カヴァーするための土器

いわゆる甕棺墓 / 土器棺墓 (urn burial) に用いられた土器で、3点出土した。Sr. 981 はルージュ 2c 期の典型的な暗色磨研土器の鉢であり、完全な胎児の人骨を含んでいた (図 2)。Sr. 1073 は非常に特殊な方形プランの厚手の粗製土器で、1 ~ 2 歳の幼児の人骨片が検出された (図 3)。このような器形の土器は非常に特異であり、埋葬用に特別に制作された可能性がある。Sr. 933 は、胎児の上に大型の暗色磨研土器片がカヴァーされた例 (図 4) である。これら 3 点の埋葬用土器は、

子供の埋葬に使用された西アジア最古級の土器棺ないし土器覆いである。土器が使用され始めて間もなく、人々は子供の埋葬の為に土器を使用し始めていることを明確に示している。その用途は、死んだ子供を悪霊から守護するためと想定してよいだろう。

2-2. 死者への供献用土器

埋葬された死者へ何かを献じるために用いられたと想定される完形の土器が 7 点出土している。多くは、私たちが Concentration (C) と命名した



図2 Str. 981 土器棺墓：鉢形土器が逆さに出土（上）、土器底部を取り除いた状態（下）



図3 Str. 1073 土器棺墓



図4 Str. 933：同一個体の土器片で覆われた埋葬

集合墓に伴って発見されている。C-5 は、火葬墓（焼人骨葬墓）の1つで、5体の成人人骨（男2女3）が出土しているが、火葬墓を埋め戻した直上から、2点の小型の暗色磨研土器が出土した（図5）。そのうち1点の壺形土器の中からは、スタン

ブ印章が発見されている。同様に火葬墓の1つであるC-6からは3体の成人人骨と4体の幼児骨が検出されている。小型の壺形暗色磨研土器がこの火葬墓ピットの底部より出土し（図6）、その中には多数の炭化小麦が詰まっていた。これらの例



図5 集合墓 5 (Concentration 5): 火葬墓坑



図6 集合墓 6 (Concentration 6): 火葬墓坑

から、埋葬ピットの直上や、ピット内に置かれた完形土器は、印章や小麦など、埋葬された死者に関連した遺物や死者を他界に送るための食物などを入れて献じられた供献用土器と想定される。

2-3. 死者の靈魂を受け取るための容器

やや解釈が難しいコンテキストで発見された土器と石製容器であり、8 点の土器と 2 点の石製容器がこのカテゴリーに含められた。このうち Str. 927 が最も理解しやすい (図 7)。Str. 927 の被葬

者は若い女性で、周産児と 4～5 歳の幼児とともに側臥屈葬で埋葬されていた。彼女の頭蓋骨は埋葬後に外されていて、その頭蓋骨を外した後、その位置に小型の鉢形暗色磨研土器が置かれていた。このケースでは、頭蓋骨の代わりに土器を置いたことは明らかである。PPN 期に頭蓋骨外しは盛んにおこなわれていたが、ケルクの土器新石器時代墓地にも数例の頭蓋骨外しが認められる。PPN 期の頭蓋骨は、死者のアイデンティティを象徴する部分として外されていたと考えられるの



図7 Str. 927 (図はサーリ・ジャンモ作成)



図8 Str. 1058 (左) と副葬された土器 (右)

で、ケルクで頭蓋骨の代わりに完形土器が置かれていることは、土器が死者のアイデンティティや魂の代わりを果たすものと認識されていたと考えることができよう。

この他、完形の土器が死者の後頭部に置かれている例が、一次葬例 (Str. 1058、図 8) に限らず、

二次葬例 (Str. 1052、図 9) でも認められた。同様に死者の後頭部に石製容器を置いた例もある (Str. 715、図 10)。この習慣は、ケルク新石器時代墓地の後のルージュ 2d 期文化層から発見された墓の例でも見られる (Str. 23、図 11)。注目されるのは、死者の後頭部に置いた土器や石製容器では、



図 9 Str. 1052



図 10 Str. 715



図 11 Str. 23 (ルージュ 2d 期)



口縁部を死者の頭側に向けて容器が置かれている点である。単に死者に供献されたものなら、このようなおかれ方は非常に不自然に見える。容器の口縁部を後頭部に向けて傾けていることも非常に印象的である。このような置かれ方は、死者の靈魂を受け取っているようにも見えるのである。

この他、8～10歳の子供の右の掌に、小さな暗色磨研土器の鉢を持たせて埋葬された例も非常に印象的な土器の使用だった (Str. 507、図 12)。この子供の両親が、その死を悼んで子供の掌にこの土器をそっと乗せたに違いないだろう。同じよ

うなコンテクストとしてすぐに思い浮かぶのは、同じ墓地から出土した2～3歳の幼児の左手に置かれたスタンプ印章の事例である (Str. 1093、図 13)。新石器時代のスタンプ印章は、他者の接近を忌避するためにバスケットや土器、石製容器の封印に用いられたが、このケースでは、悪霊から死んだ子供を守護するために置かれたことは明白だろう。印章ではなく土器をおいたのも、同じ意味を持っていたのだろうか？あるいは、反対に、子供を悪霊から守護するのではなく、頭蓋骨の後頭部に容器を置いたのと同様に、子供の靈魂を土



図 12 Str. 507



図 13 印章が副葬された幼児（2-3 歳）

器が受領するためだった可能性もあるだろうか。

3. 小結

テル・エル・ケルクの発掘調査では、その用途を考えるとときに重要な、消費のコンテクストを示す様々な容器が検出されている。前 8 千年紀後半の PPNB 後期文化層の大型の粘土製容器を連ねた倉庫の発見は、先土器新石器時代の土製容器が村落全体に関わる大量の貯蔵に関連して使用されていたことを示唆した。前 7 千年紀初頭に始まる本格的な土器生産の場面では、消費コンテクストを明確に表す容器の検出例はないが、ケルク土器そのものの属性から、それ以前の粘土製容器が直

接土器生産に繋がるのではないことは明確であった。また同じ時期の石製容器やプラスター容器の出土量はケルクでは僅かで、明確な出土コンテクストを示すものもなかった。

前 7 千年紀前半のルージュ 2a-b 期に、ケルクでは土器は調理をはじめとする実用を目的に様々な使用されたことは間違いないだろう。しかし、例えばテル・サビ・アビヤドなどの同時期の土器を出土する他の遺跡から示されているように (Nieuwenhuys 2017)、実用品ではなく象徴品として土器が使用されていたことも否定できない。そのような象徴品としての土器の使用は、ここで述べてきたように、次のルージュ 2c 期の土器新石器時代墓地から出土した土器や石製容器の出土コンテクストから、明らかに主張することができる。本稿でまとめたように、土器が本格的にケルクの社会に導入されてから僅か 500 年後には、土器を中心とする容器は、1) 死者（子供）を直接入れて庇護する、2) 死者への供献品を入れる、3) 死者の霊魂を受領する、などを目的に、社会生活の様々な象徴的場面で使用されるようになったのだった。彼らにとって、土器は単なる容器ではなく、死者の魂や死者そのものをも象徴していた可能性すらあるのではないかと、筆者は空想している。

本稿は、Olivier Nieuwenhuysse 博士の逝去を悼んで 2020 年 2 月 10 日にベルリン自由大学で開催されたワークショップ、Thinking Inside the Box: Containers in Neolithic Western Asia で筆者が発表した Containers for Spirit: A View from Tell el-Kerkh にもとづいて執筆した。2020 年 1 月 15 日に 53 歳の若さで旅立たれた Olivier 博士のご逝去を悼み、このつたない本稿を捧げます。

参考文献

Faura, J. M. and Le Mière, M. 1998 La céramique néolithique du Haut-Euphrate syrien, in Olmo Lette, G. and Montero-Fenollos, J.-L. (eds.) *Archaeology of the Upper Syrian Euphrates*: 281-198, Barcelona, AUSA.

Le Mière, M. 2017 The earliest pottery of West Asia: Questions concerning causes and consequences, in Tsuneki, A. Nieuwenhuysse, O. and Campbell, S. (eds.) *The Emergence of Pottery in West Asia*: 9–16. Oxbow Books, Oxford and Philadelphia.

Miyake, Y. 2003 Pottery, in Iwasaki, T. and Tsuneki, A. (eds.) *Archaeology of the Rouj Basin: A Regional Study of the Transition from Village to*

City in Northwest Syria, Vol. I: 119–141, Al-Shark 2: University of Tsukuba, Studies for West Asian Archaeology, Department of Archaeology, Institute of History and Anthropology, University of Tsukuba,

Nieuwenhuysse, O. 2017 The initial pottery Neolithic at Tell Sabi Abyad, northern Syria, in Tsuneki, A. Nieuwenhuysse, O. and Campbell, S. (eds.) *The Emergence of Pottery in West Asia*: 17–26. Oxbow Books, Oxford and Philadelphia.

Nieuwenhuysse, O. Akkermans, P.P.M.G. and Van der Plicht, J. 2010 Not so coarse, nor always plain – the earliest pottery of Syria, *Antiquity* 84: 71–85.

Nishiaki, Y. and Le Mière, M. 2005 The oldest pottery Neolithic of Upper Mesopotamia: new evidence from Tell Seker al-Aheimar, the Upper Khabur, northeast Syria, *Paléorient* 31(2):55–68.

Tsuneki, A. 2016 Tell el-Kerkh, in Kanjou, Y. and Tsuneki, A. (eds.) *A History of Syria in One Hundred Sites*. 61–64, Archaeopress.

Tsuneki, A. Nieuwenhuysse, O. and Campbell, S. (eds.) 2017 *The Emergence of Pottery in West Asia*, Oxbow Books, Oxford and Philadelphia.



2010 年 8 月 27 日に Olivier 博士らがケルクを来訪した時の写真

新石器革命、“Broad spectrum revolution”、 定住、栽培化、家畜化

本郷 一美

総合研究大学院大学先導科学研究科

はじめに

2019年度は、チャルモ (= ジャルモ) 遺跡 (イラク)、ハッサンケイフ・ホユック遺跡 (トルコ)、スマキ遺跡 (トルコ) から出土した動物遺存体の分析を進めた。個人的な話で恐縮だが、筆者にとって筑波大学の発掘調査により新たに出土したチャルモ遺跡の動物骨を分析したことは特別な意味があった。そもそも、筆者が西アジアの新石器時代の遺跡から出土した動物遺存体をもとに家畜化の過程に関する研究を始めた契機が、ティグリス川上流 (トルコの南東部) に位置するチャヨニュ遺跡から出土した動物骨の分析をおこなう機会を得たことだったからである。それは1990年代半ば、25年近く前のことで、シカゴ大学オリエント研究所のロバート J. ブレイドウッドらが、チャヨニュ遺跡の調査に着手してからすでに30年が経過していた。

ブレイドウッドが、ゴードン・チャイルドが「新石器革命」と称した農耕の起源に関する説を検証することを目的とし、イラケージャルモプロジェクトを開始したのは1948年であった。農耕は野生食料資源が豊富な場所で始まったはずであるとの仮説を立て、調査対象となる遺跡を探した (Braidwood and Howe 1960)。イラク北部クルディ

スタンのザグロス山麓が調査地として選ばれ、まずキルクークの南に位置するマタツラ遺跡の発掘調査に着手、続いて1950～1951年にキルクーク東方のジャルモとカリム・シャヒルの発掘がおこなわれた。1958～1959年に計画されていた第四次調査はイラクの7月14日革命により実現せず、ブレイドウッドらは調査地をトルコへ移した。1963年からイスタンブール大学のハーレット・チャンベル教授とトルコ共和国内のティグリス川上流で共同調査を開始、1964年からチャヨニュ遺跡 (ディヤルバクル県) の発掘をおこなった。

私の家畜化に関する研究は、地理的にはブレイドウッドがおこなった調査を逆になぞったことになり、チャヨニュ遺跡から始まりジャルモ遺跡にたどり着いた。しかし、時系列では、家畜化以前の前10,000年頃のティグリス川上流域における定住集落形成期の遺跡であるハッサンケイフ・ホユック遺跡、先土器新石器時代A期～B期のティグリス・ユーフラテス上流域における栽培化・家畜化の過程を示すチャヨニュ遺跡、栽培植物と家畜をPPNB期末から土器新石器時代初頭にかけて受容するサラット・ジャーミー・ヤヌ遺跡とスマキ遺跡、ザグロス山麓地域を含む周辺部の資料から、西アジアの新石器化過程をたどって来た。

1. イラク・ジャルモプロジェクトによる家畜化の研究

ブレイドウッドらによるイラク・ジャルモプロジェクトは、初期農耕集落の出現から文明の発達へ至る過程を「定住→農耕の始まり→農耕牧畜複合→都市文明の発達」という進化的な視点で解明しようとした。遺跡と遺物の研究は、地域の生態（気候、動物相、植物相）、地形、地質、景観を総合的に理解していく中で進めるべきであるという方針のもとに、植物学、動物学、地質学をはじめとする様々な分野の専門家からなる調査隊を組織した学融合的な調査は当時革新的で、その後の西アジアでの考古学調査のあり方に大きな影響を与えた (Braidwood and Howe 1960)。以降、20 世紀後半以降の西アジアの新石器時代遺跡の発掘調査には必ずと言ってよいほど動物考古学者が加わるようになり、偶蹄類の家畜化過程についての研究が蓄積されていったのである。

上記の遺跡が位置する、いわゆる「肥沃な三日月弧」北～東部地域（現在のシリア北部からトルコ南東部、イラン中央部）は、新石器時代初頭（先土器新石器時代 A 期、B 期）に植物の栽培化、偶蹄類（ヤギ、ヒツジ、イノシシ、ウシ）の家畜化の中心となった地域と考えられている。チャイルドは「農耕、牧畜を始め、定住するようになったことは、村、都市の形成と後の文明の発達につながる革命的なできごとだった。」(Childe 1936) と述べた（下線は筆者による）。そのチャイルドの「新石器革命」説を検証しようとしたブレイドウッドは、狩猟採集民がより定住的な生活に移行することを可能にする資源の豊富さが食糧生産の契機として重要で、初期農耕集落の形成につながったと考えた。イラク・ジャルモプロジェクトに参加しブレイドウッドに影響を受けるとともに、ル

イス・ビンフォードの“Density equilibrium Model” (Binford 1968) に影響を受けたケント・フラナリーは、“Broad spectrum revolution” (Flannery 1969) を提唱し、資源が豊かな地域での人口増加を受け、辺縁部のより食料資源が希薄な場所へ移住する集団が生じたことで、水産資源、小動物、鳥類など食糧とする対象が広がるいっぽう、自然条件が悪い場所で穀物などの収量を増加し安定させる努力もなされたと論じ、このような生業の多様化が、栽培化と定住農耕集落の出現を促したと考えた。

その後の西アジアでの初期新石器時代遺跡の調査の進展により蓄積されたデータは、ヒトが定住度が高い集落を形成し、周辺の環境や植生が改変されることにより、新たなニッチが生み出され、そこで植物あるいは動物とヒトの共進化的な過程（栽培化、家畜化）が進行したことを示す。

2. ジャルモ出土動物骨の先行研究

シカゴ大学のジャルモ発掘調査により出土した動物骨は、スタンプリにより詳細に報告されている (Stampfli 1983)。フラナリーがシカゴ大学に提出した修士論文 (1961) でジャルモ出土のブタを分析し、後にあらためて家畜ブタのザグロス山麓地域への伝播について論じた (1983) ためジャルモ出土動物骨資料の中で特にブタが注目されたが、実はジャルモからはイノシシ、ブタの骨はごく少量しか出土しておらず、先土器新石器時代層では出土動物骨の 2% 余り、土器新石器層で 7% を占めるにすぎない (表 1)。フラナリーは、イノシシ・ブタの割合の増加と臼歯のサイズが小さいことから、家畜ブタは前 7 千年紀中ごろに土器と同時にジャルモ遺跡にもたらされたと考えた。ジャルモ出土のイノシシ・ブタの骨を再検討したプライスらは、その多くが 1 歳以下で死亡してい

表 1 ジャルモ動物遺存体の種構成 (Stampfli 1983)

動物種		Operation I, II Lower Levels (n= 1416)	Operation I, II Upper Levels (n=3450)	Upper Level JI, 3 (n=1277)	Other operations (n=1783)
%					
<i>Ovis</i>	ヒツジ	5.1	3.4	3.2	10
<i>Capra</i>	ヤギ	5.8	8.5	11.3	5
<i>Ovis/Capra</i>	ヒツジまたはヤギ	62.4	69.6	76.6	73.2
<i>Bos (wild)</i>	ウシ(野生)	8.9	3	3.6	1.7
<i>Bison</i>	バイソン	0	< 0.1	0	0.3
<i>Sus</i>	イノシシ・ブタ	2.3	7	2.1	3.5
<i>Gazelle</i>	ガゼル	5.9	4	1.1	2.7
<i>Cervus</i>	アカシカ	2.5	2.6	1.1	0.7
<i>Capreolus</i>	ノロジカ	0.1	0	0	0.2
<i>Onager</i>	オネガー	5.1	0.4	0.1	0
<i>Canis (dog/wolf)</i>	イヌ・オオカミ	0.7	0.7	0.5	0.5
<i>Others</i>	その他	1.3	0.7	0.4	2.2

ること、骨のサイズが小型であることを根拠に、前7千年紀はじめに家畜ブタが飼育されていたのは確実であり、さらに PPNB 末（前8千年紀後半）にすでに家畜ブタが導入されていた可能性がある」と論じている。しかし、ジャルモから出土する動物骨の大部分を占めるのはヒツジとヤギである。スタンプリはこれら2種が出土骨の80～90%を占め、ヤギの方が多いと報告した。

3. 2018年調査で出土した動物骨の分析結果

以下に筑波大学による新たな発掘調査で出土した動物骨の一部の分析結果を報告する。2018年の調査で出土した動物遺存体資料のうち、J-II北トレンチから出土した約1500点の同定作業をおこなった。表土層出土の破片は分析対象としなかった。動物骨の多くは3-4層からの出土で、放射性炭素年代測定の結果、7000 BC 前後 (PPNB 末) の年代 (較正年代) が得られている。出土骨の保存状態はよいが、小破片が多い (図1)。出土地点によっては焼骨が多く混じる。

今回の分析で種と部位が同定された破片数は約200点だった。うち98%がヒツジまたはヤギの骨で、3対2でヒツジがやや多く、ヤギの方が多いとの先行研究とは異なる傾向がみられた。このほかイヌの骨が2点、ブタの骨が1点出土した。

次に、2018年に出土したヒツジ、ヤギの骨のサイズをスタンプリが報告した資料と比較した。スタンプリが報告したヒツジ86点、ヤギ156点の四肢骨の幅の計測値を、ログ・サイズインデックス法 (LSI) を用いて、標準個体のサイズと比較した (図2, 図4)。ヒツジの標準個体はイラン



図1 チャルモ遺跡出土動物骨

産の野生メス（Uerpmann and Uerpmann 1994）、ヤギの標準個体はイラン産の野生オス・メスの計測値の平均（Uerpmann and Uerpmann 1994）である。図2、図4で標準個体のサイズはLSI“0”で表される。さらに、ジャルモ出土のヒツジ、ヤギのサイズを、トルコ南東部のティグリス上流域の遺跡出土資料と比較した（図3、図5）。

ジャルモ遺跡から出土したヒツジの多くは標準個体より小型で、LSI -0.03 をピークとする正規分布を示す（図2）。標準個体がメスなので、出土したヒツジはほとんどが家畜ヒツジの骨と言ってよいだろう。ハッサンケイフ遺跡、キョルティック遺跡（Arbuckle and Özkaya, 2006）チャヨニュ遺跡 r-g 層（PPNA）、チャヨニュ遺跡 ch、cp 層（PPNB 前～中期）、チャヨニュ遺跡 c、lr 層（PPNB 後～末期）、チャヨニュ遺跡 PN 期、スマキ遺跡（PN 期）、サラット・ジャーミー・ヤヌ遺跡（PN 期）から出土したヒツジのサイズを比較すると、PPNB 中期以降、LSI の分布の中央値が標準個体の LSI を下回り、資料の大半を標準個体のサイズより小型の個体が占めるようになる（図3）。ジャルモから出土したヒツジのサイズは、チャヨニュ遺跡の cp 期、lr 期（PPNB 末）および土器新石器時代の遺跡から出土したヒツジのサイズとほぼ同じかやや小さいことがわかる。LSI 値が 0.03 以上のもも少数存在し、これらは野生ヒツジであろう。ヒツジの狩猟が継続していたことがわかる。

同様に、ジャルモ出土のヤギもその多くは標準個体より小型で、LSI -0.06 をピークとする正規分布を示し（図4）、家畜ヤギとみられる。トルコ南東部の先土器新石器時代の遺跡は概してヤギの出土数が少ないため、比較できる資料は限られるが、PPNA 期のハッサンケイフ遺跡と PPNB 期末のチャヨニュ遺跡 lr 層、土器新石器時代のス

マキ遺跡、サラット・ジャーミー・ヤヌ遺跡から出土したヤギの骨とジャルモ出土のヤギのサイズを比較した（図5）。ジャルモから出土したヤギは、PPNA 期のハッサンケイフ遺跡の野生ヤギより小型で、そのサイズ分布は PPNB 末～PN 期の家畜ヤギを出土する遺跡と比較してもやや小型である。ハッサンケイフ遺跡出土の野生個体と同等の大きさの、LSI が 0.02 以上のヤギが少数存在し、野生ヤギの狩猟も細々と続いていたことがわかる。

2018 年の調査で出土したヒツジ、ヤギの骨のうち、計測とサイズ比較が可能だったのは、ヒツジ 16 点、ヤギ 9 点と少数だが、それらのサイズ範囲を図2、図4のグラフの下に線で示した。ヒツジ、ヤギとも 2018 年出土資料はスタンプリによるヒツジ、ヤギの計測値の範囲内に収まるサイズ分布を示した。

おわりに

ジャルモ遺跡の 2018 年調査で出土した約 200 点の少数の資料にもとづく所見ではあるが、1983 年にスタンプリが報告した出土動物骨の分析結果と矛盾がない結果が得られた。種構成については、ヒツジとヤギが出土動物骨の大半を占め、ブタやウシはほとんど出土しない。ヒツジ、ヤギの骨のサイズから、大部分は家畜ヒツジ、家畜ヤギであり、ティグリス川上流域の土器新石器時代の遺跡から出土した家畜ヒツジ・ヤギより若干小さいようである。家畜化の始まりから約 1500 年後の 7000 BC 前後であり、PPNB 末～PN 期にティグリス川上流域東部に遺跡が形成されるとともに栽培植物と家畜が伝播するが、ほぼ同時期にザグロス山麓地域へも家畜が導入されたとみられる。今後ジャルモ遺跡の 2017～2018 年調査で出土し

図2は印刷版にのみ掲載

図 2 ジャルモ遺跡出土のヒツジのサイズ：Log Size Index (LSI)

図3は印刷版にのみ掲載

図 3 ティグリス川上流域の新石器時代遺跡出土ヒツジのサイズ

図4は印刷版にのみ掲載

図 4 ジャルモ遺跡出土のヤギのサイズ：Log Size Index (LSI)

図5は印刷版にのみ掲載

図 5 ティグリス上流域の新石器時代遺跡出土ヤギのサイズ（ティグリス上流域）

た資料の同定分析を進め、PPNB 末から PN 期に動物利用の変化があったかどうかを検証したい。

参考文献

Arbuckle, B.S. and Özkaya, V. (2006) Animal exploitation at Körtek Tepe: An early aceramic site in Southeastern Turkey. *Paléorient* 32: 113–136.

Binford, L.R. (1968) Post-Pleistocene adaptations. In Binford, S.R. and Binford, L.R. (eds), *New Perspectives in Archaeology*, 312–342. Chicago: Aldine Publishing.

Braidwood, R.J. and Howe, B. (1960) *Prehistoric investigations in Iraqi Kurdistan*, Studies in Ancient Oriental Civilization 31. Chicago: University of Chicago Press.

Childe, V.G. (1936) *Man makes himself*. London: Watts. (邦訳「文明の起源」岩波新書)

Flannery, K.V. (1961) *Skeletal and Radiocarbon Evidence of the Origins of Pig Domestication*. University of Chicago, MA Thesis.

Flannery, K.V. (1969) Origins and ecological effects of early domestication in Iran and the Near East. In Ucko, P.J. and Dibbleby, G.W. (eds), *The Domestication and*

Exploitation of Plants and Animals, 73–100. Chicago: Aldine Publishing Co.

Flannery, K.V. (1983) Early pig domestication in the fertile crescent: A retrospective look. In Young, T.C., Smith, P.E.L. and Mortensen, P. (eds), *The Hilly Flanks: Essays on the Pre-history of Southwestern Asia*, Studies in Ancient Oriental Civilization 36, 163–188. Chicago: University of Chicago Press.

Price, M.D. and Arbuckle, B.S. (2015) Early pig management in the Zagros Flanks: reanalysis of the fauna from Neolithic Jarmo, northern Iraq. *International Journal of Osteoarchaeology* 25: 441–453.

Stampfli, H.R. (1983) The fauna of Jarmo with notes on animal bones from Matarrah, the Amuq, and Karim Shahir. In Braidwood, L.S., Braidwood, R.J., Howe, B., Reed, C.A. and Watson, P.J. (eds), *Prehistoric Archaeology along the Zagros Flanks*, 431–484. Chicago: Oriental Institute of the University of Chicago.

Uerpmann, M. and Uerpmann, H.-P. (1994) Animal bone finds from excavation 520 at Qala'at al Bahrain. In Hojlund, F. and Andersen, H. (eds), *Qala'at al Bahrain, Volume I. The Northern City Wall and the Islamic Fortress*, 227–237. Aarhus: Aarhus University Press.

西アジア新石器時代の食物共有と埋葬

一人骨の安定同位体比分析による食性復元

板橋 悠

筑波大学人文社会系

はじめに

平成 31 年度にはトルコ共和国のアシュックル・ホユック遺跡、イラン・イスラム共和国のタペ・サング・チャハマック遺跡から出土した人骨においてコラーゲンの炭素・窒素同位体比分析、およびアミノ酸の窒素同位体比分析をおこない、個人の食性復元とそれに基づく集落内での食物の共有・分配を検討した。

食料の獲得や分配は人類にとって常に課題であり続けており、文化や経済、社会構造のあり方や変化は食料の獲得方法やその消費と密接に関連している。したがって、過去の人々がどのような物をどのような人々と分け合って食べていたのかが分かれば、当時の経済活動や共同体内の集団構造に関する多くの情報が得られると期待できる。

西アジアでは新石器時代を通じた長いプロセスによって狩猟採集経済から穀物栽培や牧畜による食料生産経済へ主たる生業が変化した。新石器時代に起こった生業の変化に時期を同じくして、西アジアの人口動態や社会構造が大きく変化したとする説が提示されている (Kuijt 2008; Kadowaki 2012)。これは新石器化の中で集落サイズの大型化や人口の増加だけでなく、経済活動や貯蓄をおこなう集団単位の大きさ、男女分業のあり方も変化していたとするものである。また食料獲得方法

が変化することにより食料獲得の際に共同して行動する人数や範囲が変化し、その結果として経済を共にする世帯サイズが減少したとする説もある。この場合、「世帯」は経済活動や財産を共有する単位として定義される。

では、先史時代において財産や経済活動の対象として重要な位置を占めていたと思われる「食料」は、実際にどのように共有、分配されていたのであろうか？遺跡から出土した人骨から抽出した骨コラーゲンやアミノ酸の安定同位体比を測定することで、各個人にどの食資源がどのくらい寄与したのかを定量的に評価することができる。さらに一人の骨を一試料として測定する化学分析のメリットとして、得られる値は一個人の生前の活動を反映することが挙げられる。したがって個人間・集団間の同位体比を比較することで、共同体内における食物利用の男女差や小集団間での偏りの存在を検出し、共同体内での食料の共有や分配の検証が可能となる。

本稿でおこなった炭素・窒素安定同位体比分析は、生物の体組織を構成する炭素や窒素の質量数の異なる原子（同位体）の比率を測定し、その生物が消費した食物の構成を推定する手法である。我々は本手法を用いることで、シリア共和国の土器新石器時代遺跡、テル・エル・ケルク遺跡の集

団墓地内では区画内の埋葬人骨同士は類似した同位体比を示すことを明らかにした (Itahashi et al. 2018)。これは集団墓地内のどこに埋葬されるかは帰属する世帯によって決まっていたことを示唆する。

一方で、アミノ酸の窒素同位体比分析では、フェニルアラニンとグルタミン酸の2つのアミノ酸の窒素同位体比の差から、その生物が食物連鎖のどの段階 (Trophic Position、以下 TP) にあるのかを推定する。ヒトの場合、TP はその個人の肉食率の指標となる。

本稿では、食性復元に用いられる人骨コラーゲンの炭素・窒素安定同位体比、アミノ酸の窒素同位体比分析を用いて過去の集団の食性を復元し、個人間で値を比較した。その結果から共同体内の食物が共有された単位を推定し、各時代における世帯の規模を検証した。

1. アシュックル・ホユック

トルコ中央部のアシュックル・ホユック遺跡では、第4～2層から PPNB に属する文化層 (8400～7500 cal BC) が検出されている (Stiner et al. 2014)。各層位の動物遺存体の組成から、未だ狩猟動物が多くの比率を占める家畜飼養の初期段階 (4層) から、家畜化したヒツジが動物骨の多くを占めるようになる (2層上) まで動物利用の時代変化が見つかっている。動物考古学研究から、4層ではヤギ・ヒツジが40～50%、ウサギなどの小型動物が動物骨の40%、ヤギ・ヒツジ以外の有蹄類が残りを含め、様々な動物を利用

していたことが明らかにされている (Stiner et al. 2014)。その後、3層、2層下、2層上と時代が新しくなるにつれて、ヤギ・ヒツジの比率が上昇し、小型動物やその他の有蹄類が減少する傾向が見られている。2層のヤギ・ヒツジ骨も同定可能な部位では多くがヒツジであるため、ヤギ・ヒツジ骨が9割を占める2層の時代には、動物利用のほとんどが家畜ヒツジになったと考えられている。したがって、アシュックル・ホユック遺跡は狩猟経済から牧畜経済への過渡期の遺跡であり、家畜飼養の開始が世帯構造や男女の分業に与えた影響を食物利用から検証できる稀有な遺跡である。

アシュックル・ホユックの PPNB 集団は出土した層位によって古い方から4層、3層、2層下、2層上に分けられているが、出土した層位によるコラーゲンの炭素・窒素同位体比の変化が検出された (図1)。4層と3層の成人人骨に対し、2層上

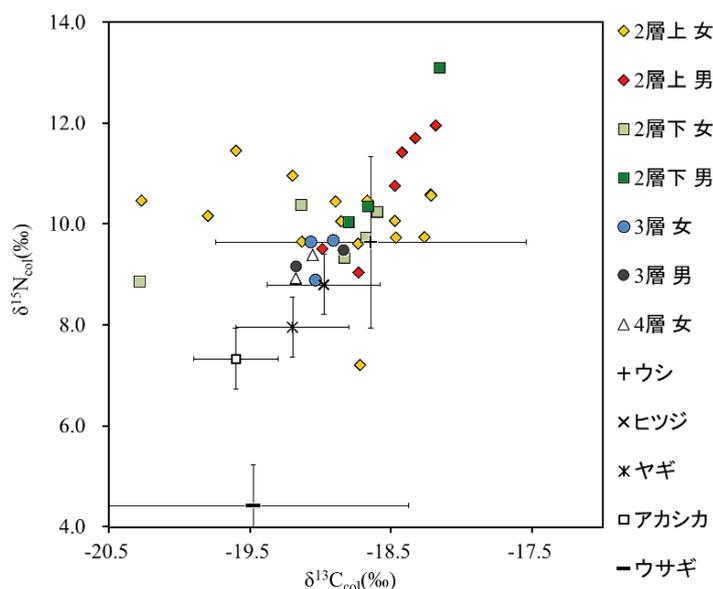


図1 トルコ、アシュックル・ホユック出土人骨と動物骨のコラーゲンの炭素 ($\delta^{13}C_{col}$) と窒素 ($\delta^{15}N_{col}$) の安定同位体比

表 1 トルコ、アシュックル・ホユック出土人骨の $\delta^{13}\text{C}_{\text{col}}$ 、 $\delta^{15}\text{N}_{\text{col}}$ と陸上生態系での TP (TP_陸)

性別	層位	$\delta^{13}\text{C}_{\text{col}}$	$\delta^{15}\text{N}_{\text{col}}$	TP _陸
女	2 層上	-18.9± 0.6	10.1± 1.0	2.48± 0.2
男		-18.5± 0.3	10.7± 1.2	2.55± 0.1
女	2 層下	-19.2± 0.7	9.6± 0.6	2.38± 0.0
男		-18.5± 0.3	11.2± 1.7	2.59± 0.1
女	3 層	-19.0± 0.1	9.4± 0.4	2.38± 0.1
男		-19.0± 0.2	9.3± 0.2	2.41± 0.0
女	4 層	-19.1± 0.1	9.2± 0.3	2.41± 0.0

下の成人人骨は炭素と窒素の同位体比が高くなる傾向が見られた。

一般的にコラーゲンの窒素同位体比の上昇は肉食率の増加と解釈される。しかし、肉食率をより鋭敏に評価できるとされるアミノ酸の窒素同位体比分析により計算した TP では、若干の値の上昇は見られるもののコラーゲンの窒素同位体比から示唆されたほどの肉食率の上昇は示唆されなかった (表 1)。

2つの分析方法の相違は、動物利用の時期差を反映したものである可能性がある。アシュックル・ホユックでは、出土した植物食動物骨においてコラーゲンの炭素・窒素同位体比に種による違いが見られた (図 1)。ウサギは分析した哺乳類の中でもっとも低い窒素同位体比を示し、アカシカがウサギに続いて低い値を示した。さらにヤギ、ヒツジ、ウシと炭素・窒素の同位体比が高くなる傾向があった。4層ではコラーゲンの炭素・窒素同位体比が低いウサギなどの小型動物やアカシカの利用が盛んであり、同位体比の高いヒツジやヤギの比率が相対的に低かったことが人骨の低い値の原因であると考えられる。対して上層では食肉の供給源がヒツジに集中した結果、人骨の値が上昇したと考えられる。

また興味深いことに、2層では男女の間でコラーゲンの窒素同位体比とアミノ酸から推定された TP に差が見られ、男性が女性よりも高い値を示した。これは2層では男性が女性よりも多くの動物性タンパク質を摂取しており、高い肉食率を持っていたことを示している。アシュックル・ホユックでは狩猟が主な食肉獲得方法であった4層に対し、2層ではヒツジ飼養が主要な食肉獲得方法になったと考えられている。チャタルホユックやテル・エル・ケルク、ハケミ・ウセなどの土器新石器時代の農耕民集団では、同位体比の性差は見られず (Richards et al. 2003, Itahashi et al. 2018, 2019)、牧畜が主要になった集団では食物利用の性差が縮小する傾向が予想された。しかし、アシュックル・ホユックの PPNB 集団の結果から、牧畜が主要な生業になった初期の集団では男性の動物性タンパク質摂取比率が高く、肉にアクセスする機会が多かったことが明らかとなった。

一方でアシュックル・ホユックでは、埋葬された住居による同位体比の偏りは示されなかった。この傾向は、アシュックル・ホユックでの食物の共有や生業活動が、世帯単位よりも性によって分けられていたことを示唆している。

2. タペ・サンギ・チャハマック遺跡

イラン・イスラム共和国のタペ・サンギ・チャハマック遺跡は、イラン高原東部の初期農耕集落であり、西タペ（7140～6820 cal BC）と東テペ（6230～5850 cal BC）の2つのマウンドから構成されている（Roustaei et al. 2015）。

西タペと東テペは時期が異なるだけでなく、出土人骨の埋葬形式も横臥屈葬が見られる西タペに対し、東テペの埋葬人骨は伸展葬となっているなど違いが見られる（池田・多賀谷 1977）。また東テペでは同時埋葬と考えられる並行して配置された4体の人骨（No. 201, 202, 203, 204）が発見されている。この中でNo. 203は仙骨付近から胎児骨が発見されているため出産直前に死亡した女性であり、顔を向かい合わせるように埋葬された7歳程度の幼児骨のNo. 204は203の子どもである可能性が指摘されている（池田・多賀谷 1977）。成人女性と同定されたNo. 201, 202も胎児骨が混入しており、両者またはどちらかが妊娠していた可能性がある。

本稿では、同時埋葬されたと思われる4個体が食生活を共有にする世帯関係にあったのかを検討するため、タペ・サンギ・チャハマック遺跡の西テペ出土の成人男女2個体、同時埋葬の3人の成人女性を含む東テペの成人9個体と幼児（No. 204）1個体のコラーゲンの炭素・窒素同位体比分析をおこなった。

出土状況から親子関係が類推されていたNo. 203と204は極めて類似した炭素・窒素同位体比を示したため、この2個体は食生活

を共にしていた可能性が高い（図2）。池田らが推察したように、2個体は同世帯に属する親子であったと考えられる。No. 201と202は互いに近い値を示し食生活が類似していたと考えられる。しかし203, 204とは異なる値を示しており、201, 202は同時埋葬されている203とは生計を異にする関係であったと見られる。201と202も妊婦である可能性が指摘されていることから、埋葬地点は特定の世帯に専有されていたのではなく、妊婦を意識的に一緒に埋葬するような論理が働いていた可能性もある。

西テペの2個体は互いに類似した値を示しているが、東テペの埋葬人骨とは炭素・窒素同位体比ともに異なる値を示しており、時代により食性が変化したことが明らかとなった。しかし、西タペと東テペの間でどのような変化があったのかを断定することは、人骨のコラーゲンの炭素・窒素同位体比しか測定していない現段階では難しい。

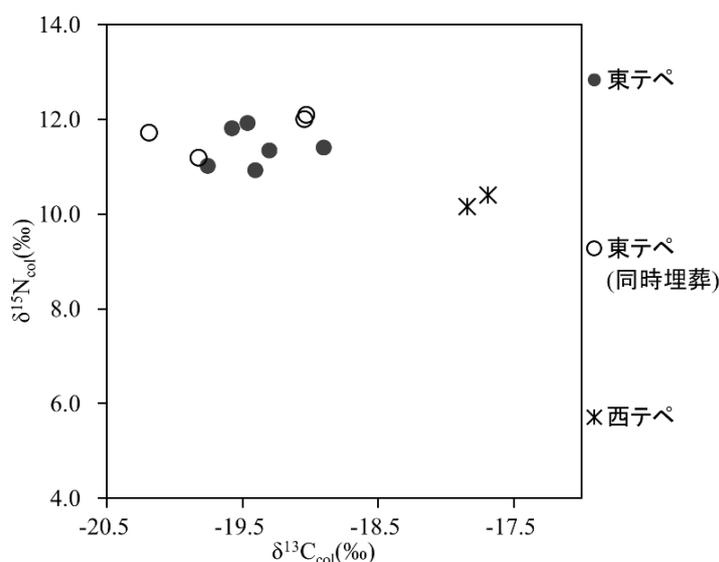


図2 イラン、タペ・サンギ・チャハマック出土人骨の $\delta^{13}C_{col}$ と $\delta^{15}N_{col}$

来年度は引き続きタペ・サンギ・チャハマック遺跡人骨のアミノ酸の窒素同位体比分析をおこない、動物骨を分析に加えることでより詳細な食物利用の復元を試みる予定である。人骨の同位体比分析により食物を共有していた同一世帯に属する個体群を検出することで、都市化へ向かう集落内の社会構造の複雑化の過程を明らかにしていきたいと考えている。

参考文献

- Itahashi, Y., Tsuneki, A., Dougherty, S. P., Chikaraishi, Y., Ohkouchi, N., Yoneda, M. 2018: Dining together: Reconstruction of Neolithic food consumption based on the $\delta^{15}\text{N}$ values for individual amino acids at Tell el-Kerkh, northern Levant, *J. Archaeol. Sci.: Reports* 17: 775–784.
- Itahashi, Y., Erdal, Y.S., Tekin, H., Omar, L., Miyake, Y., Chikaraishi, Y., Ohkouchi, N., Yoneda, M. 2019: Amino acid ^{15}N analysis reveals change in the importance of freshwater resources between the hunter-gatherer and farmer in the Neolithic upper Tigris, *American J. Physic. Anthropol.* 168: 676–686.
- Kadowaki, S. 2012: A household perspective towards the pre-pottery Neolithic to Late Neolithic cultural transformation in the southern Levant, *Orient* XLVII: 3–28.
- Kuijt, I. 2008: Demography and storage systems during the southern Levantine Neolithic demographic transition, In J.P., Bocquet-Appel and O. Bar-Yosef, (eds.), *The Neolithic demographic transition and its consequences*, Springer, New York, pp. 287–313.
- Richards, M.P., Pearson, J.A., Molleson, T.I., Russell, N., Martin, L. 2003: Stable isotope evidence of diet at Neolithic Catalhoyuk, Turkey, *J. Archaeol. Sci.* 30: 67–76.
- Roustaie, K., Mashkour, M., Tengberg, M. 2015: Tappeh Sang-e Chakhmaq and the beginning of the Neolithic in north-east Iran, *Antiquity* 89: 573–595.
- Stiner, M.C., Buitenhuis, H., Duru, G., Kuhn, S.L., Mentzer, S.M., Munro, N.D., Pöllath, N., Quade, J., Tsartsidou, G., Özbaşaran, M. 2014: A forager–herder trade-off, from broad-spectrum hunting to sheep management at Aşıklı Höyük, Turkey, *Proc. Natl. Acad. Sci.* 111: 8404.
- 池田次郎・多賀谷昭 (1977)「タペ・サンギチャハマック出土人骨」増田精一編『タペ・サンギチャハマックーイラン先史遺跡調査総括概報ー』イラン先史遺跡調査団、21–26 頁。

日本初の皮性小麦品種 「発掘のごほうび（デュラムコムギ）」の 収穫後調整方法に関するメモ

丹野 研一
龍谷大学文学部

国内2例目のデュラムコムギ品種として昨年(2019年)2月に出願公表に至った「発掘のごほうび」(関係者通称「WD」)は、小麦類としては国内品種初の皮性種として筆者が育成した。皮性は本来、初期農耕時代の小麦類にみられる性質である。皮性小麦を栽培するときには、現代のパンコムギやデュラムコムギでは省略できる粉摺りという作業工程が必要になる。この粉摺りはひと手間ではあるが、稲では常におこなわれる作業であり、皮性小麦においても先史時代と違って現代では機械でできる。この作業をおこないさえすれば、皮性小麦は鳥害をほとんど受けないほかメリットがある。鳥害を受けないと、これまで小麦栽培のできなかった農地で作付けが可能となる。皮性小麦を育成することで、耕作地の約4割が中山間地といわれる日本において、今や主食ともいえる穀物である小麦で持続可能な農業をおこなうための突破口になると筆者は考えている。

本研究では皮性品種を多数育成している。先史時代におこなわれていたであろう栽培加工方法を現代的にアレンジすることで、皮性小麦を現代日本に普及することを目指している。ここでは「発掘のごほうび」でおこなっている作業を写真で簡単に紹介し、皮性品種を栽培するイメージを示す。



図1「発掘のごほうび」の子実。明るい黄色粒。やや細長形なのでパスタ加工だけでなく粒食にもよい。



図2「発掘のごほうび」の小穂。普通種では皮すなわち粉殻は収穫・脱穀工程で外れて子実がむき出されるが、皮性種ではこの皮がはがれにくく、脱穀後に写真のような小穂の状態となる。貯蔵は子実の状態ではなく、このような小穂(粉)での貯蔵を推奨する。稲でいうところのバラ粉貯蔵であり収容容積は増すが、虫害が緩和されるので常温保存も可能である。コストと環境負荷を下げる大きなメリットが皮性小麦にはある。



図3「発掘のごほうび」の穂。芒が長いのがデュラムコムギの特徴。



図4 草姿比較。左（育成時の名称WD）が「発掘のごほうび」、右はカナダ品種のAC Navigator。発掘のごほうびは長稈品種なので施肥によって倒伏しやすいが、土壌がある程度肥沃であれば、無施肥で育てることができる。



図5「発掘のごほうび（WD）」の圃場での草姿。



図6 バインダーによる小規模な収穫風景（中央の赤い機械で刈り取って束ねる）。刈り取った麦わらの束はなるべくその場で脱穀する（写真左奥）。ハゼかけする場合は雨に当てないようにビニルシートをかける。もし雨に当たると稲と違ってすぐに穂発芽し、廃棄せざるを得なくなる。



図7 脱穀。穂から小穂（つまり籾）を外す脱穀には、大屋式 DASH（大屋丹蔵製作所）の脱穀機を用いている。回転速度を自在に変えられるので、本品種の硬い芒を落としやすい。脱穀した小穂は、必要に応じて乾燥させたのちに、米袋やフレコンバックで貯蔵できる。



図8 籾摺り作業のようす（大竹製作所インペラ式籾小型摺り機を使用している）。小穂を籾摺り機に投入し、脱稈つまり籾殻を外す。写真は少量の場合であり、脱稈率が7-8割なので受け口にフルイを置き、皮の外れなかった小穂を再投入する。上位機種ではより大量の処理ができて脱稈率も非常に高い。ただし現在皮性小麦用の条件設定を進めているところである。



図9 粉摺りによって得られた子実の例。



図10「発掘のごほうび」の粉を生パスタ用の生地にする。製粉は少量試験用のブラベンダー社テストミル（ロール式製粉機）を使用し、イタリアの地方製粉のようにやや細挽きにした。



図11 家庭用パスタマシーンで作った生麺。水のみで成形（卵や油その他の添加は一切していない）。



図12 生パスタ（チーズ）。ブラベンダー製粉からの麺。



図13 生パスタ（滋賀県日野町産鹿肉のボロネーゼ）。柳原式製粉機で精製度を高めずに製粉した粉によるので、色はややくすんでいるが、小麦らしい味を好む方からは好評。各地の食材と合わせることができる。



図 14 生産圃場 (30a)。



図 15 収穫麦をコンバインから出しているところ。本写真では取材撮影用のため台の上に出しているが、通常は乾燥施設で1日ほど乾燥させてからフレコンバックに移し、建屋で常温保存している。必要に応じて揺動式粉摺り機で麦粒をとりだして製粉している。

<最後に>

以上、日本でこれまでほとんどおこなわれていなかった皮性小麦とその作業を紹介した。それぞれの作業の詳細については今後改めて、改善点を検討しつつ解説してゆきたい。なお、現状において「発掘のごほうび」を大量生産するにあたっては、芒が堅いため機械乾燥の循環が詰まりやすい

問題が残っており、効率をあげるために改良をおこなっている（この点は滋賀県日野町の農業家廣瀬敬一郎氏にご検討いただいている）。また、後続する品種も育成しているところであり、それらについては栽培性と作業性が改善されている。本研究によって、皮性小麦を国内で標準的に生産できるようにしてゆきたい。

地中海世界の脱穀櫓

有村 誠

東海大学文学部

1. 東海大学考古学研究室所蔵の脱穀櫓

筆者は、別稿で東海大学考古学研究室が所蔵する脱穀櫓について検討した（有村 2020）。当該資料は、東海大学バルカン・小アジア総合学術調査団による第1次調査（隊長：尚樹啓太郎）の時にトルコで収集されたものであり（図1）、櫓底にはフリント製石刃（櫓刃）が埋め込まれている。

櫓刃用のフリント製石刃の製作は、トルコ、キプロス、ブルガリアなどで盛んであったことが知られている（藤井 1986; Gurova 2013）。特に有名なのが、トルコ北西部のチャクマック（トルコ語のフリント）村である。記録によれば、1970年代まで村では櫓刃の製作がおこなわれていたようだがその後なくなり、現在（2000年代）では、そのノウハウを伝えるものも少なくなった（Whittaker et al. 2009）。

チャクマック村でおこなわれていた櫓刃製作は専門的な石器製作といえるような性格のものであった（Bordaz 1965, 1969, 1973; Whittaker et al. 2009）。櫓刃の石材には、村で採掘されたフリントが用いられた。特に好まれたのは良質の緑がかった明灰色フリントであった。採取されたフリント礫は、その場で打ち割られて石刃が作られた。石器製作には鉄製の道具が使われ、粗割に使う大小のハンマーと石刃剥離に使う先端の尖ったハン

マーがあった。石核は入念に準備されることなく、粗割で作出された適当な面が石核の打面と作業面になり、石刃剥離が開始された。鉄製ハンマーの直接打撃により、長さ5～8 cm程の石刃が連続して剥離された。残核は円錐形の単設打面石核になった。製作された石刃は、缶やバックに詰められて近在の大きな町に運ばれ、市場で量り売りされた。チャクマック村の事例には、石器製作工程以外にも興味深い点が多い。例えば、フリントの採掘を含む櫓刃づくりには、男の集団が従事しており、中でも石刃製作者は格別の尊敬を集めていたことや、櫓刃づくり全盛の時代（60～70年代）、チャクマック村はこの石器づくりのおかげでもっとも裕福な村であったこと、などである。先史時代の石器の専門製作を考えるうえで、示唆に富んだ情報である。

チャクマック村の石器製作に関する報告や映像作品を参考にすると、東海大学資料の櫓刃もほぼ同じような製作過程を経て作られたことが推測される。ただし、石材が異なることから、東海大学資料はチャクマック村で製作されたものでない。トルコはフリントが豊富な地域である。おそらくトルコ各地には、在地のフリントを利用した、チャクマックやチャクマックタシュという名の櫓刃製作を生業とする村が存在していたのであろう。当



図1 東海大学考古学研究所蔵の脱穀櫓

該資料の櫓刃も、どこかのそうした村で製作されたことが予想された。

2. 比較資料

東海大学考古学研究所蔵資料との比較として、別稿では現代の脱穀櫓をいくつか扱ったが、十分な紙幅が取れなかった。以下でやや詳しく紹介したい。

2-1. チュニジアの脱穀櫓

図2: 1は2000年代前半のチュニジアにおける脱穀櫓を使ったムギの脱穀風景である(写真提供: Patricia Anderson)。櫓を2頭の馬に牽かせ、少女が櫓に立って操縦している。脱穀櫓は2枚の木板を繋げて作られており、比較的幅が狭く、細長い形状の櫓である。櫓刃には鉄片が使われている(図2: 2)。櫓底の先には、滑りやすくするための鉄板の装着がみられる。脱穀櫓と馬を繋ぐ部分には、

ロープと木の棒、鉄の金具が連結しており、櫓の運動がスムーズに動くための工夫が見られる（図 2: 3）。

2-2. アルメニアの脱穀櫓

アルメニアにも多くの脱穀櫓が残されている。現在、脱穀櫓が使用されている地域はない。アルメニアの脱穀櫓も、チュニジアのものと同様に 2 枚の木板を連結して 1 枚の櫓としたものがほとんどである。図 3 はアルメニア南部のヴァヨツ・ゾールに残された脱穀櫓である。幅約 30 cm、全長約 120 cm の櫓で、その特色は櫓刃にある（写真提供：

Artur Petrosyan）。アルメニアでよくみられるものであるが、櫓底に玄武岩の小さな礫や、大小の鉄片など様々な物質が埋め込まれている。櫓が使用されていた時にこのように櫓刃が雑多であったのか判然としない。櫓刃の多様性に比べると、櫓刃を埋め込むために彫られた溝は、規格的なサイズ・形態である。アルメニアでは石刃製の櫓刃は確認されていない。

2-3. ブルガリアの脱穀櫓

ブルガリアも、かつてフリント製石刃を装着した脱穀櫓が使用されていた地域である。図 4 はブ



図 2: 1 チュニジアの脱穀櫓



図 2: 2 脱穀櫓の底



図 2: 3 脱穀櫓の連結部分



図3 アルメニアの脱穀櫓

ルガリア南東部スリーベン郊外の村に残されている脱穀櫓である（写真提供：宮原俊一、2012年撮影）。櫓は4枚の木板を並べて製作されており、上記のチュニジア、アルメニアの資料に比べ大型である。正確な大きさは不明だが、周囲の建物との比較から、およそ幅1m、全長2.5mほどのものである。櫓底先端付近には滑りやすくするための鉄板が装着されている。櫓後端の両端には突起（把手？）がつく。櫓底にはびっしりとフリント製石刃が埋め込まれている。一見乱雑に配置されているようであるが、石刃は前後で互い違いに規則的に配置されている。さらに、東海大学資料にも観察された、櫓先端に向かって櫓刃の長さが短くなる「段々短縮配置」もみられる。いずれも、



図4 ブルガリアの脱穀櫓

脱穀櫓が効率よく運動できるように意図された工夫である。

2-4. 南フランスの脱穀櫓

図5は、パリの人類博物館に展示されている、南仏で使用されていた脱穀櫓である。上のブルガリアの資料と同様に、4枚の木板を連結させて櫓を製作している。その大きさもブルガリア資料と同じくらいで大型である。櫓刃は、櫓刃の前後で互い違いになるように規則的に配置されている。フリントが櫓刃として使用されているが石刃ではなく、剥片の両面を加工してつくられた石器が用いられている。



図5 フランスの脱穀櫓

おわりに

18世紀から20世紀前半にかけて、地中海周辺の地域で脱穀櫓という農具が使用されていることが当時の旅行記や民族誌に記録された。本稿でみたように、脱穀櫓の形態や櫓刃の種類は地域によって異なり、その背景に各地の技術伝統や農業労働力の構成などが関係していたように思える。

一方、トルコの事例でよく知られているように、石器の櫓刃づくりには、専門的生産の特徴がよくみえる。先史時代の工芸の専門化を考えるうえで、示唆的な情報が多く含まれており、さらに考察する価値のある対象である。

近現代の脱穀櫓のルーツは、先史時代にあるとしばしば考えられている。最近の石器の使用研究

では、前4千年紀（銅石器時代）のカナン石刃が櫓刃だと言われている（Anderson et al. 2004）。さらには、新石器時代の石刃にも櫓刃の可能性のあるものが含まれているともいう（Anderson 2006）。筆者は、近現代の脱穀櫓の起源が先史時代にもと繋がるとの意見はさらに慎重に検討すべきと考えているが、いずれにせよ、脱穀櫓の出現とその系譜の解明は興味深いテーマである。

参考文献

Anderson, P. C., J. Chabot and A. van Gijn 2004 The functional riddle of 'glossy' Canaanite blades: The apogee of the Mesopotamian threshing sledge. *Journal of Mediterranean Archaeology* 17/1: 87–132.

Anderson, P. C. 2006 Premiers tribulums, premières tractions animales au Proche-Orient vers 8000–7500 BP? In P. Pétrequin, R.-M. Arbogast, A.-M. Pétrequin, S. van Willigen and M. Bailly (eds.), *Premiers chariots, premiers araires: la diffusion de la traction animale en Europe pendant les IVe et IIe millénaires avant notre ère*. Paris: CNRS Editions, pp.299–316.

Bordaz, J. 1965 The threshing sledge. *Natural History* 74/4: 26–29.

Bordaz, J. 1969 Flint flaking in Turkey. *Natural History* 78/2: 73–79.

Bordaz, J. 1973 Stone Knapping in Modern Turkey. *Electronic document* (<https://www.penn.museum/collections/videos/video/197>). 2019.11.2 アクセス.

Comet, G. 1992 *La paysan et son outil. Essai d'histoire techniques des céréales* (France, VIIIe–XVe siècle). Rome: École Française.

Gurova, M. 2013 Tribulum inserts in ethnographic and archaeological perspective: Case studies from Bulgaria and Israel. *Lithic Technology* 38/3: 179–201.

Whittaker, J. E., K. Kamp and Yılmaz 2009 Çakmak revisited: Turkish flintknappers today. *Lithic Technology* 34/2: 93–110.

有村 誠 2020 (印刷中) 「東海大学考古学研究室
所蔵の脱穀櫓」東海大学考古学研究室 編『日々
の考古学 3』東海大学考古学研究室 287-298 頁。

藤井純夫 1986 「櫓刃 (Threshing Sledge Blade) の
同定基準について」『岡山市立オリエント美術館
研究紀要』第 5 巻 1-34 頁。

イラク・クルディスタン地方 シャカル・テペ遺跡出土石器の検討

前田 修
筑波大学人文社会系

はじめに

西アジアの先史時代に農耕社会が都市文明へと発達する過程は、天水農耕が可能な北メソポタミア・ザグロス山麓地域から、灌漑農耕が必要な南メソポタミア低地への集落の進出という大きな変化を伴った。南メソポタミア低地で都市文明が盛行する前段階において、北メソポタミアやザグロス山麓で発達した農耕社会が、乾燥地帯である南メソポタミアに拡散するというプロセスが必要だったのである。ところが、このプロセスの実態はほとんど解明されておらず、前6千年以降に南メソポタミアで出現する最古の集落の起源について、考古資料にもとづいた確かな検証はなされていない。

その中で、ザグロス山麓地域にあたるイラク北東部クルディスタン地方スレマニ県南部のシャフリゾール平原は、「起源地」の最有力候補といえる。西アジアの初期農耕社会は、肥沃な三日月地帯西半のレヴァント地方と、東半の北メソポタミア・ザグロス山麓地方を中心に発達したが、このうち、南メソポタミアにもっとも近いのはザグロス山麓のイラク・クルディスタン地域であり、この地に栄えた農耕社会が、前6千年前後に南メソポタミア低地へと進出したというシナリオを想定することは難くない。

これを検証するために、本領域の公募研究代表者である小高敬寛（金沢大学）は、公募研究課題の一環として発掘調査隊を組織し、2019年9月にシャカル・テペ遺跡で発掘調査を実施した（小高ほか2020）。筆者もこの調査に参加し、フィールドワークをおこなうとともに、遺跡から出土した打製石器資料の研究を実施した。調査期間が限られていたことから、まだすべての分析が終了してはいないが、本稿ではこれまでに得られた所見と今後の展望をまとめる。

1. 調査目的と遺跡の概要

発掘調査の目的は、これまで不明とされている前6000年頃のシャフリゾール平原における後期新石器時代集落の様相をあきらかにし、南メソポタミアに集落が進出する時期の農耕社会の性格を理解することにある。シャカル・テペ遺跡で、表探調査によって後期新石器時代の土器片が採集されたことから、この遺跡が当該時期の集落遺跡として発掘調査の対象に選定された。

遺跡は、ダルバンディ・ハン・ダム湖岸に位置し（図1）、長軸で約300mの楕円形を呈す比高20mほどのテル型遺跡である（図2）。テルの堆積のほとんどは、前期～中期青銅器時代、鉄器時代、パルティア～ササン朝時代の居住によるもの

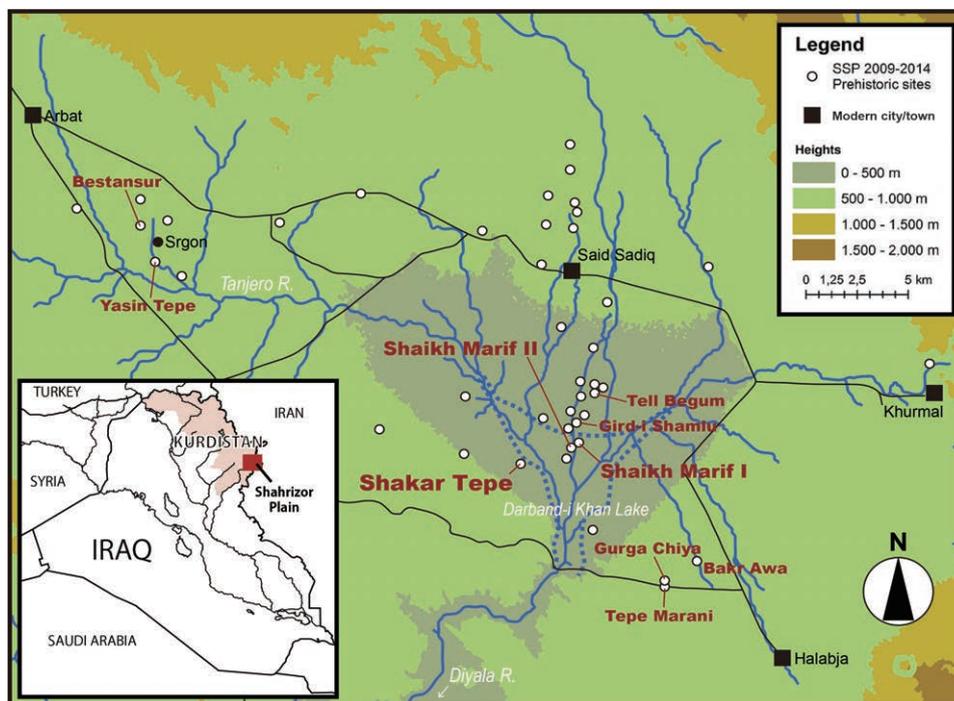


図1 シャフリゾール平原とシャカル・テペ遺跡の位置（小高ほか 2020 より）



図2 シャカル・テペ遺跡（北から）

と考えられるが、ダム湖の水によって侵食を受けたテル北西の裾部において、後期新石器時代（前7千年紀末）およびウバイド期（前5千年紀頃）のものと思われる土器片が散布していた。発掘区はこれらの土器片が多く採集できる緩やかな斜面上に9.5×2mの階段状トレンチとして設定された。トレンチ北端では地表から2.7mほど掘り下げたところで地山を検出しており、トレンチ南端の最高地点から測ると、厚さ5mにおよぶ堆積層の連続を確認している。この堆積層は、上から順にウバイド期層、後期新石器時代上層、後期新石器時代下層の3つに大別可能である。

2. 打製石器

ここでは、後期新石器時代の層から出土したチャート製および黒曜石製の打製石器について述べる。発掘区の規模が小さいこともあり、出土石

器の総数は数百点である。チャート製石器がほとんどで、黒曜石製石器は38点にとどまる。

石器に利用されているチャートは、遺跡付近を流れるワディ底（図3）で採取可能な在地産のものがほとんどである。明灰色、暗灰色、青・紫系の色調を帯びた灰色のもの、赤褐色に近いものなど、色のバリエーションは豊富である。灰色系のものには黒色や白色の斑模様や縞模様を持つものが多く見られる。珪質化の度合いは高くなく、石材としての質はそれ程良くないが、石刃の製作に用いることは可能である。

出土したチャート製石器のほとんどは不定形の剥片である。二次加工により定型的なツールに加工されたものは極めて少ない。ザグロス山麓地域では先土器新石器時代以降、砲弾型の石刃石核を用いた押圧剥離による石刃製作の伝統が続くのだが（Maeda and Pappi 2019）、シャカル・テペで



図3 遺跡の北方約500m付近を流れるワディ底でチャートの転礫が採取できる。



図4 チャート製の大型石刃

は砲弾型の石刃石核は1点も出土していない。押圧剥離によって剥離された石刃も数点のみであり、その石材は光沢のある白色のチャートが多く、在地のチャートとは異なることから、搬入品として持ち込まれたものと考えられる。

押圧剥離技術が見られない剥片主体のインダストリーにおいて異色なのは、在地産チャート製の大型石刃である（図4）。不定形で粗雑ではあるが、最大のもは長さ16 cm、幅6 cmに達する。興味深いのはその出土状況で、後期新石器時代上層の2地点において、それぞれ5点の石刃が一括して出土した（図5）。さらに別の地点において、このタイプの大型石刃の剥離に用いられた単設打面の大型石核が2点まとまって出土している（図6）。丁寧な石核の整形や打面の調整は見られず、石刃は直接打撃あるいは間接打撃で剥離されている。同様の大型石刃はその他の地点からも個別にいくつか検出されており、この遺跡の石器インダ

ストリーを特徴付けるものとなっている。ほとんどの大型石刃は二次加工が施されていないが、側縁に粗い二次加工や使用による不連続な剥離痕が残るものも見られる。石刃の両端が折り取られ、短い長方形に整形されたものも1点ある。鎌刃光沢などの目立った使用痕は見られない。

その他、チャート製の剥片石器の中には表面にビチュメン（天然アスファルト）が付着した資料も見られた（図7）。木製・角製の柄に装着するための接着剤として使われたビチュメンが残存したものと考えられる。本研究ではビチュメンの産地同定分析もおこなっているため（前田2019）、資料を日本に持ち帰り、炭化水素化合物のバイオマーカーおよび炭素同位体の分析を進める予定である。

黒曜石のほとんどは緑色の色調を呈するため、南東アナトリアのビンギョルA産あるいはネムルトダ産と考えられる。石刃が多いが概してサ



図5 大型石刃の出土状況（5点の石刃が一括して出土した。1点はすでに取り上げ済み）



図6 大型石刃が剥離された石核（2点の石核がともに出土した）



図7 ビチュメンの付着したチャート製剥片



図8 黒曜石製のサイド＝ブロー・ブレイド＝フレイク

イズは小さく、石核は見られない。台形細石器や不定形剥片も含まれるが、注目すべきは、サイド＝ブロー・ブレイド＝フレイクと呼ばれる、後期新石器時代に特徴的な石器である（図8）。16点が出土している。この石器の用途は不明であるが、石刃の端を叩いて剥離された小さな剥片であり、一遺跡から数百点が出土することも珍しくない。後期新石器時代に北メソポタミア・ザグロス山麓地域を中心に分布し、いわゆるプロト・ハッスーナ文化、ハッスーナ文化の遺跡でよく見られる。南東アナトリア産の黒曜石で作られたものがほとんどであるため、黒曜石交易との関連も指摘されている（西秋1996; 前田2009）。シャカル・テペにおいてもプロト・ハッスーナ系、ハッスーナ系の土器とともに出土しており、他遺跡で見られる例と矛盾しない。シャフリゾール平原より南のマンダリ盆地で表採資料が報告されてはいるが（Oates 1968）、確かな発掘資料としては、今のところシャカル・テペのサイド＝ブロー・ブレイド＝フレイクが、最も南に位置する遺跡から出土した資料ということになる。

3. 考察

今のところ数量も少なく、今後さらなる分析が必要な石器群であるが、シャカル・テペの2019年度調査で出土した石器資料は、この遺跡の位置づけに関して2つの重要な視点を提供してくれる。

第一に、黒曜石製のサイド＝ブロー・ブレイド＝フレイクは、シャカル・テペが、北メソポタミアからザグロス山麓地域に広がる後期新石器時代の物質文化と繋がり持っていたことを示す。黒曜石交易を含めた集落間の交流の証拠といえる。

第二に、その反面、シャカル・テペのチャート製石器は、この遺跡がクルディスタン地域の他の新石器時代遺跡とは異なる石器インダストリーの伝統上に位置することを示す。ベスタンスール、ジャルモ、テペ・ゲーラン、チョガ・セフィド（Hole 1977, 1983; Mortensen 2014; Matthewa et al. 2020）といった近隣の新石器時代遺跡では、砲弾型の石核を用いた押圧による石刃剥離を特徴とするムレファートリアン・インダストリーの伝統が見られるが、シャカル・テペの石器インダストリーはそ

の伝統からは外れたものである。シャカル・テペに類似した大型石刃は、キルクーク地域のマタッラで報告されており (Braidwood et al. 1952)、石刃の押圧剥離を有しない石器文化の伝統が、ムレフアーティアン石器文化の伝統と併存した可能性が窺える。ムレフアーティアン・インダストリーは、前 6000 年期以降も農耕社会が持続するザグロス山麓地域で継続して見られるが、シャカル・テペのようにそれとは異なる石器文化を持つ集団が、南メソポタミアへの集落の進出に関わっていた可能性を探る価値は十分にあるといえよう。今後はこうした観点を重視し、さらなる詳細を検討していく必要がある。

参考文献

Braidwood R. J., L. Braidwood, J.G. Smith and C. Leslie (1952) Matarrah: A southern variant of the Hassunan assemblage, excavated in 1948. *Journal of Near Eastern Studies* 11 (1): 1-75.

Hole, F. (1977) *Studies in the Archaeological History of the Deh Luran Plain: The Excavation of Chagha Sefid*. Memoirs of the Museum of Anthropology 9. University of Michigan, Ann Arbor.

Hole, F. (1983) The Jarmo chipped stone. In L. Braidwood, R.J. Braidwood, B. Howe, C.A. Reed and P.J. Watson (eds.), *Prehistoric Archaeology along the Zagros Flanks*. University of Chicago Press, Chicago, pp. 233-284.

Maeda, O and C. Pappi (2019) Bladelet production by pressure-flaking at the Proto-Neolithic site of Satu

Qala in Iraqi-Kurdistan. In L. Astruc, C. McCartney, F. Briois and V. Kassianidou (eds.), *Near Eastern Lithic technologies on the move. Interaction and Contexts in Neolithic Traditions*. Studies in Mediterranean Archaeology Vol. CL. Astrom Editions, Nicosia, pp. 249-256.

Matthews, R., A. Richardson and O. Maeda (2020) Early Neolithic chipped stone worlds of Bestansur and Shimshara. In R. Matthews, W. Matthews, K. Rasheed Raheem and A. Richardson (eds.), *The Early Neolithic of the Eastern Fertile Crescent: Excavations at Bestansur and Shimshara, Iraqi Kurdistan*. Oxbow Books, Oxford. (in press)

Mortensen, P. (2014) *Excavations at Tepe Guran: The Neolithic Period*. Peeters, Leuven.

Oates, J. (1968) Prehistoric investigations near Mandali, Iraq. *Iraq* 30 (1): 1-20.

小高敬寛ほか (2020) 「新石器化と都市化のはざまーイラク・クルディスタン、シャカル・テペ遺跡の第 1 次発掘調査調査 (2019 年)ー」『考古学が語る古代オリエント 第 27 回西アジア発掘調査報告会報告集』日本西アジア考古学会。

西秋良宏 (1996) 「サイド=ブロー・ブレイド=フレイクの技術と復元製作: シリア、テル・カシュカシヨク遺跡出土品を中心に」『岡山市立オリエント美術館研究紀要』14 巻 1-24 頁。

前田 修 (2009) 「石器のマテリアリティー西アジア新石器時代における黒曜石の意味と役割について」『オリエント』第 52 巻第 1 号 1-26 頁。

前田 修 (2019) 「西アジア先史時代の物資交易ー黒曜石交易・ピチュメン交易の研究ー」山田重郎 (編) 『科研費新学術領域研究 都市文明の本質: 古代西アジアにおける都市の発生と変容の学際研究 1 研究成果報告 2018 年度』35-38 頁。

研究項目 A02 「古代西アジア都市の景観と構造」

計画研究 02

古代西アジアにおける都市の景観と機能

古代西アジア都市の景観と構造

三津間 康幸

筑波大学人文社会系

新学術領域研究「都市文明の本質：古代西アジアにおける都市の発生と変容の学際研究」A02-計画研究02「古代西アジアにおける都市の景観と機能」（通称2班）の研究は、時代の枠組みをおよそ前4千年紀～後3世紀とし、西アジアにおける都市の誕生からアルシャク朝（パルティア）帝国時代の西アジア都市までを扱っている。前4千年紀の都市の誕生という問題に関してはA01-計画研究01「西アジア先史時代における生業と社会構造」と連携する。そして後3世紀にサーサーン朝が台頭して以降の中東都市の研究はC01-計画研究05「中世から近代の西アジア・イスラーム都市の構造に関する歴史学的研究」が担当することになるが、アルシャク朝からサーサーン朝へと西アジアの支配者が交代する後3世紀前後の都市についても、2班の研究の視野に入っている。地域的にカバーするのはイラクを中心とする西アジア各地の都市で、古代エジプト都市との比較に関してはA02-計画研究03「古代エジプトにおける都市の景観と構造」と連携する。2班はこのように各研究班と連携して古代西アジア都市を研究するが、前4千年紀から前2千年紀初めにかけての西アジアの都市で主たる研究対象とするのはシュメールの主要都市（国家）であるウルク、ウル、ラガシュなどであり、また宗教都市であった

ニップルも研究対象に含まれる。前2千年紀前半の古バビロニア時代からはバビロンが台頭し、この都市は新バビロニア帝国（前7世紀～前6世紀）の下で最盛期を迎え、ペルシア帝国時代（前6世紀～前4世紀）にも冬の王所在地として用いられた（*Xen. Cyr.* 6.8.22; *Plut. Mor.* 78d, 604c; *Dio Chrys. Or.* 6.1）（本稿中の略号は、*OCD*⁴の略号表に拠った。またこの略号表にないものは稿末に示した）。

その後のバビロンは前331/330年にアレクサンドロス大王によって征服され、大王は前323/322年に同地で亡くなった。アッカド語楔形文字史料『バビロン天文日誌』（前7世紀～前1世紀に作成、*Sachs and Hunger* 1988, 1989, 1996）や（ヘレニズム時代の）『バビロニア年表』（*BCHP*）からはセレウコス朝時代、アルシャク朝時代に至るまで都市としての機能が確認される。シュメール諸都市やバビロンはイラク南部の都市であるが、イラク北部にはアッシリアの諸都市、アッシュル、カルフ、ドウル・シャルキン、ニネヴェなどが存在した。これらは前1千年紀前半にアッシリア帝国の下で繁栄し、新バビロニアおよびメディアによるアッシリア滅亡（前612年）以降輝きを失うが、アッシュルはセレウコス朝時代末期から再生する。

セレウコス朝、アルシャク朝時代にはバビロン

やアッシュルといった伝統的な都市も一定の繁栄を見せるが、セレウコス朝はティグリス河畔に新たな中心都市セレウケイアを建設し、さらにアルシャク朝時代になると、セレウケイアの対岸にあった一村落テースィフォーン（クテシボン）が冬の王所在地となり（Strabo 16.1.16）、ここがサーサーン朝に受け継がれて王都として機能する。

2 班の研究の目的は、上記のような諸都市の景観と政治的・社会的・文化的機能を明らかにすることであり、そのために文書史料と考古学的データの双方を利用する。文書史料は主に楔形文字を用いてシュメール語やアッカド語で書かれたものであるが、アラム語、古代ペルシア語、パルティア語、ギリシア語、ラテン語といった言語で記された関連史料も参照する必要がある。

西アジア諸都市は、近代西洋の都市、そしてその祖型とされる古代ギリシア・ローマ都市とは異質な存在として把握されてきた。例えば Weber (1956)（日本語訳はウェーバー 1964）は「地中海沿岸地方とエウフラテス流域地方——において初めて、真に古典古代のポリスに似たものが認められるのである」とはするものの（ウェーバー 1964: 49; 一部改変 [原典は Weber 1956: 747]）、西洋と東洋（アジア）の相違を強調し、近東アジアやエジプトの古代都市に欠如しているものとして、自律性、都市の団体的性格（都市ゲマインデ）、そして身分的特権を持つ市民層をあげる（ウェーバー 1964: 47 [原典は Weber 1956: 746]）。そして「アジアの都市は、通常は、その国の高級官吏や君侯の住地」に過ぎず（ウェーバー 1964, 44-45; 一部改変 [原典は Weber 1956: 745]）、メソポタミアにおいて都市民の特権は「軍事王制の勢力の増大につれて消滅していった」とする（ウェーバー 1964: 48 [原典は Weber 1956: 746]）。また（ギリシ

ア・ローマの）古典古代都市は都市にいる消費者の利益を追求したと特徴づけ（ウェーバー 1964: 311 [原典は Weber 1956: 811]）、一方の中世（ヨーロッパ）都市は商工業による営利への経済的関心を強めたとする（ウェーバー 1964: 319 [原典は Weber 1956, 813]）。

アッシリア学者が本格的に西アジア都市を論じ出す契機となったのは、1958 年 12 月 4～7 日にシカゴ大学において開催された、古代中東の都市化と文化発展を巡る会議であろう。この会議の報告集である Kraeling and Adams (1960: xi-xiv) によれば、この会議にはイグナス・ゲルプ (Ignace Gelb)、ハンス・ギュッターボック (Hans Güterbock)、トールキルド・ヤコブセン (Thorkild Jacobsen)、ベンノ・ランズベルガー (Benno Landsberger)、レオ・オッペンハイム (Leo Oppenheim)、エリカ・ライナー (Erica Reiner) など、錚々たる古代西アジア研究者たちが出席し、宗教学者のミルチャ・エリアーデ (Mircea Eliade)、経済学者のカール・ポランニー (Karl Polanyi)、エジプト学者のジョン・ウィルソン (John A. Wilson)、建築史家のルイス・マンフォード (Lewis Mumford) など、関連分野のエキスパートたちも加わった。しかし、ここで論じられた内容を見ると、都市構造、都市計画などに特化した議論はいまだおこなわれず、むしろ都市文明の「文明」たる側面に関心が向かい、文明論、そして言語、宗教、文化、経済、政治など、文明の諸構成要素が取り扱われているという印象を受ける。エジプト学者ウィルソンはアレクサンドリア建設までのエジプトを都市なき文明 “Civilization without Cities” とする所論を改めて主張した (Kraeling and Adams 1960: 124-164)。建築史家マンフォードは Concluding Address で、前述のウェーバーらの、

中世都市同様に市場を基準とする古代都市理解を批判し、古代都市の求心力を神々や、神々によって成立していた宇宙秩序のモデルとしての役割に見出した (Kraeling and Adams 1960: 237)。これも「文明」から「都市」を理解しようとした現れであり、都市構造や都市計画から「都市」さらには「文明」を論じる本格的な試みは 1990 年代を待たねばならない。

1990 年代、それも 1997 年という一年に、古代西アジア都市研究史上重要な著作が 2 点出版されている。Van de Mieroop (1997) と Wilhelm (1997) である。前者は「古代メソポタミア都市」を、ウェーバーやモーゼス・フィンリー Moses Finley による「(ギリシア・ローマ) 古代都市」像に意識的に統合した (Van de Mieroop 1997, 252-254)。「(ギリシア・ローマ) 古代都市」像とは、都市民は後背地からの地代や租税で生活し、都市で生産される手工業製品やサービスは地元で消費されるという、都市と後背地だけで完結する都市の姿である。フィンリーはこのような都市像をギリシア・ローマ世界の事例のみから主張した (Finley 1981, 3-23)。一方、ファン・デ・ミアロープは農業の発展と都市化がバビロニアでは並行し、織物のようなものの輸出はしばしば在証されるが、いずれの都市も手工業の中心として生存すべき運命を考慮しておらず、交易は都市の富への主たる貢献とはされなかったことを指摘する (Van de Mieroop 1997: 255)。アッシリアではたとえばアッシュルのように、中世都市に匹敵するかもしれないほどの富を交易から得ていた都市も存在したが、ニネヴェのような都市が巨大な消費者となって、ローマのように経済を刺激したことに注目し、全体として消費者としての都市という像は古代メソポタミアにも当てはまるとした (Van de Mieroop 1997:

255)。これは西洋対東洋というオリエンタリズム的認識や、ギリシアをヨーロッパ文明の故郷とする歴史観を弱め、都市文明の源流に古代メソポタミアをも位置づけるという、具体的意図を持った研究であったといえよう。同書第 4 章: The Urban Landscape (Van de Mieroop 1997: 63-100) においては都市景観が扱われ、そこでは上メソポタミアと下メソポタミアの都市景観が比較されている。プランが示されたのはバビロン、ボルシッパ、ハラドゥム、ドウル・シャルキン の 4 都市であり、これらをもとにファン・デ・ミアロープは、上下メソポタミアの都市景観を次のように特徴づける。まず下メソポタミアでは可住地が限られ、河川や運河の近くに発達した都市に人口が集中し、「下の町」にも濃密に居住があったという。一方の上メソポタミアは平原が湿潤でいたる所に村落が広がり、それゆえ都市では「下の町」の居住が希薄であったという (Van de Mieroop 1997: 93-94)。このような特徴付けはしかし、適切な例に基づくものとはいいがたいように思われる。上記 4 都市のうち明確に上メソポタミアの代表例といえるのはドウル・シャルキンであるが、ここはアッシリア王サルゴン 2 世 (在位前 721-705 年) によって建設された都であり、その死後に首都はニネヴェに移ったので、使用された時期はごく短く、それゆえ「下の町」の居住が希薄であったとしても、それは都市が機能した期間の短さゆえとも考えられるのである。ともあれファン・デ・ミアロープの著作が、都市文明の重要な側面として都市景観に注目し、具体的な都市のプランに基づいてそれを論じていることは十分な評価に値する。

Wilhelm (1997) は Deutsche Orient-Gesellschaft 主催の、中東都市に関するコロキアムの報告集である。Wilhelm (1997: VII-VIII) によれば、Deutsche

Orient-Gesellschaft は中東では初めて、遺物獲得ではなく都市構造解明を目的とした発掘をおこなった組織である。まず 1899～1917 年にはバビロンを発掘し、1914 年まではロベルト・コルデヴァイ Robert Koldewey がこれを指揮した。その後も各所で調査を継続し、アッシュル、ハットウシャ、アマルナの発掘をおこない、1997 年時点ではエカルテの発掘を終えたところであり、こうした成果の上に立ってコロキアムを開催したのである。このコロキアムはこのような都市構造への強い関心を反映し、文献学者のみならず、地理学者、考古学者による多くの報告がおこなわれた。「継承と変化」が主たるテーマとなり、古くは前 4 千年紀から現代までが扱われた。

このような先行研究を参照しつつ、2 班においては 2020 年 6 月の国際シンポジウムに 2 人の研究者、ヘザー・ベイカー (Heather Baker) とミルコ・ノヴァク (Mirko Novák) を招聘し、異なる側面から古代メソポタミア（および古代西アジア）都市に対する検討を加える。ベイカーは“urban morphology”という認識手法によって古代メソポタミア都市にアプローチする研究者である。Baker (2014: 174) によれば、“urban morphology”とは都市が都市計画によるばかりでなく、個々の土地利用者の決断の累積にあずかって形成されたととらえる認識手法である。そしてこの手法で都市を認識することにより、「混沌」といった負のイメージがある伝統的中東都市も、様々な決断の有機的結合として公平に評価できるという (Baker 2014: 175)。このような都市認識へ向けて、ベイカーは考古学と文献学の相互的、循環的な協働の必要性を強調する (Baker 2014: 182)。前者は住居

プランの再現に有効であり、社会的土地利用を解明するためには後者が必要になる。そして両者の協働により、住環境における小規模変化の背後に土地利用の規範を発見することが可能になり、空間的・時間的に広範囲の社会規範の解明につながると、ベイカーは予見する。彼女は *The Urban Landscape in First Millennium BC Babylonia* という著書を予告しており、国際シンポジウムにおいては“Planning versus Process in Urban Babylonia: City Layout in a Long-term Perspective”という発表が予告されている。

もう一人の国際シンポジウム報告者であるミルコ・ノヴァクは“Mesopotamian Cities: Different Traditions and Diverging Concepts in Babylonia, Assyria and Upper Mesopotamia”という発表を予告している。ノヴァクのこれまでの研究内容から、こちらは各地の都市計画の相違が主に扱われるものと予想される。例えば Novák (2014) は residential cities という一都市類型を設定し、そこに分類される諸都市を通時的に分析する。Residential cities とは自然発生的な首都ではなく、王権が意図的に造成した都市のことで、古代中東ではアガデ、アケトアテン、ドウル・シャルキンなどがあてはまる。また Novák (2018) は古代西アジア都市のシタデルの分類をおこない、ネオ・ヒッタイト型とアッシリア型のシタデルの違いを明らかにしたり、アッシリア型に従ったかに見えるバビロンの特異性（主要神殿を包摂しないこと）を指摘したりする。このような研究の蓄積の上に立ち、2020 年国際シンポジウムでのノヴァクの報告では、都市計画の側面から様々なメソポタミア都市が論じられるものと期待される。

略号表

BCHP Irving L. Finkel, Robartus J. van der Spek, and Reinhard Pirngruber. Forthcoming. *Babylonian Chronographic Texts from the Hellenistic Period* (Finkel, Irving L., and Robartus J. van der Spek. n.d. *Babylonian Chronicles of the Hellenistic Period*, scholarly ed. Accessed 19 August 2016 at Livius.org. <http://www.livius.org/sources/about/mesopotamian-chronicles/>).

*OCD*⁴ Simon Hornblower, Antony Spawforth, and Esther Eidinow (eds.). 2012. *The Oxford Classical Dictionary*, fourth edition. Oxford: Oxford University Press.

参考文献

Baker, Heather 2014 “The Babylonian Cities: Investigating Urban Morphology Using Texts and Archaeology”. In *The Fabric of Cities: Aspects of Urbanism, Urban Topography and Society in Mesopotamia, Greece and Rome*, edited by Natalie N. May and Ulrike Steinert, 171–188. Leiden: Brill.

Finley, Moses I. 1981 *Economy and Society in Ancient Greece*. London: Chatto & Windus.

Kraeling, Carl H. and Robert M. Adams (eds.) 1960 *City Invincible: A Symposium on Urbanization and Cultural Development in the Ancient Near East Held at the Oriental Institute of the University of Chicago December 4–7, 1958*. Chicago: The University of Chicago Press.

Novák, Mirko 2014 “The Phenomenon of Residential Cities and City Foundations in the Ancient Near East”. In *Approaching Monumentality in Archaeology*,

edited by James Osborne, 311–332. New York: State University of New York Press.

Novák, Mirko. 2018 “Elites behind Walls. Citadels and the Segregation of Elites in Anatolia, the Levant and Mesopotamia”. In *Anatolian Metal, VIII. Eliten - Handwerk - Prestigegüter*, edited by Ünsal Yalçın, 255–268. Bochum: Deutschen Bergbau-Museum Bochum.

Sachs, Abraham J. and Hermann Hunger 1988 *Astronomical Diaries and Related Texts from Babylonia*, Vol. 1. Vienna: VÖAW.

Sachs, Abraham J. and Hermann Hunger 1989 *Astronomical Diaries and Related Texts from Babylonia*, Vol. 2. Vienna: VÖAW.

Sachs, Abraham J. and Hermann Hunger 1996 *Astronomical Diaries and Related Texts from Babylonia*, Vol. 3. Vienna: VÖAW.

Van de Mieroop, Marc 1997 *The Ancient Mesopotamian City*. Oxford: Oxford University Press.

Weber, Max 1956 “Kapitel IX. Soziologie der Herrschaft, 8. Abschnitt. Die nichtlegitime Herrschaft (Typologie der Städte)”. In Max Weber, *Wirtschaft und Gesellschaft, Grundriss der verstehenden Soziologie*, vierte, neu herausgegebene Auflage, besorgt von Johannes Winckelmann, 735–822. Tübingen: Mohr (マックス・ウェーバー [世良晃志郎訳]. 1964. 『都市の類型学』創文社.).

Wilhelm, Gerno (ed.) 1997 *Die orientalische Stadt: Kontinuität, Wandel, Bruch: 1. Internationales Colloquium der Deutschen Orient-Gesellschaft, 9.–10. Mai 1996 in Halle/Saale*. Saarbrücken: In Kommission bei SDV Saarbrücker Druckerei und Verlag.

ユーフラテス川中流の氾濫原に建設された 古代都市マリ

—発掘調査からわかる都市マリの景観と歴史—

中田 一郎

中央大学（名誉教授）

1. マリの自然環境

メソポタミア（ギリシア語で「川の間（の地）」の意）とは、ユーフラテス川とティグリス川に挟まれた地域（とその周辺地域）を指す（図1）。特にメソポタミア北部は、アラビア語でジャジーラ（「島」と呼ばれる。ジャジーラは、シンジャール山とアブドゥル・アジズ山を境に上ジャジーラと下ジャジーラに分かれる。下ジャジーラは年間最低でも 250 mm 以上の降水量があり天水農業が可能であるが、下ジャジーラではそれ以下となり、人工灌漑によらなければ農耕は不可能である。

西アジアでは、1 年が雨季（11 月～3 月）と乾季（4 月～10 月）にわかれる。天水農業が可能な地域では、雨季の初めに雷を伴い大量の雨が降るが、この時期に麦（特にメソポタミア南部では大麦が中心）の種播きがおこなわれる。（耕地を犁き、種播きの準備をするのは 7～10 月）その後雨はほとんど降らず収穫直前の 2～3 月にまた雨（「春の雨」）が降る。大麦の収穫期は 4～5 月である。マリに関していえば、年間降水量が 140 mm で天水農業は不可能であった。

雨季（冬）にユーフラテス川とティグリス川の水源地域であるタウルス山地に降る雪が春に解けて両川に流れ込み、増水の主たる原因となる。メソポタミア南部の人工灌漑にとってより重要な

はユーフラテス川であるが、時には 4 月に異常に増水し、刈入れ直前的大麦が流されてしまうことがあった（ハンムラビ法典 45、46、48 条参照）。

4 月におけるユーフラテス川の水量は、ジャラーブルス（カルケミシュ）付近で通常 3422 m³/s 位であるが、1954 年には 7000 m³/s、また 1967 年には 8500 m³/s に達し、大洪水を引き起した。ちなみに、減水期の水量は 220 m³/s であるから、1954 年の増水期の水量は減水期の 31 倍以上、1967 年の増水期の水量は減水期の 40 倍近くになった。ユーフラテス川の支流であるバリフ川とハブル川は、雪解けによる増水の影響はそれほどないが、春の雨による増水がユーフラテス川の増水に拍車をかけることがあった（Margueron 2014: 7）。

マリ（遺跡名：Tell Hariri）の周辺では、平均して気温は高く、砂漠地帯または半砂漠地帯では昼と夜の温度差は 20～25 度になる。また、冬には 0 度まで下がり、夏には 50 度にもなる。風も一定しない。南からは高温のハムシン（Khamisin）と呼ばれる南風が吹き、冬には雪に覆われたアナトリア高原から吹き下ろす北風シャマル（Shamal）が吹く。これらはまた砂嵐の原因となる（Margueron 2014: 8）。

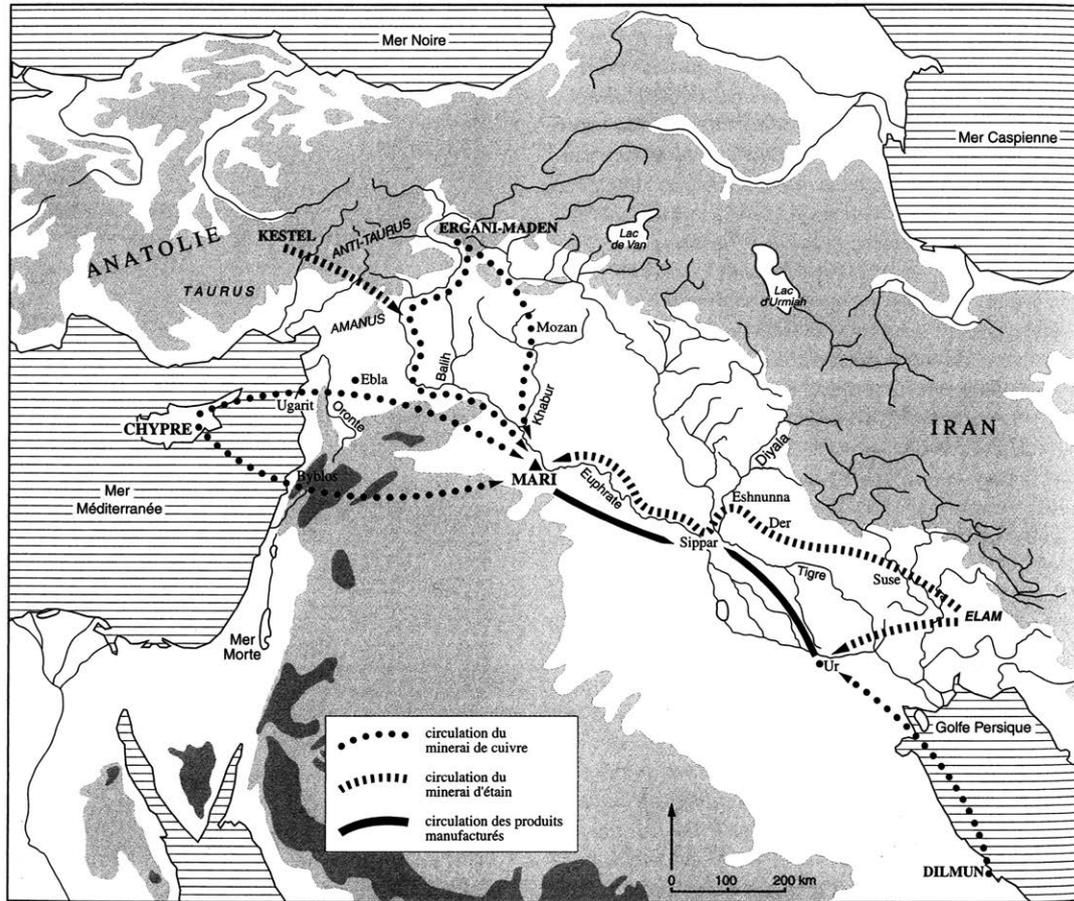


図1 銅・錫などの交易ルートとマリの位置 (Margueron 2004: 118 より)

2. マリの発見

1933年8月、お墓の蓋にする石材を探していたベドゥインたちがテル・ハリリで1つの石像の大きな断片を発見した。このニュースを聞き知ったアブ・ケマルに駐在していたフランス軍の司令官カバーヌ中尉はすぐに石像の発見場所に行き、その石像をアブ・ケマルに運び、そこからアレppoに輸送した。この発見のニュースはバイルートを経てルーヴル美術館に伝えられ、アンドレ・パロに遺跡確認のための発掘調査が命じられた (Margueron 2004: 506)。

それまで、テル・ハリリが古代のどの都市に当

たるか議論さえされていなかった。例外的に W. F. オルブライトが古代のマリの遺跡である可能性を示唆していたに過ぎない。

アンドレ・パロは1933年12月10日にマリに到着、12日から発掘調査を開始するが成果なく、場所を遺跡の西端に移して発掘を再開、翌日にはエビフ・イリ (Ebih-II) やイディ・ナールム (Idi-Nārum) の石像を発見した。そして、翌1934年1月23日にマリ王イシュキ・マリ (Išqi-Mari) (以前はラムギ・マリと呼ばれていた) の石像を発見し、テル・ハリリが間違いなく都市マリの遺跡であることが判明した (図2)。



図2 上空から見たマリ遺跡 (Margueron 2014: 16 より)

3. 発掘調査の略史

第1期 (1933–1938年) (第二次世界大戦が始まるまで) アンドレ・パロが隊長。第1期にイシュタル神殿の発見、前2千年紀の大神殿、約1万5千点の粘土板文書(断片を含む)、ライオン神殿の発見、「High Terrace」の調査などの成果があった。

第2期 (1951–1954年) (第二次世界大戦で12年間の中断の後再開) パロが隊長。「High Terrace」や「Massif Rouge」周辺の調査、ニンフルサグ、シャマシュ、イシュタラト、ニニザザなどの神々の神殿の調査の他、基礎部分があきらかされた。

第3期 (1960–1974年) (スエズ動乱で5年間中断した後11シーズン) パロが隊長。「High Terrace」の北にある通路とその下層部分の調査、および前3千年紀中頃の王宮の

発掘調査の開始。

第4期 (1979–2004年) 第4期が始まるまで5年間の空白があったが、マルゲロン新隊長のもとで新しい発掘調査隊が構成され、新たに20に及ぶ発掘シーズンが再開された。新しい発掘調査は、マリの発展とその自然環境との関係および都市マリの始まりなどに重点を置いておこなわれた。

第5期 (2005年–) は Pascal Butterlin が隊長。

4. 氾濫原に立地するマリ

ティグリス川河岸の町サマッラとユーフラテス川河岸の町ヒトより上流部分では、両川は氾濫原を流れるが、下流部分では天井川となり、周辺部より高いところを流れる。

ユーフラテス川が周辺より低い氾濫原

(floodplain) を流れるところでは、都市は氾濫原に作られる。したがって、これらの都市の多くは、下流にダムが建設されると水没することになる（例：アサッド・ダム建設で、それより上流にあった古代都市遺跡の多くが水没）。ユーフラテス川中流域の河岸地帯は川から周辺部に向かって次のような台地から成り立っている（図3）。

- (1) floodplain, episodic flood level（ときどき氾濫する氾濫原）：ここは川に近い大規模な灌漑の必要がなく、シャドゥフ（shadoof）と呼ばれる揚水用はねつるべを使って灌漑し、豆類を栽培したと思われる（Margueron 2014: 7, 24）。
- (2) ancient Holocene terrace（完新世台地、稀にしか氾濫しない）：この台地は前 8000～4000 年にできたと考えられている。川面から 2～3 m 高くなったところに完新世台地の端がある。完新世台地は、場所にもよるが、幅約数 km あり、人工灌漑による穀物生産に適して

いた。ちなみに、都市マリは、ユーフラテス川が東側に大きく蛇行しているため 2 カ所にわたり比較的大きな完新世台地が広がった場所（*alvéolares*）にあり、人工灌漑による穀物生産が可能であった（Margueron 2014: 7, 24）。

- (3) Pleistocene terraces（洪積世台地）：完新世台地の先に洪積世台地がある。表面は固く、標高が高く灌漑不可能。放牧のみ可能。水は塩分があり、飲用不可。当然井戸も存在しない。塩分の蓄積度が高くなると、建物にも害を及ぼした（Margueron 2014: 7）。

都市マリは、完新世台地の上に建設された。川のすぐ近くでのシャドゥフを利用した豆類の栽培と Wadi as-Souab からの水流を利用した完新世台地での穀物生産のみでは都市マリを支えることはできない。前 4 千年紀に大規模な人工灌漑によって誕生したメソポタミア南部の都市には、木材や石材がなく、これらを提供できたのは両河の周辺の山岳地帯であった。マルゲロンによると、マリ

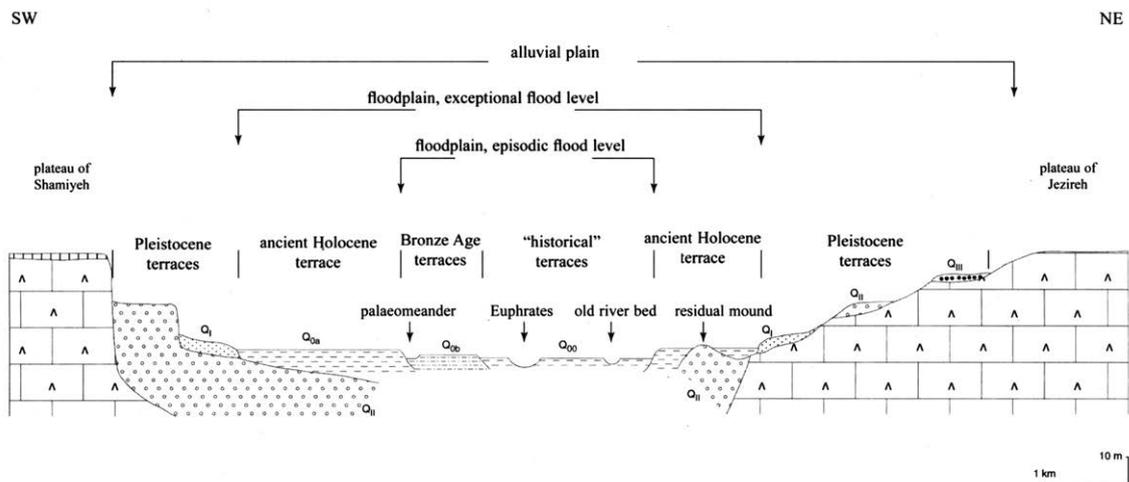


図3 マリ遺跡付近のユーフラテス川の断面図 (Margueron 2014: 6 より)

は、歴史時代の曙にこれら両地域を結ぶ主要交易ルートとなった河谷地帯に成立した都市の代表例の一つであった (Margueron 2014: 9) (図 1)。

5. 都市マリの居住史

マリ I: 前 2900 ~ 前 28 世紀の初めまで

処女地にインフラ (灌漑用運河、船用の運河、ユーフラテス川からマリへの引き込み運河) と一緒に都市マリが建設された (図 4)。マリは初めから二重の同心円の周壁からできていた。外側の周壁は直径約 1.9 km で、厚さが約 8 m あったが、これは外敵の侵入を防ぐと言うよりも洪水から都市を守る堤防 (dike) の意味合いが強かった。その内側に厚さ 6 m、高さ約 8 m、直径約 1.2 km の周壁が巡らされていた。外側の周壁と内側の周壁

の間には幅約 300 m の空間があったが、この幅は当時使われていた複合弓 (double bow) の有効範囲と関係する。外側の周壁をのり越えてくる外敵は内側の周壁から複合弓を使って射殺することができる距離であった。ただし、王宮や神殿の趾は見つかっていない。マリ I の終わりとその原因も知られていない。また、都市 II の建設が始まった時に都市 I が存在したかどうか不明。

灌漑用運河

ユーフラテス川の右岸に位置するマリ遺跡の北数 km のところに約 17 km にわたって大きな灌漑用運河の跡がのこっていた。水源は、上流の Wadi es-Souab で、貯水用のダムも作られていた。この灌漑用運河は完新世台地 Horocene Terrace が

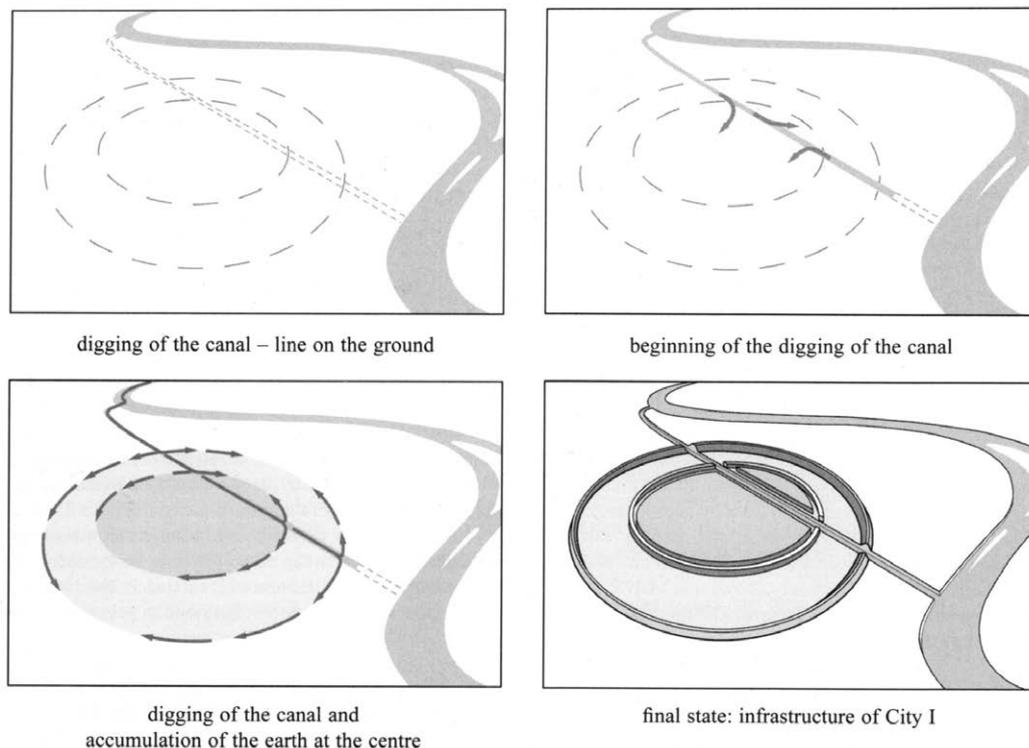


図 4 マリ I の建設過程 左上→右上→左下→右下 (Margueron 2014: 26 より)

高くなっているところに作られていて、自然に水が耕地に流れるように作られていた。運河の幅は 100 m あり、かなりの大きさであるが、大きな洪水に耐えられ、洪水の後容易に修復できるように作られていた。この運河もこの都市が建設された時に一緒に作られたものと考えられるが、正確な建設年代は不明。

船用の運河

ハブル川東岸（es-Sijr の辺り？）から Abu-Kemal 辺りまでユーフラテス川の東側に沿って船の航行用の運河（Nahr Dawrin）を建設することにより、ハブル川からユーフラテス川にかけて蛇行する川を航行する時の距離（約 160 ～ 170 km）にくらべて、運河を利用した場合の航行距離が 115 ～ 120 km に短縮された（図 5）。この運河の幅は 8 ～ 11 m で、それより狭くなることはなかった。イマル方面から下ってくる船はユーフラテス川本流を利用したと思われるが、ハブル川を下ってくる船にとっては便利であったと思われる。また、この運河は、蛇行する川の船の航行の難しさを減じることができたばかりでなく、減水期の流水を 1 本の運河にまとめることで船の航行を可能にした。船（時には筏）による輸送は 60 ～ 90 t。ウル第 III 王朝時代の資料によると、川を遡上する船曳きは 1 人で 1 t の荷物を積んだ船を 1 日あたり 20 ～ 30 km の距離を曳くことができたという。ちなみに 1 頭のロバが運べる荷物は 60 ～ 120 kg であった。

ユーフラテス川からマリへの船の引き込み用運河

ユーフラテス川からの船の引き込み用運河は古バビロニア時代以前から存在したと考えられており、氾濫原に住む人たちの水利技術の高さを証明

している。ユーフラテス川からの船の引き込み用運河なしでは、都市マリは存在し得なかったであろう。空撮写真から、古代の川が蛇行した旧流路がマリの上流でも下流でも見つかっている（図 2）。マリが成立した頃に蛇行していた川が利用できたとすれば問題はなかったが、仮に利用できない状態であっても古い流路を船の導入運河の開削に利用できたであろう。何れにしても、この運河の長さは 4 ～ 7 km はあったと思われる。

船の引き込み用運河にとり重要なのは、運河の深さである。運河の水面の標高をユーフラテス川の水面と同じ標高約 170 m にしなければならない。したがって、運河の底の標高は少なくとも標高 168 m まで掘り下げなければならなかった。ということは完新世台地（Holocene Terrace）のマリ都市の地面からは、少なくとも、2 m は掘り下げる必要があった（図 6）。

船の引き込み用運河の機能は、第 1 に都市に水を供給することであり、第 2 に航行する船に停泊する港（*kārum*）を提供することであった。中アッシリア時代にこの運河が機能していたかどうか不明だが、少なくとも水の供給のためには必要であった。増水期には運河が川の水量調節の機能も果たすことになったが、このことが逆にマリの土地の侵食につながった。その結果、現在のマリ遺跡は元の都市マリの約 3 分の 1 を残すのみとなった。

都市 II の神殿域の下に都市 I の青銅を扱う作業場が見つかっている。この作業場は、神殿と関係があったかどうか不明。青銅器時代の初めに年代付けされるこのような作業場が発見されたと言うことは、この都市の始まりとその重要性を知る上で重要である。

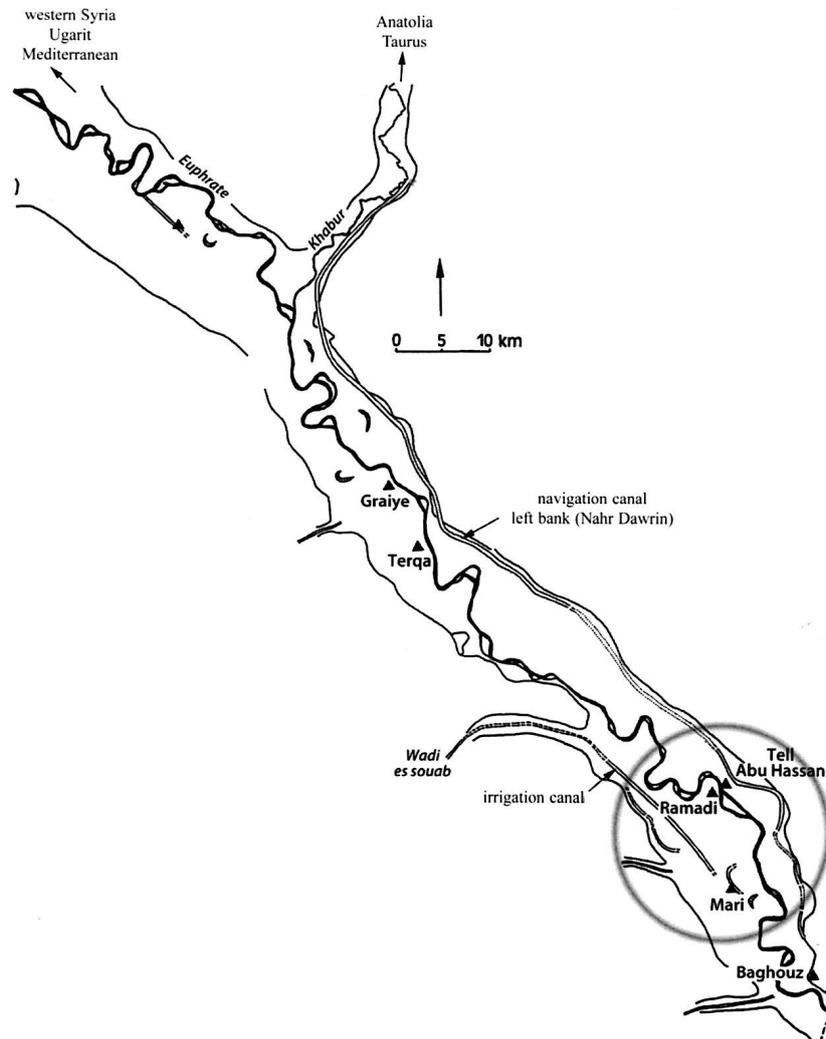


図5 蛇行するユーフラテス川とその東側に作られた船の航行用運河 (Nahr Dawrin)：上流からの船や下流からの船は Suprum (遺跡名：Tell Abu Hassan) でユーフラテス川本流に移り、マリへの引き込み運河を経由してマリ市内の港に停泊したと思われる。また、Wadi es-Souab からは灌漑用の運河がひかれていた (Margueron 2014: 23 より)。

マリ II

前 26 世紀に破壊されたマリ I をならしてマリ II の建設がおこなわれた。都市 II の外側の周壁は、その外側を測った場合の直径が約 1.9 km、内側の周壁はその内側の直径が約 1.3 km で、都市 I の場合と同じであったが、外側の周壁に 2 m の厚さの擁壁が付け加えられ、補強され、洪水を防ぐ堤

防としての役割に加えて外敵からマリを守る防壁としての役割が加わったと考えられる。

マリ II は、マリ I ~ III の中で、都市内の様子をもっともよくわかっている。(例：円形の周壁、二重の防御壁、川からのマリへの導入運河、カールム [港] の堤防建設や政治、宗教、経済等の中心部など)。(1) 雨や洪水時の水の排水のため、

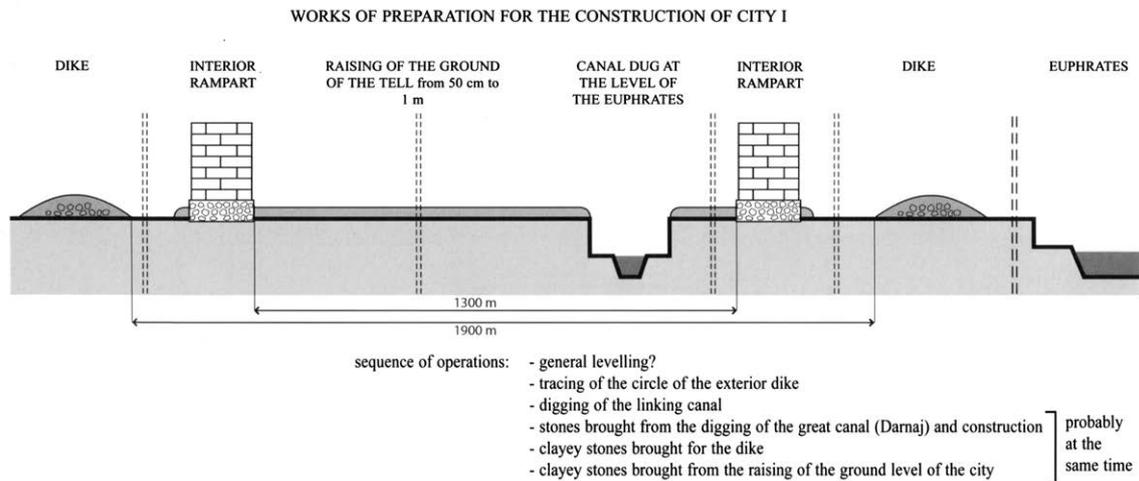


図6 ユーフラテス川からのマリⅠへの引き込み運河とマリの二重の周壁内の断面図（概念図）
 (Margueron 2014: 27 より)

中央は高く、周辺に行くに従って低くなるよう設計された道路も整備されていた。(2) 都市全体が地区に分割されており、再建は前の壁を継続利用していた。また基礎部分には2 m近い土の層(整地された跡)があり、その上に都市Ⅱが建設されていた。(3) 雨水の排水が効率よくおこなわれるように城門に向かって放射状に道路が建設されていた。道路に面した壁面は、住居の他の壁面より厚みを持たせ、その基礎もより深くなっていた。そして雨水は道路に向かって流れるように設計されていた。また、道路には雨水の吸収の良いもの(灰の混じった土、砂利、陶片など)を使用するなど、新しい都市建設の様子がうかがわれる。

マリⅡは、多分アッカド王朝のナラム・シン(前23世紀後半)により破壊されたと思われるが、これは、ナラム・シンの時代にアッカドに敵対して起こされた反乱に参加したことに対する報復であって、都市マリの全面的破壊を意図したものはなかったと思われる。なぜなら、ナラム・シンは、マリに新しい知事を任命し、2人の娘をマリ

の女司祭に任命しているからである。

マリⅡは、キシユやウルとも密接な関係を持っていた。しかし、出土した数十点の文書からシリアのエブラとは敵対関係にあったことがわかる。この時代のマリ王の中には Eblul-II、Enna-Dagan、Hida'ar、Išqi-Mari などがいた。Išqi-Mari はマリⅡ最後の王であった可能性がある。

マリⅢ

マリⅢはマリⅡ時代のような勢力の挽回を目指さず、アッカド王国の庇護のもとハブル川周辺とバビロニアの関係維持を目指した。ようやく Nūr-Mēr の治世になってニンフルサグ神殿の建設に着手、次の半世紀にライオン神殿と Sahuru の建設がおこなわれた。ニンフルサグ神殿と Sahuru の建設はつましいものであったが、High Terrace とライオン神殿の建設は権力と経済力(富)を示すものであった。新しい王宮の建設も同じであった。(図7, 図8)

6. マリ III の新しい王宮

長期間にわたって利用されたマリ III の王宮は、アムル系王朝の王宮遺跡としては最もよくわかっている。南北に約 180 m、東西に約 130 m あり、長方形をしていた。敷地面積は約 2.3 ha 近くあり、新アッシリア時代のアッシリアの王宮ほどではないが、前 3 千年紀および前 2 千年紀初めのどの王宮よりも大きい。この王宮は、前 2000 年頃のハヌン・ダガン Hannun-Dagan の頃に建設されたものと思われる。

大王宮の仕組み

王宮入口：主たる入口は、船の引き込み用運河に近い北側にある。この入り口には大きな 2 つの門柱があり、道路から階段を登って入るようになっていた。2 つ目の入口は主たる入口と同じく王宮の北側で、主たる入口から東に約 35 m のと

ころにある。この入り口は道路と同じレベルにあり、戦車／荷車や牛やロバなどの家畜が容易に出入りできるようになっていた。3 つ目の入口は王宮東側にあり、神殿域と家畜小屋を結びつける役割を果たしていた。(図 9)

主たる入口には二重の扉で開閉できるような玄関／受付スペースがあった。玄関扉の石製軸受けにはこの王宮の建設に関わったと思われるハヌン・ダガンの銘文が刻まれていた。玄関を入ると最初の広場 (154) があり、王宮の役人の居場所 (C セクション) につながっていた。

王宮の役人の居所

ここ (C セクション) は広間の周りに小部屋が配置された場所で、トイレや複数のオープンが備わったキッチンなどがある。

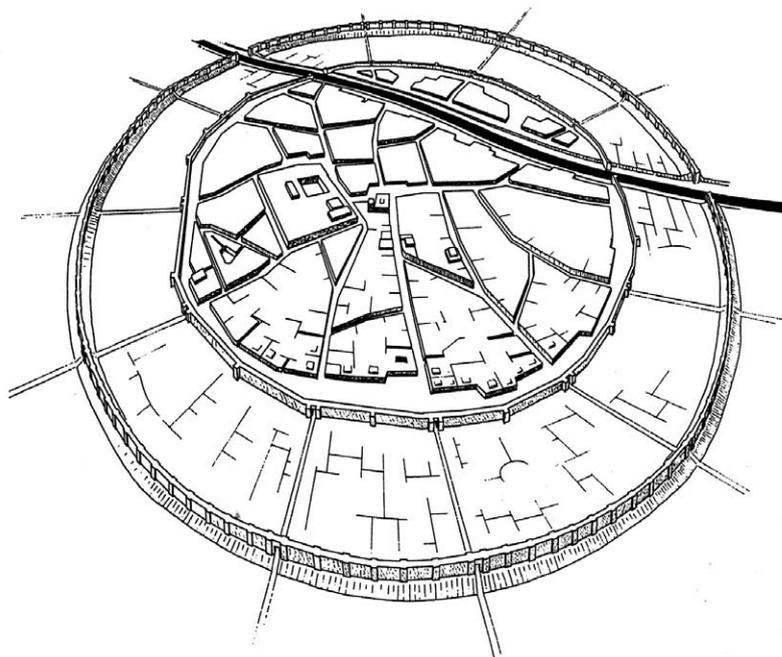


図 7 マリ III の概念図 (Margueron 2014: 58 より)

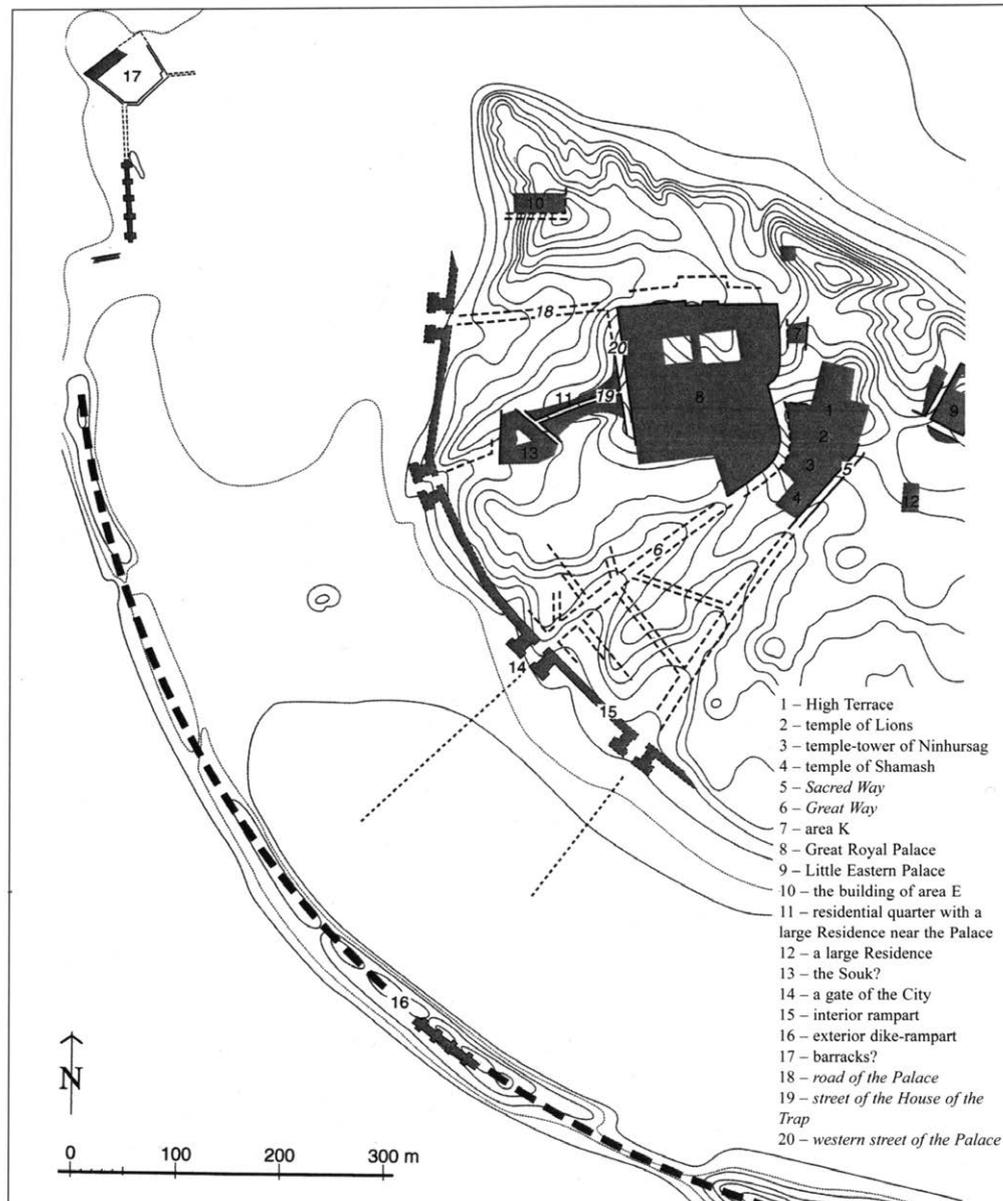


図8 マリ III の遺跡の分布状況 (Margueron 2014: 60 より)

王の私的な居住区

王の私的な居住区は、F区画の2階にあったと考えられている。ここには、玉座の間(65)の東側の階段室を通って行くことができた。

守衛室(部屋152)

この長方形の部屋には2つの出入口があり、大きなコートヤード(中庭)131につながる。部屋152では、守衛が寝泊まりしていたと思われる。

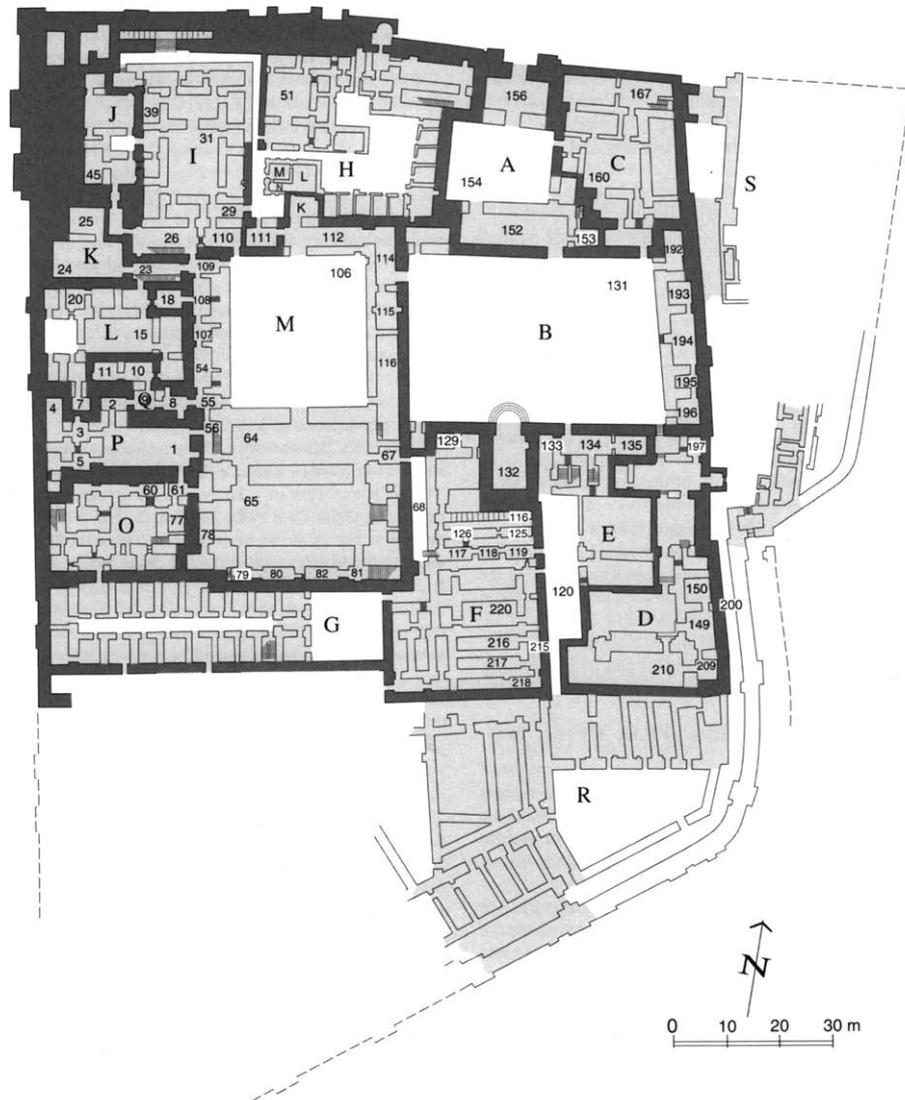


図9 マリ III の大王宮 (Margueron 2014: 114 より)

コートヤード (131) と壁画のある神殿 (=イシュタル神殿)

このコートヤードの床は、少なくとも一部に敷石が敷き詰められており、その一部には張り出し屋根があった可能性がある。コートヤードの形は不等辺四角形 (48.10 × 45.90 × 32 × 32.50 m)。

このコートヤードの北東、北西、および南西の角に独立した小部屋があり、監視人の見張り場所であったと思われる。コートヤードの東側の四部屋構成の部分は、瓶を支える装置やドアの留め具などが見つかっているため貯蔵庫であったと思われる。

コートヤードの南にシャッカナック時代に建造されたと思われるイシュタル神殿（壁画が描かれた神殿）があり、神殿入口には半円形の階段がある（132）。また、コートヤードの南東角の出入り口からは聖所や王宮の南部分の倉庫などに通じていた。さらにコートヤードの北西角近くの出入り口からは、王の居住区、女性の居住区、役人の居住区などからなる（王宮の）西半分に通じている。聖所部分は縮小され、新たに礼拝室（149-150）がつけくわえられており、階段を上って入るようになっていた。中心の礼拝室は「王宮の女神（ベレト・エカリム）」を祀っていた。

経済生活部分

コートヤードの南側中央で、イシュタル神殿の東側の入り口を入ると南北に大きな通路（120）があり、その通路の西側の3つの出入り口から倉庫が並ぶF区画に入ることができた。

ナツメヤシのコートヤード（106）

コートヤード131の北西角近くの出入り口から部屋114と部屋112を通過してナツメヤシのコートヤードに入ることができた。このコートヤードの東側にある部屋115からはたくさんの外交文書が出土した。

ナツメヤシのコートヤード（29.50 × 25.50 m）の周壁は漆喰が塗られ、赤と青で交互に色づけされていた。また、コートヤードの中ほどに作り物のナツメヤシの木が置かれていた。コートヤード106の北西角の2つの出入り口からは、女性の居住区（I区画）に通じていた。また、I区画の東に召使いの居住区（H区画）があった。南東角の出入り口は部屋116に通じており、壁に沿って大きな甕が置けるようになっていた。

部屋64（泉の女神像の部屋）

部屋64は25.60 × 7.70 mあり、正面入り口（幅3.10 m）に向かって泉の女神像が置かれていた。他の出入り口は部屋の隅に設けられていた。

玉座の間（部屋65）

後には玉座の間への西側の出入り口は閉じられ、東側の出入り口のみになった。玉座の間の西側には、大きなオヴン（釜）のある部屋（O区画）があり、食事の用意などがおこなわれたものと思われる。そのすぐ北側には王宮職員の区画（L区画）があった。またG区画は奴隷の部屋になっていたと考えられている。

奴隷の居住区（G区画）

玉座の間の南側に奴隷に居住区があった。ここには部屋68を通じてのみ入ることができた。この区画の通路の両側には各10室の小部屋が配置されていた。

王宮の貯水槽、給水設備および雨水の貯水槽

発掘調査の結果、コートヤード131（B区画）の下から貯水槽や給水路が発見されている。水の供給源の1つは船の引き込み用の運河の水であったと思われる。もう1つは雨水であるが、ナツメヤシのコートヤード（106 = M区画）の下には雨水をためる貯水槽が造られていたことがわかっている（図10）。その他にも汚水槽につながっているトイレとみられる設備が王宮内の少なくとも3箇所で見つまっているが、王宮内で居住しないしは働いていた人々の推定人口に比べてその数が多いにも少ない点が指摘されている。



Figure 135: Cistern under the floor of courtyard 131 for water supply to the Great Royal Palace (City III).

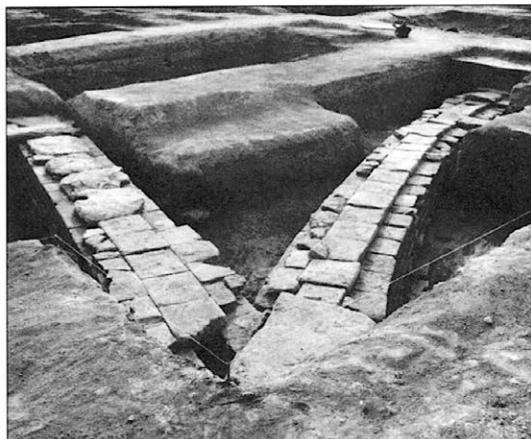


Figure 137: Channels built of baked bricks under the palace of City III.

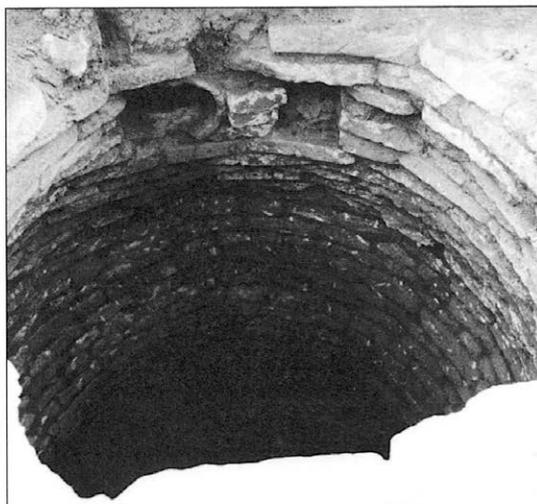


Figure 136: An iggu (cistern for collecting rainwater) in the Courtyard of the Palm Tree.

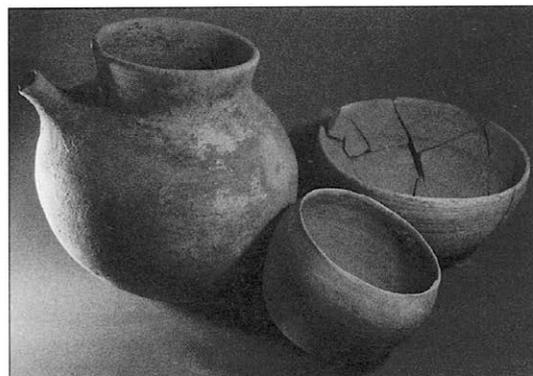


Figure 138: Water-jar (City I).

図 10 マリ III の大王宮の中庭 (131) の下に作られた貯水槽、給水設備、および中庭 106 (ナツメヤシの庭) の地下の雨水の貯水槽など (Margueron 2014: 133 より、Margueron 2004: 493-500 も参照)

参考文献

Margueron, J.-Cl. 2004 Mari. *Métropole de l'Euphrate*, Paris.

Margueron, J.-Cl. 2014 Mari. Capital of Northern Mesopotamia in the Third Millennium. *The archaeology of Tell Hariri on the Euphrates*, Oxford-Philadelphia.

エマル・エカルテ文書における財産相続用語

kašādu

山田 雅道
中央大学文学部

はじめに¹⁾

アッカド語 *kašādu* (シュメログラム KUR) は「届く、到着する」および「征服する」を基本語義とする動詞であるが²⁾、エマル・エカルテ文書では財産相続を表す用語としてしばしば用いられる。その内訳はエマル文書 13 (S 5 + H 8) 点、エカルテ文書 1 (S) 点³⁾、その事例の基本パターンは *zitta-šu mala itti aḥḥi-šu ikšud/ikaššad-šu* である。この名詞句をどう解釈するかという問題に関し、(1)「彼の兄弟たちとともに彼に『届いた/く』限りの彼の相続分」なのか、(2)「彼の兄弟たちとともに彼が『得た/る』限りの彼の相続分」なのか、研究者間に見解の相違が認められる⁴⁾。

基本語義とは異なる訳 (2) に関しては、*CAD* によれば “to get hold of (in various shades of meaning)” という語義が認められ、以下の事例が紹介されている。

DUB.NAM.MEŠ *ik-šu-da qātuššu* he seized in his hand the “Seal-of-Office” CT 15 40 iii 21 (SB Epic of Zu), cf. Gilg. XI 270; É.BI É.GAL KUR-*su* // *iredḏišu* the palace will seize, variant: take over, this house Leichty Izbu III 69; *ta-ka-ša-ad mimma u ušēbilakku* if she (your daughter) gets hold of something (here in Egypt), I will send it to you EA 1: 60 (let. from Egypt); *būšašunu ... u mimma ša itti aḥḥišunu ik-šu-du-šu-nu-ti* their possessions and whatever they hold in common with their brothers

1 本稿で使用する文献略号は M. T. Roth (ed.), *The Assyrian Dictionary* 20: *U and W*, Chicago, 2010, vii–xxix に従う。ただしエマル、エカルテ他ユーフラテス川中流域出土文書の略号は以下の通り: **ASJ 14-T** = Tsukimoto 1992; **BLMJE** = Westenholz 2000; **Ekalte II** = Mayer 2001; **Emar VI** = Arnaud 1985–86; **FM II** = Charpin and Durand 1994; **Hana** = Podany 2002; **Iraq 54-T** = Dalley and Teissier 1992; **PdA** = Fales 1989; **RE** = Beckman 1996; **SMEA 45-T** = Salvini and Trémouille 2003; **TFR 1** = Rouault 1984; **TS** = Arnaud 1991.

2 例えば “to reach,” etc. および “to conquer a country, a city,” etc. (*CAD* K, 271 [mngs. 1–2]); “erreichen, ankommen; erobern” (*AHW*, 459b).

3 二つの書記伝統を示す略号 S と H を含め、エマル文書に関する簡単な説明は山田 2019, 69 参照。エカルテ文書は、同じユーフラテス川大湾曲部 (東岸) の遺跡テル・ハディディ (古代名エカルテ) で出土したアッカド語文書 (全て S) で、前 1400–1325 年頃に年代づけられる (Werner 2004, 23–24; cf. Mayer 2001, 15–19)。

4 Arnaud: “il lui en est revenu” (*Emar* VI 215: 9 [pret.]), “il lui en revient” (*TS* 51: 4 [pres.]); Beckman: “comes to him” (*RE* 35: 6 [pres.]); Mayer: “er ... erlangen wird” (*Ekalte* II 63: 6 [pres.]); Westenholz: “has reached him” (*BLMJE* 15: 2 [pret.]) のように、テキストの出版者はいずれも訳 (1) を採用する。これに対し Durand は “échoir, revenir à ...” ではなく “il a eu en indivis (avec ses ‘frères’)” (*Emar* VI 215: 9) であると主張する (1990, 55)。

MDP 22 20: 9⁵⁾

特に Leichty Izbu III の事例 (*kašādu* // *redū*) を見ると、動詞 *redū* A (シュメログラム UŠ) にはたしかに “to take control of (property), to confiscate” という意味での用法が認められるため⁶⁾、上記した *kašādu* の特殊語義の存在は一応支持されよう。

本稿では、問題の名詞句における *kašādu* をどう理解するかという問題から出発して、エマル・エカルテ文書に見られる同語の特殊な用法をいかに評価すべきかについて考察したい。そこで使用した史料には財産所在地として「市と野」がしばしば言及されるため、その後これを用いた付論を加え、エマル人が自らの生活空間をどのように認識していたのかを検討する。まずは本論の考察対象となる *kašādu* 史料の整理から始めよう。

1. 史料

問題となる *kašādu* は、以下の文書にその用例が認められる（最後の 1 点のみエカルテ文書⁷⁾）。

- BLMJE* 15 (H; 2 箇所): ¹ 𐎶A.LA-šú ša ^mPN₁ *ma-la ša it-ti* ŠEŠ.MEŠ-šú ² *ik-šu-ud-šu*; (財産リスト) *ú-nu-tu*.MEŠ *an-nu-tu*²² 𐎶A.LA-šú-nu ša ^mPN₂ *ù* ^mPN₃²³ 2 DUMU.MEŠ ^mPN₁ *ma-la ša it-ti* ²⁴ ŠEŠ.MEŠ-šú-nu *ik-šu-du-šu-nu-ti*
- Emar* VI 116 (H): A.ŠÀ.MEŠ *mi-ri-ša* *ù* GIŠ. 𐎶AŠḤUR.KUR.RA *li-ki-is* ⁴ *ša* URU.GN 𐎶A.LA-šú ša PN₁ ŠEŠ-šú ⁵ *ma-la it-ti* ŠEŠ-šú <ù> DUMU.MEŠ PN₂ *i-kaš-ša-ad-šu*
- Emar* VI 180 (S): ⁴ *ù* 𐎶A.LA.𐎶Á-šú ⁵ *ša* URU.KI *ù* A.ŠÀ¹.𐎶Á⁶ *ma-la it-ti* ⁷ LÚ.MEŠ.ŠEŠ.MEŠ-*i*[a] ⁸ *i-ka-aš-š[a-ad/du-šu]*
- Emar* VI 215 (H): *ù* 𐎶A.LA-šú ⁸ *ša* GIŠ.KIRI₆. GEŠTIN *ma-la ša it-ti* ŠEŠ.MEŠ-šú ⁹ *ik-šu-ud-šu*
- Emar* VI 225 (H): ⁹ [mi-im-ma][?] 𐎶[A.LA]-[?]šú¹ *ša* URU.KI *ù* A.ŠÀ.MEŠ¹⁰ [ma-la it-ti]i [Š]EŠ.𐎶Á-šú *ik-šu-ud-šu*¹
- PdA* 66 (H): *mi-nu-me-e* 𐎶A.LA.𐎶Á-*ia* ⁷ [ša URU.KI] *ù* [?]šá¹ EDIN.NA⁸ [ma-la i]t-ti ŠEŠ.ME-*ia* *ik-šu-du-ni-in-ni*⁸⁾
- RE* 10 (H): ⁷ É-*ia gab-ba mim-mu-ia ka-ia-an-zi-ia* *ša* URU.KI [i] ⁸ *ù* *ša* EDIN 𐎶A.LA-*ia ma-la it-ti* ŠEŠ.MEŠ-*ia* ⁹ *i-kaš-ša-da-an-ni*
- RE* 13 (H): ⁹ É-*ia* [?]gab-ba¹ *mim-mu-ni ka-ia-an-zi-ia* *š[a]* URU.KI ¹⁰ *ù* [?]šá¹ EDIN [H]A.LA-*ia ma-*

5 CAD K, 280a (mng. 2h); また cf. “erlangen” (AHw, 459b-460a [mng. 3]). 不確実な事例 (UET 4 192: 4) と人間を対象とした事例 (JEN 361: 36, 39) は除く。なお、CAD (ibid.) はさらに *ana ahhūti ana PN la qerbu eqlu la kul-du šu[nu]* they are not in a brother relationship to PN, nor holding a field BBSt. No. 3 i 28 を挙げるが、現在 *qerbu* の後のテクストは *a-[?]hi¹ la [?]mu¹-du [?]šu¹-[nu]*, “Sie sind¹ die, die den Bru¹der¹ nicht ‘kennen’” と改訂されており (Paulus 2014, 404)、これも上記引用からは除外した。また CT 15 40 の事例に関しては、cf. STC 2 pl. 67: 4 ならびに En el. IV 121 (CAD Š/3, 13b-14a [s.v. *šimtu*, mng. 1b-1[?]] 参照)。類似した語義として、さらに cf. “to obtain possession of objects, merchandise, etc.” (CAD K, 279b [mng. 2g])。

6 CAD R, 237b-238a (mng. 5a) 参照。例えば (1[?]) 書簡・法的文書: *bītam u kirām ša PN šumma PN iḥtaliq PN₂ ašlākum i-[?]re-de¹ PN₂*, the fuller, will take possession of PN’s house and garden if PN runs away Kienast Kisurra 92: 9; *bīt PN ekallum ir-di* the palace took over PN’s estate ARM 4 5: 9; (2[?]) 前兆占い文書: *ana muškēnim bīssu u unēti[šu] ekallum i-[?]re-de-e* for a poor man (the omen means that) the palace will take over his house and furnishings YOS 10 56 i 20 (OB Izbu); *bītu šuātu ekallu ikaššassu* // UŠ-šú Leichty Izbu III 69; *bēl bīti imātma bītu šuātu ekallu UŠ-di* the owner of the house will die and the palace will take over that house Boissier DA 2: 25, also KAR 377: 44. Cf. “etwa beanspruchen, Anspruch erhalten auf (Akk.)” (AHw, 966a [mng. 9]).

7 財産相続に関連して TS 47 でも *kašādu* が用いられているが、このテクストに関し下記注 11 参照。

8 Yamada 2016, 428 参照。

la it-ti [ŠEŠ.MEŠ]-*ia*¹¹ *ik-šu-da-ni*
 RE 35 (S): ³ HA.LA ^mPN₁ ⁴ DUMU PN₂ ⁵ *ma-la ša*¹
it-ti LÚ.MEŠ.*aḥ-ḥ*[*i-šu*]⁶ *i-ka-ša¹-ad-šu*
 RE 77 (S; 2 箇所): ¹ A.ŠÀ *i-na* [... -*t*]² ⁴ IKU.
 Ḥ[Á ŠU.NÍGIN.NA⁷ HA.LA] ³ ^mPN₁ DU[MU
 ...] ⁴ *ma-la it-ti* ŠE[Š.MEŠ-*šu*]⁵ *i-ka-ša₁₀-ad-*
š[u];¹² A.ŠÀ *i-na* ŠÀ-*bi* GIŠ.KIRI₆ ¹³ *ša ir-da-ni*
 HA.LA ¹⁴ DUMU.MEŠ PN₂ ¹⁵ *ma-la i-ka-ša-ad-*
š[u¹-nu
 TS 31 (H): (家半分と KI *eršetu* 二つ) HA.LA-*ia*
⁷ *ma-la it-ti* ^mPN ŠEŠ-*ia*⁸ *ik-šu-da-an-ni*
 TS 35 (S): É-*ti*-¹ ⁷ HA.LA.ḤÁ-*ia* *ša URU.KI*⁸ ^ù
 [š] ^a A.ŠÀ.ḤÁ ¹ *ma¹-la i[t-t]i*⁹ LÚ.MEŠ.*AḤ.ḤÁ-*
ia ¹ *ik¹-šu-¹da¹-an-ni*
 TS 51 (S): ¹ A.ŠÀ GIŠ.KIRI₆.GEŠTIN ... ³ HA.LA
ša PN₁ DUMU PN₂ ⁴ *ma-la <it-ti>* ŠEŠ.ḤÁ *i-ka-*
ša₁₀-ad-šu
 Ekalte II 63 (S): ¹ KI *er-še-tum kà-ad-ru*² ... ² HA.
¹LA¹.ḤÁ ³ ^ù *qú-ub-ru-tum ša* ^mPN₁ ⁴ DUMU PN₂
^ù ^mP[N₃ ŠE]Š-*šu*⁵ *ma-la it-ti* ŠEŠ.MEŠ-*šu*-[*nu*]
⁶ *i-ka-ša-ad-šu-<nu>*

ここに示したように、エマル文書における二つの書記伝統の両方に用例が認められ、動詞の形も preterite と present の両形 (例えば S: TS 35 と RE 35; H: BLMJE 15 と Emar VI 116) が、動詞に付された接尾代名詞 (acc.) も 3 人称と 1 人称の両方 (例えば S: RE 77 と TS 35; H: Emar VI 215 と PdA 66) が使用されている。ただしシリア型文書に関しては、TS 35 以外での present 形と接尾代名詞 3 人称への偏りを指摘できよう。ここで注目した諸点のうち接尾代名詞は、本稿が扱う最初の問題を解く

鍵を提供するという意味で、特に注目に値する。

2. 考察

2-1. *kašādu* : (財産が人に)「届く」

上記で紹介した *kašādu* の二つの可能な解釈のうち、どちらが正しいのかという問いに答えることは、実は容易である。というのも動詞に 1 人称単数の接尾代名詞 (acc.) が付された事例⁹⁾を見れば、結果は一目瞭然だからである。例えば TS 35 と RE 10 の引用箇所は、テキストを出版した研究者たちが訳した通り、以下のようにしか理解しえない。

TS 35 : 我が家、我が「兄弟たち」と[とも]に私に届いた (Arnaud 訳 : “il m’en est revenu”) 限りの市と野 (狭義訳 : 耕地) の我が相続分

RE 10 : 我が家、我が全てのあらゆるもの、市と野 (狭義訳 : 広野) の我が資産、我が兄弟たちとともに私に届く (Beckman 訳 : “comes to me”) 限りの我が相続分

ここで動詞の(単数)形が 1 人称 (*akšud/akaššad*) ではなく 3 人称 (*ikšud/ikaššad*) であるという事実は、*kašādu* が (財産が人に)「届く」という意味で用いられていることの証拠である¹⁰⁾。本当の問題は、しかしここに発生する。何故なら、CAD (K, 271–284a) を見る限り、そのような意味での同語の用法は従来知られていないからである。アカド語全体においてこれは、前 2 千年紀後半ユー

9 PdA 66: 8; RE 10: 9; 13: 11; TS 31: 8 (全て H); 35: 9 (S).

10 引用した名詞句の元となる「我が相続分が我が兄弟たちとともに私に届く」という表現は、いささか奇異に聞こえるかもしれない。しかし古代西アジアにおいては、父が死亡すると遺産は未分割の状態で息子たちの手に渡り、その後彼らの間で分割されるのが常であった (Westbrook 1991, 118–141; idem 2003, 56; また Kitz 2000, 605–610 参照)。その結果、相続当初には兄弟たちによる財産共有段階が生じることになる。問題の表現はこうした相続制度を前提としたものだとして理解され、その意味において上記した Durand の訳 (注 4) は、意訳としてはむしろ正しいと評価できよう。

フラテス川大湾曲地域のエマル・エカルテ文書だけに特有な用法なのであろうか¹¹⁾。

2-2. 他のアッカド語文書におけるその用例

答えは否である。というのも管見の限り、わずか1例のみながら同じ用法が他のアッカド語文書に認められるからである。これは通称“Tablette Thierry”として知られるOAカニシュ文書（遺言書）¹²⁾であり、その中で遺言者アダド・バーニはいかなる形のものであれ「[...]の息子ダダーが私に負った[銀]9マヌ[ー]」(8b-10a行)を次のように言い換えている。

*qá-ti*¹³⁾ *ša*¹⁾ *wa-ar-kà-at um-mì-ni*¹⁴⁾ *ik-šu-dí-ni*
 (すなわち)私に届いた我らの母の遺産の我が相続分¹³⁾

ここも動詞に1人称単数の接尾代名詞 (acc.) が付された事例であることから、その語釈に疑いの余地はない。かくして(財産が人に)「届く」という意味での *kašādu* の用法は、エマル・エカルテ文書に限定されるものではないことが確認される。

さらに私見によれば、CAD が “to get hold of” とした上記 OB スーサ文書 MDP 22 20 の事例もまた、この意味で理解すべきであろう。冒頭部が欠損しているため正確な文書類型は不明ながら、相続財産の分割 (*izūzū-ma* 「彼らは分けた」[6行]) に関係していることは疑いなく、以下の箇所が注目される。

*bu-šā-šu-nu ù NÍG.GA-šu-nu*⁸⁾ *ù mi-im-ma šà it-ti*

11 ここで財産相続の問題を扱った TS 47 (S) にも触れておきたい。これは、イプキ・ダガンが他市へ立ち去る際、その言葉を聞いた証人ベール・カが書き記した文書である(1-7行)。彼によると、イプキ・ダガンは(娘たち)ビフエとキツズィを彼の家の「父と母」とし、彼の家を2人に与えた(8-16a行)。彼女たちは好きな者にこの家を与えてよく(16b-19行)、彼女たちの他に相続者はいない(20-21a行)。本文部分を締めくくるのは次の一文である。

*ur-ra-am*²²⁾ *še-ra-am ŠEŠ ka-SA-du*²³⁾ *aš-šum É-ia a-na UGU-šu-nu*²⁴⁾ *ú-ul i-ra-gu-um*
 将来、... 兄弟は我(イプキ・ダガン)が家に関し、彼(女)らに対して権利を主張しない。

Arnaud は問題となる箇所を *šeš ka-sa-du* と読み “un frère qui aurait part” と訳すが²⁵⁾ (1991, 87)、筆者は逆に *ŠEŠ <i>-ka-ša₁₀-du* 「(エマル市に)到着する兄弟は」(cf. *awāt iqbū*) と理解したい。SA = *ša₁₀* はシリア型文書で確認されており(例えば RE 77: 5; TS 51: 4)、翻字自体には問題がない。筆者の理解によると最後の一文は、現在は失踪中の息子が将来エマル市に帰ってきても父イプキ・ダガンの遺産相続に与れないことを定めた規定である。この *kašādu* も「届く、到着する」の意で、財産相続に関連して「兄弟」とともに用いられているが、相続行為そのものとは無関係なため、本稿における考察対象からは除外した。

12 Garelli 1966, 131-138 (no. 6: Tablette de la collection Thierry). また Wilcke 1976, 204-208 (no. 4); de Ridder 2017, 81-82 も参照。

13 意味的に「私」に届いたのは「我ら」の母の遺産全体ではなく「我」が相続分のみであるはずなので (cf. 上記エマル文書)、この名詞句を *ikšudīni* の前に <ša> を想定してか、もしくは *qātī ša warkat ummini* と *ikšudīni* が *awāt iqbū* の関係にあるものと見なして理解する。Garelli 訳 “(représentent) ma part de la succession de notre mère qui m'est échue” (1966, 134) および Wilcke 訳 “(nämlich) mein Anteil, der aus dem Nachlaß unserer Mutter auf mich gekommen ist” (1976, 206) も同様ながら、de Ridder は “my share of the inheritance of our mother has come to me” とする (2017, 81)。しかし動詞 *ikšud* の後の *-ī-ni* は、動詞用 (acc.) に転用された名詞用接尾代名詞 (possessive 1.sg.) *-ī* (Hecker 1968, § 49a [cf. § 78c]; von Soden GAG, § 84e; Kouwenberg 2017, § 9.7.2) および従属符 (subjunctive marker) *-ni* の組み合わせ (Hecker 1968, § 79c; Kouwenberg 2017, § 16.9.10.4) と理解されるので、de Ridder 訳は支持できない。

<ah>-hi-šu-nu⁹ ik-šu-du-šu-nu-ti

彼らの所有物と彼らの財産、および彼らの(兄)弟たちとともに彼らに届いたあらゆるもの¹⁴⁾

CAD が動詞部分を “they hold” と訳したことは既に見たが¹⁵⁾、筆者は上記の通り「届いた」を提案したい。もちろん「得た」の可能性を完全に否定することはできないが、エマル・エカルテ文書と共通する *itti ahhišunu* 「彼らの兄弟たちとともに」への言及は、拙訳を支持する間接的な根拠と見なせよう。

2-3. *kašādu* 特殊用法の起源

以上の解釈が正しいとすると、我々はエマル・エカルテ文書以外に(財産が人に)「届く」という意味での動詞 *kašādu* の用法を前2千年紀前半に溯って認めることができる。ただし現状それは、シリア(エマル、エカルテ)以外では現在のトルコ(カニシュ)およびイラン(スーサ)出土文書に限定されている。空白のメソポタミアを挟んでその東西という、この空間的な分布状況をどう捉えたらよいであろうか。

その距離を考慮すると、同じ特殊な用語法がほぼ同時代にカニシュとスーサで別個に誕生したとは考えがたい。むしろメソポタミアからの伝播を想定するのが妥当であろう。そこでまず指摘されるであろうことは、カニシュはアッシリア商人団の一大拠点であったため、彼らのアッカド語は、

現地アナトリア語からの影響を除けば、メソポタミアの古アッシリア方言(OA)と同じであった点である。しかし同方言はアッカド語の中で孤立的な特徴を示す場合が多いため、その用語法が直接アッシリアから東西に広がったとはただちに断定しかねる。そこで古バビロニア方言(OB)起源が期待されるが、まことに残念ながら筆者は寡聞にしてその証拠となる事例を知らない。今後、アッカド語の中核地域たるバビロニアでの事例探索と発見が切に求められる所以である。

3. <付論> エマル市内・外：エマル人の生活空間認識について

3-1. 財産所在地：「市と野」

本稿を閉じる前に動詞 *kašādu* とは別の問題に触れておきたい。上記 1. の史料リスト中、財産「相続分」HA.LA (*zittu*) の所在地として URU.KI ù A.ŠÀ.MEŠ/HÁ ないし EDIN.(NA)「市と野」¹⁶⁾ がしばしば言及されていたことに読者は気づかれたであろう。「市と野の相続分」とはすなわち、ある人物が市内外に有していた相続財産の意である。こうした言及はエマル人の生活空間認識を反映したもの——一人々の生活ある所、財産あり!——と考えられるため、本研究プロジェクトが扱う(客観的のみならず)主観的な「都市景観」の問題との親和性が強い。よってその事例を改めて整理し、彼ら住民が自分たちの生活空間をどのようなものとして理解していたのか、簡単にではあるが検討

14 先行詞を無限定の *mimma* (cf. *-šunu*) と取り、動詞部分を *ikšud-u-šunūti* と理解する。ただし文法的には、*būšašunu* 以下を先行詞と見なした「彼らの(兄)弟たちとともに彼らに届いた (*ikšudū-šunūti*) 彼らの所有物と彼らの財産、およびあらゆるもの」も可。

15 テクストを出版した Scheil 訳は “ils ont obtenu” (1930, 30)。

16 下線で示した部分。上記 2-1. における拙訳でも示した通り、狭義には A.ŠÀ (*eqlu*) が「耕地」を、EDIN (*šēru*) が「広野」を指す。

したいと思う。

まず上記リスト以外のエマル文書における事例を示せば以下の通りである。

Emar VI 128 (H): ⁴É-ia 'ka¹-ia-an¹-zi-ia ša URU.KI ⁵ù ša EDIN.NA

Iraq 54-T 1 (H): ⁹ka-ia-an-zi-ia ša URU.KI ¹⁰ù EDIN.MEŠ

TS 75 (H): mi-nu-me-¹e¹ ³[ka-ia-an-zi-šú ša L]Ú. mu-ti-¹ia¹ ša URU.KI ⁴[ù ša EDIN.NA] ¹⁷

これらを含め「市と野」にある財産の表記パターンを整理すると、以下の結果が得られる。

- URU.KI & A.ŠÀ (3点): *Emar* VI 180: 5 (S); 225: 9 (H); *TS* 35: 7-8 (S)
- URU.KI & EDIN (6点): *Emar* VI 128: 4-5; *Iraq* 54-T 1: 9-10; *PdA* 66: 7; *RE* 10: 7-8; 13: 9-10; *TS* 75: 3-4 (全て H)

一般的にシリア・ヒッタイト型文書に多く見られ、「野」の部分に関しては EDIN 型が優勢である。他方、シリア型文書は A.ŠÀ 型の 2 点にとどまる。

以上を踏まえた上でエマル周辺の地勢図 (Reculeau 2008, 140) を見てみると、都市エマル (遺跡メスケネ・カディメ) がユーフラテス川西岸にある河岸段丘上の東部縁辺に位置していたことから、その市外の地域は大きく三つの地域に分類される。まず東部はユーフラテス川に直接面した沿岸の低地であり、その西部にはエマルが載る、そこから一段高くなった段丘がある。さらにその西部、エマルから 1～数キロメートル離れた所には崖上に高地が展開している。そこでエマル人の生活空間として、ごく大まかに沿岸低地が各種農

地、段丘上の都市が居住地域、それ以外の段丘上は牧草地、と想像されるかもしれない。しかし明らかに段丘の斜面である *yardānu* (ibid. 参照)¹⁸には農地が存在していたこと (例えば *Emar* VI 137: 1; *TS* 58: 1)、またエマルは縁辺ながらも天水農耕地域内に位置していたことから判断して、段丘上も少なくとも一部は農地として利用されていたと考えられる。

3-2. 「野」: A.ŠÀ と EDIN

これら事例の解釈にとって問題となる市外における A.ŠÀ と EDIN の関係について、まず考えてみよう。狭義においてそれぞれ「耕地」と「広野」を意味するのであれば、両語の関係は当然 A.ŠÀ ⊂ EDIN となろう。実際 A.ŠÀ.MEŠ-šu i-na EDIN.NA 「広野にある彼の耕地」(*TS* 53: 24) は、そのような両語間の階層性をはっきりと示している。しかし上記のように各語が財産の所在地を示す場合には、このような区別は無意味であろう。何故なら耕地や果樹園、菜園といった「農地」のない広野とは単なる荒野にすぎず、こうした言及の対象になるとは考えがたいからである。結果として、上記リスト中の史料において A.ŠÀ と EDIN はともに市外の「野」全般を意味する語として用いられているのであり、そこにある財産とは、当然農地が主体となることが了解されよう。

もっとも ¹PN₁ É-[ta]-ši [ša] N[I]N-ši iš-¹tu¹ EDIN.MEŠ a-na ¹PN₂ A[M]A-ši ta-at¹-ta-din 「PN₁ は彼女の姉妹の家を野から ¹⁹彼女の母 PN₂ に与えた」(*TS* 80: 4-7) から窺われるように、市外においても家

17 これは上記 *Emar* VI 128: 4-5 と同じ財産への言及である。Yamada 1994/c 参照。

18 また Reculeau 2008, 136-137; idem 2010, 511-512; さらに Pentiu 2001, 86-87 参照。

19 Cf. “la maison [de] sa sœur, dans la campagne” (Arnaud 1991, 133).

屋が立地していたことが知られる²⁰。ただしそれらは通常の住居とは限らない。TS 80 の「家」(5 行)の場合、2 人の娘が父の財産を分けた際に母に分与されていることから判断して、これは市郊外の隠居所として使用された可能性が高い。また昨年度の報告で指摘したように、カッシュ山に面した É *ḥa-ba-ú/i/a* 「*ḥaba'u* 家屋」(RE 7: 5, etc.) もまた、同地域 — この場合はエマル市の西方に広がる高地付近 — にあった、ある一族の家畜管理施設と解される²¹。これは、エマル市が位置する段丘上(さらには高地上?)の牧草地を利用するのに適した立地であると言えよう。

3-3. 牧草地

市外に関連して、農地の他に今触れた「牧草地」(A.GĀR = *ugāru*)²²についても触れておこう。これは上記リスト中の史料に全く認められないものの、ヒッタイト語書簡 *BLMJE* 32 ではエマルの有名な内臓占い師ズ・バアラの相続財産として *É¹-[ir² A.ŠĀ A.G]ĀR.Ḥ[Á] GIŠ¹.KIRI₆.GEŠTIN-ia (...)* 「家、[耕地・牧]草地および [び]葡萄園」(13–14 行) が言及されている²³。ここからは牧草地もまた市外にある財産として認識されていたこ

とが理解される。

この種の財産に関して興味深い史料は RE 86 である。その本文は前半の KI *eršetu* 「地所」売買 (1–20 行) と後半の王の面前における耕地の贈与 (21–35 行) の 2 部構成になっているが、本稿にとって重要なのは後者である。その主要部分を引用する。

²¹ *a-n[a p]a-ni^m el-li LUGAL-rù²² a-¹bī¹-ka-pī DUMU še-i-ia²³ A.Š[Ā q]i-i-ra :šu-ut-ta-ti²⁴ ša [b]i-in-a-ti.KI²⁵ ÚS.SA.DU AN.TA PÚ¹ GI Ú²⁶ ÚS.SA.DU KI.TA DUMU.MEŠ nu-uk-ra²⁷ pa-nu-šu :na-aḥ-ra-pu²⁸ A.ŠĀ.ḤÁ ú-ga-ra-ta ša É.GAL²⁹ a-na^m zu-ba-la DUMU-šu id-din-šu-nu*

エリ王の [前] で、シェイヤの息子アビ・カピは、ビンアティ市 (村) の耕 [地] (ならびに) [溜] 池：穴 — (その) 上側は … 泉、(その) 下側はヌクラの息子たち (の耕地)、その前側は水路 (と) 王宮の耕地・牧草地 — を、彼の息子ズ・バアラに与えた。

Cf. In the presence of King Elli and Abī-kāpī, son of Šē'iya. An irrigated² field in the town of Bināti, in use as a vineyard [[*k*]i-i-ra]. On the upper side it is bordered by a … well. On the lower side it is bordered by (the property of) the sons of Nukra. In front it is bordered by the desert² [:na-aḥ-ra-bu]. The fields belong to the palace. He gave them to his

20 ただし KI *er-še-tu₄ i-na me-eḥ-ti-li EDIN eš-šu*, “A lot in the … of the new territory of the countryside” (RE 14: 1; Beckman 1996, 24–25) はこの件に該当しない。ここでは EDIN を GIBIL (= *eššu*) と読み、全体を「新しい *meḥtilu* にある地所 (廃屋)」と理解すべきである (Yamada 2017, 127 n. 24)。エマル・エカルテ文書における特殊用語 KI = *eršetu* (直訳：地) に関しては、先行研究を含め *ibid.*, 125–126 参照。

21 山田 2019, 73–75 参照。ただし、これを与えられたタダツリが住み込みで働けるよう、おそらく居住設備はそこに付属していたであろう。Cf. Pentiuć 2001, 61–62 (s.v. *ḥa-pá-a*, etc.); Démare-Lafont and Fleming 2015, 61–62.

22 辞書訳：“grassland, meadow, arable land” (*CAD* U & W, 27a [mng. 1]); “Feldflur, Ackerland” (*AHw*, 1402b).

23 Cf. GIŠ.KI[R]I₆.GE[Š]TIN-w[a-m[u] A¹.ŠĀ <A>.GĀR.ḤÁ-ia 「私か [ら] 葡 [萄園と] 耕地・(牧) 草地を」(6 行)。同じズ・バアラの相続財産は、別のヒッタイト語書簡 *SMEA* 45-T 1 では É-ir GIŠ.KIRI₆.GEŠTIN-ia 「家と葡萄園」(17–18 行; cf. 6–7 行)、アッカド語文書 *Emar* VI 201 では É.MEŠ A.ŠĀ.MEŠ ù G[IS].KIRI₆.NUMUN 「家々、耕地および果 [樹園 (?)]」(31 行; cf. 11–12, 16–17 行) として言及される。上記した *BLMJE* 32: 13–14 の読みは、これらを総合的に勘案した結果である。ただし cf. ¹² [...] x x [...] ^{A.ŠĀ} A.G]ĀR.ḤI.A ¹³ [...] x LÍL [...] ¹⁴ [GI]Š.KIRI₆.GEŠTIN-y[a ...], “... lands, ... field ... and the vineyard” (Singer 2000, 66–67 に従った Hoffner 2009, 372).

“son” Zū-Ba’la (Beckman 1996, 109).

注解：

23 行：Cf. A.ŠÀ *qí-i-ri :šú-ut-ta-ti* (31–32 行). Pentiuć が正しく指摘したように (2001, 148, 174–175), *KI-i-ra* を *kirá* (acc.)「葡萄園」と取る (Beckman 1996, 109) ことは難しい。その注釈語 (gloss) として付された *šuttatu* が何らかの「穴」²⁴⁾ である点を考慮して、彼 (2001, 148) に従い *qīra* (“something dug; well, cistern”) と理解する。この場合、耕地の上側が PÚ (*būrtu*) 「泉」²⁵⁾ であるので、そこから水を引き入れるための小さな「溜池」の可能性が高いと考える。

27 行：*naḥrapu* に関し、cf. A.ŠÀ.ME *ša na-ʿa-ʿl-ra-pi ša ba-li-ti* URU.šú-mi 「シュム市 (/ 村) の貯水池の水路 (沿い) の耕地」(ASJ 14-T 43: 4) およびこの耕地の第二の側 1 *ḥu-ur-ru à na-ʿa-ʿl-ra-pu ša ba-li-ti* URU.šú-mi 「一つの三日月湖とシュム市の貯水池の水路」(10–11 行; cf. *Emar* VI 194: 8)²⁶⁾。Beckman は RE 86 におけるこの語を西セム語派生の *naḥrabu* (“desert”) としたが (1996, 109)、耕地の前面に「荒野」が広がる光景は想像しがたく、またその耕地を “irrigated²⁾ field” と見なす彼

の解釈 (ibid.) とも矛盾しよう。Tsukimoto もまた *naʿrabu* と取り、*nērebu* (“entrance”) の異形として理解した (1992, 290–291)²⁷⁾。これは「貯水池への入口」として ASJ 14-T 43 では一応意味をなすかもしれないが、何の入口かに関する情報を欠く RE 86 では問題である。これらに対し Reculeau は、この語を *ḥarāpu* (SB)²⁸⁾ と同根語の *naḥrapu* と取り、”the gorge formed by the overflow of water in certain places” (2008, 139) ないし “la gorge que creuse l’écoulement régulier de l’eau depuis une source quelconque, en l’occurrence, d’après les exemples connus, depuis un bras mort aménagé pour l’irrigation ou depuis un fossé” (2010, 515) と考える。

現在の筆者の見解は彼の後者の考えに近い。ASJ 14-T 43 は一種の「溝」— さすがに「峡谷」は大袈裟にすぎよう — たる *naʿhrapu* が貯水池に付属する (*ša*) 施設ないし設備であることを示唆するが、この点に関し次のハナ文書の記事はきわめて示唆的である：ÚS AN.TA ÍD.*a-tap-pa maš-qi-ti à ba-li-tum* 「(売却される耕地の) 上側：灌漑用水路と貯水池」(*Hana* 17: 5–6)²⁹⁾。さらに PÚ 「泉」(RE 86: 25) には排水路が必要 (かつ灌漑に転用可

24 辞書訳：“pitfall, grave” (CAD Š/III, 404b); “(Fall-)Grube” (AHw, 1292b). RE 6 ではその異形 *šuttetu* が PÚ (次注参照) の注釈語として用いられている (11 行)。この箇所を “well and pit” と訳した Beckman は、後者を “some sort of excavation ..., perhaps a refuse pit for the building and an irrigation ditch for the field” と考える (1996, 10–11)。

25 辞書訳：“well, cistern” および “waterhole, source” (CAD B, 335a [mngs. 1 and 3]; “Zisterne, Brunnen” (AHw, 141a). RE 86 ではこれが耕地に隣接している点を考慮すると、「井戸」よりも「泉」の方が現実的であろう。筆者は湧き出た水が「貯水池」状になっているさまを想像する。

26 Cf. “the field at the entrance [*na-ʿa-ʿl-ra-bi*] to the reservoir of the city of Šumi” および “(a field of) Hurru and the entrance [*ḥu-ur-ru à na-ʿa-ʿl-ra-bu*] to the reservoir of the city of Šumi” (Tsukimoto 1992, 290).

27 また Yamada 1993, 454, 456; Pentiuć 2001, 129–130; Mori 2003, 130–131 も参照。

28 辞書訳：“to cut” (CAD H, 90b [s.v. *ḥarāpu* B]); “wegschlagen” (AHw, 323b [s.v. *ḥarāpu* II]).

29 辞書では *balittu*, “reservoir, pond” (CAD B, 63a); *balittum*, eine Art “Reservoir; Fishteich(?)” (AHw, 99b) として立項された語 (上記 Tsukimoto 訳はこれに従う) に関し、Durand はこれを *balitu* (pl. *baliʿātu*) であるとし、意味も “méandre mort” を充てた (1990, 60). Reculeau もこれを受け入れ、*balītu*, “dead meanders of the river” であると強く主張する (2008, 138 and n. 92; 2010, 514; cf. “backwater” [Streck 2018, 7b]). 同語が *balītu* であるとしても、

能)である点を考慮に入れると、エマル文書における *na'ḥrapu* とは(灌漑に利用可能な)「水路」を指すものと考えるのが妥当と思われる。

ASJ 14-T 43 において *na'ḥrapu* と並んで言及された *ḥurru* (直訳)「穴」³⁰⁾ についても触れておこう。エマル文書に現れるこの語に関しては、“dépression, fosse” (Arnaud 1991, 11, 34, etc.)、 “marshy depression” (Mori 2003, 114)、 “several kinds of humid depressions” (Reculeau 2008, 138) などの理解が示されてきたが、筆者は Buccellati の解釈に最も魅力を感じる。彼はハナ(テルカ)文書に見える耕地に隣接した *arru* (*Hana* 9: 7-8) と *ḥurru(m)* (*TFR* 1 8: 5; 8E: 6) は同一語であり³¹⁾、 “a standing body of water, corresponding to old meander loops, and swamplike in appearance, particularly on account of the reed thickets growing alongside it” を指すと主張した(1990, 161)。

大小を問わずこれが一種の「三日月湖」である

点に関し、以下の2点の史料が注目される。まずエマル文書 TS 9 を見ると「(ユーフラテス)川対岸の *ḥurru* 地区³²⁾にある(一)耕地の全域」(1-2行)の「第一の側: Azalilu の息子たちの用水路(ÍD)、第二の側: 同じく用水路(ÍD.ḤÁ-*ma*)」(7-8行)とあり、*ḥurru* が通常の用水路(*nāru*)とは区別された存在であったことが窺われる³³⁾。次のマリ文書 FM II 75 はさらに興味深い。これはハブル川沿岸で行われた泉の検査と掘削によるそれらの拡張に関する書簡であるが、そこに言及された二つの「泉」(*īnu*)の一方に関し、以下の記述を見てみよう。

²⁵⁾ ḥur 7 GI.ḤÁ A.ŠÀ *a-na ḥa-bu-ur ḥur*¹-[rum]

²⁶⁾ *i-nu-um šī-i ú-ul ḥur*¹-[em]

ハブル(川)から(直訳:へ)7カヌー離れた所に *ḥur*[rum] が(ある)。その泉(の水)は(この *ḥurru* に)近づ[か]ない³⁴⁾。

この *Hana* 17 の事例は、やはりそれが「貯水池」を意味する(少なくともその目的で実際に使用された)ことを強く示唆しよう。以下に見るように筆者は、エマル文書において「三日月湖」に相当する語はむしろ *ḥurru* ではないかと考える。なお Pentiuć は問題の語を *mali'itu*, “artificial terrace” と理解するが(2001, 120-121)、筆者はもちろんこれを採らない。

- 30 辞書訳: “hole” (*CAD* Ḥ, 252b); “Loch” (*AHW*, 359b). エマル文書では ASJ 14-T 43: 10 の他、TS 9: 2, 9; 16: 1; 17: 1; 18: 1 に言及される (Mori 2003, 114 参照)。
- 31 Buccellati はさらに A.SUG (*Hana* 1: 14; 2: 13) も同一語と考えたが(1990, 161)、現在このシュメログラムの読みは ÍD と改訂されているため(先行研究を含め Reculeau 2008, 138 n. 93 参照)、ここでの議論からは除外する。
- 32 エマル文書における KÁ (直訳: 門)を「灌漑区」(“irrigation district”)と見なす解釈がある (Reculeau 2008, 133-135)。エマル周辺に灌漑された耕地があったことは疑いえないが、KÁ によって位置表示された耕地全てが灌漑区にあったとは断定できまい(何故「門」=灌漑区なのか? ; また cf. PA₅ と NAM [*BLMJE* 1: 4])。筆者はこうした KÁ 表記を、当該の農地がエマル市のどの門ないし出口を出て到達される「地区」にあるのかを示した表現として理解したい。
- 33 母音 *a* と *u* の交替自体はさほど問題ではないが、この点は問題の *ḥurru* を *ḥarru* 「水路」(辞書訳: “watercourse” [*CAD* Ḥ, 114a (s.v. *ḥarru* A, mng. 2)); “Wassergraben” [*AHW*, 327b]) の単なる異形として理解すること (cf. Buccellati 1990, 161) を躊躇させよう。ただし cf. “(a topographical feature, depression or the like)” (*CAD*, *ibid.* [mng. 1]). これら *ḥurru* と *ḥarru* をどのように区別するか、あるいは逆に一語にまとめるかは、今後の検討課題である。
- 34 Mori 訳 “and 7 reeds from the Khabur there is a marshy depression, but that spring does not reach it” (2003, 114) に準ずる。Cf. “et la dépression que constitue cette source est à 7 cannes (= 21 m) du Habur: il ne peut pas en approcher” (Joannès 1994, 138). なお Joannès はこの *ḥurru* を、NA 碑文によく現れる “la gorge creusée par l’écoulement de la source” (cf.

問題の語は一部欠損しており、また 'ḥar¹-[rum] とも読みうる。しかし辞書を見る限り語頭が ḥa/urC- (ないし murC-) で川辺にあっても不適切でない語が他に見出せなかったこと、また泉からの水流とは別の「水路」が近くに存在するとは想像しがたいこと — もしそうなら連結していたのではないか？ — から、筆者は Joannès の読みを支持する。この水流と接触をもたない ḥurum とは、Buccellati が提案したように「三日月湖」と捉えるのが最適であろう。

28 行：Beckman 訳では葡萄園に転用された耕地 (23 行) — ならばそれは、もはや単なる葡萄園ではないのか³⁵⁾？ — と本行の耕地が同一視されているようであるが、そうではあるまい。筆者は後者を、この耕地から見て水路 (nahrapu) の対岸に展開する「野」と理解したい。ここで CAD 訳 “the meadows belong to the palace” (U & W, 31a [s.v. ugāru, mng. 1c-2'b]) はもちろん可能ながら、対岸とはいえ耕地がある地域に牧草地のみを想定することにはいささか抵抗を覚える。また既に見た内臓占師ズ・バアラの相続財産中、A.ŠÀ A.GÀR. ḤÁ (BLMJE 32: 6, 13) が牧草地のみであったとは到底考えられない、換言すれば必ずや耕地を含んでいた点を考慮して、ここもまた「耕地・牧草地」と解するのが妥当と思われる³⁶⁾。この解釈が正しいならば、市外には耕地をはじめとする農地の他、

牧草地も混在していた状況が窺われよう。そしてこれを逆に言えば、A.ŠÀ A.GÀR (ugāru) 「耕地・牧草地」とは、同じく「野」を意味する A.ŠÀ の拡張表現として理解されるということである。

以上の検討に基づき、RE 86 で扱われたビンアティ市の耕地とその周辺の様子を図 1 にまとめた。同市の正確な位置は不明ながら、エマル王宮所有の耕地・牧草地が存在するのであるから、ここがエマル近郊であったことは疑いえない。また泉や水路の存在は、ここがユーフラテス川沿岸低地内に位置していたことを示す。そこで見られた農地と牧草地の混在は、エマル市の沿岸低地においても同様であったろう。既に指摘した点と合わせると、段丘上にも (牧草地ばかりか) 農地が、沿岸低地内にも (農地ばかりか) 牧草地が存在していたことになる。

3-4. 「市と野」：エマル・エカルテ文書以外

市内外における財産に話を戻そう。エマル・エカルテ文書で確認される「市と野」という大きな空間区分は、他のアッカド語文書においても認められる。CAD³⁷⁾ に集められた事例を中心にいくつか紹介するが、KAJ 174 を除き、これらは全て URU.(KI) & EDIN 型に属する。

(1) OB スーサ

NÍG.GA URU.KI ù E[D]IN-šu 「彼の市と野の財

CAD N/2, 118) と考える (ibid., 139)。

35 RE 16 ではたしかに A.ŠÀ GIŠ.KIRI₆.GEŠTIN (1, 23 行) が GIŠ.KIRI₆.GEŠTIN と言い換えられており (8, 16 行)、ベックマンは前者を “field (...) in use as a vineyard” と訳す (Beckman 1996, 29-30)。しかし筆者は両者を耕地と葡萄園の両方 (ただし後者が優勢) が存する農地 (cf. RE 77: 12)、ないしは前者に関し異例ながら「農地」を示す限定詞 A.ŠÀ が付された葡萄園、と考える。

36 例えば cf. ana A.ŠÀ A.GÀR an-ni-e ri-ši-ma [x] rejoice in this field and meadow BA 5 673 No. 29: 15 (CAD U and W, 28b [s.v. ugāru, mng. 1a])。

37 例えば CAD B, 139b (s.v. bašītu, mng. 1c), 354a (s.v. būšu, mng. a-1'b'); M/1, 134b (s.v. makkūru, mng. a-3'); N/2, 229 (s.v. nikkassu A, mng. 3a); S, 141-142a (s.v. šēru A, mng. 3a-1')。

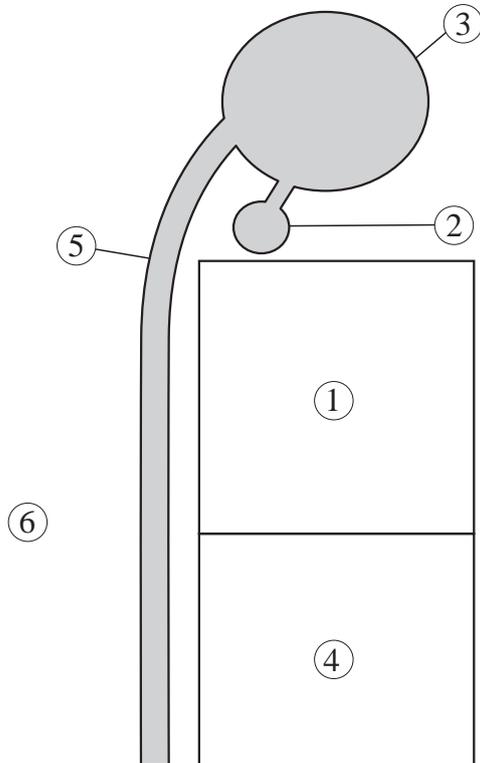


図1 ビンアティ市近郊の耕地とその周辺 (RE 86)

- ① A.ŠÀ ... ša Bin'atī^{ki} (シェイヤの息子アビ・カビ所有) 「ビンアティ市の耕地」 (23-24 行)
- ② qīru :šuttatu 「溜池：穴」 (23 行)
- ③ PÚ! GI Ú 「... 泉」 (25 行)
- ④ DUMU^{mes} Nukra 「ヌクラの息子たち (の耕地)」 (26 行)
- ⑤ :nahrapu 「水路」 (27 行)
- ⑥ A.ŠÀ^{bá} ugārātu ša É.GAL 「王宮の耕地・牧草地」 (28 行)

産」 (MDP 22 8: 4); NÍG.GA š[à] 「URU.KI-šu¹-nu ù sé-er-šu-[nu] 「彼らの市と野の財産」 (23 169: 4); NÍG.GA URU.KI ù EDIN A.ŠÀ É.DÙ.A ù GIŠ.KIRI₆ 「市と野の財産、耕地、家屋および果樹園」 (23 321-322: 1-2; また 44 行)³⁸⁾

(2) ヌジ

A.ŠÀ.MEŠ-ka i-na EDIN-ri ù É.ḪÁ.MEŠ i-na URU 「野にあるあなたの耕地と市にある (あなたの) 家々」 (RA 23 148 No. 29: 17-18)

(3) MA

É ep-šu ... ù qa-qú-ru pa-ši-ú-tu₄ ša qa-bal URU A.ŠÀ ta-bi-ša-¹tu₄ i-na A.ŠÀ ad-ru bu-ši-ú ù ba-ši-ú i-na URU.GN ù A.GÀR GN 「市内の ... 家屋と空き地、野にある tabišātu 耕地、ズバティ市とズバティの「野」 (直訳：牧草地)³⁹⁾ にある脱穀場、所有物と占有物」 (KAJ 174: 2-6 [Saporetti 1982, 100, 164])

(4) NB

mim-mu-šú šá URU u EDIN ma-la ba-šu-ú 「市と野にある限りの彼のあらゆるもの⁴⁰⁾」 (Nbk. 91: 6-7); NÍG.KA₉-su-šú šá URU u EDIN 「市と野の彼の資産」 (BRM 1 47: 6)

管見の限り前3千年紀後半および2千年紀前半のメソポタミアではその事例が見出せないものの⁴¹⁾、OB スーサ文書では URU.KI & EDIN 型のみながら、エマル文書以上に豊富な事例が確認される。MDP 23 321-322 では「市」とその代表的な

38 他に MDP 22 1: 6-7; 3 (= 18 202): 5-6, 8-11; 6: 5-7; 10: 6; 11: 3-6; 12-13: 7-10; 14 (= 18 214): 7-10; 16: 3-7; 17 (= 18 235): 4-6; 136: 5-7, 14-17, 20-22; 137: 8-10; 138: 5-9; 164: 3-4, rev. 4-5; MDP 23 166: 5; 168: 4-6; 171: 1'-6'; 172: 20-21; 211: 13-14; 285: 5-6; 286: 6-8, 11-12; MDP 24 341: 3; 345: 9; 381: 5-6; また cf. MDP 22 119: 1-2; MDP 23 202: 17-20; 236: 10-12.

39 Cf. "the district of GN" (CAD A/1 [1964], 129b [s.v. adru, mng. 1a-1']; B [1965], 354a [s.v. būšu, mng. a-1'c]); "nel territorio di Šubāti" (Saporetti 1982, 100); "the meadow of Zubati" (CAD U and W [2010], 29a [s.v. ugāru, mng. 1b-2']).

40 直訳は「ある限りの市と野の彼のあらゆるもの」。

41 なお、OA および MA でしばしば対比される ālum (URU) と eqlum (GÁN ないし A.ŠÀ) はそれぞれ「アッシュル市」と「(地続きの) 外国」を意味する特殊表現であるため (CAD E, 251b [s.v. eqlu, mng. 3a-2'] 参照)、本稿における検討対象からは除外した。

財産「家屋」が、同様に「野」と「耕地」が交差配列的に対応し、これに「野」の準代表的な財産「果樹園」が付加されたと解される。何故交差配列としたのかは不明ながら、この三つ組パターンは他の事例でもほぼ一貫している⁴²⁾。

ヌジ文書の事例では、こうした代表的な財産の対応が素直に表現されている。しかしこのみ空間区分が「野と市」と、通常とは逆順で表現された点は興味深い。これがヌジ文書における定型パターンであるか否か、今後他の文書を検討する必要がある。

MA の事例は、ここで唯一の URU.(KI) & A.ŠÀ 型という点でまず注目される（ただしここでの A.ŠÀ に関して以下を参照）。次に「市」（3行）と「ズバティ市」（6行）の関係が気になるが、前半の2-4行では主要な財産（特に家屋と耕地）が、後半の5-6行ではその他残りの財産が扱われていると理解できるので、前者もまたズバティ市を指すと考えてよかろう。その場合、「脱穀場」（5行）が（市外はよいとしても）「牧草地」にあるとは到底考えられないので、A.GÀR（6行）は市外＝「野」を意味する語として使用されたと解釈せざるをえない。これをどう説明したらよいであろうか。ここで想起すべきは、前項で扱った A.ŠÀ A.GÀR 「耕地・牧草地」である。2語で構成され

た、この A.ŠÀ の拡張表現が前半と後半に1語ずつ振り分けられたと考えれば、二つ合わせて完全な「野」を意味する表現となろう。この場合、形式的に A.ŠÀ（4行）は単独で「野」を表す語ではなくなるもの⁴³⁾、この説明は5-6行を2-4行の補完部分と見なす上記のテキスト理解にも合致することから⁴⁴⁾、筆者はこれを主張したい。

最後の URU.(KI) & EDIN 型をした NB の事例は、経済文書その他において頻出するが (CAD S, 142a [mng. 3a-1'])、「市と野」という空間区分が前1千年紀まで継続的に使用されたことを示す。この時代に関しては、NB 以外に NA 文書の調査も今後の課題である。

3-5. エマルにおける「市と野」とは

簡単ながらも以上の検討を通して、財産の所在地を「市と野」すなわち市内・外で区分する考え方は、事例の多寡にかかわらず、前2千年紀後半のエマル以外の時代・地域でも広く普及していたことが明らかとなった。表現の一般性を考えると、このこと自体は至極当然であり、エマル人もごく普通の生活空間認識をもっていたことを確認したにすぎない。また市内を代表する財産が家屋であり、市外のそれが耕地⁴⁵⁾である点も、常識に属する。

42 MDP 22 1, 6, 11, 12-13; MDP 23 285, 286; MDP 24 381; ただし cf. MDP 22 3 (耕地、果樹園、家屋：純交差配列的語順!)

43 それでも実質的には、A.ŠÀ 一語がここで「野」を意味すると筆者は考える。この点に関し、ウガリト語文書 RS 94.2168 (Bordreuil and Pardee 2009, 138, 258-260 [no. 38]) は興味深い。この文書では、王からアブディ・ミルクに授けられた財産 *bhm . šdm* 「家々(と)『耕地』」(5行)が *bhth . šdh 'm'r'h* 「彼の家々(と)彼の耕地・彼の牧草地」(14-15行)と言い換えられており、ここから *šd // šd mr'* 「野」を導くことは容易であろう。

44 この「主要 vs. 補完」という関係はまた、「一般 vs. 特殊」とも読み替えられよう。その場合、前半は一般的であったがゆえに URU と A.ŠÀ に「ズバティ(の)」という限定が付されなかったと考えるのは、果たして穿ちすぎであろうか。

45 一部の OB スーサ文書に記されたように、これに準ずる重要財産は農地たる「果樹園」であり、「牧草地」そ

しかし「野」を表す語として A.ŠÀ と EDIN が併用された点 (もっとも後者が優勢であるが) は、エマル文書の特徴と見なせよう。筆者は財産所在地としての EDIN に関し、3-2. において「耕地や果樹園、菜園といった『農地』のない広野とは単なる荒野にすぎず」と述べたが、あの時点では A.GÀR 「牧草地」を考慮に入れていなかった。財産所在地の区分から窺われるエマル人の生活空間認識に関し、概略的に A.ŠÀ // EDIN は成り立つと筆者は今も考える。しかし 3-3. で扱った A.ŠÀ A.GÀR を考慮に入れると、より厳密には URU vs. A.ŠÀ \subseteq A.ŠÀ A.GÀR // EDIN という図式⁽⁴⁶⁾が成立するのではないと思われる。本節におけるエマル文書の検討によって得られたこの仮説が他のコーパスにおいても妥当性をもつか否か、今後実地に検証すべき課題となる⁽⁴⁷⁾。

おわりに

エマル・エカルテ文書における財産相続用語としての動詞 *kašādu* は、(財産が人に)「届く」という意味で用いられていた: *zitta-šu mala itti aḥḥī-šu ikašud / ikašad-šu* 「彼の兄弟たちとともに彼に届いた / 届く限りの彼の相続分」。こうした *kašādu* の用法は、きわめて稀にはあるが他のアッカド語コーパスである OA カニシュ文書、またおそらく OB スーサ文書でも確認される。しかし OA アッシリアから直接周辺地域に伝播したとは考えにくいことから、その起源に関しては、

今後 OB バビロニア文書の調査が喫緊の課題である。

付論で扱った財産所在地「市と野」については今まとめた通りであるが、この市内・外のような大きな基本的区分の他にも、エマル人が自らの生活空間を主観的に区分・配置したさまざまな仕方があったにちがいない。それらの考究を通してエマル人が抱いていたであろうメンタル・マップを描くこと、それはエマル文書の歴史学研究において新たな一分野を切り開くことになるだろう。

参考文献

Arnaud, D. 1985–86: *Recherches au pays d’Aštata: Emar VI.1–3*, Paris.

Arnaud, D. 1991: *Textes syriens de l’âge du Bronze récent* (Aula Orientalis Supplementa 1), Sabadell.

Beckman, G. 1996: *Texts from the Vicinity of Emar in the Collection of Jonathan Rosen* (History of the Ancient Near East / Monographs II), Padova.

Bordreuil, P., and D. Pardee 2009: *A Manual of Ugaritic* (Linguistic Studies in Ancient West Semitic 3), Winona Lake, Ind.

Buccellati, G. 1990: “The Rural Landscape of the Ancient Zor: The Terqa Evidence,” in: B. Geyer (ed.), *Techniques et pratiques hydro-agricoles traditionnelles en domaine irrigué*, Paris, 155–169.

Charpin, D., and J.-M. Durand (eds.) 1994: *Florilegium marianum II: Recueil d’études à la mémoire de Maurice Birot* (Mémoires de NABU 3), Paris.

Dalley, S., and B. Teissier 1992: “Tablets from the

の他ではなかった。

46 もしくは財産所在地としては不適ながら、EDIN が不毛の荒野まで表すことをも考慮に入れた場合、一般理論的には A.ŠÀ \subseteq A.ŠÀ A.GÀR \subseteq EDIN となる。

47 とりわけ CAD が A.ŠÀ A.GÀR を単に “meadow (field)” と訳出した箇所 (U and W, 28ff., 特に 29b–31 [s.v. *ugāru*, mng. 1c]) では、我々が BLMJE 32: 6, 13 ならびに RE 86: 28 について見たように、「耕地・牧草地」と解釈し直した方がよい場合 (cf. 上記注 36) が見つかるかもしれない。

- Vicinity of Emar and Elsewhere,” *Iraq* 54, 83–111, Pls. X–XIV.
- de Ridder, J. J. 2017: “Testaments and Division of Assyrian Estates in the Second Millennium BC,” *Aula Orientalis* 35, 51–84.
- Démare-Lafont, S., and D. Fleming 2015: “Emar Chronology and Scribal Streams: Cosmopolitanism and Legal Diversity,” *RA* 109, 45–77.
- Durand, J.-M. 1990: Review of Arnaud 1985–86, *RA* 84, 49–85.
- Fales, F. M. 1989: *Prima dell’alfabeto: La storia della scrittura attraverso testi cuneiformi inediti* (Studi e documenti 4), Venice.
- Garelli, P. 1966: “Tablettes cappadociennes de collections diverses,” *RA* 60, 93–152.
- Hecker, K. 1968: *Grammatik der Kültepe-Texte* (AnOr 44), Rome.
- Hoffner, H. A. 2009: *Letters from the Hittite Kingdom* (SBL Writings from the Ancient World 15), Atlanta, Ga.
- Joannès, F. 1994: “L’eau et la glace,” in: Charpin and Durand 1994, 137–150.
- Kitz, A. M. 2000: “Undivided Inheritance and Lot Casting in the Book of Joshua,” *JBL* 119, 601–618.
- Kouwenberg, N. J. C. 2017: *A Grammar of Old Assyrian* (Handbook of Oriental Studies I/118), Leiden / Boston.
- Mayer, W. 2001: *Tall Munbāqa - Ekalte II: Die Texte* (WVDOG 102), Saarbrücken.
- Mori, L. 2003: *Reconstructing the Emar Landscape* (Quaderni di Geografia Storica 6), Rome.
- Paulus, S. 2014: *Die babylonischen Kudurru-Inschriften von der kassitischen bis zur frühneubabylonischen Zeit: Untersucht unter besonderer Berücksichtigung gesellschafts- und rechtshistorischer Fragestellungen* (AOAT 51), Münster.
- Pentiuc, E. J. 2001: *West Semitic Vocabulary in the Akkadian Texts from Emar* (Harvard Semitic Studies 49), Winona Lake, Ind.
- Podany, A. H. 2002: *The Land of Hana: Kings, Chronology, and Scribal Tradition*, Bethesda, Md.
- Reculeau, H. 2008: “Late Bronze Age Rural Landscapes of the Euphrates according to the Emar Texts,” in L. d’Alfonso et al. (eds.), *The City of Emar among the Late Bronze Age Empires: History, Landscape, and Society* (AOAT 349), Münster, 129–140.
- Reculeau, H. 2010: “Périphérique ou local? Le vocabulaire des paysages de la Vallée de l’Euphrate au IIe millénaire av. n. è.,” in: L. Kogan et al. (eds.), *Language in the Ancient Near East* (Babel und Bibel 4 = CRRA 53), Winona Lake, Ind., 505–520.
- Rouault, O. 1984: *Terqa Final Reports 1: L’Archive de Puzurum* (BiMes 16), Malibu, Cal.
- Salvini, M., and M.-C. Trémouille 2003: “Les textes hittites de Meskéné/Emar,” *Studi Micenei ed Egeo-Anatolici* 45, 225–271.
- Saporetti, C. 1982: *Assur 14446: Le altre famiglie* (Cybernetica Mesopotamica. Data Sets: Cuneiform Texts 3), Malibu, Cal.
- Scheil, V. 1930: *Actes juridiques susiens* (MDP 22), Paris.
- Singer, I. 2000: “A New Letter from Emar,” in: L. Milano et al. (eds.), *Landscapes, Territories, Frontiers and Horizons in the Ancient Near East II: Geography and Cultural Landscapes* (History of the Ancient Near East / Monographs III/2 = CRRA 44), Padova, 65–72.
- Streck, M. P. 2018: *Supplement to the Akkadian Dictionaries 1: B, P* (Leipziger Altorientalistische Studien 7.1), Wiesbaden.
- Tsukimoto, A. 1992: “Akkadian Tablets in the Hirayama Collection (III),” *Acta Sumerologica* 14, 289–310.
- Werner, P. 2004: *Tall Munbāqa - Ekalte III: Die Glyptik* (WVDOG 108), Saarbrücken.

- Westbrook, R. 1991: *Property and the Family in Biblical Law* (Journal for the Study of the Old Testament: Supplement Series 113), Sheffield.
- Westbrook, R. 2003: "Introduction," in: R. Westbrook (ed.), *A History of Ancient Near Eastern Law* (Handbook of Oriental Studies I/72), Leiden / Boston, 1–90.
- Westenholz, J. Goodnick 2000: *Cuneiform Inscriptions in the Collection of the Bible Lands Museum Jerusalem: The Emar Tablets* (Cuneiform Monographs 13), Groningen.
- Wilcke, C. 1976: "Assyrische Testamente," *ZA* 66, 196–233.
- Yamada, M. 1993: "Division of a Field and Ninurta's Seal: An Aspect of the Hittite Administration in Emar," *UF* 25, 453–460.
- Yamada, M. 1994: "Three Notes on Inheritance Transaction Texts from Emar," *NABU* 1994/2.
- Yamada, M. 2016: "Did *terḫatu* Mean 'Dowry' in Emar?" *UF* 47, 415–430.
- Yamada, M. 2017: "The Arana Documents from Emar Revisited," *Orient* 52, 121–133.
- 山田雅道 2019: 「エマル文書における親族用語 ^{lu.ms} *ahhū* “兄弟たち”」山田重郎 (編) 『都市文明の本質：古代西アジアにおける都市の発生と変容の学際研究 1：研究成果報告 2018 年度』69–76 頁。

都市・行政州・領土： アッシリア先帝国期における国家形成と領土支配

— 研究途上の覚書 —

山田重郎
筑波大学人文社会系

はじめに

前10世紀末から前8世紀半ばにかけての「先帝国期 (Pre-imperial period)」におけるアッシリア王国の領土拡大の実相をめぐっては、いくつもの論文がこれを扱ってきた。しかし、アッシリアの直接支配の主たる行政単位となった行政州の形成がこの時期にどのように進展したのかは、不明瞭な部分が多く残されている。当該期に関しては、行政州、行政州都、行政長官の名を記録する年月日が記された行政文書は、多くは知られていない¹⁾、アッシリアの政治史構築のための主史料とされてきた王碑文は、略奪、貢納の受領、都市の征服などを軍事業績として報告するものの、行政州形成の実態をほとんど記録していない。碑文中で征服されたと記されている領土が、アッシリアの固有領土である州行政システムに組み込まれたのか、あるいは、属国として貢納義務を負い、(人質を差し出し、時には支配する都市をアッシリアに割譲しながら)なお独立を維持したのか否かは不明瞭な場合が少なくない。こうした問題はどこまで克服することが出来、アッシリアの領土史は

どこまで繊細に復元しうるのだろうか？これまでの研究を回顧するとともに、この問題を検討するためのいくつかのポイントを整理して、記録しておきたい。また、これによって、2019年度の研究成果報告書での佐野の記事「前9世紀におけるアッシリアの拡大」(pp. 77-79)との対話をはかりたい。

1. 先帝国期のアッシリアの領土支配をめぐりいくつかの先行研究

K. Radner は *Reallexikon der Assyriologie* に事典項目として書いた論文 (Radner 2006) において、新アッシリア時代の行政州 (*pāhutu*) とその長 (*bēl pāhiti*, *pāhutu*, *šakin māti*) に関するデータを広く集め、アッシリアの行政州分割の実相の復元を試みた。それまでに基礎研究とされてきた E. Forrer の研究 (Forrer 1920) にかわり、Radner の論文は、アッシリアの行政州分割に関する現在最も重要な基礎研究となっている。Radner は、(1) シャルマネセル3世 (在位前 858-824年) 時代以降のエポニム・リストと実務文書にみられる、年代の明

1 例外は、Tell Billa 出土文書 (Finkelstein 1953) nos. 68-90; カルフ出土の行政官文書 (Postgate 1973); Tell Halaf (= Guzana) 出土 Mannu-kī-Aššur 文書 (Dornauer 2014)。

確な行政州長と行政州についてのデータ、(2)ティグラト・ピレセル3世（在位前744-727年）、サルゴン2世（在位前721-705年）、エサルハドン（在位前680-669年）の王碑文にみられる行政州形成についての記述、さらに（3）書簡ならびに行政文書（特にグザヌとカルフの行政州長官の文書庫）に残る前8～7世紀についての諸情報を活用して、州行政システムの全容を再構成した。この試みにおいて、かつてForrerが行政州分割を復元するための重要な史料と見なした地名リスト（SAA 11, 1 = K 4384）は、（Postgate 1995: 12 にならって）一種のレキシカル・リストであり、行政首都であるとは限らない地名を含むものとして史料価値は限定的であるとし、決定的な証拠は、特定の地名が行政州（*pāhutu*）として明示されているか、行政州長に帰属するものとして確認されている場合であると述べている。このアプローチは、方法論として正当である。また、原則として、大きな行政州の分割（たとえばRašappa州の分割）や小さな行政州の合併（たとえばAmedi州とTušhan州の合併）、あるいは、特定の都市や地域の帰属が隣接する行政州の間で移動する可能性を実例をもって示唆したほか、一人の行政州長に属する地域は、かならずしも地理的に一つの空間に固まっている必要はないとしてハブル川の東に位置づけられるRašappa州に遙か西のユーフラテス湾曲部にある都市Pitruが所属し、ティグリス上流地域がもっと東方に位置する献酌官の行政州（*pāhut rab-šāqê/šāqî rabî*）に帰属することを例にあげている。こうした論点は、特に州行政の再編成が急速に進んだ先帝国期の州行政を考慮する際に慎重に再検討されるべきポイントである。

Radnerは、アッシリアの最盛期以前（前8世紀半ばまで）に行政州分割が及んだ地域をアッシ

リアの領土拡張の歴史的過程と地理的位置関係の双方に配慮しながら以下のように分類し、行政州に関する主要なデータを整理し、提示した。

1. 「アッシリア中心」（Zentralassyrien）：Arbail、Arzuhina、Assur、Isāna、Kalhu、Kilizu、Kurbail、Nēmed-Ištar、Ninūa、Šimu、Talmussu。
2. 「大臣たちの行政州」（die Provinzen der Magnaten）：*turtānu*、*turtānu šumēlu*、*masennu*、*rab šāqê*、*nāgir-ekalli*、*mār šarri*。
3. 「前9世紀に拡大された地域」（die Expansion des 9. Jhs.）：Amedi、Arrapha、Guzana、Habruiri、Mazamua、Našibīna、Raqamātu、Rašappa、Šahuppa、Tillê、Tušhan。
4. 「前8世紀に編成された行政州」（Provinzen, die im 8. Jh. im bestehenden Reichsgebiet eingerichtet wurden）：Barhalzu、Dūr-Šarrukīn、Halziadbari、Harrānu、Hindānu、Lāqê、Lubda、Si'immê、Šibhiniš、Tamnunū、Til-Barsip。
5. 「ティグラト・ピレセル3世からサルゴン2世の時代の北方、東方、南方への拡張」（Die Nord-, Ost- und Südexpansion von Tiglath-pileser III. bis Sargon II.）：Birtu、Bīt-Hamban、Harhar（Kār-Šarrukīn）、Kišessim（Kār-Nergal）、Lahiru、Parsua(š)。
6. 「ティグラト・ピレセル3世からサルゴン2世の時代の西方への拡張」（Die Westexpansion von Tiglath-pileser III. bis Sargon II.）：Arpadda、Asdudu、Dimašqa、Gargamiš、Hatarikka、Haurīna、Kullani(a)、Magiddû、Manšuāte、Marqāsu、Qarnīna、Que、Sam'alla、Samerīna、Šimirra、Šubutu、Tabal、Tu'ammu。
7. 「エサルハドン治世下の北方と西方への拡張」（Die Nord- und Westexpansion unter Asarhaddon）：

Kullimeri、Sidunu、Uppumu。

8. 「前 7 世紀の新行政州」(Weitere neue Provinzen des 7. Jhs.): Alihu (Dūr-Sîn-ahhē-erība)、HAR、Hatallu、Šamaš-nāšir。
9. 「バビロニアの行政州」(Provinzen in Babylonien): Bābili、Dēru、Dūr-Šarrukku、Gambulu、Nippur、Sippar、Ur。

この研究成果の基礎となっている史料の量と質は、時代によって濃淡がある。書簡史料や行政文書が豊富で、王碑文が行政州の再編についてしばしば明確な情報を提供する帝国期に比較すると、本稿が問題にする先帝国期は史料に乏しい時期である。必然的に、先帝国期における行政州形成に関する Radner の見解も、戦勝の後にどのような行政形態による領土支配に至ったかを記さない王碑文の曖昧な叙述(後述)と、エポニム表/年代誌、各種記念碑、少数の行政文書と法文書にみられる行政長官の職名、管理地域に関する限られた情報に基づいており、帝国期にその存在が確認できる行政州の形成を、状況証拠にしたがって、先帝国期に起こったものとして推定する。この手法はアッシリアの行政州分割の総体を復元するために、最も確実に現実的な手段といえる。一方、行政州制度に基づくアッシリアの領土形成は、一つの軍事作戦によって一定の広さを持つ領土が一度に行政州として確定され、それが変化なく固定されるといった単純なプロセスでは、必ずしもない。そこで、アッシリアの行政州形成がどのような歴史的過程をへて実現されていたのかを動態として理解しようとする考察も行われてきた。

M. Liverani は、1988 年の論文(Liverani 1988)で、前 9 世紀のハブル川とユーフラテス中流域の諸地域に対するアダド・ネラリ 2 世(在位前

911-891 年)、トゥクルティ・ニヌルタ 2 世(在位前 890-884 年)、アッシュルナツィルパル 2 世(在位前 883-859 年)の遠征記録を分析し、アッシリアの拡大を「ネットワーク帝国」モデルとでも呼ぶべき理論によって説明しようとした。王碑文に記されたアッシリア王たちの遠征の途上に、アッシリアが支配する都市とアッシリアに貢納する土着の王が支配する都市が交互に現れることに注目して、アッシリア帝国は、ひと続きの土地が広がっているのではなくコミュニケーション・ネットワークとして存在していたと述べた。

このモデルに対して、J. N. Postgate (1992) は、中期アッシリア時代以来、アッシリアの支配領域には行政州制度が機能しており、都市の周りには農業耕作地を含む後背地が広がっていることを強調し、Liverani の見解は行政州内に「面として広がる領土」(spreading territory)の存在を軽視しているとして、これを批判した。そして、ハブル川流域にみられるような地方王朝の存在は、最終的にアッシリアに併合される過渡期にある状況として理解すべきであると主張した。

その後、Liverani は 2004 年の論文で、前 9 世紀の先帝国期、特にアッシュルナツィルパル 2 世とシャルマネセル 3 世(在位前 858-824 年)の時代のアッシリアの領域支配の性格について論じている。Liverani は、アッシュルナツィルパル 2 世時代のアッシリアの領土は、中期アッシリア時代末のティグラト・ピレセル 1 世(在位前 1114-1076 年)治世下にみられるのと同様の行政システムに基づき、王碑文では「土地/国(mātu)」と呼ばれ、行政記録では「行政区(pāhutu)」と記録される小さなユニットからなっていたと推測する(2004: 17)。そして、アッシュルナツィルパル 2 世が年代記において「私が支配した国々に

私の行政官を置き、彼らは私に服従した」(*i-na KUR.KUR.MEŠ ša a-pe-lu-ši-na-ni LÚ.GAR-nu. MEŠ-a al-ta-kan ur-du-ti ú-pu-šu*) と述べていることを根拠に、すべての領土は行政官(*šaknu*)によって管理される行政的に同一のステータスを持っていたと推測し、アッシュルナツィルパル2世の計画は、残存していた地方の「王たち」をアッシリアの内政的な単位として取り込んでいったものとみている。その上でLiveraniは、アッシュルナツィルパル2世は、中期アッシリア時代に一度は確立されたアッシリアの固有領土を再確立することを目指したのに対し、彼の後継者シャルマネセル3世は、従来のアッシリアの領域を超えて外へと政治支配を広げようとする革新的な政策に基づく野心的な遠征を行っており、帝国期における広域領土支配の嚆矢となったと評価する。したがって、Liveraniは、ここではかつて主張した「ネットワーク帝国」理論にはよらず、前9世紀の拡大するアッシリアの領土支配を州行政分割制度の存在を前提に議論したといえる。

これに対して、佐野は、アッシュルナツィルパル2世治世とシャルマネセル3世治世を扱う2つの論文(2015a, 2017)において、Liveraniの議論に批判的検討を加えている。第一の論文(2015a)において、佐野は、前述のアッシュルナツィルパル2世の年代記の言説は、筆者(Yamada 2000)が、シャルマネセル3世の碑文にあらわれる同様の言説について述べたように、「行政州、前哨地、ならびにアッシリアの行政官と見なされた地方王権によって統治される国々を含み、種々の方法でアッシリアの行政管轄に取り込まれた諸領土」を指している、と見るべきであるとしたうえで、この見解を実証すべく、アッシュルナツィルパル2世の王碑文にみられるすべての遠征記事を

精査した。結論として、佐野は以下のように述べる(p. 330): “Wie wir bisher gesehen habe, ist die Zahl der von Aššurnaširpal II. in seiner Regierungszeit annektierten Orte begrenzt: die Stadt **Tušha**, die Stadt **Damdammusa** in Bīt-Zamāni, die Städte **Sinabu** und **Tīdu**, die Städte **Kār-Aššurnaširpal** und **Nēbarti-Aššur**, die Stadt **Tīl-uli** des Landes Kadmuhu, die Stadt **Šura** des Landes Hanigalbat, die Stadt **Aribua** des Landes Patinu, das Land **Mallanu**, die Stadt **Udu** des Landes Nirdun, die Stadt **Dūr-Aššur** des Landes Zamua.”そして、実際に「併合」された都市や地域は、これら(太字で示した都市と地域)に限定されており、「行政官」(Statthalter)を一円的・統一的に任命したとする王碑文の主張は、一見すると、軍事征服された場所がすべてアッシリア帝国に併合されたかのような印象を与えるが、この主張は、「理念上のものである」(lediglich ideelle Funktion)とする。そのうえで、アッシュルナツィルパル2世が伝統的領域内のすべての属王にアッシリアの「行政官」(Statthalter)の称号を与えたかどうかを確認するすべはないが、「Habhu (A.0.101.1: iii 104)、Suhu (A.0.101.1: iii 17)、Aggunu、Ulliba、Arbakku と Nirbu の地 (A.0.101.19:100) の王たち」、「Sūru 市の王」(A.0.101.1: I 75, 89)、「Guzana、Sikānu、Zarānu 市の王 (A.0.101.1.2004: 8-9)」については、「行政官(*šaknu*)」を立てたという記述があり、状況証拠から見て、実際には地方領主がそう見なされたことは確実であるとする。そして、王碑文は、一連の軍事遠征記録においては、アッシリアの伝統的国境の内と外を明確に区別しており、北メソポタミアの外に位置する属国の支配者は、けっして「行政官(Statthalter)」とは記さないという興味深い指摘をしている。そのうえで、アッシリア

の伝統的国境の内側に形成された行政州や国境の外に建設されたアッシリアの前哨基地としての飛び地が、敵対勢力と接する状況にあって、それら固有領土を保全する目的で、敵対勢力を弱体化させるべく、征服地からの捕囚政策が実施されたとする。こうした観察をへて、佐野は、アッシリアの伝統的領域と見なされる全領域を一円的に均質の行政州制度の下に統合することは不可能であったため、アッシュルナツィルパル2世は、属国化した国々の支配者を「行政官 (Statthalter)」として認定することで、全領土を「理念的に」アッシリアに併合することを目指した、と結論する。王碑文の記述の詳細を丁寧に観察・分析することで得られた佐野の見解は、王碑文にあらわれる「行政官 (*šaknu*)」という語がどのような政治的ステータスを持つのかを問題にしている点で重要である。あるいは、地方領主を示す場合にとどまらず、州行政長官よりも低位の(例えば一都市の管理者のような)アッシリアの官吏も含む漠然とした語であった可能性さえ排除できないのではなかろうか。

佐野の第二の論文(2017)は、シャルマネセル3世の諸碑文を詳細に分析する。王碑文の記述を精査して、属国にされた国々(Hubuškia、Enzite、Dayenu、Patinu、Gurgum、Sam'al、Bit-Gabbari、Gargamiš、Que、Tabal、Namri、Bit-Haban、Harhar)、遠征途中のアッシリア軍に貢納した国々(Gilzanu、Sarugu、Immerina、Kummuhu、Bit-Agusi、Tyros、Sidon、Bit-Humuri、Melid、Parsua、Bit-Dakkuri、Bit-Jakin、Bit-Amukkani)、併合した都市(Til-barsip、Alligu、Nappigu、Rugultu、Ana-Aššur-uter-ašbat、Mutkinu、[Bit-Adini]、Sahlala、Til-turahi [Balih川地域])を確認したうえで、貢納国はいずれも遠方にあり、シャルマネセル3

世は、前任者が「伝統領土」内にあって属国としていたほとんどの国々を行政州に組み込んだとする。王碑文に記されてはいないが、Eponym Chronicleに見られる情報や、前後の時代の政治的状況から、それまで属国だったがシャルマネセル3世時代に併合されたであろう地域としてHabruri、Našibina、Nairi、Hindanu、Laqe、Kišpunaならびに*masennu*職の地位にあったYahaluの領地をあげる。また、シャルマネセル3世は、アッシュルナツィルパル2世が理念的に併合したと見なしていたが実は属国に過ぎなかった国々を、おそらく反乱に乗じて直接併合し、レコンキスタを西方ではユーフラテス川まで進めたとする。そして、シャルマネセル3世が土着の支配者をなおアッシリアの行政官として容認したケースとしてŠadikkanniのMušezib-Marduk、SuhuのMarduk-apla-ušur、ŠubruのIlu-ibniをあげ、実際には属王であった彼らの領土は理念的にアッシリアの固有領土と見なされたと考える。こうした分析にたつて、佐野は、シャルマネセル3世の政策は、「伝統領土」内では行政州の建設と属国の「理念的」併合(前述)を目指し、「伝統領土」外では、遠征時に貢ぎ物を受領することで、アッシリアの政治的優位を確認することで満足し、貢ぎ物を払わないものに対しては攻撃して間接的支配を確立する、というものだったと総括する。佐野は、Liveraniがアッシュルナツィルパル2世の治世を「伝統領土の再征服(レコンキスタ)」段階、シャルマネセル3世治世を「さらなる遠方領域の征服」段階として、双方を政策的・行政的に異なる段階と理解することを批判しており、アッシュルナツィルパル2世とシャルマネセル3世の拡張政策には本質的な違いはなく、前9世紀は連続する一時代と理解すべきであると主張する。佐野が指摘

するように、アッシュルナツィルパル 2 世とシャルマネセル 3 世の政策には明らかな連続性が認められ、そのことは両者の王碑文の叙述様式に見られる共通性に反映されているように思われる（後述）。しかし、主たる軍事遠征の目的がどこにあったのかという観点からみれば、シャルマネセル 3 世の軍事行動には、「伝統的領土」を超えてアッシリアの直接・間接の支配を外に広げようとする野心がうかがえることもまた事実である。特に、ユーフラテスの渡河の回数を数えてそれを王碑文に頻繁に記そうとするなど（Yamada 1998, 2000）、この野心は王碑文に独特な形式で表現されており、後のティグラト・ピレセル 3 世治世に始まる帝国期の領土拡大を政治思想的に先取りする時代であったことは認めてよいように思われる。

以下では、Liverani と佐野の研究を受けて、シャルマネセル 3 世治世までの時期について、王碑文の記述の内容、表現様式、傾向性を確認する。

2. アッシリア王碑文に含まれる領土支配についてのデータとコード

王の栄光と優れた業績を記念する宣伝文書である王碑文には、王権に都合のよいことを記録するという傾向性があることは当然である。しかし、王碑文が何をどのように記録するのかは、文書が作成された歴史的背景と Sitz im Leben によって種々の叙述傾向があり、それぞれの碑文のもつ主題や文学的コードを正確に把握することなしに史料としての正しい理解はあり得ない。

先帝国期の王碑文の軍事遠征記事の枠組みは、アッシリアが領土国家として確立された中アッシリア時代に、そのプロトタイプが作られた。ティグラト・ピレセル 1 世が多数の粘土製角柱に刻ませた長編の年代記や短編の王碑文には、中アッ

シリア時代の軍事遠征記録の完成形とも呼ぶべき形式を見ることが出来る。ティグラト・ピレセル 1 世の碑文に見られる遠征記録は、大きく以下の要素からなっている。

- (1) 敵対勢力の領土の破壊と略奪、ならびに服従の印としての貢納の受領。
- (2) 属国となった国家や共同体の義務としての定期的貢納 (*biltu, maddattu*) や労役、あるいは（文学的表現として）「アッシュルのくびき (*nīr Aššur*)、わが主権のくびき (*nīr bēlūtiya*)」の賦課 (*elīšūnu kunnu*); これを保証するために課された誓約 (*māmita tamū / ana arduṭte tamū*) や王族等から取られた人質 (*līṭu*) への言及。
- (3) 征服地のアッシリアへの併合 (*ana mišir mātiya turru*)。
- (4) アッシリア中心への被征服地からの住民の強制移住と彼らのアッシリアへの吸収 (*ana nišē mātiya manū*)。

遠征記事は、これら 4 つの要素を種々のバリエーションで組み合わせているが、要素 (2) と (3) は、2 種の統治形態を区別して、通常、一緒に言及されることはないように見える。2 種の統治形態とは、すなわち、納税義務を受け入れた属国支配（間接支配）とアッシリアの行政州あるいは前哨都市（直接支配）である。こうした記事の諸要素は、新アッシリア時代の王碑文にも引き継がれていった。

新アッシリア時代初期の王碑文で、軍事遠征記録を含む最も早期の例は、アッシュル・ダン 2 世（在位 934-912）の王碑文（RIMA 2, A.0.98.1）である。そこでは、Yahan, Katmuhu, Mušru, Habriuru（さらに Uluzu [A.0.98.2]）を含むアッシ

リア中心の北から北東に広がる山岳諸地域の破壊と略奪が記録されている。Katmuhu については、敵対的な王が除かれてアッシルに連行され、代わりの王が擁立されたこと、また地名は欠けているが、「私自身に所属するものとして数えた」([...a-n]a ra-ma-ni-ia lu am-nu) という表現で、その併合が記録されている。こうした個別の軍事行動への言及に続き、達成された建国事業の概要が、以下のように総括される。

「私は飢えと飢饉 [のために町々と家々を] 捨て、他の土地に逃れて疲弊したアッシリアの [人々] を連れ戻した。[私は] 彼らを [彼らに見合った] 町々と家々に入植し、平和裏に住ませた。私は、私の国のすみずみに [複数の宮殿] を建設し、私の国のすみずみで鋤をつなぎ、以前より多くの穀物を [積み上げた]。私は国力 (を増す) ために輓に付けた馬をつないだ。」

([nišē] māt Aššur anhā[te ištu pān] sunqi bubūte hušahhi [ālānišunu bītātišunu u]ššerūni ana mātāte šan[iāte eli 'ūni] utēraššunu ālānišunu bīt[ātešunu naṭūte ušašbit]sunu šubtu nēhtu ušbū [ekallātu ina šid]-di mātiya aršip epinnī ina šiddi mātiya [arkus še'am] tabkāni eli ša pāna ušāter [atbu]k sisē šimdat nīri [ina emūq] māt Aššur arkus) (RIMA 2, A.0.98.1, ll. 60–67)

こうした記述では、行政州形成の詳細は整然と報告されないものの、征服された地方の少なくとも一部がアッシリアの固有領土として取り込まれたことが示唆される。占拠され、再建あるいは新たに建設された都市とその周辺の領土には、アッシリア人が入植されたことがうかがえる。そうした都市の後背地には、耕作地が開拓され、馬を含む軍備が整えられ、宮殿を含むアッシリアの諸施設が建てられた。

アダド・ネラリ 2 世 (在位 911–891 年) の長大

な王碑文 (RIMA2, A.0.99.1) は、前任者のそれに比べ格段に多くのデータを提供する。言及されている順に従い、王の軍事遠征の主な内容を列挙すると以下ようになる。

- 「下ザブ川の向こう側」の Lullumu、Habuhu、Zamua、Namru への進軍。
- 北方 Qumamu、Mehru、Salua、Urartu の征服。
- 北西 Kašiyari 山系の Katmuhu、ティグリス東岸バビロニア国境の Lahiru、Ugar-sallu、Der、Arrapha、Lubdu をアッシリア領へと回復・併合 (ana mišir mātīšu utēr; ana mišir māt Aššur aškun; ana mišir māt Aššur utēr)。
- 西方 Nairi、Habhu ša bētāni、Natbu を征服、南東アナトリアの Alzu へ進軍し「人質」(lītu) を得て貢納を課す (biltu u tāmartu elišunu ukīn)。(属国化)
- ユーフラテス中流域、「アラム系遊牧民」(Ahrāmē Aramāya) と戦い、Suhu から貢物を得る。
- 南東 Idu、Zaqqu を回復・併合 (ana mišur mātiya utēr)。「Šubru に征服されていた」(kišitti ša KUR.Šubrē ištu māt Aššur nasahī) Arinu、Turhu、Zaduri の再征服。
- 廃墟となっていた Apku の再建。
- 西方ハニガルバトにおいて、Temannu 族の Nur-Adad と繰り返し戦い、以下の戦果をあげる：Yaridu 入城、Saraku 「併合」(ana ramāniya lū amnu)、Huzirina を占領し防備を整備。Temannu 族に従う Kašiyari 山の麓の町々を服属させる。条約に違反した Temannu の Muquru を打ち破り Gidara (Raqqammatu) を包囲、Muquru とその兄弟をアッシルに連行。
- Našibina を包囲し、征服。Nur-Adad とその軍を捕獲。「町々と住民をアッシリアに帰属させ

た」(URU.MEŠ-ni iš-tu UN.MEŠ <ana> KUR aš-šur áš-ruk-šú-nu mi-nu-su-<nu> am-nu)。納税不履行の Sikkuru と Sappanu を包囲、戦利品をとり、課税 (*maddattu amhuršunu biltu u tāmarta udannin elišunu ukīn*)。納税不履行の Habhu の諸都市 Satkuru, Iasaddu, Kunnu, Tabsia (Kummu 近郊) を占領、破壊。「私は広大なハニガルバトの地をその全域にわたって支配し、私の国に併合して、彼らを統一的に支配した」(*māt Hanigalbat rapaštu ana pāt gimriša apēl ana mišir mātiya lū utēr ištēn pā ušeškiššunūti*) と総括 (II. 99-100)。

- Bit-Bahian の Guzanu と Sikamu に進軍し、貢ぎ物獲得、課税 (*maddattu elišu ukīn*)。
- ハブル川中・下流域とユーフラテス下流域を貢ぎ物を得ながら進軍 (Arnabanu, Tabetu, Šadikannu, Kisiru, Qatnu, Dur-katlimmu, Laqû, Zurih, [Bit-Halupe], Sirqu, [Laqe], Hindanu)。Qatnu では「属王を擁立し、課税」(*dāgil pāni ušēšib; maddattu elišu ukīn*) (属国化)。また Dur-katlimmu は、王が「私のものと見なした」(*ana ramāniya lū amnu*) としており、併合を示唆するが、後述するように、同市は、後にトゥクルティ・ニヌルタ 2 世に貢納しており、自治権を持つ地方社会が残存したものと思われる。
- 遠征記録の結びには、前任者アッシュル・ダン 2 世の碑文に類似した以下の結論が提示される。

「私は複数の宮殿を私の国のすみずみに建設し、私の国のすみずみで鋤をつなぎ、以前より多くの穀物を積み上げた。私は私の国の力（を増す）ために輓に付けた馬を以前よりも増やし、つないだ。」(*ekallātu ina šiddi mātiya aršip epinnī ina šiddi mātiya arkus še'am tabkāni eli ša pān ušāter atbuk sisē šimdat nīri ina emūq mātiya eli ša pāna ušāter arkus*) (RIMA 2, A.0.99.2, II. 120-121)

トゥクルティ・ニヌルタ 2 世(在位 890-884 年)にも長文の年代記 (RIMA 2, A.0.100.5) が知られている。粘土板上の記事は、遠征記事の途中から始まっており、それに先行する(別の粘土板に書かれていたであろう)部分は、欠落している。欠落部分には治世のはじめから第 4 年(887 年)までの遠征記事が含まれていたと考えられる。粘土板の記事は、叙述されている順番で以下のように要約される。

- 北西方面 Nairi への遠征:Ki[…]市の征服、略奪、王族の捕囚。P[a]tiškun 市に居城を構える Bit-Zamani の Amme-Ba'li を降伏させ、町々を略奪。人質をとりアッシリアの敵に馬を渡さないように誓わせる。
- 西方 Habriuri の峠から山岳地に入り、上下ザブ川の町々を略奪。
- ワディ Tharthar から Dur-Kurigalzu, Sippar ša Šamaš に至り、ユーフラテス中流域からハブル川を北へ遡り、ハブル・トライアングルの Našibina, Huzirina を経て山岳地を通り Mukiš の地の Pir[u-…]などの諸都市を「屈服させ、貢納義務を課し」(URU.MEŠ-ni-šu-nu ú-šá-aš-bi-su-nu [G]UN ma-[da-tu ... URU-šu]-nu áš-kun)、属国化。ユーフラテス、ハブル両川沿いに進軍中に Suhu, Hindanu, Laqu, Sirqu, Dur-Katlimmu, Qatnu, Sadikkannu で在地の支配者から「挨拶の貢ぎ物」(*tāmurtu*)を受領。

一連の軍事遠征記録の締めくくりとして以下の文言が提示される。

「Šubaru から Gilzanu までの険しい山々と Nairi […] 私の獲得したもの：総計 2,702 頭の輓に付けた馬を、私は私の国の力（を増す）ために、以前よりも増やし、つないだ。私は複数の宮殿を私の国のすみずみに建設し、私の国のすみずみで鋤をつな

ぎ、以前より多くの穀物を私の国の必要を満たすべく積み上げた。私はアッシュルの国に国々を、その人々に人々を加えた。」

(šadē šaqūte ultu Šubari adi Gilzāni u māt Na'ir[...]) A RI šá malqetu ša altaqū naphar 2 LIM 7 ME 2 sisé [šimdat] nūr[ī ina] emūq mātiya eli ša pān ušāter arkus ekallātu ina šiddi mātiya aršip epinnī [ina š]iddi mātiya arkus še'am tabkāni ana erišti mātiya eli ša pān ušāter atbuk eli māt Aššur māta eli nišēša nišē uraddi) (A.0.100.5, ll. 129–133)

前述したように、アッシュル・ダン2世とアダド・ネラリ2世の碑文にも類似の文言が見られるが、トゥクルティ・ニヌルタ2世の記事にだけ見られるのは、最後の「私はアッシュルの国に国々を、その人々に人々を加えた」という部分である。しかし、この表現もすでに中アッシリア時代のティグラト・ピレセル1世の碑文に例が見られるモチーフであり (RIMA 2, A.0.87.1, vii 32–35)、同様の表現が継承されてきたことが看守される。

アッシュルナツィルパル2世とシャルマネセル3世の王碑文の評価については、すでに佐野の論文に関連して触れたので、詳細な考察は、稿をあらためたい。都市や領地のアッシリアの固有領土への併合に関しては、中アッシリア時代から用いられていた *ana mišir mātiya/ māt-Aššur turru/manū* という表現に加え、*ana eššūti šabātu*、*ana ramāniya manū/šabātu* という表現が特定の都市や領土の併合を表現する表現として用いられるようになった。

3. 結論

レコンキスタ期の前半に当たるアッシュル・ダン2世、アダド・ニラリ2世、トゥクルティ・ニヌルタ2世の碑文にある軍事遠征記事に続く業績

要約は、各地での宮殿の建設、農地の開拓、馬に代表される軍備の充実を強調し、国土と人民が次第にアッシリア国家に増し加えられていくことを申し立てているが、行政官の任命には言及しない。

その後のレコンキスタ完成期に当たるアッシュルナツィルパル2世とシャルマネセル3世の碑文には軍事遠征記事の末尾に業績を要約する記述として、「私が統治した国々（と山々）に私の行政官を置き、彼らは私に服従した」(*ina mātāti (u huršāni) ša apēlušinani šaknūtiya altakan urdūti uppušū*) という記述が置かれるようになる。この「行政官 (*šaknu*)」という語で示される人物は、必ずしもアッシリア本国から送られた行政官でなく、在地の有力者である可能性があることは上述した。

その後、ティグラト・ピレセル3世以降の帝国期の年代記では、個々の軍事遠征の記事において、「私の宦官を行政州長官として置いた」(*šūt-rēšiya bēl-pihati/pāhete elišu aškun*) という表現が現れ、アッシリア中央から任命された行政官の管轄による行政州の形成が強調されている。このことから以下のような3つの時期を王碑文の叙述スタイルに判別できるように思う。すなわち、(1) レコンキスタ前期：個々の拠点都市とその後背地が再征服あるいは占領され始めた時期、(2) レコンキスタ後期：再征服の進行とともに体系的な行政州分割が目指されたが、そこには多くの地方政権が含まれていた時期、(3) 行政州形成が領土の広がりとしても行政システムの統一性の上でも進展し、アッシリア直属の行政官が各行政州に置かれた時期、である。

また、(2) と (3) の間には、地方の高官が時として王に比肩する権力を振るい、アッシリアが分権化したようにみえる80年ほどの「高官の

時代」（前 824-745 年頃）があるが、この時期は、単なる国力減退の時代と言うよりもむしろ、アッシリア中央出身の高官による各地における行政支配と軍事力の整備が進んだ時代（Blocher 2001）とみなすのが適当であろう。この「高官の時代」の行政州の再編については、さらなる考察の余地がある。また、王碑文、エポニム歴代誌、行政文書、考古学的データ等を総合的に検討して、各地で起こった個別の事件の詳細をさらに分析する必要があることは言うまでもない。近年の各地での考古学的・文献学的研究は、物質文化と文書作成の双方において広域に適用された「帝国文化」と呼ぶべき均質の文化の普及を明らかにする一方で、アッシリアの辺境領域における文化と統治様式の多様性も指摘している（MacGinnis et al 2016、Tyson and Herrmann 2018）。したがって、拡大していくアッシリアの帝国領域にあって、地域と時代によって、戦略的、政治的、経済的理由によって選択された統治の様式は複雑・多様であり、アッシリア帝国は、先帝国期も帝国期も種々の統治様式によって管理される多様な地域のネットワークから成り立っていたこと（Düring 2018）を前提に研究が進められるべきであろう。

以下に引用文献に限定せず、今後の新アッシリア帝国の領土支配の各地での統治様式を考える研究で参考にしたい文献をリストにして、脱稿する。

参考文献

（略号は以下を参照：http://cdli.ox.ac.uk/wiki/abbreviations_for_assyriology）

Bedford, P. R. 2009: "The Neo-Assyrian Empire", in: I. Morris and W. Scheidel, *The Dynamics of Ancient Empires*, Oxford, 30-65.

Blocher, F. 2001: "Assyrische Würdenträger und Gouverneure des 9. und 8. Jh.: eine Neubewertung ihrer

Rolle," *AoF* 28, 298-324.

Cancik-Kirschbaum, E. 1997: *Die mittelassyrischen Briefe aus Tell Schech Hamad (Tall Sheikh Hamad)*, BATSH 4, Texte 1, 1996.

Cancik-Kirschbaum, E. 2000: "Organisation und Verwaltung von Grenzgebieten in mittelassyrischen Zeit: die Westgrenze," in: L. Milano, S. de Martino, F. M. Fales, G. B. Lanfranchi (eds.), *Landscapes: territories, frontiers and horizons in the ancient Near East, papers presented to the XLIV RAI, Venezia, 7-11 July 1997*, Part II: *Geography and cultural landscapes*, History of the Ancient Near East, Monographs III/2, Padova, 5-8.

Dalley, S. 2000: "Shamshi-ilu, Language and Power in the Western Assyrian Empire," in G. Bunnens (ed.), *Essays on Syria in the Iron Age*, ANESS 7, Leuven, 79-88.

Dornauer, A. 2016: *Assyrische Nutzlandschaft in Obermesopotamien: Natürliche und anthropogene Wirkfaktoren und ihre Auswirkungen*, München.

Dornauer, A. 2014: *Das Archiv des assyrischen Statthalters Mannu-kī Aššūr von Gūzāna/Tall Ḥalaf*, Wiesbaden.

Düring, B. S. 2018: "At the Root of the Matter: The Middle Assyrian Prelude to Empire," in Tyson and Herrmann 2018, 41-64.

Finkelstein, J. J. 1953: "Cuneiform Texts from Tell Billa," *JCS* 7, 111-176.

Forrer, E. 1920: *Die Provinzeinteilung des assyrischen Reiches*, Leipzig.

Fuchs, A. 2014: "Der turtān Šamši-ilu und die große Zeit der assyrischen Großen (830-746)," *WO* 38, 61-145.

Jakob, S. 2003: *Mittelassyrische Verwaltung und Sozialstruktur: Untersuchungen*. CM 29. Leiden.

Jakob, S. 2005: "Zwischen Integration und Ausgrenzung. Nichtassyrier im mittelassyrischen 'Westreich,'" in W. H. van Soldt (ed.), *Ethnicity in Ancient Mesopotamia: Papers Read at the 48th RAI*

- Leiden, 1–4 July 2002, *Publications de l'Institut historique-archéologique néerlandais de Stamboul* 102, 180–188.
- Jakob, S., 2009: *Die mittelassyrischen Texte aus Tell Chuēra in Nordost-Syrien*, Wiesbaden.
- Karlsson, M. 2016: *Relations of Power in the Early Neo-Assyrian State Ideology*, SANER 10, 2016.
- Kühne, H. 1980: “Zur Rekonstruktion der Feldzüge Adad-nirari II, Tukulti-Ninurta II, und Aššurnasirpal II im Habur-Gebiet,” *BagM* 11, 44–70.
- Kühne, H. 1995: “The Assyrians on the Middle Euphrates and the Ḥābūr,” in M. Liverani (ed.), *Neo-Assyrian geography*, Rome, 69–85.
- Kühne, H. 2000: “Dūr-katlimmu and the Middle-Assyrian Empire,” in O. Rouault and M. Wäfler (eds.), *La Djezire et l'Euphrate syriens de la protohistoire à la fin du IIe millénaire av. J.-C.: tendances dans l'interprétation historique des données nouvelles*, Subartu 7, Turnhout, 271–280.
- Kühne, H. 2018, “Politics and Water Management at the Lower Ḥābūr (Syria) in the Middle Assyrian Period and beyond – a New Appraisal,” in H. Kühne (ed.), *Water for Assyria*, *Studia Chaburensia* 7, Wiesbaden, 137–194.
- Liverani, M. 1988: “The Growth of the Assyrian Empire in the Habur/Middle Euphrates Area: A New Paradigm,” *SAAB* 2, 81–96.
- Liverani, M. 1992: *Studies on the Annals of Ashurnasirpal II, 2: topographical Analysis*, Rome.
- Liverani, M. 2004: “Assyria in the Ninth Century: Continuity or Change?” in G. Frame and L. S. Wilding (eds.), *From the Upper Sea to the Lower Sea: Studies on the History of Assyria and Babylonia in Honour of A.K. Grayson*, PIHANS 101, Leiden, 213–226.
- Llop, J. 2011: “The Creation of the Middle Assyrian Provinces,” *JAOS* 131, 591–603.
- Llop, J. 2012: “The Development of the Middle Assyrian Provinces,” *AoF* 39, 87–111.
- Llop, J. 2015: “Foreign Kings in the Middle Assyrian Archival Documentation,” in B. S. Düring (ed.), *Understanding Hegemonic Practices of the Early Assyrian Empire. Essays dedicated to Frans Wiggermann*, PIHANS 125, Leiden, 243–274.
- Lyon, J. 2000: “Middle Assyrian Expansion and Settlement Development in the Syrian Jazira: The View from the Balikh Valley,” in R. Jas (ed.), *Rainfall and Agriculture in Northern Mesopotamia, Proceedings of the Third MOS Symposium (Leiden 1999)*, PIHANS 88, Istanbul, 89–126.
- MacGinnis, J. 2012: “Population and Identity in the Assyrian Empire: a Case Study,” in Ö. A. Ceterez, S. Donabed, and A. Makko (eds.), *The Assyrian Heritage: Thread of Continuity and Influence*, Uppsala, 131–153.
- MacGinnis, J., D. Wicke and T. Greenfield (eds.) 2016: *The Provincial Archaeology of the Assyrian Empire*, Cambridge.
- Machinist, P. 1982: *Provincial Governance in Middle Assyria and Some New Texts from Yale*, *Assur* 3/2, Malibu.
- Masetti-Rouault, M.-G. 2014: “L'évolution d'une colonie néo-assyrienne dans le bas Moyen-Euphrate syrien (9e–8e siècle av. J.-C.): Recherches archéologiques et historiques récentes à Tell Masaikh,” in L. Marti (ed.), *La famille dans le Proche-Orient ancien: réalités, symbolisms, et images*, *Proceedings of the 55th RAI at Paris 6–9 July 2009*, Paris, 689–700.
- Masetti-Rouault, M.-G. 2016: “Assyrian Colonization in Eastern Syria: the Case of Tell Masaikh (ancient Kar-Ashurnasirpal),” in J. MacGinnis et al. 2016, 199–212.
- Pappi, C. 2018, “The Land of Idu: City, Province, or Kingdom?” *SAAB* 24, 97–123.
- Parpola, S. 2017, “The Location of Rašappa,” in Y. Heffron, A. Stone and M. Worthington (eds.), *At the Dawn of History: Ancient Near Eastern Studies in Honour of J. N. Postgate*, 393–412.
- Pfalzner, P. 1995: *Mittanische und mittelassyrische Keramik: eine chronologische, funktionale und*

- produktionsökonomische Analyse*, BATSH 3/1, Berlin.
- Pongratz-Leisten, B. 2011: "Assyrian Royal Discourse between Local and Imperial Traditions at the Hābūr," *RA* 105, 109–128.
- Postgate, J. N. 1973: *The Governor's Palace Archive*, Cuneiform Texts from Nimrud 2, London.
- Postgate, J. N. 1992: "The Land of Assur and the Yoke of Assur," *World Archaeology* 23, 247–263.
- Postgate, J. N. 1995: "Assyria: Home Provinces," in M. Liverani (ed.), *Neo-Assyrian Geography*, Rome, 243–259.
- Postgate, J. N. 2007: "The Invisible Hierarchy: Assyrian Military and Civilian Administration in the 8th and 7th Centuries BC," in J. N. Postgate, *The Land of Assur and the Yoke of Assur: Studies on Assyria: 1971–2005*, Oxford, 331–361.
- Postgate, J. N. 2013: *Bronze Age Bureaucracy: Writing and the Practice of Government in Assyria*, Cambridge.
- Postgate, J. N. 2016: "Assyria: provincial exploitation, first time round," in J. MacGinnis et al. 2016, 35–40.
- Radner, K. 2002: *Die Neuassyrischen Texte aus Tall Šēḫ Hamad*, BATSH 6/2, Berlin.
- Radner, K. 2006: "Provinz. C. Assyrien," in M. P. Streck (ed.), *Reallexikon der Assyriologie und vorderasiatischen Archäologie* 11-1./2, 42–68.
- Röllig, W. 2008: *Land- und Viehwirtschaft am unteren Hābūr im mittelassyrischer Zeit*, Berichte der Asugrabung Tell Schech Hamad / Dur Katlimmu, Band 9, Texte 3, Wiesbaden.
- Sano, K. 2015a: "Die Expansion des assyrischen Reiches unter Aššurnāširpal II," *Aula Orientalis* 33/2, 323–331.
- Sano, K. 2015b: "Die Interpretation eines in der Inschrift Tukultī-Ninurtas II. vorfindbaren Ausdrucks über die Annexion ins assyrische Reich," *NABU* 2015/3, 125 no. 75.
- Sano, K., 2017, "Die Etablierung der assyrischen Herrschaft in der Regierungszeit Salmanassars III.: Nochmalige Überlegungen zur Frage der Kontinuität des 9. Jahrhunderts v. Chr.," *Studia Mesopotamica* 4, 181–195.
- Shibata, D., 2015, "Dynastic Marriages in Assyria during the Late Second Millennium BC," in B. S. Düring (ed.), *Understanding Hegemonic Practices of the Early Assyrian Empire. Essays Dedicated to Frans Wiggermann*, PIHANS 125. Leiden, 235–242.
- Shibata, D. 2011: "The Origin of the Dynasty of the Land of Māri and the City-god of Tābetu," *RA* 105, 165–180.
- Shibata, D. 2012, "Local Power in the Middle Assyrian Period. The 'Kings of the Land of Mari' in the Middle Habur Region," in G. Wilhelm (ed.), *Organization, Representation, and Symbols of Power in the Ancient Near East: Proceedings of the 54th Rencontre Assyriologique Internationale at Würzburg 20–25 July 2008*, Winona Lake, IN, 489–505.
- Tenu, A. 2009, *L'expansion médio-assyrienne: Approche archéologique*, Oxford.
- Tournay, R.-J. 1998: "La stèle du roi Tukulti-Ninurta II: Nouvell interpretation," *Subartu* 4, 273–278.
- Tyson, C. W. and V. R. Herrmann 2018 (eds.), *Imperial Peripheries in the Neo-Assyrian Period*, Louisville.
- Yamada, S. 2000: *Construction of Assyrian Empire: A Historical Study of the Inscriptions of Shalmaneser III (859–824 B.C.) relating to His Campaigns to the West*, Leiden.
- Yamada, S. 2005: "Kārus on the Frontiers of the Neo-Assyrian Empire," *Orient* 40, 56–90.
- Yamada, S. 2018: "Ulluba and its Surroundings: Tiglath-pileser III's Province Organization Facing the Urartian Border," in S. Yamada (ed.), *Neo-Assyrian Sources in Context: Thematic Studies of Texts, History, and Culture*, SAAS 28, Helsinki, 11–40.
- Yamada, S. 2019: "Neo-Assyrian Trading Posts on the East Mediterranean Coast and 'Ionians': An Aspect of Assyro-Greek Contact," in I. Nakata et al. (eds.),

Prince of the Orient: Ancient Near Eastern Studies in Memory of H. I. H. Prince Takahito Mikasa, Tokyo, 221–235.

Zawadzki, S. 1995: “Hostages in Assyrian Royal

Inscriptions,” in K. van Lerberghe and A. Schoors (eds.), *Immigration and Emigration within the Ancient Near East*, OLA 65, Leuven, 449–458.

To a Distant Place: the Sebettu in the City, the Steppe, and the Service of the King

Gina Konstantopoulos
筑波大学人文社会系

From its earliest to latest periods, Mesopotamia was populated by a broad range of supernatural figures. These demons and monsters were thought to pose a very real and considerable threat to individuals, as well as to the larger cultures and societies found throughout the history of Assyria and Babylonia. These figures were a diverse lot, and could include: monsters, which tended to be more closely linked to certain locations or places; demonic diseases; wandering spirits and ghosts; wild animals or hybrid beings, and even the demonic manifestations of wild spaces, times of day, or abstract concepts.¹⁾ Understandably, given the range of figures seen in such a list, some of these creatures were more easily conceptualized than others: while the *udug*-demon is typically described as formless and shapeless in texts, monsters were often given clear physical features and descriptions. The dragon-snake creature known as the *mušhuššu*, for example, was famously depicted in the glazed bricks of the *Ištar*

gate of Babylon's processional way as a four-legged chimera (Fig. 1). Other monstrous figures had smaller-scale but no less identifiable artistic depictions.²⁾

Most demons and monsters posed threats to individuals, acting as the vectors of disease and ill fortune. They were combated by individuals in turn, principally the *āšipu*, or Mesopotamian exorcist. The *āšipu* was a highly trained specialist,



Fig.1 Plaque of Mušhuššu (BM 103381: Late Babylonian; Fired clay; 9.2 x 10.2 cm)

1 For an overview of these different categories of demons and monsters, see Hutter 2007; Sonik 2013; Verderame 2013; Scurlock 2016; and most critically Wiggermann 2011.

2 Wiggermann 1992. On the *udug*, see Geller 2011.

counted among other specialized professions, particularly the *asû* (physician or herbalist). In general, the *āšipu* addressed the supernatural (namely, demonic) cause of an illness or affliction, while the *asû* addressed the physical symptoms, primarily through his use of pharmacological or medico-magical treatments.³⁾ The *āšipu*'s tools included an extensive range of incantations; the protection provided by benevolent supernatural assistants; and the legitimation of the gods themselves, particularly the god Enki/Ea, who was closely associated with the protective magic that was the *āšipu*'s purview.

The *āšipu* was well-established as a professional figure in Mesopotamian society, particularly in the first millennium BCE, and this position speaks to the overall nature of Assyrian and Babylonian societies in this period, as well as the millennia that preceded it. Demons and monsters were an integrated aspect of Mesopotamian life, intrinsic to the religious worldview but also to, as best as can be determined, daily life and society. Demons and monsters affected the Mesopotamian world in different ways, however. Demons were often associated with the “kur,” a region linked to both the Netherworld and the mountains that bordered Mesopotamia to the north and east, but these demons were mobile entities, capable of drifting in from the wilderness to attack the city.

The incantations that opposed them, then, were often focused on removing them from civilization and driving them back into the steppe or the mountains that were their natural home. Monsters were more geographically fixed, and less likely to venture beyond the regions with which they were associated: demons could move into the city, but monsters were only encountered when moving into the wild outskirts of the Mesopotamian world, such as the tangled wilderness of the Cedar Forest, where the monstrous Humbaba dwelt.⁴⁾ The city was a bastion not only of civilization and society, but of safety, and the world grew wilder and more dangerous the further one ventured outside of it, until finally reaching a terminal border, such as the sea, or the mountains.

The implications of this dichotomy – between the civilization of the city and the wilderness that lay beyond it – were complex, particularly in light of how the figure of the Mesopotamian king, who often campaigned into the wilderness, behaved. Much like the *āšipu*, the king relied upon the sanction of divine figures, a full pantheon of deities that he could call upon in royal inscriptions, invoking them to bolster his own image and highlight the power he represented. During the Middle and Neo-Assyrian periods in particular, an examination of the deities employed when the king was on campaign (and thus concerned with

3 On the distinction between the *asû* and *āšipu*, a line that was often blurred, see Ritter 1965 and Scurlock 1999.

4 Humbaba/Huwawa is most famously positioned as one of the primary challenges faced by Gilgamesh and Enkidu in the Epic of Gilgamesh; within the Sumerian text the pair venture across seven mountain ranges to reach his forest; see Graff 2013 for an overview of the figure.

the frontier) sheds insights as to how his own behavior shifted on the outskirts versus the core. To track such changes for the entire pantheon is a massive undertaking, but it can be manageably approached through a particular focus; namely, the targeted use of specific gods to reinforce the king's control over the frontier. Here, the greater distance from the Assyrian core provided a similarly greater flexibility. The king was able to employ figures that would be most useful when interacting with native and local deities, for example, or gods who had natures that predisposed them to combat and violence. It is no surprise that Ištar, the goddess associated with sex and war, was often employed in such circumstances.⁵⁾

My focus here, however, is on one very particular group of figures: a collective of seven

warriors known as the Sebettu, or the ^dimin-bi, as they were most often referred to in texts. The Sebettu have a unique origin and identity: in their earlier representations, which continue to exist alongside their appearances in royal inscriptions from the Late Bronze Age onwards, they are not deities but rather demons, destructive beings that could threaten civilization itself. This nature, as well as their astral identity as the Pleiades, inherently placed them on the margins and the liminal, set them to function best and most usefully on the frontier. Though they were occasionally represented as a collective of seven theriomorphic hybrid armed figures, the Pleiades were by far their most prevalent artistic representation, and one that facilitated their use (see Fig. 2 and Fig. 3 for depictions of these respective representations).



Fig. 2 Plaque against the Demoness Lamashtu; detail (AO 22205 [detail image]: Neo-Assyrian; Bronze; 13.8 x 8.8 cm)

5 On the different geographic manifestations of Ištar, see Allen 2015; Porter 2004.



Fig. 3 Cylinder seal with the Pleiades (BM 119426: Neo-Assyrian; Chalcedony; 3.45 cm)

Coupled with their inherent martial natures, they were fierce and terrifying weapons in the service of the king, but ones that required care in their implementation, as we shall discuss in greater detail.⁶⁾

The Sebettu appear relatively late into the overall arc of Assyrian royal inscriptions, first appearing in the texts of Tukulti-Ninurta I (1243–1207 BCE). An overview of the use of the deities within Assyrian royal inscriptions is well beyond the limitations of this present article; and I will thus only reference here the studies which have

already been completed on such a topic.⁷⁾ It should be noted that these attestations are not the first references to the Sebettu in a cultic – which is to say, divine, rather than demonic – context. The earliest attestations to them in such a role originate some several centuries before this Middle Assyrian ruler, and may be found not in the north but in the south. Texts belonging to the First Sealand dynasty of Babylonia reference offerings to temples of the Sebettu, and place those same references alongside more established deities.⁸⁾ Such references continue in the south, under the Kassite rulers who

6 For an overview of the Sebettu, see Konstantopoulos 2015. Their astral nature and that of the Pleiades is summarized in Verderame 2016.

7 See Sazonov's (2016) overview of Assyrian royal titles until the reign of Tukulti-Ninurta I; and Cifola's (1995) analysis of royal titles, including divine invocations, in the Middle Assyrian period and later.

8 See Dalley 2009 for the publication of this archive, and Boivin 2018: 277 for a brief overview of the cultic role of the

followed in the wake of the Sealand kings, with a dedication to a temple to the Sebetu at Nippur, one likely dated to the early fifteenth century at the earliest.⁹⁾ It is important to note that the worship of the Sebetu appears thus to follow a clear geographic pattern: in its earliest incarnations, it is limited to Babylonia and the south, with only one exception.¹⁰⁾ After Tukulti-Ninurta successfully sacks the city of Babylon in 1222 BCE, the ruler returns to the north and proceeds with construction on his new capital city of Kār-Tukulti-Ninurta. The construction of a new city demanded the similar construction of a number of new temples, and one such temple was dedicated to the Sebetu.¹¹⁾ Based upon such evidence, and such a proposed pattern, we might thus speculate that the Assyrian king took the cult of the Sebetu and its worship back to Assyria with him following his assault on the south. Such actions would fall in line with the removal and displacement of cult statues, or ‘godnapping’, that was recorded particularly, though not exclusively, during the first millennium BCE.¹²⁾

The Sebetu reappear after two centuries, under the reign of the Middle Assyrian ruler Aššur-bēl-kala. This ruler was concerned with the west, given the increasing number of threats which arose

in the Levant in particular. Through his triumphant military campaigns, he was overall successful in expanding the territory under Assyria’s control. His reference to the Sebetu appears, curiously, on an inscription located on the back of a stone female torso (Fig. 4) that was excavated from the city of Nineveh. The closing lines of the text recount how: “the one who removes my inscription and my name, the Sebetu, the gods of the west, will



Fig. 4 Limestone female torso (BM 124963: Middle Assyrian; h. 93 cm)

Sebetu during this period.

- 9 This inscription is dedicated by one Ḥašmar-galšu, a local ruler at Nippur; see Boese 2010; Stephens 1937.
- 10 The outlier to this is a letter from the site of Tabetu, located at modern-day Tell Taban, in Syria. In it, offerings to the Sebetu, who are described as the letter writer's own gods, are referenced (Shibata 2019).
- 11 Grayson 1987, A.0.78.22: 43–44.
- 12 See Zaia 2015.

defeat him on the battlefield.”¹³) This reference draws the first concrete textual connection between the Sebettu and the west, and between the more distant periphery (where the Seven are purportedly employed in battle) and the core cities such as Nineveh (where the text itself was situated).

The Sebettu reappear, and with a vengeance, in the Neo-Assyrian period, first appearing in the inscriptions Shalmaneser III (858–824 BCE). Like Aššur-bēl-kala, the ruler was much preoccupied with the west, constantly campaigning in that direction as required by its rebellious territories and foreign neighbors.¹⁴) Shalmaneser’s inscription to the Sebettu highlights their far-ranging qualities, elements that were intrinsic to their underlying demonic nature but that also made them ultimately useful tools within the propaganda arsenal of the Assyrian kings. They were at home on the margins, and his inscription reflects that: the Sebettu are addressed as the ones who survey the heavens and the earth, who move about on mountain paths and through the marshes, while drawing back to reference their warrior abilities in its closing lines.¹⁵) This position manifested again, though through different means, in the way in which the Sebettu are next invoked, by the Assyrian king Aššur-nerari V (754–745 BCE). Here, the Sebettu appear as one of the divine witnesses present in a

treaty text, here set between the Assyrian king and Mati’ilu, the ruler of Arpad, a kingdom located to the north of modern-day Aleppo, and one that had given the Assyrian king no small grief. In this treaty, we observe a transition from the more ‘native’ Assyrian deities, a list which begins with the god Aššur and follows with the invocation of fifteen divine pairs and two geographically-oriented versions of Ištar (Nineveh and Arbela, respectively), to then move into the invocation of deities more closely associated with Arpad and its western lands, such as Adad of Kurbail, Hadad of Aleppo, and Dagan of Mušuruna. Set within the latter group is a reference to the Sebettu.¹⁶) Though the presence of temples to the Sebettu – including both the temple dedicated earlier by Tukulti-Ninurta I and multiple others referenced as located in other Assyrian cities in the first millennium BCE – speaks to the integrated position of the Seven as Assyrian deities, they are nevertheless placed on the outskirts here, set as a barrier against and perhaps also protection from the foreign deities situated at the end of the treaty’s divine witness lists.

References to the Sebettu continue in the royal inscriptions of successive Neo-Assyrian rulers, many of which emphasize the Sebettu’s martial qualities: Tiglath-pileser III (745–727 BCE), for

13 Grayson 1991, A.0.89.10: 5–7.

14 On Shalmaneser’s campaigns, see Yamada 2000. One particularly persistent thorn in the ruler’s side was the united front of foreign rulers known as the Damascus Coalition, which Shalmaneser was forced to confront on campaign a number of times over the span of several years (Galil 2002: 43–46).

15 Grayson 1996, A.0.102.14.

16 See edition of text in Parpola and Watanabe 1988, No. 2.

example, cites them as those who lead his troops and strike down his enemies, essentially placing them as the vanguard of his military forces.¹⁷⁾ Such language may also be seen in the inscriptions of his son, Sargon II (722–705 BCE), who invokes the Sebettu several times, often in a quite nearly identical inscription which he places on steles set at the geographic edges of his then-empire: at Tell Tayinat, in Kition on Cyprus, and at the site of Tang-i Var.¹⁸⁾ The first two of these locations are found to the extreme west, while the last lies to the east: though the Sebettu have strong connections with the western periphery, their underlying demonic nature first and foremost positioned them as liminal beings, regardless of the cardinal direction that utilizes that liminality. Though they are most often employed in the west, this does not discredit an occasional use on the eastern periphery.

Sargon's most interesting use of the Sebettu, however, comes to the fore when examining a site very much in the center of his Neo-Assyrian empire: his new capital city of Dūr-Šarrukīn, or modern-day Khorsabad. From an initial glance at its city plan (Fig. 5), we can immediately place the citadel, wherein many of the major temples as well as the palace were located, along the north-west wall of the city. The temple of the Sebettu, however, is not found within the citadel. Roughly

square in overall outline and positioned along a similar axis to the city itself (Fig. 6), excavations in the 1950's revealed the temple's location to be equidistant between the northwest Gate 7 of the city wall and Gate A of the citadel.¹⁹⁾ The position is telling: the walls of the city served undoubtedly as its primary means of defense in the event of an attack on the city, with gates often being the notable weak point in their otherwise solid protection. The temple's place slightly outside of the main citadel provided an important buffer, a safeguard against the inherently wild and possibly dangerous nature of the Sebettu themselves. At the same time, their temple also lay in the most likely path of any attack on the citadel, positioned along the most direct line between the gate of the city wall and the nearest gate of the citadel itself. Such a position situates the Sebettu, as they have been within royal inscriptions, as the vanguard, the first line of either defense or attack.

References to the Sebettu continue past Sargon II, and though we have no archaeological evidence for other temples under the reigns of successive kings, both ritual texts and letters provide examples of the continued existence of temples in other Assyrian cities. Dūr-Šarrukīn was abandoned as the capital following Sargon's untimely battlefield death, which was an unfavorable omen if ever there was one, with his son Sennacherib (704–681

17 Tadmor and Yamada 2011, Tiglath-pileser III 37, 9.

18 The editions of these respective texts may be found in: Lauinger and Batiuk 2015; Malbran-Labat 2004 and Frame 1999: 35–36.

19 On this temple and its excavation, see Safar 1957.

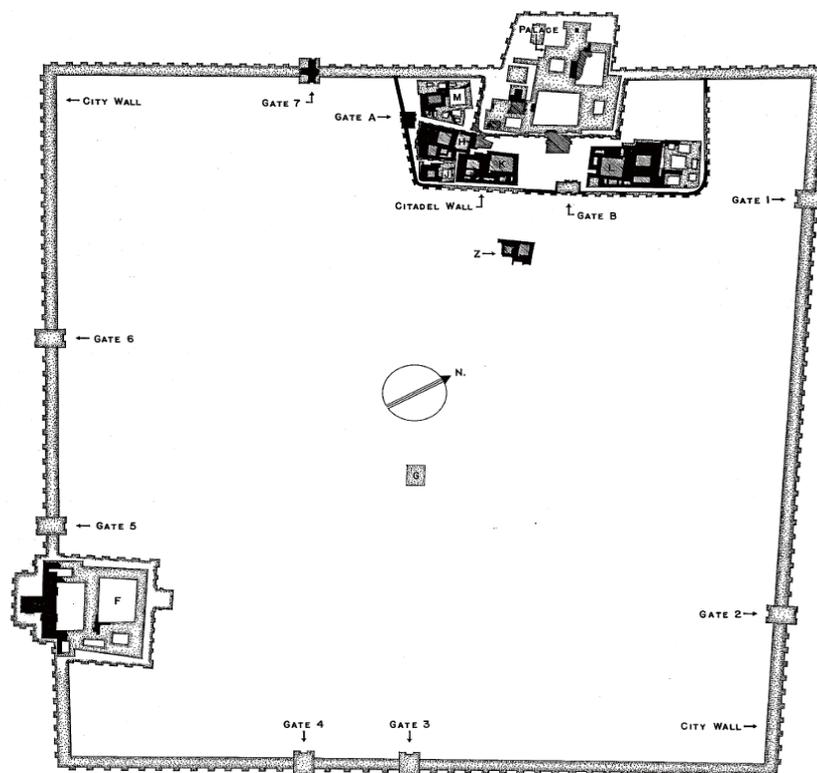


Fig. 5 City plan of Dūr-Šarrukin (Loud and Altman 1938)

BCE) moving to renovate and repurpose Nineveh as his capital.²⁰⁾ The Sebetu appear in several inscriptions of Sennacherib, as well as those of his son and successor Esarhaddon (680–669 BCE). Esarhaddon’s use of them is perhaps the more interesting of the two: the ruler places them within the list of divine witnesses found within the treaty governing his succession, and they appear therein once again as the boundary between the gods associated with Assyria and those connected to foreign lands.

Through this brief look at the role of the

Sebetu across royal inscriptions, their position on the periphery – the ways in which they were intrinsically both at home and most useful on the margins – is clear. The Middle and Neo-Assyrian kings were precise in their use of the Sebetu in inscriptions that reflected their actions on campaign, placing the demons as the vanguard, foremost among their military forces. This distance, interestingly, is still present when we consider the place of the Sebetu not on the steppe or distant campaign, but within the city itself, as the singular location of their temple at Dūr-

20 See Zaia (forthcoming) for an overview of the shifting capitals of the Neo-Assyrian period.



Fig. 6 Plan of the temple of the Sebetu at Dūr-Šarrukin (Safar 1957)

Šarrukin shows. That they are constantly employed in this role, however, remains an expression of their dual nature, as both demonic and divine figures. The latter allowed them to be harnessed, as it were, to the chariot of Assyrian propaganda, employed in the service of the king. The former, on the other hand, is the more nebulous of the two but also, perhaps, the more essential. It facilitated their far-ranging and liminal nature, and gave the Sebetu a malleable quality that still allowed them to negotiate a careful, though still liminal, use within the city as well.

Moreover, this demonic nature informed their most useful quality; namely, their martial predisposition. The amalgamation of all these qualities is on display in perhaps the most famous first millennium work to feature the Sebetu, the poem known as *Erra and Išum*. Shortly after the opening passages of the text, the Sebetu voice how aggrieved they are by Erra's unwillingness to engage in the acts of military campaigning, denying them the war they believe their very nature demands. They declaim that their place is on the field, in the steppe, not hiding away within

the city. Indeed, to stay within its walls denies them the respect they may be owed as warriors, and also damages if not invalidates their very identity. To remain away from the field is to be classified as a non-combatant, which the Sebettu describe as the elderly, children, and women – or those who cannot, apparently, fight. This role is foreign to them, and they complain so to Erra, stating that:

*ù né-e-nu mu-^lde^l-e né-reb šadē(kur)^e nim-ta-á[š-
ši ḥa]r-ra-nu*

*ina muḥḥi til-le-e šērī(EDEN)-ni šú-ta-[a] qé-^le^l
e[t-t]u-tu*

*qa-šat-ni ta-ab-tú ib-bal-kit-ma id-ni-n[a e]lī(UGU)
^le^l-m[u-q]i-ni*

šá uš-ši-ni zaq-ti ke-^lpa^l-ta li-šá-a[n]-šú

pa-tar-n[i] ina la ta-ba-ḥi it-t[a-d]i šu-uḥ-tú

And we, who (once) knew the mountain passes, we have forgotten the paths,

Cobwebs are spun over our field gear,

Our fine bow resists and is too strong for us,

The tip of our sharp arrow is bent out of alignment,

Our blade is corroded for want of a slaughter!²¹⁾

This text portrays warfare and combat as fundamental qualities of the Sebettu, intrinsic to their very nature. They must be allowed to continue to express this nature, particularly in the distant field. In this sense, *Erra and Išum* both

reinforces the destructive, demonic nature of the Sebettu and serves as a warning for how that nature could, especially if left idle and without a true fight, turn against the cities of Mesopotamia, rather than its distant enemies. Their martial nature made the Sebettu an attractive divine aid to the Assyrian kings, but the Seven required a delicate hand in how they were used. The Assyrian rulers thus utilize the divine sanction inherent in their own rule to harness the Sebettu, binding them to their own will and the service of the state. Even while doing this, they are careful to position the Seven well on the margins, simultaneously placing them where they may be of the most use while also building in a protective buffer of distance against the cities at the core, should their control fail and the Sebettu turn against them.

References

- Allen, S.S. 2015 *The Splintered Divine, A Study of Ištar, Ba'al and Yahweh: Divine Names and Divine Multiplicity in the Ancient Near East*. Studies in Ancient Near Eastern Records 5. Berlin: de Gruyter.
- Boese, J. 2010 Ḥašmar-galšu. Ein kassitischer Fürst in Nippur. In: *Festschrift für Gernot Wilhelm: anlässlich seines 65. Geburtstages am 28. Januar 2010*, edited by J.C. Finke, 71–77. Berlin: ISLET.
- Cagni, L. 1969 *L'Épopée de Erra*. Studia Semitica 34. Rome: Istituto di Studi del Vicino Oriente.
- Cifola, B. 1995 *Analysis of Variants in the Assyrian Royal Titulary from the Origins to Tiglath-pileser III*. Annali dell'Istituto Universitario Orientale di Napoli, Series Minor 47. Istituto universitario orientale:

21 *Erra and Išum* I, 87-91, following edition in Cagni 1969. This passage is considered within the framework of depictions of war in *Erra and Išum* as a whole in George 2013: 52-54.

- Naples.
- Dalley, S. 2009 *Babylonian Tablets from the First Sealand Dynasty in the Schøyen Collection*. Cornell University Studies in Assyriology and Sumerology 9. Bethesda: CDL Press.
- Frame, G. 2013 Two Monumental Inscriptions of the Assyrian King Sargon II (721–705 BCE) in Iran: the Najafehabad Stele and the Tang-i Var Rock Relief." In: C. Faizee (ed.), *Collection of Papers presented at the Third International Biennial Conference of the Persian Gulf*, 433–445. New York: Routledge.
- Galil, G. 2002 Shalmaneser III in the West. *Revue Biblique* 109: 40–56.
- Geller, M.J. 2011 The Faceless Udug-demon. In: D.O. Edzard and M.P. Streck (eds.), *Demoni Mesopotamici*, pp. 333–341. Rome: Sapienza University.
- George, A.R. 2013 The Poem of Erra and Ishum: A Babylonian Poet's View of War. In: *Warfare and Poetry in the Middle East*, edited by Hugh Kennedy, 39–71. London: I.B. Tauris.
- Graff, S. 2013 The Head of Humbaba. *Archiv für Religionsgeschichte* 4, pp. 129–144.
- Grayson, A.K. 1987 *Assyrian Rulers of the Third and Second Millennia B.C. (to 1115 B.C.)*. Toronto: University of Toronto Press.
- Grayson, A.K. 1991 *Assyrian Rulers of the Early First Millennium B.C. I (1114–859 BC)*. Toronto: University of Toronto Press.
- Grayson, A.K. 1996 *Assyrian Rulers of the Early First Millennium B.C. II (858–745 BC)*. Toronto: University of Toronto Press.
- Hutter, M. 2007 Demons and Benevolent Spirits in the Ancient Near East: A Phenomenological Overview. In: F.V. Reiterer, T. Nicklas, and K. Schöpflin (eds.), *Yearbook 2007: Angels. The Concept of Celestial Beings – Origins, Development, Reception*, pp. 21–34. Berlin: Walter de Gruyter.
- Konstantopoulos, G. 2015 *The are Seven: Demons and Monsters in the Mesopotamian Textual and Artistic Tradition*. PhD dissertation, University of Michigan.
- Lauinger, J. and S. Batiuk 2015 A Stele of Sargon at Tell Tayinat. *ZA* 105: 54–68.
- Loud, G. and C.B. Altman 1938 *Khorsabad, Part 2: the Citadel and the Town*. OIP 40. Chicago: Oriental Institute.
- Malbran-Labat, F. 2004 Section 4: Inscription assyrienne (No. 4001). In: M. Yon (ed.), *Kition dans les textes*, 345–354. Paris: Édition Recherche sur les Civilisations.
- Parpola S. and K. Watanabe 1988 *Neo-Assyrian Treaties and Loyalty Oaths*. State Archives of Assyria 2. Helsinki: Helsinki University Press.
- Porter, B.N. 2004 Ishtar of Arbela and her Collaborator, Ishtar of Nineveh, in the Reign of Assurbanipal. *Iraq* 66: 41–44.
- Ritter, E.K. 1965 Magical expert (=āšipu) and Physician (=asû): Notes on Two Complementary Professions in Babylonian Medicine. In: H.G. Güterbock and T. Jacobsen (eds.), *Studies in Honor of Benno Landsberger on his Seventy-fifth Birthday, April 21, 1963*. Assyriological Studies 16, pp. 299–311. Chicago: University of Chicago Press.
- Safar, F. 1957 The Temple of the Sibitti at Khorsabad. *Sumer* 13: 219–221.
- Sazonov, V. 2016 *Die Assyrischen Königstitel und – Epitheta*. State Archives of Assyria Studies 25. Winona Lake: Eisenbrauns.
- Scurlock, J. 1999 Physician, Exorcist, Conjuror, Magician. In: T. Abusch and K. van der Toorn (eds.), *Mesopotamian Magic: Textual, Historical, and Interpretative Perspectives*. Ancient Magic and Divination 1, pp. 69–79. Groningen: Styx.
- Scurlock, J. 2016 Mortal and Immortal Souls, Ghosts, and the (Restless) Dead in Ancient Mesopotamia. *Religion Compass* 10(4), pp. 77–82.
- Shibata, D. 2019 The Gods of Tabetu during the Middle Assyrian Period and their Genealogy. In: *De l'Argile au Numérique: Mélanges Assyriologiques en*

l'Honneur de Dominique Charpin, edited by G. Chambon, M. Guichard, and A. Langlois, 943–976. PIPOAC 3. Leuven: Peeters.

Sonik, K. 2013 Mesopotamian Conceptions of the Supernatural: A Taxonomy of Zwischenwesen. *Archiv für Religionsgeschichte* 4, pp. 103–116.

Stephens, F.J. 1937 *Votive and Historical Texts from Babylonia and Assyria*. Yale Oriental Series 9. New Haven: Yale University Press.

Tadmor, H. and S. Yamada 2011 *The Royal Inscriptions of Tiglath-Pileser III (744–727 BC) and Shalmaneser V (726–722 BC)*. Winona Lake: Eisenbrauns.

Verderame, L. 2013 “Their Divinity is Different, their Nature is Distinct!” Nature, Origin, and Features of Demons in Akkadian Literature. *Archiv für Religionsgeschichte* 4: 117–128.

Verderame, L. 2016 Pleiades in Ancient Mesopotamia. *Mediterranean Archaeology and Archaeometry* 16(4): 109–117.

Wiggermann, F.A.M. 1992 *Mesopotamian Protective*

Spirits: the Ritual Texts. Cuneiform Monographs 1. Groningen: Styx.

Wiggermann, F.A.M. 2011 The Mesopotamian Pandemonium: A Provisional Census. In: D.O. Edzard and M.P. Streck (eds.), *Demoni Mesopotamici*, pp. 302–319. Rome: Sapienza University.

Yamada, S. 2000 *The Construction of the Assyrian Empire: A Historical Study of the Inscriptions of Shalmaneser III (859–824 BC) Relating to His Campaigns in the West*. Culture and History of the Ancient Near East 3. Leiden: Brill.

Zaia, S. 2015 State-Sponsored Sacrilege: “Godnapping” and Omission in Neo-Assyrian Inscriptions. *JANEH* 2(1): 19–54.

Zaia, S. Forthcoming. Divine Foundations: Religion and Assyrian Capital Cities. In: G. Konstantopoulos and S. Zaia (eds.), *As Above, So Below: Religion and Geography – Proceedings following a Workshop Conducted during the 62nd Rencontre Assyriologique Internationale at Philadelphia, July 11–15, 2016*. Winona Lake: Eisenbrauns. Forthcoming.

研究項目 A02 「古代西アジア都市の景観と構造」

計画研究 03

「古代エジプトにおける都市の景観と構造」

計画研究 03 「古代エジプトにおける都市の 景観と構造」 2019 年度活動報告

近藤 二郎¹・河合 望²

¹早稲田大学文学学術院 ²金沢大学新学術創成研究機構

はじめに

本稿では、計画研究 03 「古代エジプトにおける都市の景観と構造」の 2019 年度の活動について、研究代表者および研究分担者の個々の研究活動を報告する。内田杉彦、周藤芳幸、西本真一の詳細な論考については、別稿を参照されたい。

1. 研究成果報告：研究代表者

近藤二郎（早稲田大学）

2019 年度、プロジェクト 2 年目にあたり、エジプト各地の考古学的調査を継続しながら古代エジプト都市の問題に関して、具体的な問題点を抽出するとともに資料の蓄積を図った。計画研究 03 班は、他の研究班とは異なり、エジプト・アラブ共和国内にある複数の古代の遺跡において、継続的に考古学調査を実施することが出来ている。こうした利点を活かし、フィールド調査からの視点を中心とした研究を展開している。2019 年度も、ナイル・デルタのコーム・アル＝ディバーウ遺跡、メンフィスのネクロポリスに位置する北サッカラ遺跡、ダハシュール北遺跡、そして中部エジプトのアコリス遺跡、ルクソール西岸のアル＝コーカ地区岩窟墓群、ヒエラコンポリス遺跡などで調査・研究が実施された。その他、エジプト国内の遺跡の踏査が複数実施されている。

研究会としては、5 月 19 日、6 月 28 日（計画研究 02 班と合同で開催、内容の詳細は後述）、2 月 23 日の 3 回開催した。5 月と 2 月は早稲田大学文学部で、6 月は筑波大学各回の発表者と題目は次のとおり。

2019 年 5 月 19 日

馬場匡浩「ヒエラコンポリスからみる古代エジプト都市」

2019 年 6 月 28 日

河合 望「古代エジプトにおける都市の景観と構造～新王国時代を中心に」

2020 年 2 月 23 日

内田杉彦「新王国時代の文字資料にみられる「居住地」の呼称について」

西本真一「マルカタ都市王宮における景観と構造」

2019 年 9 月 9 日には、計画研究 03 班の主催で早稲田大学文学部 36 号館 682 教室において国際シンポジウム Thebes under Amenhotep III（アメンヘテプ III 世時代のテーベ）を開催した。新王国第 18 王朝アメンヘテプ III 世治世の専門家による発表と議論は、「テーベ」というエジプトの祝祭都市を考える上で非常に刺激的であった。発表者と題目は次のとおり。

Hourig Sourouzian: “Amenhotep III and the Temple of Millions of Years at Thebes”.

Melinda Hartwig: “*Theban Tombs and and Elite Integration in Amenhotep III’s Deification Program*”.

Jiro Kondo: “*The Tomb of Userhat (TT47) and the Large Rock-cut Tombs in Thebes under the Reign of Amenhotep III and Amenhotep IV*”.

Nozomu Kawai: “*The Tomb of Amenhotep III (KV22) and its Funerary Equipment*”.

9月に金沢大学の河合望教授を隊長とする北サッカー遺跡の調査に参加し、メンフィスのネクロポリスと都市との配置等の調査も実施した。11月には、アレクサンドリアの西方320 kmに位置する Mersa Matrouh の近くに位置する新王国第19王朝ラメセス2世時代の遺構が残る Zawiyet Umm el-Rakham 遺跡や Mersa Matrouh 博物館を訪れる機会を持ち、西方デルタやデルタ西方の地中海の都市の立地について多くの知見を得ることが出来た。

12月19日から1月19日にかけて、ルクソール西岸、アル=コーカ地区岩窟墓群の第13次調査を実施した。アメンヘテプIII世治世末期の高官ウセルハトの墓(TT47)を中心とする調査区における新王国時代の岩窟墓の分布を検討することで、テーベ東岸と西岸の遺跡立地や景観を考察した。墓の構造や装飾の変化なども新王国時代の都市研究にとって重要な要素のひとつとなる。

2. 研究成果報告：研究分担者

河合 望（金沢大学）

2019年度には、まず4月11日から14日にかけて米国、ワシントンD.C.で開催された American Research Center in Egypt の The 70th Annual Meeting に参加し、北サッカー遺跡における第3・4次発掘調査の成果を “The 2019 Season of the Excavation at North Saqqara: A Preliminary Report” と題して発

表した。本調査は、古代都市メンフィスの住民の埋葬習慣、物質文化、経済活動などを明らかにすることを目的としており、調査において出土した新王国時代第18王朝に年代づけられる遺物および末期王朝時代からローマ時代に年代づけられる埋葬や関連遺物について報告した。

6月28日には筑波大学で開催された新学術領域研究・都市文明の本質：古代西アジアにおける都市の発生と変容の学際研究 A02-計画研究02「古代西アジアにおける都市の景観と機能」および計画研究03「古代エジプトにおける都市の景観と構造」による第1回合同研究会において「古代エジプトにおける都市の景観と構造～新王国時代を中心に」を発表し、古代エジプト新王国時代の主要「都市」、メンフィス、テーベ、アマルナ、ペル・ラメセスの4つの都市の特徴を論じ、新王国時代の古代エジプトの「都市」は、神殿を中心に形成された『神殿都市』であったことを指摘した。神殿の建設の副産物として、それを支え、祭祀を維持するために集落が発展したと結論づけた。そして、新王国時代の「都市」は、権力を示威する空間として機能し、宗教、王権、高官、外交と強く結びつき、これらを支えるために多くの人々が集住して「都市」を構成していたとした。

8月から9月にかけては、エジプト、北サッカー遺跡にて発掘調査を実施した。今シーズンでは、新王国時代の岩窟墓の発見と調査が課題であったが、ローマ支配時代のカタコンベを発見した。サッカーでローマ支配時代のカタコンベが発見されるのは学史上初めてのことであり、エジプトはもちろん海外からも大きな反響があった。今後にかタコンベ内部の精査により、ローマ支配時代のメンフィスの人々の来世観、埋葬習慣、物質文化、生活などが明らかになることが期待される。

2019年9月9日には、計画研究03班主催による早稲田大学文学部にて国際シンポジウム Thebes under Amenhotep III (アメンヘテプ3世時代のテーベ) に参加し、“The Tomb of Amenhotep III (KV22) and its Funerary Equipment” と題してアメンヘテプ3世王墓の調査と同墓の副葬品について発表した。

10月26日に開催された新学術領域研究・都市文明の本質：古代西アジアにおける都市の発生と変容の学際研究 第3回領域全体研究会では、「古代エジプトにおける都市の景観と構造」と題し、特に新王国時代の都市について研究の現状と課題について発表した。

12月から1月にかけては、早稲田大学の近藤二郎教授を隊長とするルクソール西岸・アル＝コーカ地区の岩窟墓の調査に参加し、古代都市テーベの景観と構造および都市とネクロポリスの関係について検討をおこなった。

内田杉彦 (明倫短期大学)

フィールド調査：

中部エジプト・アコリス遺跡調査 (アコリス考古学プロジェクト：川西宏幸隊長) に2019年12月28日から2019年1月8日まで参加、アコリス南の居住地遺跡から出土した護符数点、棺1点を検討した。付近のニューミア採石場銘文調査にも参加し、デモティックのグラフィティ数点の解読をおこなった。

「都市の景観と構造」関連の研究：

新王国時代に重点を置き、「居住地」概念を示す用語、新王国時代の文学ジャンル「都市の賛美」などについて、昨年度に引き続き文献を収集・検討中であるが、現在のところ、以下のような検討

結果が得られている。

一般に「町」と訳される *dmi* は本来、川船を係留する「波止場」を意味する語であったが、新王国時代には、「波止場」から発展したとみられる水辺の居住地のほか、水路に面していない居住地にもこの呼称が用いられるようになった。新王国末期頃に書かれた「用語集」の地名リストは、テーベなどの大都市や地方都市ばかりでなく、比較的小規模な居住地と思われるものも含み、その見出しは *dmi* となっている。地名リストに続いて記される小規模な建造物などを列挙したリストには、上流階級の邸宅のほか、「村落」とされる *whi* が含まれる。このことから *dmi* はある程度以上の規模を持つ「居住地」を意味する包括的な概念と考えられる。*dmi* の例としては、都市のなかで王が滞在する場所、おそらく王宮区画が *dmi* と呼ばれている例や、王墓造営職人村のデル・エル＝メディーナなどが挙げられる。*dmi* はまた、「大ハリス・パピルス」に神殿の供物生産地として記されているほか、経済文書には租税の徴収や物々交換がなされる場所として言及されており、都市や他の *dmi* との間の流通の拠点の役割を果たしていたと考えられる。

Niwt は新王国時代の史料では、*dmi* のなかでも規模の大きなもの、とりわけテーベ、メンフィス、ヘリオポリスなど大都市の呼称として用いられており、「都市」をさす用語とみるのが妥当と思われる。*Niwt* を所有するのはその主神とされており、王による神殿造営や寄進がなされる場所として *niwt* は王権とも密接な関わりを持っていたと言える。王による寄進のなかには *niwt* の神と住民の交流の機会である祭礼の神輿や神像の寄進もみられ、*niwt* の共同体の中心に神殿があったことがうかがえる。「都市の賛美」でも、都市の豊

かな生活への憧れとともに、王が都市の建設者として讃えられ、都市に住むことを許されるようにとの神々への祈願が記されており、都市と王権、神殿の密接な関係が示されている。

今後は「都市の賛美」に見られる都市のイメージ、一般に「村落」「町」と訳される *whi* などについてさらに検討する予定である。

柏木裕之（東日本国際大学）

2019 年度はダハシュール北地区（現場主任：矢澤健東日本国際大学客員教授）、北サッカラ地区（現場主任：河合望金沢大学教授）の発掘調査に、建築班として参加した。前者は 2019 年 1 月～2 月に、後者は 2019 年 8 月～9 月に実施され、厳密に言えば前者は 2018 年度にあたるが、研究成果報告刊行後に実施されたため 2019 年度扱いとした。

北サッカラ地区の調査は今年度本格的な発掘を実施し、ローマ期の地下墓所（カタコンベ）を発見した。良好な様態を保ち、その西方に位置するセラペウムとの関係性が注目される貴重な遺構である。サッカラ遺跡はエジプトを代表する大規模な墓地遺跡で、中でも北側は初期王朝時代から墓地として開発された。この付近にはジョセル王の階段ピラミッドをはじめ、王族や高官などの大規模な墓も多数位置し、サッカラ遺跡の中核的な場所といってよい。早大隊が発見したアブ・シール南丘陵遺跡もサッカラ遺跡の北端に位置しており、聖地として重要な役割を果たしたと考えられている。北サッカラ地区の調査は端緒に就いたばかりであるが、隣接する場所から更に古い時期の遺構が顔をのぞかせており、調査を重ねることによってサッカラ遺跡の理解が深まることが期待される。

石造の巨大なピラミッドが造営された古王国時

代、王のピラミッドの周囲には王妃のピラミッドや王族、高官の石造マスタバが数多く築かれた。特に石造マスタバは基盤目状に整然と配され、互いの距離も近い。用いられた石材は大きく、集合団地のような配置を実現させるためには順に建設する必要がある。すなわち全体計画の存在が強く示唆され、埋葬都市の研究に手がかりを与えよう。マスタバの周囲には一辺 1 m 足らずの方形の竪穴墓が多数穿たれ、より低階層の人が埋葬されたと推測される。また王のピラミッドと河岸神殿を結ぶ参道の脇にも多数の岩窟墓が穿たれており、王のピラミッドを中心に墓域が展開したことが了解される。

中王国時代も王のピラミッドが石や日干しレンガで作られ、その周囲には王族や高官のマスタバ墓が築かれた。墓域の基本的な構成は古王国時代と変わらない。

筆者が調査に関わったダハシュール北遺跡は中王国時代に開発され、新王国時代に再度利用された墓地遺跡である。遺跡の北東側には第 13 王朝のケンジェル王のピラミッドが、南東側には第 12 王朝末のセンウセレト 3 世のピラミッド複合体が位置し、ダハシュール北遺跡の竪坑墓からもこれらと年代の近い副葬品が取り上げられている。だがダハシュール北遺跡は中王国時代の 2 基のピラミッドからやや離れた位置にあり、両墓域の一部とみなすことは難しい。王のピラミッドを中心に据えた墓域とは別のタイプの墓地ということができ、墓地の計画方法も異なっていた可能性に注意する必要がある。

ダハシュール北遺跡では 150 基に迫る岩窟墓が発掘され、中王国時代の墓も数多く含まれている。それらは矩形をした竪坑の長軸が南北を指すという特徴を持つが、南北軸は竪坑墓によって微妙に

振れ、また豎坑の規模や深さも一様ではない。加えて上部構造を含め徹底的な盗掘に遭っているため、文字史料が極めて乏しく、被葬者や埋葬時期を直接知ることが難しい。墓の検出数に対し、編年を描く上での指針となる軸が見出しにくい原因のひとつとなっている。

カフーンやアマルナ、マルカタの住宅建築で窺われる整然とした構成から、墓地の計画を透かし見ようとする試みはおこなわれてきた。文字史料に限界があるダハシュール北遺跡の場合、墓地の配置計画の解明は突破口のひとつになりうる。ただし同様に、王のピラミッドから離れた墓地である点を考慮する必要があり、王のピラミッドに代わるような中心性の可能性を探り、墓域の配置原理を復元することが望まれる。

王のピラミッド複合体から離れた墓地としては、ギザ遺跡の南端から発見された古王国時代の例が挙げられる。ここには崖の斜面に小型の Mastaba を備えた墓が多数作られ、3 大ピラミッドの造営と強い関係はあるものの、ピラミッドの主要墓域から離れた別の区域を形成している。斜面の下には労働者の集合住宅や関連施設が広がっており、その関係性も注目される。王のピラミッド近傍とは異なる、もう一つの墓域タイプという点でダハシュール北遺跡の参考資料になりえよう。

2018 年度の調査では当該遺跡で最大規模を誇る豎坑墓の発掘がおこなわれ、石棺が搬入された痕跡を得た。なかでも周囲に点々と広がる多数の窪みは重量物を移動する際に利用された可能性があり、墓地への主要通路の解明につながる興味深い資料である。

ダハシュール北遺跡の新王国時代の遺構も重要である。遺跡は「ダハシュール」の名を冠しているが、新王国時代においてはサッカラの南端遺跡

と見なした方が正しい。王族や高官の墓が集中する北サッカラ地区に対し、ダハシュール北遺跡は辺境に位置するといつてよく、これまで挙げてきた古王国時代や中王国時代の王のピラミッド墓域から外れた墓地との関連性が注目される。調査が進むサッカラ南北の遺跡に、ギザやルクソールなどの墓地遺跡を加味することで、計画性が見いだしにくい、やや外れた場所に位置する墓地の基本原理の抽出を目指したい。

周藤芳幸（名古屋大学）

2019 年度には、まず 5 月 11 日(土)、12 日(日)に、名古屋大学高等総合研究館カンファレンスホールにおいて、シンポジウム「古代エジプト領域部におけるモニュメントと知の動態—アコリス考古学プロジェクト 2019—を、科研費基盤研究 (A)「古代地中海世界における知の動態と文化的記憶」(研究代表者：周藤芳幸) との共催によって開催し、第 3 中間期からヘレニズム時代にかけての地方都市の様相について討議した。個別発表の内容は以下の通りである。

花坂 哲「アコリス南区 2018 シーズン」

辻村純代「第 3 中間期の墓地構成」

小山 琢「ギリシャ・ミノア文明における中庭建造物の規格」

河江肖剰「ピラミッドタウン House Unit 1 の発掘調査と文化的資料の分析」

清水麻里奈「古代エジプトにおける聖獣崇拜について」

西本真一・安岡義文「オペリスクの計画方法について」

西本真一・安岡義文「アコリス南石切場の未完成巨像について」

周藤芳幸「アコリスとエジプト在地社会の通時的盛衰」

川西宏幸「アコリス 2019 を終えて：総括」

また、6月20日から22日にかけて、ベルリン自由大学で開催された国際研究集会 Terra Incognita: Archaeological Fieldwork in Asyut and Middle Egypt に招待され、“The Rise and Fall of a Hinterland: Akoris in a Diachronic Perspective” と題する講演をおこなうとともに、現在中エジプトにおいて進められている各国隊による都市と墓域の調査について、情報交換をおこなった。

現地調査に関しては、2020年1月2日から13日まで、アコリス遺跡、及びニュー・メニア古代採石場において調査をおこない、N区ブロックA底部天井面グラフィティの記録と分析によって、プトレマイオス3世時代の採石工程に関する貴重な知見を得た。

高宮いづみ（近畿大学）

① テーマ：古代エジプト先王朝時代から古王国時代の南縁部における都市の景観と構造（仮）

- ・ 担当は先王朝時代～古王国時代
- ・ とりあえず地域をエジプト最南部に設定し、マクロとミクロの観点から、古代エジプトにおける都市の景観と構造を考察する。
- ・ できれば国家による人のモビリゼーションの観点から、担当時期の都市の景観と構造を考えてみたい。

② 古代エジプト最南部

- ・ 主にアスワンからエドフの地域を対象とする。この地域は従来遺跡分布が希薄にしか知られていないが、近年の調査も含めて、遺跡分布と景観を考える。その際、下ヌビア北部も視野に入れる。

③ エレファンティネ遺跡

- ・ アスワンの中州の島にあるエレファンティネ遺跡は、エジプト最南端のノモス内にある国境の集落
- ・ 発掘調査によって、先王朝時代からコプト時代まで、継続的に集落が検出されている。ただし、各時代の集落検出は部分的
- ・ エレファンティネにおいて、初期王朝時代初頭から「城塞」が構築され、それ以前と集落の様相が大きく変化する
- ・ 集落の経時的変化を追いながら、集落の変化と国家形成の関係（特に人のモビリゼーション）を明らかにすることを試みる

④ 今後の展望（予定）

- ・ 今年度中に、学会発表（中間報告的）をおこない、一応投稿論文の執筆を予定する
- ・ 人のモビリゼーションの課題を、もう少し地域を広げて考察する必要性が生じるかもしれない。

田澤恵子（古代オリエント博物館）

テーマ：古代エジプト都市の社会福祉機能をめぐる通時的研究

本分担者は、古代エジプト都市の機能に関して「宗教と福祉」の面から研究を進めている。2019年度は、下記の3点に取り組んだ。

① 口頭発表「古代エジプトにおけるマアトの実践—宗教と社会福祉の相互関係をめぐる視点から—」（日本オリエント学会第61回大会2019年10月13日）。

古代エジプトにおいては、社会的弱者の救済や保護は、自らが死後の再生・復活を果たすために必要不可欠であった「マアトの実践」の一つとして実行されていた可能性が高いことを指摘し、古

代エジプト人にとっての社会的弱者救済と保護は、古代メソポタミアのように法律という形で外から規制されるものではなく、各人の内省的な問題であったことを提示した。そして、規模の大小は別にして、ある程度の政治的まとまりを有した「都市」（これについては定義を必要だが、その議論に関しては別に機会を設けたい）の支配層には、その喧伝が必要であったことに言及した（本発表は、2017-2019 年度科学研究費補助金基盤研究 B（一般研究）17H02275「古代西アジアにおける宗教と福祉の相互関係をめぐる総合的実証研究」（研究代表者：月本昭男）により実施された比較研究プロジェクト「古代オリエントにおける宗教と福祉の関わり方の解明」と連携している）。2020 年度は、本発表を論文として公開する予定である。

② デンデラをケーススタディとして、宗教都市における神殿が備えた社会福祉施設としての機能について考察を継続した。ローマ時代に主神ハトホル神殿域内にサナトリウムが設置されたデンデラには、病気治療や療養のための医療インフラとしての機能が備わっていた。このことから、デンデラに関するこれまでの報告書や先行研究の精査と 2018 年度におこなったデンデラ巡検の記録を基に、神殿都市もしくは宗教都市に求められた社会福祉機能について検討した。2020 年度は、更にその検討を深めた上で成果を公表していきたい。

③ フィールド踏査：2020 年 2 月 26 日～3 月 11 日に、ルクソール周辺からアスワンにかけての古代エジプト主要都市及びその周辺の遺跡（アスワン、コム・オンボ、エドフ、エル・カブ、エスナ、ゲベレイン、モアラ、アルマント、アビドス）を踏査し、都市の立地条件と宗教と福祉について考

究した。2018 年度におこなったルクソール周辺からメンフィスにかけての同様の踏査結果と併せて、総合的な検討を続けていきたい。

辻村純代（古代学協会）

アコリス遺跡はナイル東岸の河岸段丘上に立地し、眼下にナイルを望む段丘の西方にひと際高く聳え立つ巨岩の麓には古王国時代から中王国時代にかけての墓やチャペル墓が造られている。これらの墓作りに従事した人々の集落はナイルの中州や西岸に存在していたのだろうと想像されるが、その存在は具体的には知られていない。ただ、ナポレオンのエジプト調査で描かれた地図によれば当時のナイルは現在よりも東方を流れていたようで、近隣の小村落からアコリスへの距離は近い。その後のアコリスの歴史は途絶えるが、統一王権が崩壊する第 3 中間期になるとアコリスは都市化という新たな一步を踏み出す。しかし、遺跡の大半はコプト時代末期までの厚い堆積に覆われているために都市化が始まった頃のように第 3 中間期のうちに放棄された巨岩の南側でしか見ることができない。

巨岩の南斜面から南に向かって下降し、次の岩山が高まっていく斜面までを含めた範囲（南区）を発掘調査の対象として、この谷状の地形を北から南に向かって発掘を進めてきた結果、密集した住居群、円筒型の貯蔵庫群、炉跡、革工房、墓群など多くの遺構が検出された。これらの遺構はレンガや土器の編年に基づいて 4 つのステージに整理され、この地区における土地利用の変遷が明らかになりつつある。今年度の調査区は調査対象区の南端斜面で、鞍部の低地と比べると居住環境としては不良で、家畜小屋や作業場のような利用が想定される。けれども出土した土器片にはマール

クレイやフェニキア産の土器片が珍しくないの
で、低地部で判明したようにこの時代からアコリスがナイル交易の拠点としての役割を担っていたことがここでもわかる。そして、居住地や作業場として放棄されたのちは南区全体が墓域化し、今回の調査区でも東の隣接区と同程度の数の墓が検出されるだろうと予想されたのだが、その数は2基にとどまった。小規模な貯蔵庫の底から発見された3体の遺体は通常の埋葬とは考えられないが、これも加えるなら3基になる。

古王国時代のマスタバを中心としたシャフト墓を第3中間期に再利用した西の墓群（西区）が基本的に単葬であるのと同じく、南区の墓域でも単葬が主体で、家族墓ではない。胎児や乳児を住居内に埋葬する風習は近年までエジプト農村部ではよく見られ、アコリス遺跡のあるテヘネ村でもおこなわれていたが、古代にはそのような風習は一般的でない。いっぽう、第3中間期に属すアビドスの墓域で子供の埋葬が集中する事例が報告されると、“子供の墓域”の存在が俄かに注目されるようになった。アコリス・南区でも「子供の墓域」と推定される子供墓の集中がみられる。子供の埋葬に用いられる棺種が多様なのは子供の年齢と共に、儀礼など子供の社会参加や家族の経済力が反映し易いからだろう。今回出土した5体の人骨にはこれまでに余りみなかった栄養失調を示すクリブラ・オルビタリアが認められたが、羊、山羊、豚、牛、魚、スッポン等、かなりの量の動物骨が出土しており、住民全体が栄養不足の状況にあったとは考えられない。他に病歴としてはかなりの割合で歯周病に罹患していたことが注目。

中野智章（中部大学）

昨年度に引き続き、古代エジプトにおける都市

の景観と構造を明らかにするため、1) 国家形成期における首都メンフィス域の様相、2) 首都を中心とした都市における王の表象の変化、3) ギリシア世界などとの接触の中でエジプトの都市がどのような変化を遂げたか、の3点について研究を進めている。それらの点に関し、今年度は成果を広く一般や研究者に還元すべく以下の講演や発表をおこなった。

① 「ピラミッドと神殿：エジプト初期国家における王と神々」同志社大学一神教学際研究センター・日本オリエント学会共催講演会 2019年3月2日

古代のエジプトにおいて、ピラミッドや神殿が都市の景観や構造に果たした役割は極めて大きいと考えられるが、その背景にあった王と神々の多様な関係については必ずしも評価が一定していない。本講演では、その関係について彫像やレリーフなどの資料を挙げて紹介するとともに、とりわけ、神々の中に人の姿を取るものと人と動物が組み合わさった姿を取るものが存在したことに着目し、それがどのような関係の中で歴史的に育まれ、ひいてはピラミッドや神殿の意味や役割について影響を与えたのかを論じた。年度的には昨年度になるが、昨年度の年次報告後に開催されたので付記しておく。なお当該発表をおこなうにあたっては、アビドスのセティ1世葬祭殿などエジプト現地の遺跡におけるレリーフ調査を実施し、報告書には掲載されていない細部の観察をおこなった（講演内容については、CISMOR VOICE 28: 18に概要を掲載）。

② “A New Dutch-Japanese exhibition project” CIPEG (International committee for Egyptology, ICOM) 京都大会 2019年9月5日（オランダ国立ライデン

古代博物館学芸員 Lara Weiss 氏との共同発表)。

2020 年 4 月から九州国立博物館を皮切りに全国 8 箇所で開催する「オランダ国立ライデン古代博物館所蔵古代エジプト展」では、従来のエジプト展とは異なる視点からさまざまな遺物を紹介する予定にしている。そこでは都市における景観と建造物、用いられたさまざまなモノ、ひいては人間同士の関係にも着目していくが、本発表ではそうしたコンセプトの下でどう展覧会を組み上げていくのかを論じた。同大会には世界各国の博物館に勤務するエジプト学者が 50 名近く出席しており、展覧会の内容に加え、日本における古代エジプト研究の意味についても活発な議論が交わされた。

③ “The Egyptian Collection at Kyoto University for the Next Hundred Years”. International Symposium, “Egyptological Research in Museums and Beyond”, 東京国立文化財研究所 2019 年 9 月 10 日。

西本真一（日本工業大学）

成果報告については、別稿を参照されたい。

長谷川 奏（早稲田大学）

2019 年度においては、以下の①～③の 3 つを柱に据えて研究をおこなった。

① ナイル・デルタ都市の景観復元—アレクサンドリア後背地域の役割に焦点を当て—

古砂丘の上に形成された集落遺跡のコーム・アル＝ディバーウ遺跡では、日本調査隊は 2015 年から南北二つの丘で地表面探査をおこなってきた経緯があり、活動時期の中心はヘレニズム時代にあると推測された。南丘陵は明らかに神殿周域住居 (Temple Precinct) である一方で、北丘陵に

はランドマーク的な建造物が建てられていたことが推測された(図 1 上段)。遺跡直近の東側には、広大な砂丘丘陵が広がり、丘陵頂部の村落が経済活動の中心となっていたと思われる(図 1 中段)。一方、砂丘丘陵を越えた低地には、ラシード支流が流れるが、ここはまたイドウク湖東端との接点であり、広大な沼沢地が広がる景観にあっ

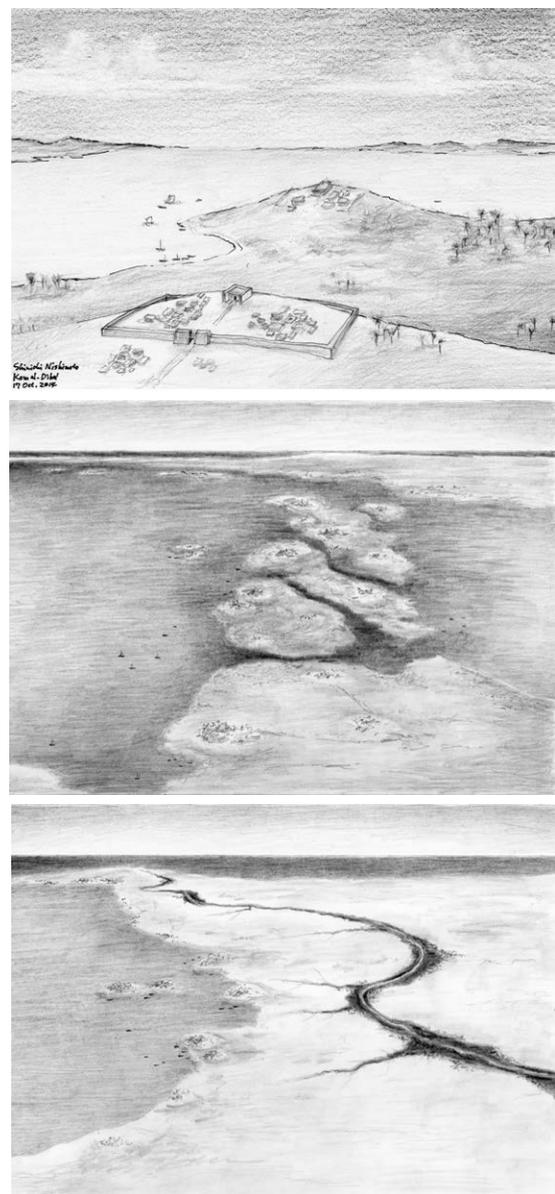


図 1 ナイル・デルタの景観復元

た（図1 下段）。2019年度は2018年度に得られた研究成果を検証しつつ、エジプトで開催された2つのワークショップで発表をおこない、国際デルタワークショップの主催者であるイギリス・ダーラム大学ペニー・ウィルソン教授が2020年度に刊行するプロシーディングに論文投稿をおこなった。

② 行政の中心都市メンフィスの景観復元—都市空間と墓地空間の水辺景観を対象に—

これは、ファラオの時代から営々と行政の中心地であり続け、ヘレニズム時代には「アレクサンドリアに次ぐ第2の都市」としての役割を担ったメンフィスの都市景観を、特に古代末期への移行期において水辺景観の持つ意味を考える研究である。2019年度は、考古学とリモートセンシングのコラボレーションという観点から、都市空間（図2）と墓地空間（図3）において分析をおこない、全体像の把握に努めた。その結果、ファラオ時代の行政拠点となってきたメンフィスが、古代から

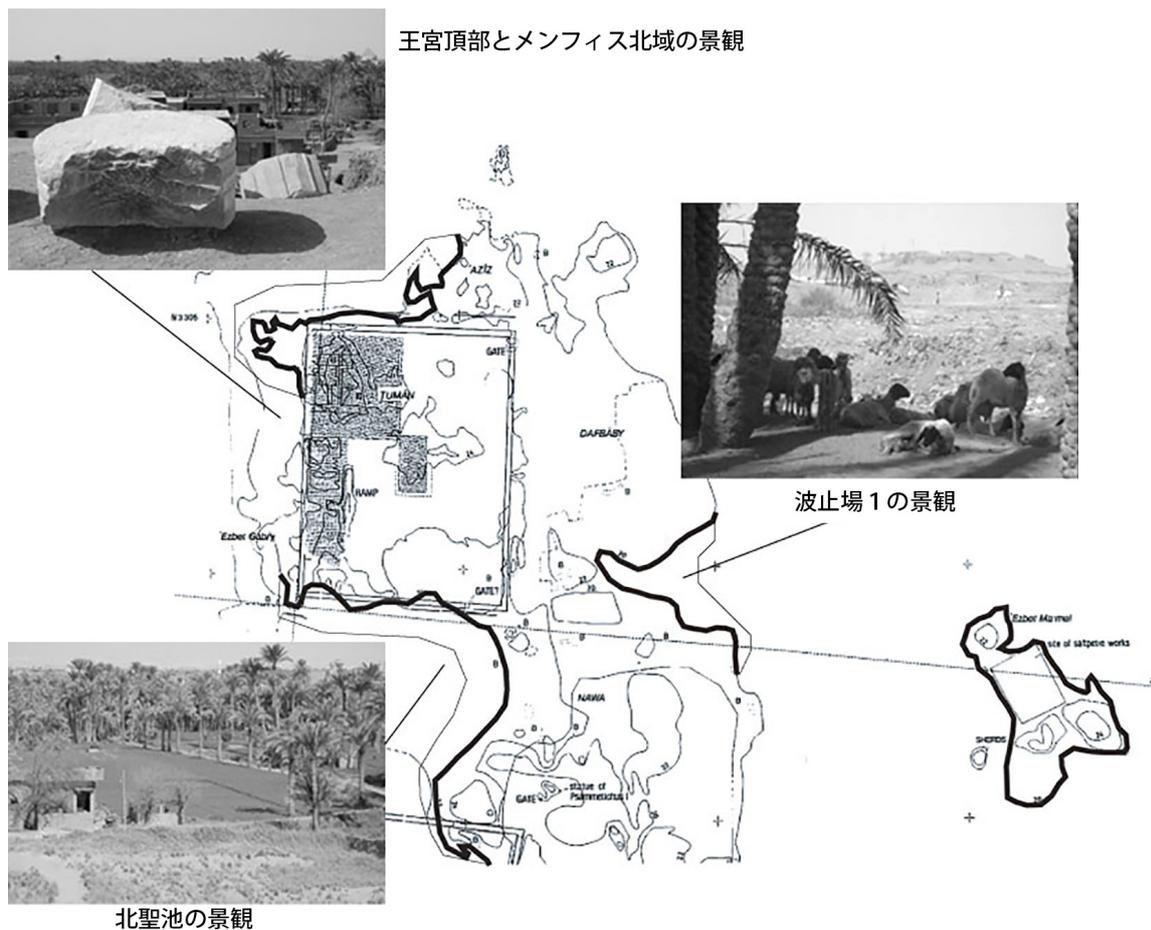


図2 メンフィス北域の遺構分布

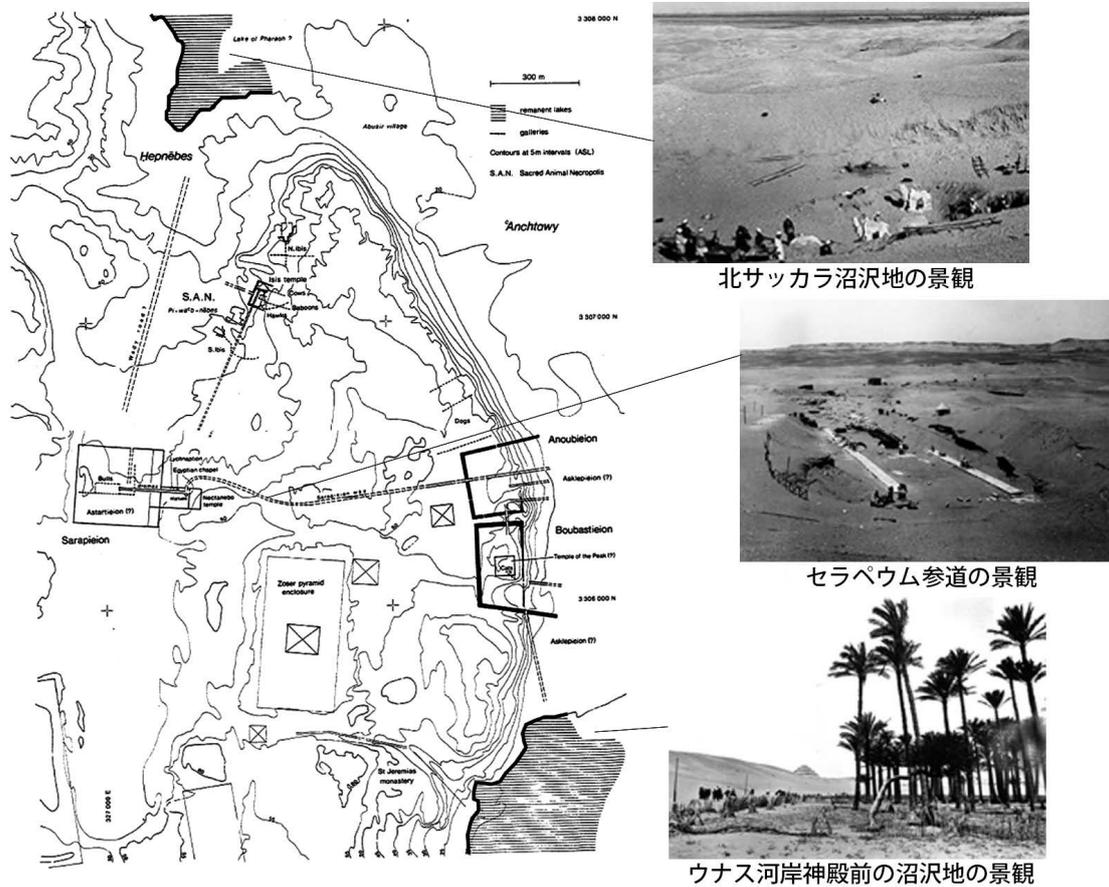


図3 メンフィス墓の遺構分布

中世に向う歴史の中で、忘却の中に埋もれていくプロセスには、社会的な要素以外にも、自然環境の変化が大きく関わっている可能性が得られた。研究成果の論文は、吉村作治教授が編集された書籍(喜寿記念論集)に収録された。

③ 紅海沿岸の港まちの景観復元—流通の窓口としての機能と生活空間の場を考える—

これは筆者がサウジアラビア紅海沿岸港湾都市で進める遺跡調査の成果を素材とし、エジプト側の港湾都市景観を逆照射する試みをおこなったも

のである。検討の結果、考古学資料が有効に活用できる可能性を持つ点で、ベレニケは港域と集落域がはっきり分化される構造を持つ点において注目された(図4)。一方、クセイルは、外湾の停泊機能以外に、内湾において活発におこなわれたであろう船修理の役割等を推測させるアラビア語資料も出土していることから(図5)、流通の窓口としての機能が具体的に読み取られる可能性があり、喫緊に取り組むべき課題と考えられた。また港まちを防御した砦の役割については、ヨルダンのアカバにあるアイラの要塞が重要な比較資料に

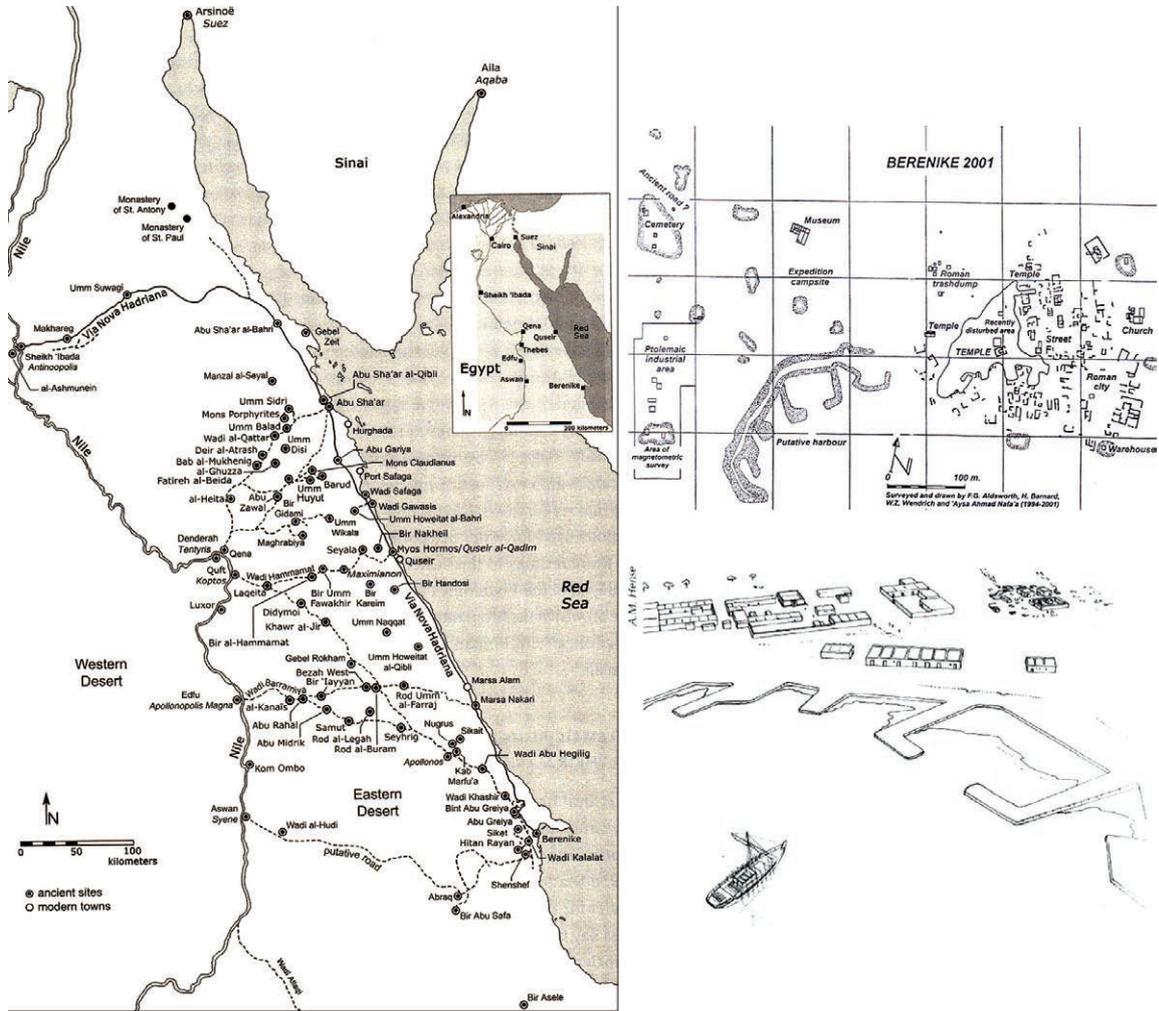


図4 古代末期におけるエジプト側の港と内陸商路（左）、ベレニケの遺構分布（右上）、港域の復元図（右下）

なるであろう。論文は、金沢大学で毎年開催されているヘレニズム～イスラーム考古学研究会（第26回）で発表され、金沢大学が発行する機関誌に論文が収録された。本研究はまだ予察の段階であり、今後継続的に分析がおこなわれていく予定である。

矢澤 健（東日本国際大学）

メンフィス遺跡では中王国時代初期から末期ま

での住居址が発見されており、それに対応してナイル川西岸の低位砂漠にはアブ・シールからマズゲーナまでのネクロポリスが形成されている。特にセンウセト3世治世から第13王朝中期にかけては、王のピラミッドや王族・高官の墓がメンフィス・ネクロポリスに造営されており、中王国時代後半のメンフィス地域は国の中心であったと言っても過言ではない。当時のメンフィスは政治、宗教上の重要な都市であったと想定されるが、資

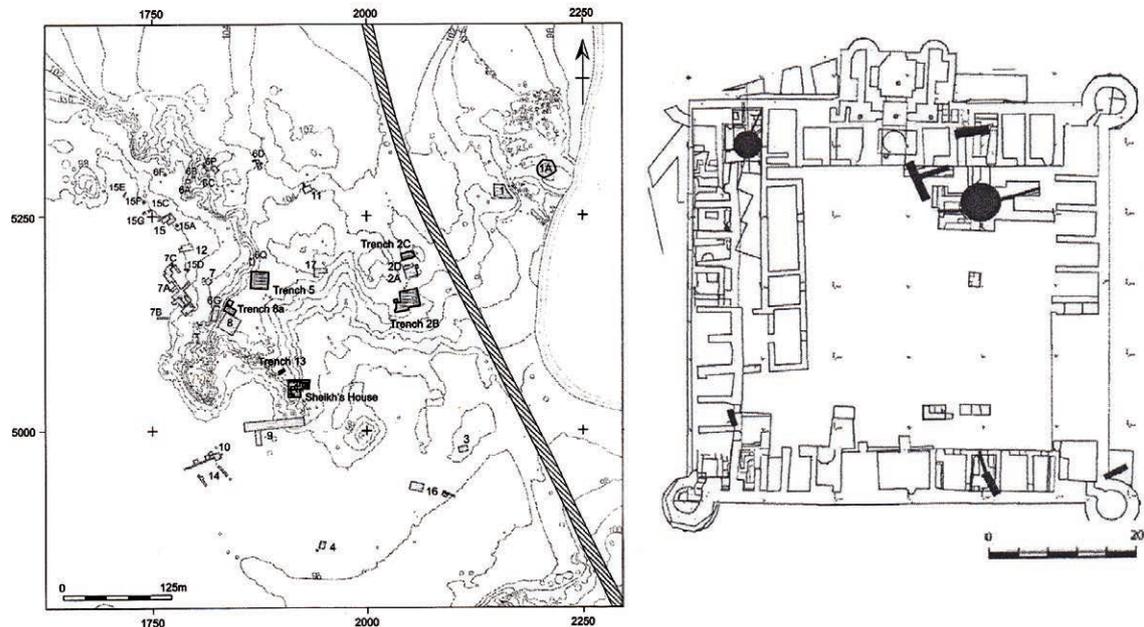


図5 クセイルの遺構分布図(左)、アイラ(アカバ)の岩遺構(右)

料は断片的である。この問題に対する打開策として、都市メンフィスを背景として造営されたと想定される墓地の資料の分析から、情報の欠落を埋めていく作業を分担者は進めている。

ダハシュール北遺跡はセンウセレト3世のピラミッド周辺墓地と南サッカラの第13王朝のピラミッド周辺墓地の近傍に位置しており、両墓地と同時期に造営された墓地である。同遺跡からはメンフィス地域における中王国時代後半の葬制の変遷過程を示す稀有な資料が発見されており、当時のメンフィスに関する情報を補う上で有用である。

ダハシュール北遺跡の分析を進めていく上で基本的な情報の1つとして、被葬者の社会的位置付けを示すことが重要と考えられる。分担者は過去の研究で、墓の規模や副葬品の検討から、同遺跡の被葬者は近傍のピラミッド群周辺に埋葬された

王族・高官に次ぐ階層の人々だったと推測した。今年度は、被葬者の役職を示す称号から被葬者像について検討した。

この遺跡の中王国時代の墓は竪坑と地下室によって構成されるシャフト墓が大部分を占め、分担者は過去に統計的な処理によってこれらの墓を規模に応じて Small、Middle、Large の3つのグループに分類した。各グループの墓から発見された副葬品の断片や造営にかかる労力から、墓の規模の違いは階層差を示すと考えられた。同遺跡で被葬者の称号が判明している例はごく僅かであり、分担者は Large に分類されるシャフト58の被葬者が持っていた *nty m srwt* という役職に着目した。碑文資料から、この称号の所有者は宰相に直接任命され、各地に配置されて4ヶ月毎に任地の出来事を宰相に報告する役割が与えられたとされている。また、ラフーンで発見されたパピルス

文書では、財産の帰属に関する申し立ての調停に *nty m srwt* が関与していたことが示唆されるなど、行政上の重要な役割を担っていたことが明らかである。一方で、中王国時代の支配層にのみ許された、王との関係を示す「序列の称号」は、*nty m srwt* に任命された人物は通常持つことができなかった。従って称号の観点から、ダハシュール北遺跡の比較的高位の被葬者は支配層に次ぐ階層の人々であることに加え、支配層と行政面で密接に関わっていた人物が含まれていた可能性が指摘される。

また今年度は、前年度にダハシュール北遺跡で発見されたシャフト 158 の分析が進められた。この墓は同遺跡最大であり、地下室の入口前、シャフト部の床面付近からはファイアンス製、石製、

青銅製の小型の遺物群がまとまって出土した。同種の遺物群の多くは詳細な出土位置・状況が明確に記録されておらず、どのような目的で使用されたのか、不明な点が多い。本例のように出土状況が明確で、まとまって発見された例は希少であり、出土状況や墓の利用歴の検討から地下室が閉じられた後の儀礼行為に由来する可能性がある。小型の遺物群の中には青銅製のスタンプ型印章が含まれており、印面には被葬者の名前と称号が刻まれていたと推測される。劣化や錆によって判読が難しい箇所があるが、今年度2月にその保存修復作業が実施される予定である。シャフト 158 は前述のシャフト 58 と共に、ダハシュール北遺跡の被葬者像を示す貴重な資料になり得る。

新王国時代の文字資料にみられる 「居住地」の呼称について

内田 杉彦

明倫短期大学歯科衛生士学科

はじめに

新王国時代の文字資料には「居住地」を意味する語として *niwt* (ニウト)、*dmi* (デミ)、*whi* (*whyt*) (ウエヘト (ウエヒト)) の三種類の呼称がみられる。第 18 王朝時代の「アテン讃歌」では、太陽神アテンが創造した世界の要素が *niwt*、*dmi*、*3ht* とされているが、この *3ht* (アヘト「耕地」) は *whi* の誤りと解釈されており、三者の間に *niwt* を最上位とする階層が存在すると理解されている。これは従来、規模の相違と関連づけられ、3つの呼称はそれぞれ「都市」、「町」、「村」と大まかに解釈されてきた。

しかし近年になって、このような用語は現代人の居住地概念を単純にあてはめたものであるという批判や、これらの呼称を区別するものは居住地の規模ではなく機能ではないかという主張がされるようになってきている。そこで、これら三種類の呼称が示す居住地の概念について、呼称の本来の意味を示すと思われるエジプト国内の居住地に関するいくつかの資料をもとに検討した。

1. *whi* について

第 20 王朝時代に書かれた中部エジプトの「土地台帳」ウィルバー・パピルス (Wilbour Papyrus) には、農地の目印として *whi* の名が冠詞と属

格を伴う形で記されており、そのなかには「アメンモセの *whi*」 (*t3 whi 'Imn-ms*) のように人名を伴う例がみられる。*whi* は本来、「氏族」を意味する語だったと考えられており、この人名には *whi* の創設者となった氏族の長が含まれる可能性があるが、古典文学の主人公の名を冠した「サアネヘト (シヌヘ) の *whi*」がみられ、当時の知名人や有力者にちなんで名付けられた *whi* もあったと思われる。第 18 王朝初期の軍人ネシがアハモセ王から下賜された農地の場所として第 19 王朝時代の墓銘に言及のある「ネシの *whi*」も、この「台帳」に見られる。この農地はヒクソスとの戦いの際の褒賞とみられ、「ネシの *whi*」も農地と前後して下賜された可能性があると言える。事実、ウィルバー・パピルスの *whi* には「兵士たちの *whi*」など軍人の入植地だったことをうかがわせる名を持つものがある。「ナウリ勅令」によれば *whi* の長は、軍人の称号としてしばしばみられる *tzw* (「指揮官」) とされており、このような種類の *whi* の性格に合致するように思われるが、特定の *whi* の「指揮官」を示す資料は確認されていない。

ウィルバー・パピルスの *whi* には準軍事的な存在である「メジャイの *whi*」や、異国の地名を伴うものなど異民族の入植地だった可能性のあるものなどがみられ、個々の *whi* の由来や性格が多様

だったことがうかがえる。農地を伴うネシの *wht* はおそらく農村とみられ、第 18 王朝時代のパピルス（Papyrus Louvre 3171）には、*wht* に住む 2 人の農民の名が記されており、これも *wht* の範疇に農村が含まれることを示している。

wht は労働者が一時期だけ滞在する集落の呼称にも用いられており、第 20 王朝時代に描かれた東部砂漠の地図には、おそらく黄金採掘の際に利用された *wht* の住居群の名が記されている。また、デイル・エル＝メディーナの王墓造営職人が「王家の谷」や「王妃の谷」で作業中に用いた小屋の集合体は「ネクロポリスの *wht*」と呼ばれていたとみられる。

2. *dmi* について

dmi は「波止場」を意味する語から派生して、波止場から発展した居住地も指すようになり、新王国時代までには、それ以外の居住地も意味するようになったとされる。

世界を構成するとされたものの名前を列挙した「用語集」（Ancient Egyptian Onomastica）と呼ばれる資料のなかで、新王国末期から第三中間期初期に書かれたとみられるゴレニシェフ・パピルス（Golénischeff Papyrus）には、*dmi* という見出しのもとに上エジプトから順に 99 の居住地名を列挙したリストが含まれている。居住地の選択基準は不明であるが、*wht* は、次のリストに、エリート層の邸宅（*bhn*）と一般住居（*pr*）の中間の存在として記されており、*dmi* が *wht* とは区別されていることがわかる。ただしこの *dmi* リストには *wht* の名を持つもの（「それを管理する者の *wht*」）も含まれており、*wht* が *dmi* へと発展する場合があったことが示されている。

一方、このリストには、テーベやメンフィスな

ど、他の資料で *niwt* とされている都市名がみられ、*niwt* が *dmi* と別個の概念ではなく、*dmi* の上位グループに位置付けられていたことがうかがえる。なかでもテーベの名は「アムン神のテーベの *niwt*、あらゆる *dmi* の女主」（*niwt w3st nt imn hnw n dmi nb*）とされており、特に東岸地区が *niwt* という通称で呼ばれたこの都市の権威が表現されている。

テーベ地域とその周辺の穀物徴収を記録した「トリノ徴税パピルス」には、租税の穀物が集められ船積みされる場所のなかに「イユニット（エスナ）の *dmi*」（あるいは「*dmi* イユニット」（*dmi iwnyt*）のように地名を伴う *dmi* がみられる。この *dmi* が波止場と居住地のいずれを指す概念かは曖昧ながら、地名はおおむね「用語集」の *dmi* リストに含まれており、波止場から発達した居住地を指すと思われる。

この発達の背景に水運とそれを利用した交易があったことは、商品を積んでナイルを往来した舟や、波止場に隣接する市場の存在が資料から確認されること、ある書記が衣類などを購入する場所を *dmi* と記した「パピルス・ボールドウィン」（Papyrus Baldwin）の記述などから推測できる。*dmi* という呼称が水路に沿わない居住地も指すようになった背景には、水運の発達とその経済的重要性の高まりがあったことが考えられるが、これについては推測の域にとどまる。

水運以外の文脈に見られる *dmi* には、第 18 王朝初期の軍人アハモセの墓銘に彼が育った場所として言及される「ネケブの *dmi*」、（*dmi n nhb*）ヒクソスの首都アヴァリス、王妃ティイのために人口池が作られたことで知られるジャルウハなどの都市のほか、王家によって特定の機能を果たすため作られた居住地が含まれる。その例としては、

王墓の造営職人のために設けられ、定冠詞を伴う通称 *p3 dmi* で呼ばれたデイル・エル＝メディーナ、葬祭殿の工房で働くシリア人捕虜の居住地としてアメンホテプ3世が建設したものの、ラメセス3世がテーベ、ヘリオポリス、メンフィスの神殿の供物生産施設として各地に建設した居住地のほか、セティ1世、ラメセス2世、ラメセス3世の各葬祭殿に付属した居住地などが挙げられる。この葬祭殿の居住地については第20王朝末のパピルス (Papyrus BM 10068) に、葬祭殿ごとに主要な住居所有者の職業と名が記されている。住民には神官が含まれており、葬祭殿の維持を目的とする居住地だったと思われるが、ラメセス3世葬祭殿の *dmi* には「*niwt* の西 (i.e. テーベ西岸) の市長」などの高官のほか、デイル・エル＝メディーナの職人の生活を支える洗濯夫や陶工など「セメドト」の人々も住んでおり、この *dmi* がテーベ西岸の行政中心地だったことがうかがえる。

3. *niwt* について

niwt と *dmi* は同じ居住地を指す語として一緒に用いられることがあり、例えば前述の軍人アハモセの墓銘では、彼の育った「ネクベトの *dmi*」が後の文脈では「私の *niwt*」とされている。このような場合、両者の使い分けは曖昧と言えるが、*niwt* とそれ以外の *dmi* の概念を分けていたものは、*niwt* が古くから持っていた宗教との繋がりでないかと考えられる。これは主神を祀る神殿を持つ地方都市やメンフィスのような首都が古王国以来の文字資料でしばしば *niwt* として言及され、その主神が「*niwt* の神」と呼ばれていることで示される。これに対しておそらく波止場や水運に関わりを持つとみられる *dmi* の概念には本来、そのような宗教的意味はなかったであろう。

niwt の宗教的な意義は新王国の文字資料にも表されており、第19王朝初期の宗教文書「ライデン・パピルス」(P.Leyden I 350) に記されたアムン・ラー讃歌では、テーベがあらゆる *niwt* の模範とされ、テーベに出現した人類がそれらの *niwt* を建設したとされている。これは「用語集」のテーベの呼称に通じるものであり、ここでは *niwt* は「原初の丘」であるテーベの「写し」、神の創造した世界の主要な構成要素とみなされると言える。同じパピルスに記された別の讃歌ではアムン、ラー、プタハが一体の存在とされており、テーベ、ヘリオポリス、メンフィスがこれらの神々の *niwt* とされている。アクエンアテンが太陽神アテンのために造営した「聖地」アケトアテンについては、*niwt* と呼ばれたことを示す資料は確認されておらず、「中央市街」の邸宅遺構 (K42.33) 出土の境界石に記された「アテンの *dmi*」がこの都市の呼称だったとみられる。これはおそらくテーベの通称でもあった *niwt* を忌避したためだろうと考えられているが、この *dmi* がアテン神殿などの祭祀施設を含まない「市街地」を指すものだった可能性も否定できない。

王が神のためにおこなう寄進や神殿造営に触れた資料では、神が鎮座する都市は *niwt* と表現されている。「大ハリス・パピルス」(Papyrus h^rri-si) によれば、ラメセス3世はラーの *niwt* ヘリオポリスに供物供給のためのオリーブ樹林や鳥の飼育施設を設け、アムンの *niwt* テーベにパレスチナからの供物をもたらし、庭園や神殿の造営をおこなったとされている。ハトシェプスト女王の「スペオス・アルテミドス銘文」には、上エジプト第14州のキス(クサエ)、第15州のヘルモポリスとフル(フウト・ウェル)の神殿を復興したことが記されており、これら地方都市も *dmi* ではなく

niwt と呼ばれている。クサエの女神ハトホルの神殿に関する記述では、女王が神殿を清め祭礼行列のための女神像を作らせたこと、それが女神の *niwt* を「守る」ためであることが記され、ヘルモポリスとフルの神殿と祭祀の復興にそれらの *niwt* の住民が歓喜したことを述べた記述にも、女王が祭礼を担当する神官を養成したことが暗示されている。*niwt* という呼称には、神殿を中核とし、祭祀によって住民が神の加護を得られる聖地という意味が込められていたとみられる。文学作品「セケンエンラー王とアペピ王の争い」では、セケンエンラーの支配する *niwt* テーベに対して、祭儀がおこなわれなくなり悲惨な状態にあるヘリオポリスが *niwt* ではなく *dmi* として対比されており、ここにも *niwt* が祭祀によって維持されるという考え方が示されている可能性がある。

第 18 王朝の半ばから第三中間期初め頃までの 17 編からなる「都市の賛美」と呼ばれる資料は、当時のエリートが抱いていた都市 *niwt* への憧れを示したものであり、どの都市に関するものか不明なもの 1 編を除くと、9 編がテーベ、2 編がメンフィス、（可能性のあるもの 1 編を加え）5 編がペルラメセスを対象としている。そのうちテーベに関する「賛美」には、テーベの神アムンを讃え、この神の *niwt* にもう 1 年留まりたいと願ったものや、テーベを去る人物がアムンに呼びかけて「あなたの *niwt*」に連れ戻してほしいと願ったものなど *niwt* の主神に言及したものがみられる。メンフィスの「賛美」にも、メンフィスの神プタハの *niwt* へと連れておこなってほしいと願う言葉や、プタハ、セクメトなどメンフィスの神々の名が列挙されており、やはり *niwt* とその神の関わりが示されている。

テーベの「賛美」には、他の *niwt* で長く生き

るよりアムンの *niwt* の住民の間で過ごす方が楽しいという思いとともに、アムンに「あなたの快適な砦」である「あなたの *dmi*」に住まわせて欲しいと願う言葉を記したもの（Ostrakon Nakhtmin (O.87/173)）がみられる。複数の神殿を持つペルラメセスは「大ハリス・パピルス」(Papyrus Harris I) に記される「下エジプトの *niwt*」(*niwt t3-mḥw*) がそれを指すとみられるが、その「賛美」では宗教色は希薄であり、ペルラメセスを *niwt* とする言及や神への祈願は見られない。その反面、西アジア進出拠点として建設されたこの都市の壮麗な王宮や交易拠点、軍事基地としての側面とともに、果実や野菜、魚など豊富な飲食物が得られるこの都市の *dmi* の豊かな暮らしが強調され、その王宮の近くに住むものは故郷の *dmi* に戻ろうとしないとも記されている（Papyrus Rainer 53, Papyrus Anastashi II など）。テーベの「賛美」に見られる「アムンの *dmi*」は、*niwt* を言い換えた表現である可能性が否定できないが、ペルラメセスの *dmi* はおそらく、*niwt* のうち人間の生活圏を強調した表現であり、そこでの生活は、エリート層が理想とした郊外の邸宅(ヴィラ)でおくられるものだったと考えられる。ここにも「神の住まい」である *niwt* の概念と「(人間の) 居住地」である *dmi* のそれとの相違がうかがえる。

おわりに

新王国時代の資料にみられる「居住地」の概念は、農村や一時的な居住地を含む *whṯ* とそれ以外の、より上位の居住地 *dmi* に大別され、*dmi* はその中に上位グループの *niwt* を含む。*dmi* が広く人間の「居住地」を意味するのに対して、*niwt* は「人間とともに神が住む居住地」としての意味を持っており、主神を祀る神殿を中核とする都市を指す

概念とみられる。

以上のような解釈、特に *niwt* と *dmi* に関する解釈には、*niwt* の中核となる「神殿」や「祭祀」の基準が不明な点、個々の居住地を *dmi* と *niwt* のいずれかとする資料が乏しく、かつ曖昧なことなど、問題点が多々あると言わざるを得ない。

ただしこれらはエジプトの居住地や都市の機能・性格を考察する場合、大きな障害にはならないように思われる。たとえば *niwt* の概念を最上位とする価値観が宗教上の意義にあるとすれば、それは「都市」の概念とは次元が異なるものであり、神殿の権威や経済力、王権との関係など種々の要因によって個々の *niwt* に重要度や規模の差が生じるのは当然と言える。また、*wht* を便宜的に「村」と訳すにしても、*niwt* と併用されることもある *dmi* の定義付けは、その概念が広範囲に及ぶので「居住地」とする以外に困難であり、あまり意味がないように思われる。古代エジプトの居住地を研究する際には、たとえば当時の居住地概念を念頭に置きながらも、文献・考古資料をもとに個々の居住地の特徴や機能を抽出する方法などが、有効と言えるだろう。

参考文献

Al-Ayedi, Abdul Rahman, *Index of Egyptian Administrative, Religious and Military Titles of the New Kingdom*, Ismailia, 2006.

Allam, S., 'Some Remarks on the Trial of Mose', *JEA* 75 (1989), 103–112.

Allen, J.P., 'The Speos Artemidos Inscription of Hatshepsut', *BES* 16 (2002), 1–17.

Bietak, Manfred and Irene Forstner-Müller, 'The Topography of New Kingdom Avaris and Per-Ramesses,' Collier, Mark and Steven Snape ed., *Ramesside Studies in honour of K.A.Kitchen*, Bolton,

2011, 23–50.

Caminos, Ricardo A., *Late-Egyptian Miscellanies*, London, 1954.

Davies, Benedict G., *Life within the Five Walls : A Handbook to Deir el-Medina*, Wallasey, 2018.

Erichsen, W., *Papyrus Harris I: Hieroglyphische Transkription*, Bruxelles, 1933.

Fischer-Elfert, Hans-Werner, 'In Praise of Pi-Ramesse – A Perfect Trading Center', Collombert, P. et al. ed., *Aere Perennius: Mélanges égyptologiques en l'honneur de Pascal Vernus*, Leuven, 2016, 195–218.

Foster, John L., *Hymns, Prayers, and Songs: An Anthology of Ancient Egyptian Lyric Poetry*, Atlanta, 1995.

Gaballa, G.A., *The Memphite Tomb-Chapel of Mose*, Warminster, 1977.

Gardiner, A.H., *Ancient Egyptian Onomastica*, 3 vols., London, 1947.

Gardiner, A.H., *Late-Egyptian Miscellanies*, Bruxelles, 1937.

Gardiner, A.H., *Late-Egyptian Stories*, Bruxelles, 1932.

Gardiner, A.H., *Ramesside Administrative Documents*, Oxford 1948.

Gardiner, A.H., 'Ramesside Texts Relating to the Taxation and Transport of Corn', *JEA* 27 (1941), 19–73.

Gardiner, A.H., *The Wilbour Papyrus*, vols. II–IV, Oxford, 1948–1952.

Goelet, Ogden, "'Town' and 'Country' in Ancient Egypt", Hudson, M. and B.A. Levine ed. *Urbanization and Land Ownership in the Ancient Near East*, Cambridge, 1999, 65–116.

Goyon, Georges, 'Le Papyrus de Turin dit "des Mines d'Or" et le Wadi Hammamat', *ASAE* 49 (1949), 337–392 (with 2 pls.).

- Grandet, Pierre, *Le Papyrus Harris I*, 3 vols, Le Caire, 1994.
- Guksch, Heike, “‘Sehnsucht nach der Heimatstadt’: ein ramessidisches Thema?“, *MDAIK* 50 (1994), 101–106 (with 1 pl.).
- Habachi, Labib, *The Second Stela of Kamose and His Struggle against the Hyksos Ruler and His Capital*, Glückstadt, 1972.
- Haring, B.J.J., *Divine Households: Administrative and Economic Aspects of the New Kingdom Royal Memorial Temples in Western Thebes*, Leiden, 1997.
- Hoch, James E., *Semitic Words in Egyptian Texts of the New Kingdom and Third Intermediate Period*, Princeton, 1994.
- Janssen, Jac. J., *Grain Transport in the Ramesside Period: Papyrus Baldwin (BM EA 10061) and Papyrus Amiens*, London, 2004.
- Janssen, Jac. J., ‘A New Kingdom Settlement; The Verso of Pap.BM.10068’, *AoF* 19 (1992), 8–23.
- Kemp, Barry, *The City of Akhenaten and Nefertiti: Amarna and its People*, London, 2012.
- Lichtheim, Miriam, ‘The Praise of Cities in the Literature of the Egyptian New Kingdom’, Burstein, Stanley M. and Louis A. Okin ed., *Panhellenica: Essays in Ancient History and Historiography in honor of Truesdell S. Brown*, Lawrence, 1980, 15–23.
- Moeller, Nadine, *The Archaeology of Urbanism in Ancient Egypt From the Predynastic Period to the End of the Middle Kingdom*, Cambridge, 2016.
- Montet, Pierre, *Géographie de l’Égypte ancienne*, 2 vols. Paris, 1957, 1961.
- Murnane, William J., *Texts from the Amarna Period in Egypt*, Atlanta, 1995.
- Ragazzoli, Chloé, *Éloges de la ville en Égypte ancienne : Histoire et littérature*, Paris, 2008.
- Redford, Donald B., ‘The Hyksos Invasion in History and Tradition’, *Orientalia* 39 (1970), 1–51.
- Sandman, Maj, *Texts from the Time of Akhenaten*, Bruxelles, 1938.
- Sethe, Kurt und W. Helck, *Urkunden der 18. Dynastie*, Berlin 1927–1988.
- Simpson, William Kelly, *The Literature of Ancient Egypt*, Princeton, 2003.
- Spalinger, Anthony J., ‘A Garland of Determinatives’, *JEA* 94 (2008), 139–164.
- Yoyotte, Jean, ‘Le bassin de Djârroukha’, *Kêmi* 15 (1959), 23–33.
- Zandee, Jan, *De Hymnen aan Amon van Papyrus Leiden 1350*, Leiden, 1948.
- Zibelius, Karola, *Afrikanische Orts- und Völkernamen in hieroglyphischen und hieratischen Texten*, Wiesbaden, 1972.

エジプト地方都市の通時的盛衰

—アコリスの場合—

周藤芳幸

名古屋大学人文学研究科

中エジプトのミニア近郊、ナイルの東岸に位置する地方都市アコリスについては、過去40年間にこなわれてきた調査の成果を通じて、その都市景観が通時的にどのような変遷を遂げてきたのかという問いに対して、一定の見通しを提示することのできる段階に到達している。そこで、ここでは、エジプトにおける都市の成立と発展の過程を解明するための一助として、その概要を紹介することとしたい。

アコリスにおいて確認されている最古の遺構は、西区の崖面に掘り込まれた古王国時代第5王朝初期のマスタバ墓である。その周辺では、同じテラス上で数多くのシャフト墓が検出されているが、いずれも盗掘を受けた後、第三中間期に墓として再利用されているため、古王国時代の埋葬状況については明らかではない。これらのマスタバ墓やシャフト墓の存在は、アコリスがすでに古王国時代から居住されていたことを示しているが、残念ながら、これに対応する家屋の遺構などは集落域からはいまだに発見されていない。さらに、この時代におけるアコリスの集落の性格を考える上で問題となるのが、都市域の南約2 kmに位置し、「フレイザー・トゥーム」として知られている岩窟墓群の存在である。この第4王朝から第5王朝にかけての時期の墓に埋葬された有力者の拠点が現

在のアコリスの都市域内にあったのか、あるいはアコリスとは別に独立した集落がナイルの沖積平野に営まれていたのかによって、この地域の集落組織におけるアコリスの位置づけは大きく変わってくる。しかし、ここからさらに14 kmほど南に位置するザウィエト・エル・マイエティン（ザウィエト・スルタン）にも古王国時代の集落があり、第3王朝時代にはそこで小型のピラミッドも建設されている状況は、古王国時代のアコリスが必ずしもこの地域の集落組織の上で突出した位置を占めていたわけではなかったことを示唆している。

中王国時代になると、西方神殿域には4基の岩窟墓が、また西区崖面にも1基の岩窟墓が掘り込まれており、これらはアコリスがこの時代に地域の有力者が拠点とする一定規模の都市となっていたことを示している。西方神殿域の岩窟墓Bの地下墓室から、全長が2 mに及ぶ精巧な葬送船の模型が発見されていることも、これを裏付けるものであろう。しかし、よく知られているように、アコリスの南約30 kmに位置するベニ・ハサンでは、美しい壁画で装飾されたこの時代の州知事たちの岩窟墓を中心とする大規模な墓域が知られているため、この時代のアコリスの集落は、ほぼ確実にこのベニ・ハサンの被葬者たちの勢力下にあったものと推測される。



図1 南から望むアクリス都市域

アクリスの都市としての歴史を通観した際にもっとも興味深い現象は、そこでは古代エジプト文明の最盛期である新王国時代に関する証拠が際立って乏しいことである。どのような理由で新王国時代がアクリスの歴史における「暗黒時代」となっているのかは依然として不明であるが、この時代に属することが確実な唯一の遺構が、この時代の末期のものであることは、このような歴史像が調査の偏り等に由来する偶然の産物ではないことの傍証とみなすことができよう。この遺構とは、沖積平野に面した崖面に遺されたラムセス3世の像とカルトゥーシュであるが、中エジプトに分布するこのようなラムセス3世の浮き彫り（rock-cut stela）については、近年これが採石場に対する王

家の関心を反映しているという説が提唱されており、後述するヘレニズム時代におけるアクリスの状況と照らし合わせるときわめて興味深い。

新王国時代の場合とは対照的に、これに続く第三中間期の様相については、2002年から継続されている南区の調査により、基本となる土器編年の枠組から墓に埋葬されたミイラのCTスキャン結果にいたるまで、現在までに豊かな知見が蓄積されてきている。南区は、アクリス都市域の南西部に隆起する巨大な岩山の南斜面からその南隣の岩山の北麓までの鞍部を占めているが、ここでは調査区のほぼ全域で表土直下から第三中間期の家屋と特徴的な円形遺構が検出されている。土器型式からは前期、中期、後期の三段階が識別されてお



図2 北から望むアクリス南区

り、仮説的にはあるが、それぞれ第 20 王朝時代、第 21 王朝時代、第 22 王朝時代に比定されている。第三中間期のアクリスについて注目すべきことの一つは、大量のフェニキア系搬入土器の存在であり、それらは該期のアクリスの住民が周辺世界から孤立していたわけではなく、何らかの要因によって地中海世界とも関係を保っていたことを物語っている。南区北斜面で確認された皮革工場の製品も、おそらくそのような外部との関係の維持に寄与していたのであろう。

南区は第三中間期の末までに放棄され、墓域として利用されるようになるが、アクリスの都市域では末期王朝時代になると都市化が本格化したことが、北区の石材加工場の下層から検出された

この時代の日干煉瓦の都市壁の存在から明らかになっている。末期王朝時代のエジプト領域部について、ヘロドトスは「エジプトはアマシス王の支配下で空前の反映を示し、人の住む都市の数はエジプト国内で 2 万に達した」という有名な言葉を残しているが、北区の調査の成果は、アクリスもまたこの 2 万の都市のうちの一つであったことを示唆している。一方で、末期王朝時代の出土遺物には、外部との交渉を示すものが相対的に少ないことには留意が必要である。

アクリス遺跡では、19 世紀以来、ナイルの沖積平野に面した崖面に刻まれたプトレマイオス 5 世のための巨大なギリシア語磨崖碑文の存在が注目を集めていたが、その歴史的な意義が明らかになっ

たのは、ごく近年のことである。この碑文は、ヘルゲウスの子ハコリスなる者がプトレマイオス5世のためにイシス・モキアス女神のための聖域を奉納したことを、典型的なギリシア奉納碑文の定型句によって告げているが、その2行目に現れるプトレマイオス5世への添え名からは、これが刻まれたのが著名なロゼッタ・ストーンとほぼ同時代の前190年代半ばのことであったことが分かる。パピルス文書からの知見もまた、このハコリスがこの地を拠点とする在地エリートのエジプト人であり、前206年から前186年にかけてプトレマイオス朝のエジプト支配を揺るがせたテーバイスの大反乱に際して、彼がプトレマイオス朝支持の姿勢を堅持していたことを示唆している。ギリシアとエジプトそれぞれの碑文慣習を見事に融合させたアコリス遺跡の磨崖碑文は、この大反乱のさなかにあつて、ハコリスがこの政治的立ち位置をナイルに沿って移動する人々にアピールする目的で刻まれたのであろう。ケファラスの子ディオニュシオスの家族文書集積（前117-104年）もまた、この時期までにアコリスがギリシア系の兵士たちの駐屯地（garrison town）となっていたことを伝えているが、これらの証言の存在にもかかわらず、アコリスでは1981年から1992年にかけての日本隊による調査によっても、ヘレニズム時代の考古学的証拠はごく断片的にしか発見されることがなかった。

それだけに、1997年から2001年にかけておこなわれた北区の石材加工場での調査に際して、ギリシア系のアンフォラやテラコッタ像など、アレクサンドリアとの密接な繋がりを示す遺物が大量に出土したことは、碑文やパピルス文書から推測されていたように、ヘレニズム時代のアコリスがプトレマイオス朝の支配のもとで繁栄した都市で

あったことを裏付けることになった点で、大きな意義を持っている。特に、北区から出土したロドス産アンフォラの紀年銘の分析結果からは、これらの遺物が前2世紀を中心とする時代のものであることが明らかになっているが、このような知見は、アコリスという地方都市とアレクサンドリアとの関係が緊密化したのが南部大反乱に続く時期のことであったこと、そしてその要因が南部大反乱の時期にアコリスがプトレマイオス朝の側に与していた事情にあつたことを示唆しているのである。それでは、いったいなぜこの地の有力者はプトレマイオス朝との関係をことさらに重視していたのであろうか。

この点を究明する上で重要な手がかりとなったのが、北区から出土した石灰岩の石材である。これらの石材のなかでもっとも大きいブロックDは、長さが約14 m、縦と横がそれぞれ3 mほどある立方体の巨大な石材を円柱状に加工する途中で放棄されているが、これらの石材は、明らかにアコリスの近郊にある採石場からこの地に運ばれ、加工の後に船でここから運び出される予定だったと考えられる。問題はそのような作業がいつおこなわれていたかであるが、上述した前2世紀の文化層がこれらの石材を直接覆っている状況からは、これらの石材の加工もおそらくこれに近い時期におこなわれていたことが推測された。もちろん、その年代を石材そのものから知ることは不可能であるが、北区の調査後、アコリスの南約12 kmに位置するニュー・メニア古代採石場の調査において、そこで観察された膨大なギリシア語とデモティックの併記による作業記録システムがプトレマイオス2世から3世にかけての時期、すなわち前3世紀後半のものであることが判明し、さらに同じシステムの使用がアコリスのすぐ南にあるアコリス

南採石場でも確認されたことにより、北区における石材加工の時期も同時代のものである蓋然性がきわめて高くなった。採石業は、現代でもアコリス周辺では重要な地域の産業となっているが、それはおそらく古代においても同様であり、良質の石灰岩の採掘と加工という産業の存在こそが、アコリスとプトレマイオス朝の首都とを経済的に結びつける要因の一つであったことは疑いがない。

プトレマイオス朝時代の特徴的な土器片や大型の日干煉瓦はアコリス都市域に広く散布しており、この時代の居住範囲の広がりを見ているが、西方（ネロ）神殿と中央（サラピス）神殿とを二つの核とする都市プランが確立されたのは、ローマ帝政初期のことだったらしい。この時期に、西方神殿域では中王国時代の岩窟墓の床面が掘り下げられ、地元の神々とローマ皇帝とを祀る神殿に転用されるとともに、列柱を伴う前庭部が整備された。出土碑文史料は、このような神殿域の整備作業が、早くもティベリウス帝の時代に始まっていたことを示している。西方神殿域ではこの時期に参道の整備も進められたが、聖域の北門を構成する六角柱にコンモドゥス帝への奉納碑文が刻まれていることは、この事業が2世紀の末にもなお継続されていたことを示唆している。

西方神殿域とならぶもう一つの重要な聖域が、都市の中心軸上に位置することから中央神殿と呼び慣わされているサラピス神殿である。この場所がサラピス神への聖域として区画されるようになった正確な時期は不明であるが、第22軍団ディオタリアナに属する二人の百人隊長がそれぞれ奉納した碑文の存在からも、その起源が遅くとも前2世紀初頭にまで遡ることは確実である。この地におけるローマ軍団の役割に関しては、2003年にアコリス北採石場で再発見されたゼウス神への

祭壇に刻まれた碑文から、ドミティアヌス帝の時代にその指揮官たちが採石場での作業の監督にあたっていたことが判明している。このことは、ヘレニズム時代に盛んにおこなわれていた採石業が、ローマ帝政期にも依然としてアコリスでは重要だったことの証拠でもある。

アコリス遺跡の現地表面を覆っている膨大なコプト時代の土器片や日干煉瓦の建築遺構群は、ここではその後も7世紀末まで都市生活が続いていたことを証言している。しかし、700年頃には、この都市は大火によって廃墟と化した。その後、住民はおそらく遺跡の北、現在のテヘネ・エル・ジェベル村のある場所に居住地を移したのであろう。

このような通時的概観を通じて浮かび上がるのは、アコリスの地方都市としての盛衰がおそらく二つの要因によって大きく規定されていたという事実である。一つは、ナイルに沿ってその時々位置を変える政治的な中心との相対的な関係である。そもそも中エジプトは、古代エジプト文明における二つの伝統的な中心であるテーベを核とする上エジプトとメンフィスを核とする下エジプトとのあいだにあって、潜在的には常にこれらに対して従属的な位置に置かれていた。それは、アコリスにおいて豊かな都市生活の痕跡が残されているのが、これらのいずれかに置かれた伝統的な中心からの統一的な政治支配が弱体化していた時期、とりわけ第三中間期であることによく示されている。さらに、この構造に新たな局面を拓くことになったのが、地中海に面して築かれたアレクサンドリアの出現である。アレクサンドリアが従来のエジプト世界よりもはるかに広がりをもったヘレニズム文明世界の新たな中心として発展していったことは、アコリスにもこれまでとは異なる空間的な意義を与えることになった。というのも、ア

コリスは、アレクサンドリアとテーベとのちょうど中間点に立地していたからである。トゥナ・エル・ジェベルからの知見が示すように、プトレマイオス朝と中エジプトとの間には早くから特別な関係が結ばれていたようであるが、その関係が維持強化される上で決定的な転機となったのが南部大反乱であったことは疑いのないところである。このとき、アコリスを拠点とする在地エリートがプトレマイオス朝支持の旗幟を明確にしたことで、アコリスはヘレニズム時代の後半にプトレマイオス朝による上エジプト支配の重要な足がかりとして発展することができたのである。

もう一つの要因は、言うまでもなくアコリスの周辺に高品質の石灰岩を産出する採石場が存在したことである。建築技師クレオンのアーカイヴ(前3世紀中葉)が示すように、プトレマイオス朝による領域部の開発にあたっては、資材となる石灰岩の石材の調達が不可欠だった。この要因は、ヘレニズム時代においてだけではなく、先の要因と

は逆に、エジプトが統一王朝によって安定的に支配され、巨大なモニュメントなどが建造されていた時代におけるアコリスの繁栄を規定したのであろう。

広大なアコリスの都市域にあって、これまでに調査された区域は、きわめて限定的である。しかし、周辺の採石場も含めたアコリス遺跡の今後の調査は、中エジプトにおける都市の歴史に貴重な知見を提供し続けるであろう。

* 本稿は、2019年6月22日にベルリン自由大学でおこなった招待講演の概要(Y. Suto, “Akoris in a Diachronic Perspective,” *Preliminary Report Akoris* 2018, Nagoya 2019, 3-6)を改稿し、日本語訳したものである。アコリス遺跡におけるこれまでの調査は、その年ごとに概報として公刊されているが、それらについては <http://akoris.jp/archive.html> を参照されたい。

マルカタ都市王宮における景観と構造

西本真一

日本工業大学建築学部

新王国時代第 18 王朝のアメンヘテプ 3 世は、もともと古代エジプトが版図を拓いた時の王として記憶されて良いであろう。彼の記念神殿（葬祭殿）であるテーベのコーム・アル＝ヘタン（Kom al-Hetan）は、再利用を目的としてほとんどの石材が持ち出されたために、現在では神域の輪郭を辿ることさえ容易ではないが、今日のエジプトで最も大きな規模を誇る遺跡はカルナクのアメン大神殿であるが、これよりも遥かに規模が大きかったことが調査の結果、知られている（Haeny et al. 1981）。その前面の入口を守っていたのが一対からなるメンノンの巨像で、これにとどまらず、アメンヘテプ 3 世は各地に大きな建築を造営した。後の第 19 王朝の王ラメセス 2 世は時として「建築王」と呼ばれるものの、実はアメンヘテプ 3 世による建築の作法を真似た形跡がうかがわれ、建築王という称号は本来、アメンヘテプ 3 世にまず与えられるべきであったかもしれない。

この王が、同じテーベ西岸の外れに建造したのが日乾煉瓦造のマルカタ王宮である。長方形平面の巨大な人工湖ビルカト・ハブー（Birkat Habu）をナイル川の岸边に造り（Engelbach and Macaldin 1938; Yoyote 1959; Kemp and O'Connor 1974）、その長辺に沿って大小の王宮の他、アメン神殿や砂漠の謁見台などを建てた。数キロにわたって数々

の建物が造営されたこの複合施設は、もはや都市王宮と呼んでも差し支えないほどの規模を誇っており、事実、1970 年代の前半に当該遺跡を発掘調査した Kemp は、マルカタ王宮を“palace-city”と呼んでいる（Kemp 2018: *passim*）。時間の経過とともに少しずつ自然に成長を遂げた他の多くの古代都市とは異なり、短い時間の中で設計がおこなわれたもので、古代エジプト人が都市に何を求めたのかが逆照射されている遺構であるとみなすことも可能である。

アメンヘテプ 3 世の時代の王アクエンアテンが、メンフィスとテーベとの間のほぼ中央の地に遷都をおこなって築造したアマルナも都市王宮と称されて良い遺跡であるが、同時期に発見されながらも発掘の経過はかなり様相を異にする（Petrie 1894）。古代エジプトにおいて、このようにひとりの王によって短期間のうちに計画されて造られた都市的な大きさの王宮施設というものは、マルカタとアマルナを除くとほとんど類例を見ない。短期に計画されて造られたと思われるアマルナ都市王宮も念頭に置きながら、ふたりの王によって造られた古代エジプト新王国時代の都市の景観と構造について今後、考察を巡らせる必要がある。このふたつを本格的に比較した考察というものは、未だ発表されていないように思われる。

マルカタ王宮を語る際にまず念頭に置くべきは、1900年代の末から相次いで出版がなされたアメンヘテプ3世に関する数々の主たる論考（Berman 1990; Kozloff et al. 1992; O'Connor and Cline 1998; Cabrol 2000; Arnold 2002）とともに、マルカタ王宮について触れた3つの博士論文（Shoukry 2008; Emery 2014; Salland 2015）である。さらには最近まで発掘をおこなっていた Lacovara の調査隊による中間報告というべきものも散見され（Monnier forthcoming）、見逃すことができない。

これらの中で景観という観点から注目されるのは、人工池ビルカト・ハブーに沿って並べられた小山の列である。ひとつひとつは四角錐台のかたちを呈しており、これらを Kemp は「世界で最初のランドアート」と記した。ナイル川からの眺望を特に意識して造形が図られたものであり、おそらくはアマルナ王宮にあっても河岸には目を惹く建築的な造形が凝らされていたであろう。この小山の列とその背後に散在しているマルカタ王宮の諸施設との関係において、軸線が揃えられている建物群と、若干のずれた傾きを有しているものが看取される。都市の全体構成を統一する意味で、この軸線の存在は大きいと見なければならぬ。それでは軸線のずれは、いったい何を意味するだろうか。O'Connor は土地の起伏に合わせて築造がおこなわれた結果であるとの考えを述べたが、W. R. Johnson はこれに対し、構築順序に関わる問題として取り上げ、軸線の傾きと建造年代とを絡めて論じた（O'Connor and Cline 1998）。彼の見方は以降の論者に多大な影響を与えており、例えば Emery の博士論文では傾きに従ってマルカタ王宮内の諸施設を第1期から第3期までの3つに区分し、図示をおこなっている。

だがこの軸線の問いは古代エジプト建築の全体

を俯瞰しながらもう少し入念に考える必要があり（cf. Spence 1997）、急いで造られてわずか10年間しか使用されなかったと見られるマルカタ王宮の不統一な部分を拾い上げ、丁寧に考究していくことが求められる。

この研究テーマは、古代エジプトにおいて王宮とは果たして何であったのかという、古くて新しい問題へと繋がるはずである。王宮は統治のための機械なのではないか（Uphill 1972）という有名な反問を、改めて熟考することが課題となっている。

参考文献

Arnold, D. 2002 “The Royal Palace. Architecture, Decoration and Furnishings,” in Ch. Ziegler (ed.), *The Pharaohs*. New York: Rizzoli, 271–295.

Berman, L.M. (ed.) 1990 *The Art of Amenhotep III: Art Historical Analysis*. Cleveland: Cleveland Museum of Art.

Cabrol, A. 2000 *Amenhotep III: le magnifique. Collection Champolion*. Monaco: Éditions du Rocher.

Emery, V.L. 2014 *The House of Rejoicing: Malqata as the Festival Palace of Amenhotep III*. Dissertation, University of Chicago, 2014.

Engelbach, R. and Macaldin, J. 1938 “The Great Lake of Amenophis III at Medinet Habu,” *Institut d'Égypte, Bulletin* 20: 51–61.

Haeny, G., Ricke, H. and Habachi, L. 1981 *Der Totentempel Amenophis' III; Zur Ausstattung des Tempels*. Beiträge zur ägyptischen Bauforschung und Altertumskunde 11. Wiesbaden: Steiner.

Kemp, B. J. 2018 (3rd ed.) *Ancient Egypt: Anatomy of a Civilization*. First published in 1989. London and New York: Routledge.

Kemp, B. J. and O'Connor, D. 1974 “An Ancient Nile Harbour: University Museum Excavations at the

- ‘Birket Habu,’” *The International Journal of Nautical Archaeology and Underwater Exploration* 3.1: 101–136.
- Kozloff, A.P., Bryan, M.B. and Berman, L. M. 1992 *Egypt’s Dazzling Sun: Amenhotep III and His World*. Cleveland: Cleveland Museum of Art and Indiana University Press.
- Monnier, F. forthcoming “Scientific Reconstruction of the Palace of Amenhotep III at Malqata,” in P. Lacovara (ed.), *Studies on the Palace of Amenhotep III at Malqata*.
- O’Connor, D. and Cline, E.H. (eds.) 1998 *Amenhotep III: Perspectives on His Reign*. Ann Arbor: University of Michigan Press.
- Petrie, W.M.F. 1894 *Tell el Amarna*. London: Methuen.
- Salland, P.C. 2015 *Palatial Paintings and Programs: The Symbolic World of the Egyptian Palace in the New Kingdom (c. 1550–1069 BCE)*. Dissertation, New York University.
- Spence, K. 1997 *Orientation in Ancient Egyptian Architecture*. Dissertation, University of Cambridge.
- Shoukry, N.M 2008 *Histoire de la cite d’Amenhotep III à Thèbes-Ouest (Malqatta): Étude historique, archéologique et religieuse*. Dissertation, Université de Helwan.
- Uphill, E. 1972 “The Concept of the Egyptian Palace as a Ruling Machine,” in P. J. Ucko, R. Tringham and G. W. Dimbley (eds.), *Man, Settlement and Urbanism*, London: Duckworth, 721–734.
- Yoyote, J. 1959 “Le bassin de Djârroukha,” *Kemi* 15: 23–33.

研究項目 B01 「西アジアの環境と資源」

計画研究 04

古代西アジアをめぐる水と土と都市の
相生・相克と都市鉱山の起源

アイソスケープと考古学

中野 孝教

総合地球環境学研究所（名誉教授）

1. 産地研究とアイソスケープ：地域の化学指紋となる安定同位体比

昔の人々は、どこで動植物を採取し、どのような水を使って生活や農業を営み、どこの岩石や鉱石を利用しながら社会を築いてきたのだろう。人々の活動や社会の変容の解明は、考古学など人類の歴史を扱う分野の大きな目的である。各種の遺物や遺構を作っている石材・木材などの産地がわかれば、人類史の解明につながる重要な情報が得られる。分析化学や地球化学の発展とともに、物質を構成する元素や安定同位体の存在度には地域性があることがわかり、人類史研究にも適用されてきた。

自然界には 92 種類の元素があり、そのうち 60 元素に同位体比分析が可能な二種類以上の安定な同位体（アイソトープ）が存在する。分析には、試料全体を対象とするバルク分析法と微小領域を対象とする局所分析法がある。バルク分析法は試料を溶液や粉末にしておこなうので、文化財などへの適用には限界がある。しかし現在では、微量試料でも 50 以上の元素の定量分析が可能になっている。安定同位体比もほとんど全ての元素を測定できるようになってきた。一つの試料から数多くのデータを獲得できればできるだけ、利用可能な産地指標は多くなる。けれども、それだけでは

産地の推定は難しい。対象となる遺物や遺構物だけでなく、その原材料である天然物についても同様な情報が必要であり、両者の比較によって産地の同定や識別が可能になるからである。

産地研究に利用できる地球化学情報は、ある地点での時間変化よりも地理的变化の方がはるかに大きくなければならない。岩石の場所は人類史スケールでは変わらないので、岩石の元素組成はそのまま石材や石器の産地指標になる。しかし安山岩や花崗岩のように、同じ岩石種は元素組成が類似しているため、産地指標の抽出には微量元素も含めた岩石化学的な知見を必要とする。しかもその適用範囲は石材や石器に限定される。これに対して安定同位体比は元素の指紋的性質があること、また同位体比の組み合わせが元素によって決まっているので、元素組成に比べて適用範囲が広い。

安定同位体比は二種類の安定同位体の存在度で表記される。同位体比が変化する要因には、同位体分別作用と放射性起源の安定同位体の存在度が変化する二つの場合がある。前者はどの同位体でも生ずるが、水素、酸素、炭素、窒素など質量数が低い軽元素の安定同位体は、質量差が大きいため同位体比の変化が大きい。地下水や河川水などの陸水の水素・酸素同位体比は、地球規模の水

循環の過程で非常に大きい地域性が生ずる。その地理的特徴は生物に反映されるので、水の産地だけでなく生物の生息地の指標にもなりうる。しかし生物部位での同位体分別が大きく、考古遺物への適用においては変質による評価なども必要になる。炭素と窒素の安定同位体比は食物の起源や食性によって変化するので、古代人の食性解析に利用され、農産物や食品の産地判別にも利用されている。しかし生物の炭素と窒素は、同位体比の地域的変化が小さい二酸化炭素や均質な窒素などの大気を起源としている。両元素の安定同位体比は、光合成回路や食性のほか、生物生産などに伴う環境変化によっても変化する。生物化学的な要因で地域性が生ずるので、産地指標として利用には限界がある。例えば現代人の毛髪は炭素・窒素同位体比は食性の違いを反映した国別変化が知られているが、日本国内では地域性がない（Kusaka et al. 2015）。多くの岩石鉱物に含まれるこれら軽元素は微量であり、その同位体分析は煩雑なこともあって、石材などに広く適用するのは難しい。

上記の軽元素（あるいは生元素）を除くと、人間が生活する陸域の水や生物に含まれている多くの元素は、地表を広く覆う岩石や鉱物・燃料資源などの岩石圏にその起源がある。岩石圏由来の元素のなかでも、ストロンチウム（Sr）やネオジウム（Nd）、鉛（Pb）などの元素は放射性元素に由来する安定同位体を含んでいる。各元素の安定同位体比は、同じ岩石であっても形成した地質時代や成因によって異なることが多く、大きな地域性が知られている。安定同位体の質量差も小さいので同位体分別程度も小さい上に、Sr や Nd の安定同位体比（ $^{87}\text{Sr}/^{86}\text{Sr}$ や $^{143}\text{Nd}/^{144}\text{Nd}$ ）は同位体分別作用を補正して分析できる。このため、これら造岩元素の同位体比の特徴は周囲の水や生物にも反映

される（Nakano 2016）。こうした安定同位体比の地域性を利用すれば、石材だけでなく土器や植物遺物（樹木や農産物など）、動物遺骸（貝殻、骨、歯など）といった多くの考古試料の産地推定も期待できる。その中でも、ストロンチウムの安定同位体比（ $^{87}\text{Sr}/^{86}\text{Sr}$ ）は古くから世界各地の岩石について研究されており、元素組成とともにデータベース化も進んでいる。

安定同位体比の分布は欧米ではアイソスケープ（同位体地図あるいは同位体景観）と呼ばれており、様々な物質や元素について研究が進んでいる（West et al. 2009）。岩石のアイソスケープはそのまま採石地情報として、生物のアイソスケープは生息地の保全や、農産物や食品の偽表示防止にも利用可能と期待できるからである。石器や金属器の安定同位体比を、原産物である岩石や鉱物のアイソスケープと比較できれば、それら産地の判別確度は向上する。人骨も含めた生物遺骸においても、生物が摂取する水や動植物のアイソスケープがあれば、生活範囲や移動履歴に関する情報も期待できる。このためアイソスケープの研究は、環境学や生態学、食品研究だけでなく考古学の分野でも高い注目を集めている。しかし安定同位体比によって変化要因は異なり、岩石由来と考えられる Sr 同位体比についても、産地指標としての有効性が十分に理解されているわけではない。

地質図は岩石や地層の分布を地図化したものである。日本は狭い国土の割に地質が多様であり、シームレス地質図と呼ばれるデジタル地質図や、研究された多くの岩石の元素組成や Sr 同位体比がデータベース化されている。これらを利用し、岩石と水や生物の Sr 同位体比の関係を明らかにできれば、産地研究における安定同位体比やアイソスケープの有効性を実証できる。ここでは、筆

者らが最近報告した日本の地下水 (Nakano et al. 2020) や野菜 (Aoyama et al. 2017) の研究事例を紹介し、歴史・人類学分野におけるアイソスケープを用いた産地研究の可能性を考えてみたい。

2. 日本の岩石の Sr アイソスケープ

シームレス地質図では、地質年代を考慮して地質を 194 種類 (あるいは 386 種類) に区分している。地質学的特徴が同じ地域は地質区と呼ばれ、類似した岩石で構成される。地域性が強い地質と陸域の水や生物の化学的性質の分布関係を明らかにするには、地質区を考慮した比較が有効である。地質区を考えて日本列島の岩石を区分すると、付加体 (AC: Accretionary prism) と呼ばれる古生代から新第三紀の堆積岩類、花崗岩を主とする中生代から新第三紀の深成岩類 (MNpl: Mesozoic-Neogene igneous rock mainly of plutonic rocks)、同時代の変成岩類 (MET: Metamorphic rocks)、グリーンタフ (GT: Green Tuff of Neogene time) と呼ばれる日本海側に広く分布する新第三紀の火山岩 (GTvr: volcanic rocks of GT) や堆積岩 (GTsr: sedimentary rocks of GT)、第四紀の火山岩 (Qvr: Quaternary volcanic rocks)、それに地表を広く覆う第四紀の堆積物に分けられる (図 1)。付加帯の岩石でも、SiO₂ を主とする堆積岩類 (ACsr: siliceous rock of AC、砂岩・頁岩・チャート) と CaCO₃ を主とする石灰岩 (AClm: limestone of AC) は化学的性質が大きく異なるので細分した。中生代から新第三紀の堆積岩類はそれ以前の岩石を供給源としており、地球化学的な類似性や分布が限られていることから、こ

こでは付加体のケイ質堆積岩類に区分した (ACsr: Sedimentary rocks from AC、MNpl、MET)。第四紀堆積岩の Sr 同位体比は報告例がないが、上記した 7 種類の地質や地下水の Sr 同位体比はそれぞれ特徴があり、図 2 に箱ひげ図で示した。

最も低い Sr 同位体比を示すのは第四紀の火山岩である。日本の火山の Sr 同位体比の全容は、野津らの研究 (Notsu and Nakamura 1988; Notsu et al. 1983, 1985, 1987) によって明らかにされている。一つの火山でも様々な元素組成を持つ火山岩 (玄武岩や安山岩、流紋岩など) が分布するが、Sr 同位体比が高くなるほど火山体での変化も大きい。しかし多くの火山の Sr 同位体比は 0.706 以下であり、火山体内の変化は 0.0001 程度に過ぎない。このような均質性があるので、異なる元素組成をもつ火山岩であっても、Sr 同位体比を用いて火山を絞り込むことが出来る (図 3)。

日本列島の地質はフォッサマグナと呼ばれる断

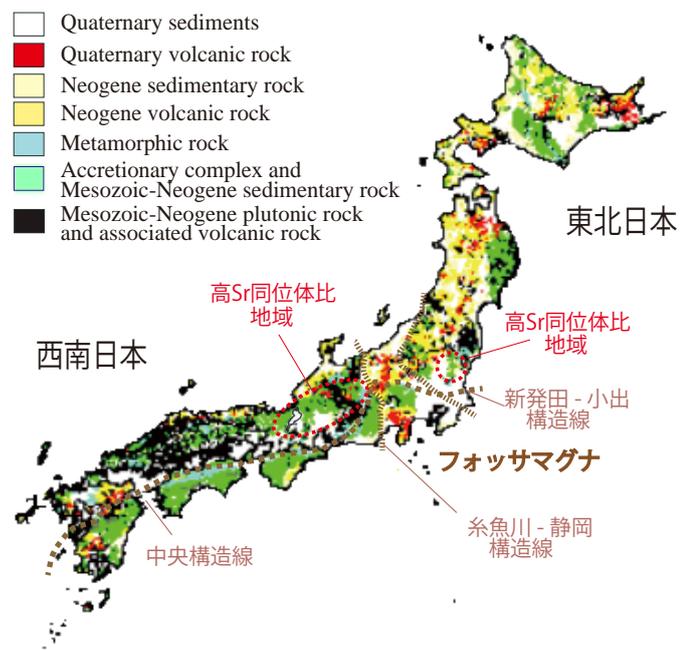


図 1 日本列島の地質区分

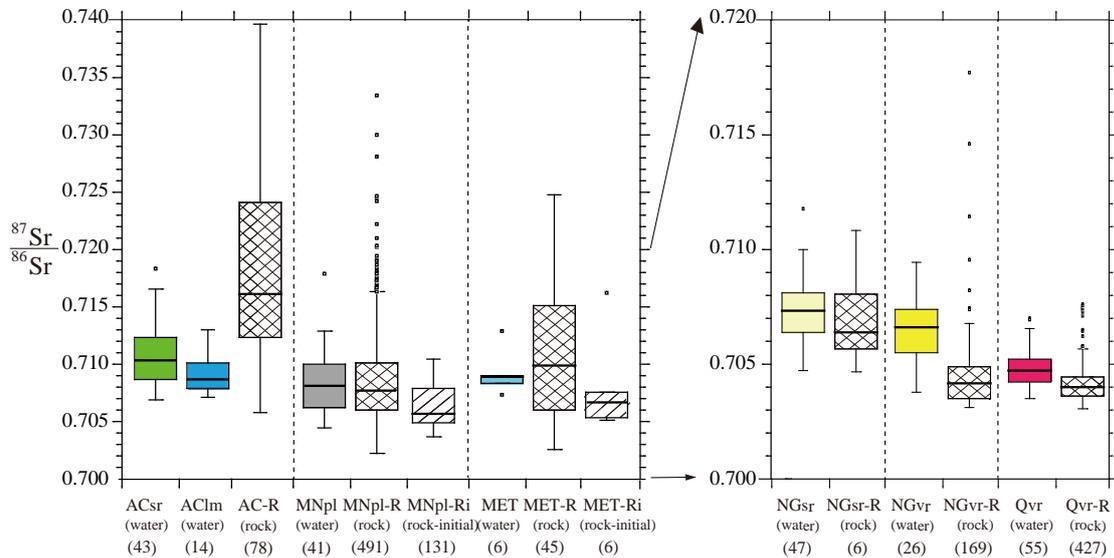


図2 日本の岩石タイプと地下水の Sr 同位体比の関係を示す箱ひげ図：
 () 内の数字は試料数。-R は岩石の Sr 同位体比を示す。

裂帯により、東北日本と西南日本に二分される。フォッサマグナには北から南にかけて焼山から浅間山、八ヶ岳、富士山などの活火山が広く分布する。これら火山の Sr 同位体比は低く (<0.7047)、北海道の火山も同様に低い。東北地方の火山は日本海側から太平洋側に向かって Sr 同位体比が高くなる傾向が知られているが、関東地方の赤城山はとくに高い。西南日本の北九州（九重、阿蘇、雲仙）、南九州（霧島、桜島、開聞岳）、山陰（大山、三瓶山など）の火山の Sr 同位体比は、東北日本やフォッサマグナ地域の火山に比べて高く、中部地方の木曾御岳周辺はとくに高い。代表的な石器である黒曜石は非常に高いケイ酸（SiO₂）濃度で特徴づけられる火山岩であるが、Sr 同位体比を利用することでその産地を絞り込むことができるだろう。

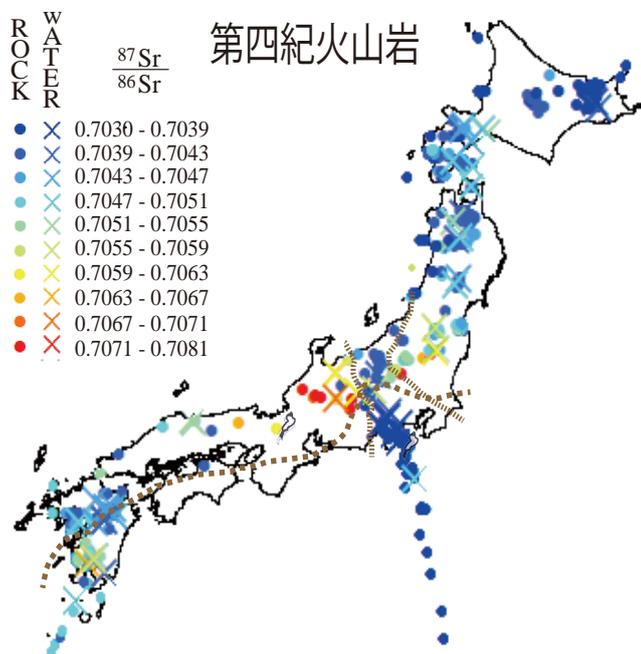


図3 第四紀火山と地下水の Sr 同位体比の関係：○印は岩石、×印は地下水。ISTL(糸魚川—静岡構造線)と SKIL(新発田—小出構造線)の間の地域がフォッサマグナ。

これに対して高い Sr 同位体比を示す岩石は、中生代の花崗岩を主とする深成岩類 (MNp 1) と付加帯のケイ質堆積岩 (ACsr) である。深成岩は石材に広く利用されているが、その Sr 同位体比は西南日本の京都から長野にかけて、東北日本でも栃木や茨城で高い傾向がある。同地域の付加体のケイ質堆積岩は、花崗岩類よりもさらに高い Sr 同位体比で特徴づけられる (図 4A)。付加体に多く見られるチャートはケイ質堆積岩の一種で、石器の原材料の一つである。チャートの Sr 同位体比や元素組成の地理的変化は明らかになっていないが、それらの地球化学データも産地指標として利用できるだろう。岩石のネオジム同位体比 ($^{143}\text{Nd}/^{144}\text{Nd}$) も大きな地域性があり、一般に Sr 同位体比と負の相関を示す。両同位体比を利用すれば、石材産地をより高い確度で識別できると期待できる。

3. 水と野菜の Sr-S アイソスケープ

日本でもボトル水が全国で利用されるようになったが、その原水は温泉や湧水 (Notsu et al. 1991) と同じ地下水である。地下水の Sr 同位体比は時間変化が非常に小さいいっぽうで、地域性がたいへん大きい。ボトル水などの日本の地下水の Sr 同位体比をまとめると、岩石と類似した Sr アイソスケープが得られた (図 4B; Nakano et al. 2020)。この結果は、地下水の Sr が周囲の岩石に由来することを示している。河川水や湖沼水などの地表水も一つの水系では地下水と互いつながっているもので、地下水の Sr 同位体比は地表水にも反映される。一つの河川でも流域地質を反映して地点によって Sr 同位体比は変化するが、広域的

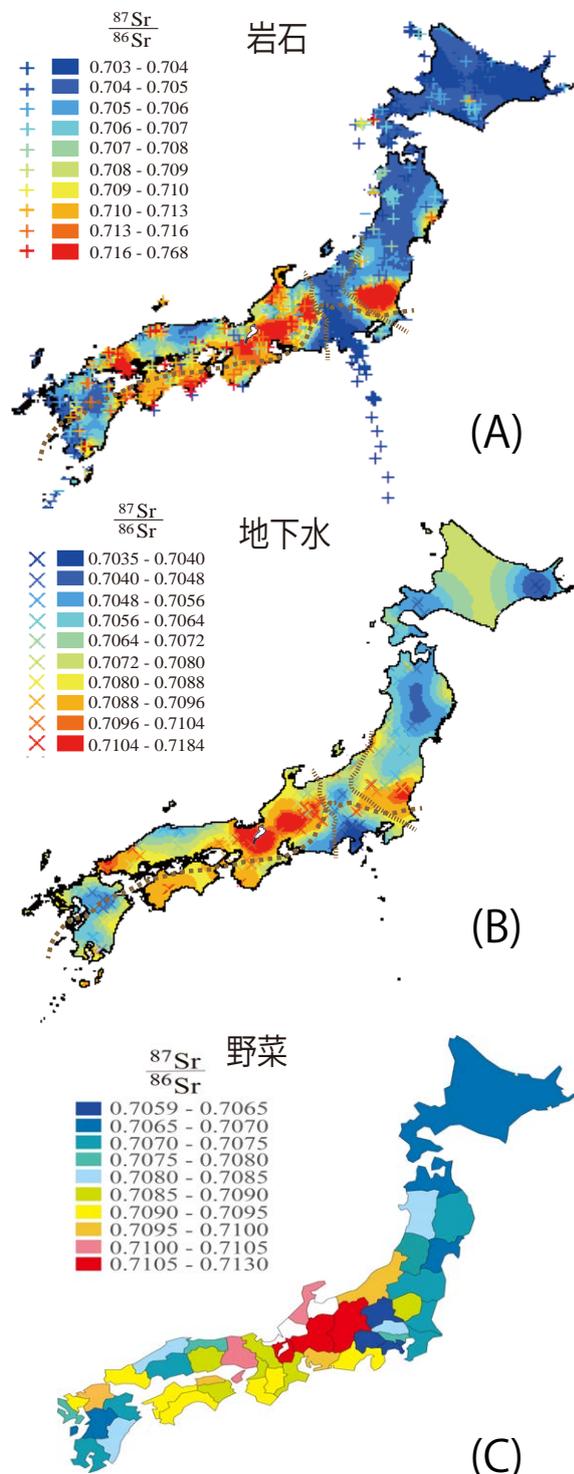


図4 岩石 (A)、地下水 (B)、野菜 (C) の Sr アイソスケープ

に見れば地下水の Sr アイソスケープは河川水にも反映される。生物は環境水と同じ Sr 同位体比を示すので、これら陸水の Sr アイソスケープはイネなどの水生生物や生活範囲が狭い貝類や淡水魚の生息地指標としてそのまま利用できる。陸水の Sr 同位体比は基本的に流域地質を反映するので時間変化も小さい。遺跡からは、コメだけでなくパピルスやヨシなど植物や貝殻なども出土する。地下水や地表水の Sr アイソスケープがあれば、これら考古遺物の Sr 同位体比と比較することで、それらの産地推定が可能となる。

ムギや野菜などの陸上植物は、多くの樹木や植物と同じように土壤に存在する水（土壤水）を介してミネラル成分を吸収する。これらミネラル成分の多くは土壤の有機物や鉱物粒子に強く吸着しており、生物と容易に交換するので交換性プールと呼ばれている。交換性プールの Sr 同位体比は土壤水と良い一致を示し安定しているため、陸上植物は一般に部位による Sr 同位体比の変化が小さい。日本の野菜の Sr 同位体比を県別単位で見ると、岩石や地下水の Sr アイソスケープと類似している（図 4C）。野菜などの畑作は、稲作に比べて肥料由来のミネラル成分を多く含んでいるが、このような類似性は、野菜であっても含まれている Sr が主に周辺の岩石に由来することを示しており、Sr 同位体比が産地研究に利用できることを示している。植物中の Ca は主に細胞壁に多いので、腐食しても Sr 同位体比は余り変わらないと考えられる。水や土壤交換性の Sr は生物に利用可能であるた

め、生物に利用可能 Sr（Bioavailable – Sr）として Sr 同位体比を用いた研究が進んでいる（Willems et al. 2018）。

しかし土壤水は、地下水に比べて降水由来の成分の寄与が強く、基盤や流域の地質が同じであっても、植物や交換性プールの Sr 同位体比は地下水や地表水と一般に異なる。実際、岩石と地下水、野菜の Sr 同位体比は同じ地域でも有意な違いが見られる。図 5 は昨年報告されたヨーロッパ全域にわたる Bioavailable-Sr のアイソスケープである（Hoogewerff et al. 2019）。同地域では、ボトル水の Sr アイソスケープも報告されている（Voerkelius et al. 2010）。EU でも両者の全体の傾向は類似しているが、ボトル水の方が Sr 同位体比の変化が大きい。このように異なる物質の間での Sr アイソスケープの不一致を少なくするには、降水が土壤水となり、さらに地下水や地表水になる化学

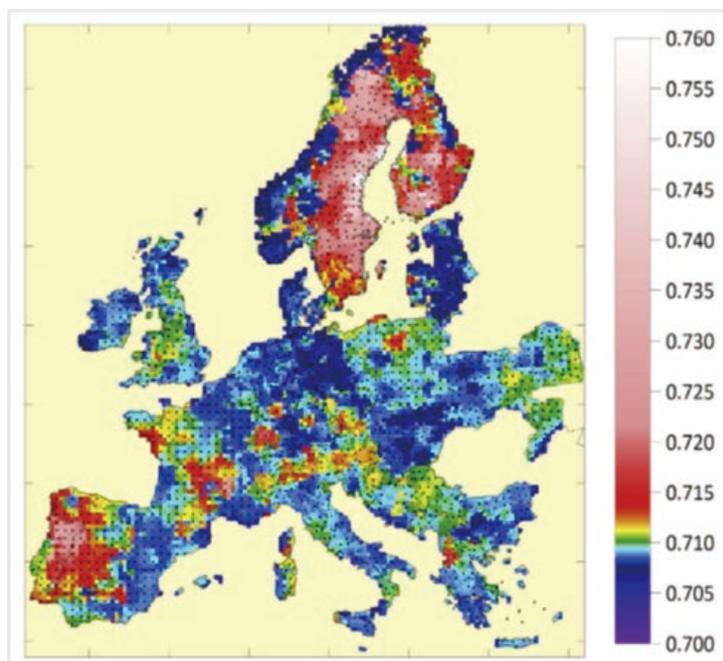


図 5 EU の陸上植物に利用可能な Sr アイソスケープ：Hoogewerff ら (2019) より引用。北欧は先カンブリア時代の花こう岩質が広く分布するため、日本では見られない非常に高い Sr 同位体比を示す。

風化プロセスに関する基礎的研究が必要である。河川水や地下水の Sr アイソスケープについては、化学風化を考慮したモデルが提案されている (Bataille and Bowen 2012)。化学風化は、炭酸や硫酸などの酸が岩石と反応して中和するプロセスであり、両酸の主成分である炭素や硫黄 (Burke et al. 2018) の全球規模での収支とも深く関係する。陸域の生態系や人間社会に対する酸性雨の影響評価などの環境研究だけでなく、地球史や古環境を扱う地球惑星研究の中心課題とも直接関わっている。化学風化の全容解明には、岩石や土壌の鉱物だけでなく、降水や各種酸に対

する化学反応性などの知見を必要とするため、十分な解明はなされていない。Sr アイソスケープを再現する現在の化学風化モデルは、陸水の Sr が全て岩石に由来すると仮定しており、降水などの環境要素に由来する Sr は考慮されていない。岩石と河川水の Sr 同位体比の不一致の要因として、風化しやすい炭酸塩が考えられているが、その実証もなされていない。Sr だけでなくアイソスケープモデルの高度化には、さらなる研究を必要とするが、産地判別の確度向上を図るには、異なる元素のアイソスケープが有効である。

硫黄の安定同位体比 ($^{34}\text{S}/^{32}\text{S}$) は、Sr や Nd 同位体比と異なり同位体分別によって変化するが、多くの岩石は黄鉄鉱のような硫化物や石膏のような硫酸塩鉱物を含んでいる。海水や石炭、石油も硫黄を多く含み、人体にもリンと同程度の硫黄が含まれている。図 6 は、ボトル水の硫黄アイソスケープを示したものである。日本の降水の硫黄同位体比 ($\delta^{34}\text{S}$) は季節変化が大きいものの、年平

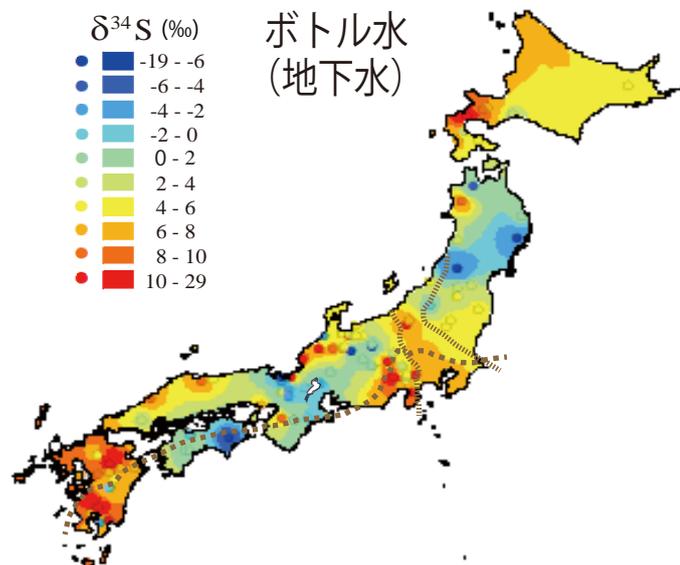


図6 ボトル水の硫黄アイソスケープ

均値は 5‰ 前後でプラスの値を示す。第四紀火山岩は硫黄濃度が高く、硫黄同位体比 (~6‰) (Ueda and Sakai 1984) は降水と類似する。これに対して、付加体の堆積岩は負の $\delta^{34}\text{S}$ 値を示すことが知られており (Kajiwara and Kaiho 1992; Kajiwara et al. 1994)、同地域の表流水にも反映されている (Nakano et al. 2008; Sase et al. 2019)。付加体地域のボトル水は負の値を示しており、試料が多い西南日本では Sr 同位体比との間に弱い負の相関が見られる。陸水は Sr に比べて降水に由来する硫黄をより多く含んでいるが、ボトル水など地下水には、岩石由来の硫黄の寄与が明らかに認められる。硫黄 (S) アイソスケープは水や生物の産地指標としての利用が期待できる。

4. 考古学とアイソスケープ

地球環境問題が人類の共通課題と理解され、文理を問わず持続可能な社会の発展に資する研究が重視されて四半世紀が経過した。人間社会の持続

的發展には、環境・災害リスクの要因である自然資源の開発・利用の観点から、様々な地域で起こった文明の成立から発展、崩壊の歴史を明らかにする必要があります。アイソスケープは、岩石や土壌、水、生物などに含まれる元素の現在の安定同位体比の地図であり、地域の自然資源の多様性を示す化学情報として利用できる。これら様々な物質について異なる元素のアイソスケープがあれば、各物質を対象とする研究分野だけでなく、それら相互の関係、つまり地球環境研究のボトルネックとなっている環境要素のつながりが明らかになってくる。Sr アイソスケープの事例としてアメリカのマリファナの産地研究（West et al. 2009）が挙げられているように、アイソスケープは安全・安心な社会の基盤情報となりうる。考古・歴史試料と現在試料のアイソスケープの両者を利用することで、現在と過去をつなげる産地研究は、地域資源を生かし環境リスクを軽減する未来社会の提案を意図している。

筑波大学の分析センターには、多くの元素を分析できる共同利用機器類が設置されており、元素組成についてはバルク分析も局所分析も可能である。地球科学系には同位体比や元素組成の局所分析が可能な質量分析装置も設置されている。人類史研究に必要な数多くの考古試料もあり、これら各機器を有機的に利用することで、農業や生活に利用されていた水や食料だけでなく、石や土、金属の起源や交流などの解明も進むと期待される。西アジアでは考古試料だけでなく現在の環境試料の入手も難しいので、現状ではアイソスケープの作成は不可能に近い。しかし、アイソスケープ的な研究の可能性や問題点を明らかにしておくことは、次の課題の発掘につながるだろう。

アイソスケープの作成には多くの試料を必要と

する上に、試料は無限にある。これもアイソスケープ研究のボトルネックになっているが、空間スケールの違いによって地図から得られる情報は異なる。様々な空間スケールのアイソスケープが得られるようになればなるほど、研究は進展し、社会の多様なニーズにも応えうると期待できる。そのためには、データが蓄積され再利用できるようになることも必要である。多くの人々は、洪水や沿岸流などによって土砂が運ばれて生じた、第四紀の堆積物で構成される平野や盆地、台地で生活している。より狭い範囲で、堆積物と基盤岩の化学地図があれば、堆積物の後背地や土砂供給といった地質学的研究だけでなく、環境評価に関する有用な知見も得られる。産業総合技術研究所が作成した日本全体の河川堆積物の元素分布地図は環境大臣賞の対象となったが、名古屋大学ではその Sr アイソスケープが作成されており、大学教育のなかで地図作りがおこなわれてきた（Asahara et al. 2006; Yamamoto et al. 2007）。第四紀堆積物を基盤とする土壌には、大気降下物由来の物質が多く含まれているが、日本各地の降水の量や質は気象庁や環境省のデータベースが整備されている。これら既存のデータに、各地で得られる環境試料の地球化学データを再利用できるようになれば、アイソスケープの実態解明とともにそのモデル化研究も進展するのではないだろうか。本研究を通して、このような検討を進める予定である（中野 2020）。

参考文献

Aoyama, K., Nakano, T., Shin, K-C., Izawa, A. and Morita, S. 2017 Variation of strontium stable isotope ratios and origins of strontium in Japanese vegetables and comparison with Chinese vegetables, *Food Chem.* 237: 1186–1195. <https://doi.org/10.1016/>

j.foodchem.2017.06.027

Asahara, Y., Ishiguro, H., Tanaka, T., Yamamoto, K., Mimura, K., Minami, M. and Yoshida, H. 2006 Application of Sr isotopes to geochemical mapping and provenance analysis: The case of Aichi Prefecture, central Japan. *Applied Geochemistry* 21: 419–436. doi:10.1016/j.apgeochem.2005.12.003.

Bataille, C. P. and Bowen, G. J. 2012 Mapping $^{87}\text{Sr}/^{86}\text{Sr}$ variations in bedrock and water for large scale provenance studies, *Chem. Geol.* 304/305: 39–52. doi:10.1016/j.chemgeo.2012.01.028.

Burke, A., Present, T. M., Paris, G., Rae, E. C. M., Sandilands, B. H., Gaillardet, J., Peucker-Ehrenbrink, B., Fischer, W. W., McClelland, J. W., Spencer, R. G. M., Voss, B. M. and Adkins, J. F. 2018 Sulfur isotopes in rivers: Insights into global weathering budgets, pyrite oxidation, and the modern sulfur cycle, *Earth Planet. Sci. Lett.* 496: 168–177. <https://doi.org/10.1016/j.epsl.2018.05.022>

Hoogewerff, J., Reimann, C., Ueckermann, H., Frei, R., Frei, K. M., Aswegen, T. V., Stirling, C., Reid, M., Clayton, A. and Ladenberger, A. The GEMAS Project Team 2019 Bioavailable $^{87}\text{Sr}/^{86}\text{Sr}$ in European soils: A baseline for provenancing studies. *Science Total Environ.* 672: 1033–1044. <https://doi.org/10.1016/j.scitotenv.2019.03.387>.

Kajiwarra, Y. and Kaiho, K. 1992 Oceanic anoxia at the Cretaceous/Tertiary boundary supported by the sulfur isotopic record. *Palaeog. Palaeoc. Palaeoeco.* 99: 151–162.

Kajiwarra, Y., Yamakita, S., Ishida, K., Ishiga, H. and Imai, A. 1994 Development of a largely anoxic stratified ocean and its temporary massive mixing at the Permian/Triassic boundary supported by the sulfur isotopic record. *Palaeog. Palaeoc. Palaeoeco.* 111: 367–379.

Kusaka, S., Ishimaru, E., Hyodo, F., Gakuhari, T., Yoneda, M., Yumoto, T. and Tayasu, I. 2015 Homogeneous diet of contemporary Japanese inferred from stable isotope ratios of hair, *Nature*, DOI: 10.1038/srep33122.

Nakano, T. 2016 Potential of stable isotope ratios

of geological origin in earth environmental studies, *Proc of the Japan Acad., Ser. B* 92: 167–184. <https://doi:10.2183/pjab.92.107>

Nakano, T., Tayasu, I., Yamada, Y., Hosono, T., Igeta, A., Hyodo, F., Ando, A., Saitoh, Y., Tanaka, T., Wada, E. and Yachi, S. 2008 Effect of agriculture on water quality of Lake Biwa tributaries, Japan, *Science Total Environ.* 389: 132–148. doi:10.1016/j.scitotenv.2007.08.042

Nakano, T., Yamashita, K., Ando, A., Kusaka, S. and Saitoh, Y. 2020 Geographic variation of Sr and S isotope ratios in bottled waters in Japan and sources of Sr and S. *Science Total Environ.* 704: 135449, <https://doi.org/10.1016/j.scitotenv.2019.135449>.

Notsu, K. and Nakamura, Y. 1988 Strontium isotopic composition of oil-field and gas-field waters, Japan. *Appl. Geochem.* 3: 173–176.

Notsu, K., Isshiki, N. and Hirano, M. 1983 Comprehensive strontium isotope study of Quaternary volcanic rocks from the Izu-Ogasawara arc. *Geochem. J.* 17: 289–302.

Notsu, K., Kita, I. and Yamaguchi, T. 1985 Mantle contamination under Akagi volcano, Japan, as inferred from combined Sr-O isotope relationships. *Geophys. Res. Lett.* 12(6): 365–368.

Notsu, K., Aramaki, K., Oshima, O. and Kobayashi, Y. 1987 Two overlapping plates subducting beneath central Japan as revealed by strontium isotope data, *Jour. Vol. Geo. Res.* 32: 195–207.

Notsu, K., Wakita, H. and Nakamura, Y. 1991 Strontium isotopic composition of hot spring and mineral spring waters, Japan. *Appl. Geochem.* 6: 543–551.

Sase, H., Takahashi, M., Matsuda, K., Sato, K., Tanikawa, T., Yamashita, N., Ohizumi, T., Ishida, T., Kamisako, M., Kobayashi, R., Uchiyama, S., Saito, T., Morohashi, M., Fukuhara, H., Kaneko, S., Inoue, T., Yamada, T., Takenaka, C., Tayasu, I., Nakano, T., Hakamata, T. and Ohta, S. 2019 Response of river water chemistry to changing atmospheric environment and sulfur dynamics in a forested catchment in central Japan, *Biogeochem.* 142(3): 357–374.

Ueda, A. and Sakai, H. 1984 Sulfur isotope study of Quaternary volcanic rocks from the Japanese Islands *Arc. Geochim. Cosmochim. Acta.* 48(9): 1837-1848. [https://doi.org/10.1016/0016-7037\(84\)90037-1](https://doi.org/10.1016/0016-7037(84)90037-1).

Voerkelius, S., Lorenz, G. D., Rummel, S., Quénel, C. R., Heiss, G., Baxter, M. and Hoogewerff, J. 2010 Strontium isotopic signatures of natural mineral waters, the reference to a simple geological map and its potential for authentication of food. *Food Chem.* 118(4): 933-940. <http://dx.doi.org/10.1016/j.foodchem.2009.04.125>.

West, J. B., Bowen, G. J., Dawson, T. E. and Tu. K. P. 2009 *Isoscapes: Understanding movement, pattern, and process on Earth through isotope mapping*. Springer.

Willems, M., Bataille, C. P., James, H. F., Moffat, I., McMorrow, L., Kinsley, L., Armstrong, R. A.,

Eggins, S. and Grün, R. 2018 Mapping of bioavailable strontium isotope ratios in France for archaeological provenance studies, *Appl. Geochem.* 90: 75-86. <https://doi.org/10.1016/j.apgeochem.2017.12.025>

Yamamoto, K., Tanaka, T., Minami, M., Mimura, K., Asahara, Y., Yoshida, H., Yogo, S., Takeuchi, M. and Inayoshi, M. 2007 Geochemical mapping in Aichi prefecture, Japan: Its significance as a useful dataset for geological mapping. *Applied Geochem.* 22: 306-319. doi:10.1016/j.apgeochem.2006.09.011.

中野孝教 2020 「アイソスケープを使った環境診断：石と水と野菜の産地のつながり」岩波、科学3月号。

古代西アジアにおける金属利用と都市鉱山の 起源に関する基礎的検討

黒澤正紀・池端慶・荒川洋二
筑波大学生命環境系

1. 都市鉱山とは何か

都市鉱山とは、東北大学の南條道夫氏が1988年に提唱した金属資源リサイクルに関する概念で、レアメタルなど有用金属を含む自動車・家電製品などの廃棄物を、再生可能な金属資源と考え、それらが蓄積された都市そのものを「鉱山」とみなすものである。廃棄物は「鉱石」に相当し、天然鉱山の金属鉱石と比較して、存在確認が容易で探査不要、すでに濃縮済みで高品位、採鉱・選鉱・製錬の手間が少なく省エネルギー・省コスト、再利用に伴う環境負荷が少ない、などの特徴がある。

近年、物質・材料研究機構の原田幸明氏らによって、日本国内に蓄積されている都市鉱山の鉱石の金属量は、世界有数の資源国に匹敵する規模の埋蔵量を持つと推計され、特に、金は世界の現有埋蔵量の約16%に相当する量、銀やインジウムおよびタンタルなども世界の確認埋蔵量の1割を超える量とされる。ただし、その十分な利用には解決すべき点も多く、特に採算性が課題とされる。

例えば、家電製品には多種類の有用金属が少量ずつ含まれるが、選別等に手間がかかり、技術的に取り出し可能でも、採算が合わないことが多い。そのため、現状では再利用が少なく、多くは不燃物として埋立て処分されている。しかし、金属資源の大半を輸入に頼る日本では、資源リサイクル

としての都市鉱山の開発・活用は喫緊の課題であり、現代文明の持続的発展を考える上でも重要な課題となっている。

都市鉱山の起源は、金属資源の大量利用を開始した産業革命期以降というより、人・物資・文化・技術・ネットワークが集積して誕生した古代都市にその起源がある可能性が想定される。古代の都市では、それ以前の集落に比べ、組織的な金属集積や部分的なリサイクルがおこなわれ、再利用されていたかもしれない。それが、都市に集積した金属を再利用するという意味の「都市鉱山」の淵源となった可能性がある。本計画研究では、この都市鉱山の起源が近代・現代ではなく、古代都市が成立した過程にその萌芽があるという観点から、都市化に向かう古代遺跡で出土する遺物の金属成分や周辺資料を分析し、遺跡への金属集積の様子から都市鉱山の起源と内在する課題について明らかにすることを目的としている。

2. 都市鉱山の起源の検討

都市鉱山は、都市の物質集積や都市機能の発展と関係が深いため、古代都市の機能の成立過程の検討も重要となる。都市成立期前の集落では、天然鉱山から鉱石を採鉱・選鉱し、集落で鍛造・鋳造あるいは製錬して金属製品を使用していたと考

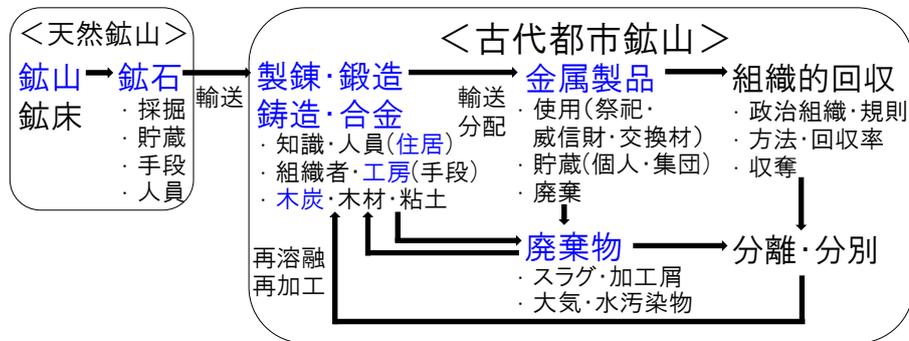


図1 古代都市鉱山での物質移動

えられる（図1）。その後、人口が集中・増加して集落が大きくなると、金属材料の集積も増加し、その製錬・加工に伴う廃棄物や金属屑、使用されなくなった金属器なども現れるようになる。それらの再利用に都市鉱山の萌芽をみることができ。都市成立期の古代都市では、行政機構・専門的職人・階層の発生などの状況を受けて、金属の組織的生産だけでなく、貴重な金属を有効利用するため、廃棄物や不用品・神前への捧げ物などの金属製品の組織的回収もおこなわれた可能性がある。それら回収物の分別と再利用の痕跡があれば、資源リサイクルが機能していたことになり、都市鉱山の成立と考えることができる。図1に示すように、都市鉱山の成立にはそれを支える数多くの要素・条件があり、それらは古代の都市機能とも密接である。図中の青字部分は物質科学的な手法で追跡可能と考えられる部分で、本研究でもそれらを中心に都市鉱山誕生の探索を試みる。

最初の古代都市は、前3300年頃にメソポタミアのウルクで誕生したとされており、都市鉱山の成立過程の解明には、その前後の時代の「都市と認定できる遺跡」および「都市化途上の集落遺跡」での調査結果や出土品分析が重要となる。ただ

し、ウルク以前の個別遺跡については、どちらの遺跡に相当するかの判断が考古学的にも難しいことが多いとされる。都市遺跡であれば、出土遺物の分析と年代から都市鉱山成立の状況を推定できるが、遺跡の性格が明瞭でない場合や適切な遺跡を検討できない場合は、地域全体での物質的な指標に基づいて、その成立状況を間接的に推定できる可能性がある。例えば、図2のように、地域全体での金属製品の出土報告やリサイクルされたとされる金属製品、汚染物・廃棄物などの量は、金属利用および地域での人口集中や都市機能の成立

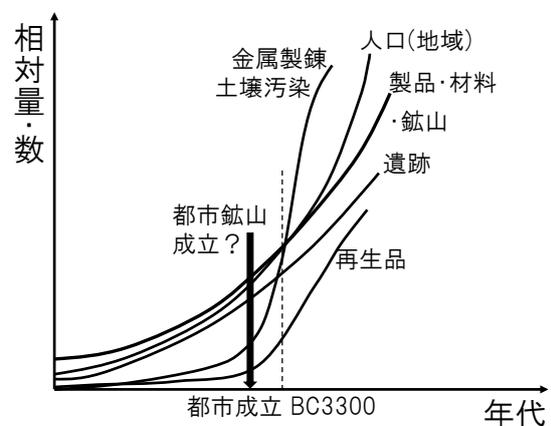


図2 様々な指標量と年代の関係例

に伴って増加すると考えられる。特に、都市機能の充実によって、それらの量が急激な増加を引き起こす可能性があり、その変曲点付近での年代で都市鉱山が成立したと推定できる。特に、再生品と推測される遺物の量の増加は、都市鉱山が機能し始めている証拠と考えられる。

図2の中で、金属製錬量の変化は、製錬等に伴って大気中に放出される鉛などの揮発性重金属が周辺土壌に堆積した量を、ボーリングコアの土壌試料を用いて経時的に追跡することで推測できる可能性がある。大気放出粒子は広範囲に拡散するため、その変化は西アジア一帯での金属製錬量を反映しているかもしれない。試料については、ウルク遺跡付近の氾濫原堆積物で既に採取されているボーリングコア試料を利用する予定である。

また、金属リサイクルの状況は、遺跡から出土した金属器やその腐食物を含む土壌の同位体や不純物濃度の様子から推定できる可能性がある。複数鉱山由来の金属製品がリサイクルの過程で混淆すると、金属製品の同位体比や不純物濃度は、複数の起源物質の混合線あるいは混合領域へと値が変化していく。この様子を金属製品出土の年代と併せることで、リサイクル状況を把握できる可能性がある。金属やスラグ中の残存金属の再利用の情報については、楔形文字文書の記録も重要となる。

3. 研究対象となる古代西アジアの金属

古代西アジアのイランからトルコにかけての地域は、全域がテチス鉱床生成帯とよばれる、あらゆる種類の金属が多産する世界有数の金属鉱床地帯に属しており、その状況を背景に世界で最初の金属利用が進んだ地域とされる。最初期には、天然起源の自然金属を石とは異なる可塑性材料の一

つとして利用していたが、やがてそれらを加工・鍛造し、鋳型で鋳造することにより、金属は微細造形可能な材料としても重用されるようになった。金属の持つ色彩や輝きは、威信財としても重要だったと推測される。その後、金属の炭酸塩や硫化物である鉱石から、金属を製錬する技術を開発することで、金属製品を大量に生産することが可能となった。それに前後して、複数種類の金属を混合することで、石よりも硬い合金が発明され、生産用具・武具としての金属利用も広まった。古代西アジアで、金属を大量に利用・保持していたのは、イラクのメソポタミア地域付近の人々であったとされる。この地域は河川の氾濫原や乾燥地帯からなり、金属鉱山や鉱石は無く、鋳造・製錬に必要な木材・木炭にも乏しい場所であった。そのため、主に外部との交易でそれらを入手し、鉱石・金属材料・金属製品は非常に貴重であった。この貴重な金属を無駄なく合理的に使うためには、利用を終えた金属製品や廃材を組織的に再利用する必要がある、そこに最初の都市鉱山誕生の萌芽があったのではと推測される。

古代西アジアでは、銅・鉛・銀・金・錫・鉄・亜鉛・水銀など様々な金属が早期から利用されていた。これらのうち、銅は自然銅としても産出するため、前8500年頃から金属材料として利用され、銅鉱石の製錬技術はその後の他の金属の製錬の基盤ともなった。隣接するバルカン半島では、すでに早期から小規模集落で青銅器製品のリサイクルがおこなわれていたとの報告がある。前6500年頃から初見されるのは（本格的利用は前3500年頃からであるが）、融点の低い鉛であった。鉛は軟らかいため初期には金属材料としての用途は限定的だったが、古代ローマ帝国時代には幅広く使用された。比較的早期から鉛鉱石中の銀

不純物を回収する技術が開発され、古代西アジア地域では、銀の回収を目的に鉛鋳山の開発が大規模に展開されてもいた。鉛鋳山の製錬や銀の回収過程では、多量の鉛粒子が大気中に放出され、その降下物が泥炭や粘土質堆積物中によく保存される。そのため、堆積物中の鉛量は金属製錬発達状況の推定に重要とされる。また、鉛同位体比は、金属の産地や流通経路の推定に有効な指標ともなる。銀の利用開始は金よりも遅れるが、西アジア地域では前5千年紀から利用され始め、特に、都市誕生の前3300年前後には広く普及していた。ただし、自然銀や銀鋳石は西アジアには少なく、銀はほぼ鉛鋳石から抽出されていた。銀はメソポタミア地域で特に重用され、交換材としても利用されていたとされる。これらの銅・鉛・銀の3種類の金属は、西アジアでの鋳業活動・金属利用を考える上で重要な指標となるため、都市鋳山の起源の検討でもそれらを中心に追跡することになっている。

4. 古代西アジアでの銅の利用

ここでは、図1で示した古代都市鋳山での物質の流れを整理する上で重要な、銅利用の歴史について概観する。金属としての銅の利用は、表層に露出した自然銅を叩き加工することから始まり、前8500年頃には700℃以上の加熱による自然銅の可鍛性の調節と鍛造、前7000年頃には自然銅の溶融鑄造、前6000年頃には孔雀石など銅炭酸水酸塩鋳石の製錬、前4500年頃に青銅の発明を経て、銅硫化物鋳石の精錬へと進んできた。古代西アジアの銅鋳山は、主に中生代・古第三紀・新第三紀の酸性火成岩の周囲に存在し（図3）、一部は古期火成岩類・オフィオライトなどに伴う。多くは熱水性鋳脈で、産状が共通することから、鋳石の同位体比は主に形成年代・産状に呼応してわずかに変化する可能性がある。

初期の銅の利用では、銅鋳床の地表付近に発達する二次的酸化帯に産出する自然銅が利用されていたが、採りつくされると、同じ酸化帯の孔雀石・

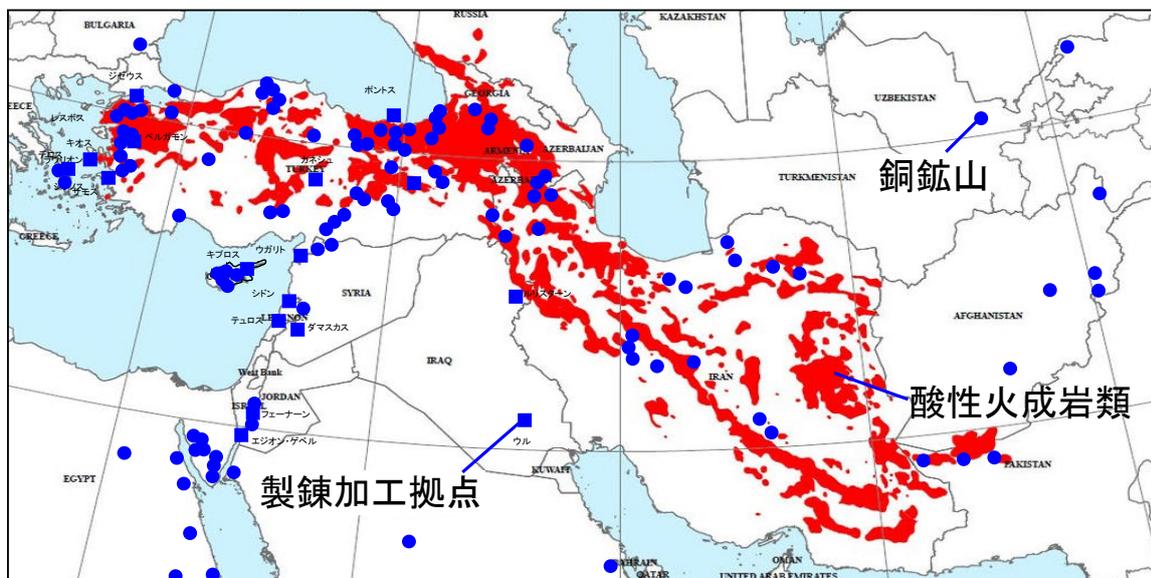


図3 酸性火成岩と古代銅鋳山の分布：赤色部分は花崗岩・斑岩・流紋岩など酸性火成岩の分布域。青丸は古代鋳山跡、青四角は製錬加工拠点 (Forbes 1955, 1957; USGS 2010 に加筆)

藍銅鉱・珪孔雀石などが利用された。それらも枯渇すると、鉱床のやや地下深部にある黄銅鉱など銅硫化物の鉱石が利用されるようになった。銅鉱石は色彩によって判別が容易だが、孔雀石から黄銅鉱となるにつれて採鉱が難しくなり、さらに硫化物鉱石は製錬も複雑である。

孔雀石 $\text{Cu}_2(\text{CO}_3)(\text{OH})_2$ などの銅炭酸水酸塩鉱石の製錬は、鉱石を約 500°C で加熱して酸化銅を作り、それを木炭と共に $700\sim 800^\circ\text{C}$ で加熱して還元することで粗銅が得られる。ルツボで製錬できるため、前 5 千年紀までには広くおこなわれていたようである。

他方、硫化銅鉱石の場合は、黄銅鉱 CuFeS_2 のように鉱石に鉄が多量に含まれると、その除去のために多段階の精錬が必要となる。代表的な製錬法では、最初に黄銅鉱と脈石（溶融状態でスラグとなるような石英など）を 600°C 以上に加熱して溶かし、鉄の一部を溶融スラグ中に排出し、鉄分の少ない銅鉄硫化物の塊を取り出す。その塊を再度脈石と共に 1000°C 以上の温度で溶融し、硫黄を亜硫酸ガスとして除去し、鉄分を溶融スラグ中にほとんど捨て去ることで、最終的に硫黄や鉄を含まない酸化銅を得る。これを木炭と加熱して粗銅とする。大量に製錬するには高温炉が必要とされるため、硫化銅鉱石の製錬は前 3 千年紀頃に普及したとされる。

粗銅には不純物が多く、鉱石の産地や地域での製錬法の違いが不純物に反映される。粗銅は各集落に運ばれ、強熱による部分酸化で不純物を蒸発させた後、再度、木炭との加熱で還元され、金属製品に加工された。重要な銅製品である銅合金は、前 4 千年紀頃には砒素を 4～12% 含む砒素青銅として盛んに利用され、鋳造品が多く作成された。前 3000 年以降には錫を 4～12% 含む錫青銅の利

用が広まった。青銅製品も材料の産地および生産技術が地域によって異なるため、同位体比や不純物組成によって流通の追跡が可能となっている。土中に埋没した銅遺物は塩類や地下水によって腐食し、一部あるいは全部が塩化物となっていることが多い。

5. 古代西アジアでの鉛と銀の利用

同じく、古代西アジアでの鉛と銀の利用の歴史についても簡単に整理する。金属鉛は自然界での存在は極微小なため、肉眼レベルでの存在は金属製錬の証拠とされる。非常に柔らかいので、初期には装飾品・錘など用途が限定されていたが、青銅に添加すると青銅の微細な鋳造が可能となるために前 2100 年頃から利用が広がり、古代ローマ帝国時代には貨幣・屋根・管・棺・食器・船の竜骨などあらゆるものに鉛製品が使われた。前 4 千年紀頃には、トルコ北部で灰吹法と呼ばれる、鉛鉱石から銀不純物を取り出す手法が開発され、それ以降、銀を回収する目的でも鉛鉱山の開発が進んだ。この手法では、鉛硫化物鉱石を陶製ルツボや骨灰容器中で約 1000°C に強熱し、鉛酸化物へと変化させる。高温の鉛酸化物は液体となって容器に染み込むが、鉱石中の銀不純物は酸化されずにそのまま容器の底に金属銀として残るので、それを回収する。容器に染み込んだ酸化鉛は、木炭との燃焼による還元で金属鉛として取り出すことができる。

銀は金属中で最も高い反射率を持ち、著しい輝きから古代西アジア地域では威信財として広く重用された。ほとんどの銀は鉛鉱石や粗金属鉛から抽出されていたため、銀鉱石は鉛鉱石とほぼ同義であったが、鉱山によって鉛鉱石中の含銀量は大きく異なっていた。銀の精錬法は、前 2100 年頃

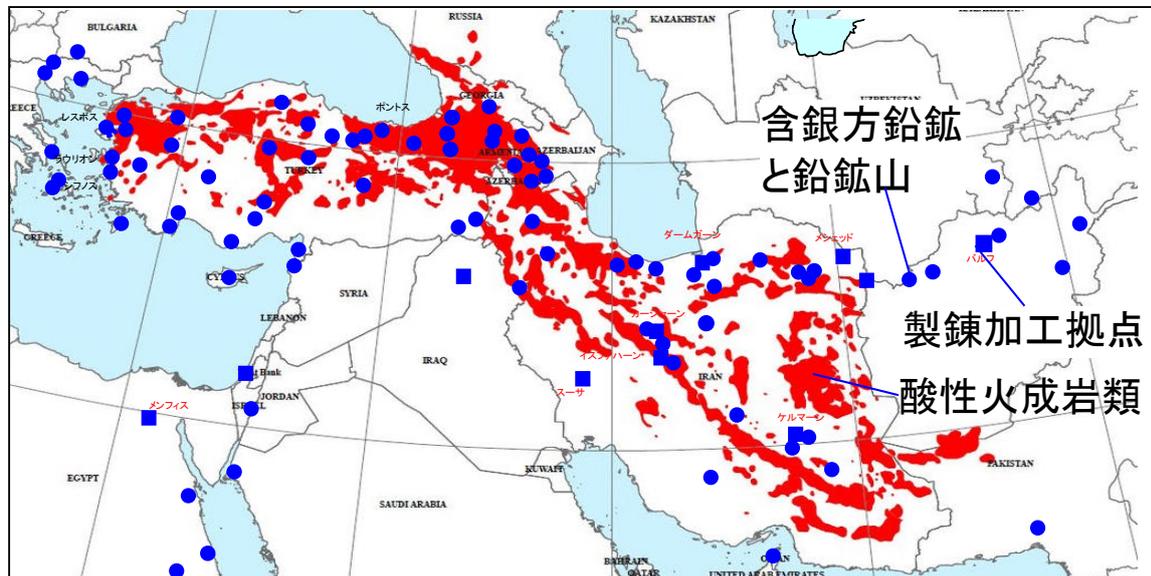


図4 酸性火成岩と古代含銀鉛鋳山の分布：赤色部分は花崗岩・斑岩・流紋岩など酸性火成岩の分布域。青丸は古代含銀鉛鋳山、青四角は製錬加工拠点 (Forbes 1955, 1957; USGS 2010 に加筆)

にイランで開発されたが、一般的に、前 1000 年以前の銀製品には 0.1 ~ 6 % の鉛不純物が含まれている。そのため、鉛同位体比によって産地推定が可能な場合がある。また、前 3 千年紀頃には、コイル状の銀が重さに応じて貨幣の様な交換材として利用されており、前 580 年頃からは銀貨としての利用も始まった。土中に埋没した銀製品は、塩類や地下水によって腐食し、一部あるいは全部が白色塊状の塩化物となっていることがある。遺物周囲の土壌には、金属成分の一部が移動していることもあるので、その土壌分析によって、銀に関する重要な情報が得られる可能性がある。

古代西アジアの銀・鉛鋳山は、銅鋳山と同様に酸性火成岩の周囲に存在する（図 4）。多くは熱水性鋳脈で、銅鋳山の近傍に分布する。鉛鋳石には鉛硫化物と鉛炭酸塩があるが、利用初期には製錬容易な鉛炭酸塩が、その後は産出量の多い鉛硫化物が鋳石として用いられた。鉛硫化物鋳石の

製錬は、基本的には 500 °C 程度での焙焼とその後 800 °C での強熱によって粗鉛を得るもので、鋳石中の不純物・不要物を除く場合には、脈石の添加あるいは炉壁との溶融反応を利用してスラグを形成させ、スラグ中に不純物・不要物を排出する。鉛鋳石から銀を回収する場合は、鉛の製錬過程で銀は粗鉛中に濃集するので、粗鉛の生成後にさらに灰吹法をおこなって、粗鉛から銀を抽出したと考えられている。これらの製錬過程では温度制御が重要で、粗鉛を得る過程で 1000 °C 以上の高温になると、鉛の一部が揮発し、スラグにもかなりの量の鉛や銀が融け込む。また、灰吹法でも鉛酸化物の一部が蒸発する。製錬過程で蒸発した鉛は、先述のように大気中から降下して堆積物中に捕獲され、その捕獲量は金属製錬状況の良い指標となる可能性がある。また、銀・鉛鋳山周辺に廃棄されたスラグは、鉛や砒素などの重金属を含むため、周囲の環境汚染の原因となるが、製錬技

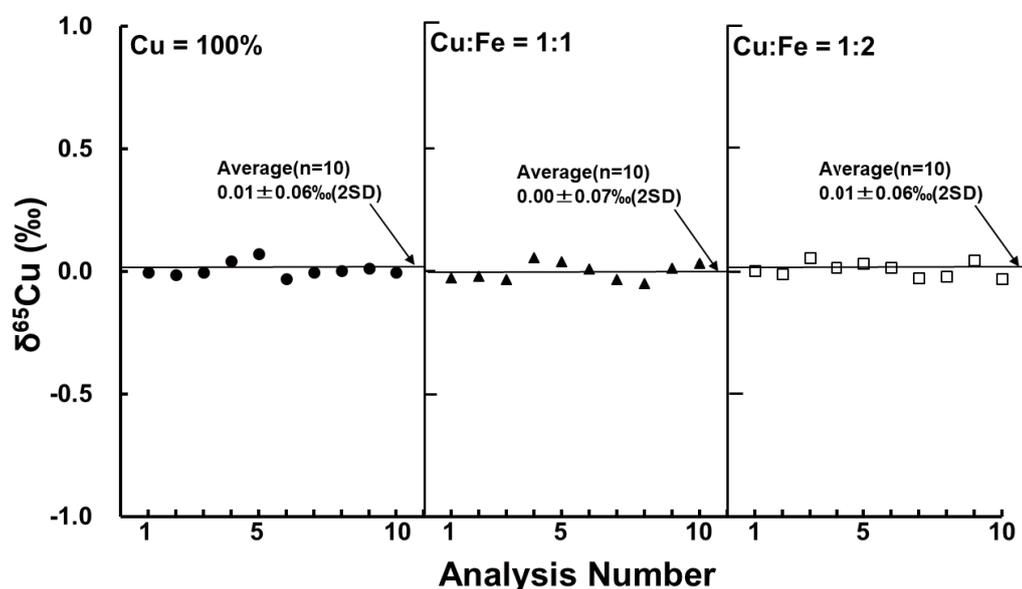


図5 マルチコレクター型 ICP 質量分析計による 0.2ppm の銅同位体標準溶液、同溶液に鉄 / 銅のモル比が 1、および 2 になるよう鉄標準溶液を添加した溶液の銅同位体比分析結果

術の進んだ後の時代では重要な鉛・銀の「鉱石」として再製錬されることも多く、鉱山集落付近での「都市鉱山」としても注目される。

6. マルチコレクター型 ICP 質量分析計による金属同位体比の分析

前述したように、金属の同位体比は、金属の産地やリサイクル過程の推定に有効な指標となりうる。しかし、一般的に自然界の金属同位体比の変動幅は極めて小さいため、0.1 ‰ 以下の分析精度で分析をおこなう必要がある。本研究では、様々な試料に含まれる金属の同位体比を昨年度に導入したマルチコレクター型誘導結合プラズマ質量分析計 (MC-ICP-MS) を使用して高精度測定する計画で、今回は実試料を測定する前に、慣熟実験をおこなった。主要な銅鉱石鉱物の 1 つである黄銅鉱 CuFeS_2 や鉄を含む銅製品の銅同位体比を測

定する時の、銅に対する鉄のマトリックス効果を評価するため、0.2 ppm の銅同位体標準溶液、同溶液に鉄 / 銅のモル比が 1 : 2 になるよう鉄標準溶液を添加した溶液をメタルフリークラス 1000 クリーンルーム内のクリーンブースの中で調合した後、各溶液の銅同位体比を、MC-ICP-MS により分析した。質量分析計内の質量差別効果の補正は、Sample-standard bracketing 法と亜鉛標準溶液による外部補正法とを用いた。その結果、0.2 ppm の銅同位体標準溶液、同溶液に鉄 / 銅のモル比が 1 : 2 になるよう鉄標準溶液を添加した溶液の銅同位体比 $\{\delta^{65}\text{Cu} = ((^{65}\text{Cu}/^{63}\text{Cu})_{\text{試料}} / (^{65}\text{Cu}/^{63}\text{Cu})_{\text{標準溶液}} - 1) \times 1000\}$ を、それぞれ $0.01 \pm 0.06 \text{ ‰ (2SD)}$ 、 $0.00 \pm 0.07 \text{ ‰ (2SD)}$ 、 $0.01 \pm 0.06 \text{ ‰ (2SD)}$ (図5) の高精度で測定することができた。また、鉄 / 銅のモル比が 2 程度では、銅同位体比の分析精度に影響する鉄のマトリックス効果は認められなかつ

た。したがって、黄銅鉱の銅同位体比分析の前処 ないことが明らかとなった。
理として、鉄（マトリックス元素）の分離は必要

イラン 8 都市の月別降水の化学組成

横尾 頼子¹・浅井 公輔¹・堀井 彩衣¹・濱口 弘平¹
申 基澈²・安間 了³・メラバニ シバ⁴

¹同志社大学理工学部 ²総合地球環境学研究所
³徳島大学社会産業理工学研究部 ⁴クルディスタン大学 (イラン)

はじめに

西アジアのような雨季と乾季の明瞭な乾燥地域においては、ダストの化学組成や鉱物組成の研究は多くなされている (例えば、Hojati et al. 2012; Ahmady-Birgani et al. 2015)。降水試料は雨季にのみ得られるがその降水量も少ないため、降水の化学組成を調べた研究は少ない (Kamani et al. 2014)。イラン各都市の降水の化学組成からは、現在のイランの大気環境の情報を得られるばかりでなく、雨季と乾季における季節的な特徴や地域ごとの特徴を明らかにすることで、今後地質試料や遺物からの古環境復元に対して有用なデータになると考えられる。

著者らは、イラン 8 都市 (Hamedan, Ilam, Shiraz, Ahvaz, Mashhad, Birjand, Zahedan, Rezvanshahr) で、2014 年 1 月から 2017 年 5 月にかけて、月別降水を採取し (図 1)、主要イオン組成と微量元素組成、Ca のトレーサーとして有用な Sr 同位体比 (⁸⁷Sr/⁸⁶Sr) の分析をおこなっている。2019 年度からは、2017 年まで採取されていた 4 都市 (Hamedan, Shiraz, Ahvaz, Birjand) に加えて新たにカスピ海周辺 (Ahmad, Chalus, Saravan) とイラン西部 (Marivan, Sanandaj)、イラン東部 (Sabzevar)、イラン北西部 (Maku) の 7 都市で降水の採取をおこなっている。

ここでは、イラン 8 都市 (Hamedan, Ilam, Shiraz, Ahvaz, Mashhad, Birjand, Zahedan, Rezvanshahr) において、2014 年 1 月から 2017 年 5 月にかけて採取した月別降水の pH と主要イオン組成、Sr 同位体比 (⁸⁷Sr/⁸⁶Sr) について報告する。

1. 調査地域と試料採取

イランは、温帯冬雨気候からステップ気候であり、平均的な年降水量は約 200 mm と日本の約 7 分の 1 である。大部分は雨季と乾季が明瞭な乾燥帯に属しており、夏季の 6～9 月は降雨が極めて少ない一方で、秋季から春季にあたる 10～5 月は降水量が 40 mm/月と多くなる。この冬季に降水をもたらす湿気はインド洋からのものではなく、「シャマル」と呼ばれる北西風によって地中海からもたらされる。

8 都市 (Hamedan, Ilam, Shiraz, Ahvaz, Mashhad, Birjand, Zahedan, Rezvanshahr) において、直径 210 mm のポリエチレン製漏斗を取り付けた 10 ℓ ポリエチレン製タンクを設置して 1 ヶ月ごと降水を採取した (図 1)。降雨のなかった月は乾性降水物を回収するために、漏斗とタンクを 500 ml 超純水で洗浄して試料とし、本報告では「洗浄水」と呼ぶ。

Rezvanshahr は、カスピ海の南に位置しており、



図1 試料採取地点（青：2014年1月から、赤：2016年1月から）

標高は約 15 m である。Hamedan、Ilam、Shiraz はザグロス山脈（標高約 4500 m）の近隣の都市であり、Hamedan は山脈北部に、Ilam は山脈北西部に、Shiraz は山脈南東部のイラン高原に面した標高 1200 ~ 1500 m の山麓にある。Ahvaz はペルシャ湾に近い平野部に位置する。Mashhad は首都 Tehran に次ぎ人口の多い都市であり、イラン北東部に位置している。Birjand、Zahedan はイラン東部に位置する。これら 2 都市の気候区分はそれぞれ低温砂漠気候（BSk）、高温砂漠気候（BWh）に分類され、都市の西側にはカヴィール砂漠とルート砂漠が位置している。

2. 分析手法

降水試料の水素イオン濃度指数 (pH) と電気伝導度 (EC) を、pH-EC メーター (HANNA

Instruments、Combo pH & EC) を用いて、試料採取時に現地で測定した。

降水試料は、現地で孔径 0.20 μm のセルロース混合アセテイトタイプメンブランフィルター (Advantec、DISMIC-25CS) で濾過した。

同志社大学理工学部設置されているイオンクロマトグラフィー (Thermo Fisher Scientific Inc.、ICS-90) を用い、降水と洗浄水試料の Na^+ 、 NH_4^+ 、 K^+ 、 Mg^{2+} 、 Ca^{2+} 、 PO_4^{3-} 、 F^- 、 Cl^- 、 NO_2^- 、 Br^- 、 NO_3^- 、 SO_4^{2-} 濃度を測定した。標準試料には陽イオン標準液 (Thermo Fisher Scientific Inc.、6 成分混合) と陰イオン混合標準液 IV (関東化学) を用いて検量線を作成した。降水と洗浄水試料の HCO_3^- 濃度は、2014 年から 2015 年に採取された試料では、0.005 mol/L 硫酸 (和光純薬、容量分析用) で pH4.8 まで滴定して求めた。それらの試

料において、イオンクロマトでの主要イオン濃度と pH から求められた H^+ 濃度、滴定で求められた HCO_3^- 濃度において陽・陰イオンのイオンバランスがとれることを確認した。2016 年以降採取された試料については、イオンバランスから HCO_3^- 濃度を算出した。

総合地球環境学研究所に設置されている表面電離型質量分析装置 (Thermo Fisher Scientific Inc., Finnigan Triton) で $^{87}Sr/^{86}Sr$ を測定した。カラムで分離回収後の Sr 試料を TaO activator 1 μ l で溶解させ、フィラメントにローディングしたものを同位体比分析用試料とした。 $^{87}Sr/^{86}Sr=0.1194$ で同位体分別の補正をおこない、NBS987 (0.710250) で規格化した。同時に測定した NBS987 の $^{87}Sr/^{86}Sr$ 比は 0.710258 ± 0.000022 (2σ , $n=30$, 2017 年度) と 0.710231 ± 0.000009 (2σ , $n=16$, 2019 年度) であった。

3. 結果

採取試料のうち、降水は 150 試料、洗浄水は 64 試料であった。降水 150 試料について、pH を測定し、降雨量 (採取量) 換算によって pH の平均値を求めた。イラン西部の Hamedan では平均 pH6.78 (最小値 6.11 ~ 最大値 6.78, 降水 31 試料)、Ilam では平均 pH7.41 (6.69 ~ 8.93, 29 試料)、Shiraz では平均 pH6.80 (6.24 ~ 8.76, 29 試料)、Ahvaz では平均 pH7.85 (7.41 ~ 8.64, 19 試料) であった。イラン東部の Mashhad では平均 pH7.11 (6.71 ~ 7.86, 14 試料)、Birjand では平均 pH8.26 (7.62 ~ 10.23, 10 試料)、Zahedan では平均 pH7.52 (7.24 ~ 7.85, 6 試料)、イラン北部の Rezvanshahr では平均 pH4.89 (3.88 ~ 7.48, 降水 12 試料) であった。カスピ海に近い Rezvanshahr の平均 pH は他の 7 都市より低かったが、イラン

の降水は多くの試料で pH7 ~ 9 と中性から弱アルカリ性であった。

主要イオン濃度を測定した降水 141 試料と洗浄水 64 試料の主要イオン組成比をトリリニアダイアグラムで示した (図 2 ~ 図 4)。トリリニアダイアグラムは地球化学的な水質区分の一つであり、試料中の各主要イオンの溶存比によりイオン組成を表す。キーダイアグラム (中央の菱形) ヘプロットされる位置によって、一般的に Ca- HCO_3^- 型、Na- HCO_3^- 型、Ca-Cl または Ca- SO_4 型、Na-Cl または Na- SO_4 型に区分される。降水と洗浄水の主要イオン組成比はトリリニアダイアグラムより、どちらも Ca- HCO_3^- 型であった。カスピ海沿岸の Rezvanshahr の一部の試料では pH が低く、 HCO_3^- を含まない試料もあった。多くの試料で pH7 ~ 9 と中性から弱アルカリ性であり、イランの特にザクロス山脈とその西方では表層の地質に石灰岩が多く分布するため、周辺土壌由来の方解石 ($CaCO_3$) が降水に溶解し、降水をアルカリ化すると考えられる。また、Ca- HCO_3^- 型以外のイオン組成比を示す月の数を降水と洗浄水で比較すると、降水の方が洗浄水よりも多かったことから、降水には土壌由来以外の物質が溶解している。

降水試料では、Ca- HCO_3^- 型以外のイオン組成比をもとに 8 都市を 2 グループに分類した。それらは、① Ca - ($SO_4 + NO_3$) 型と② Ca- HCO_3^- 型と Na-Cl 型との中間組成である (図 3, 図 4)。降水の組成が① Ca - ($SO_4 + NO_3$) 型を示したのは、イラン西部の Hamedan, Ilam, Shraz とイラン東部の Mashhad で (図 3)、乾季明けにあたる冬季や乾季中の少量の降水であった。降水の組成が② Ca- HCO_3^- 型と Na-Cl 型との中間組成を示す試料は、Ahvaz, Rezvanshahr, Birjand, Zahedan でみられ (図 4)、冬季から春先の降水であった。Ahvaz はペル

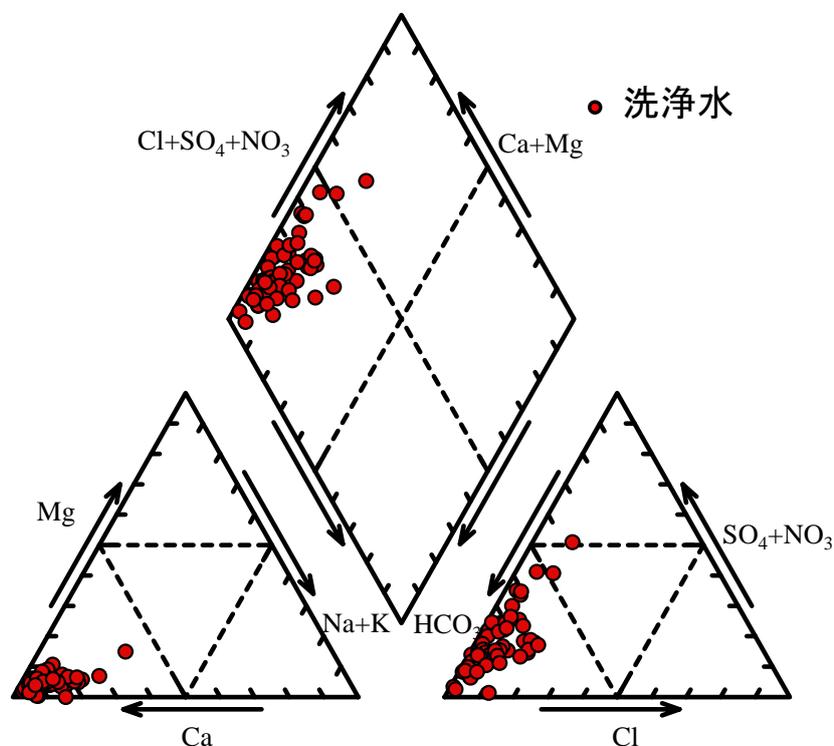


図2 洗浄水のイオン組成比

シャ湾から 100 km の位置にあり、Rezvanshahr はカスピ海沿岸の都市であることから、ペルシャ湾やカスピ海、また冬季のシャマルによる地中海からの海塩の流入が考えられる。Birjand、Zahedan は岩塩砂漠であるカヴィール砂漠とルート砂漠の東部に位置することから砂漠由来の岩塩によると考えられる。

2015 年 7 月から 2017 年 5 月に採取された降水と洗浄水の Sr 同位体比 ($^{87}\text{Sr}/^{86}\text{Sr}$) は、Hamedan で 0.70820~0.70855 (19 試料)、Ilam で 0.70792~0.70831 (20 試料、他 1 試料は 0.71025)、Shiraz で 0.70828~0.70846 (22 試料、他 1 試料は 0.71012)、Ahvaz で 0.70815~0.70834 (13 試料、他 7 試料で 0.71004 ~ 0.71026)、Mashhad で

0.70821~0.70840 (15 試料、1 試料は 0.71023)、Birjand で 0.70786~0.70824 (17 試料)、Zahedan で 0.70803~0.70818 (8 試料、他 2 試料で 0.71024、0.71027)、Rezvanshahr で 0.70799~0.70852 (10 試料、他 3 試料で 0.71015 ~ 0.71017) であった。月や都市により明瞭な違いがみられた。8 都市の降水と洗浄水で測定できた 139 試料中 124 試料は $^{87}\text{Sr}/^{86}\text{Sr}$ が 0.7079~0.7086 であったが、Ahvaz、Rezvanshahr、Shiraz、Zahedan、Ilam、Mashhad では、0.710 と高い月があった。0.710 以下の値を示した 124 試料について、Hamedan、Shiraz、Ahvaz、Rezvanshahr、Mashhad の $^{87}\text{Sr}/^{86}\text{Sr}$ は高く、Ilam、Birjand、Zahedan は低かった。また Hamedan、Ilam と Shiraz で、Ahvaz、Birjand と Zahedan で月

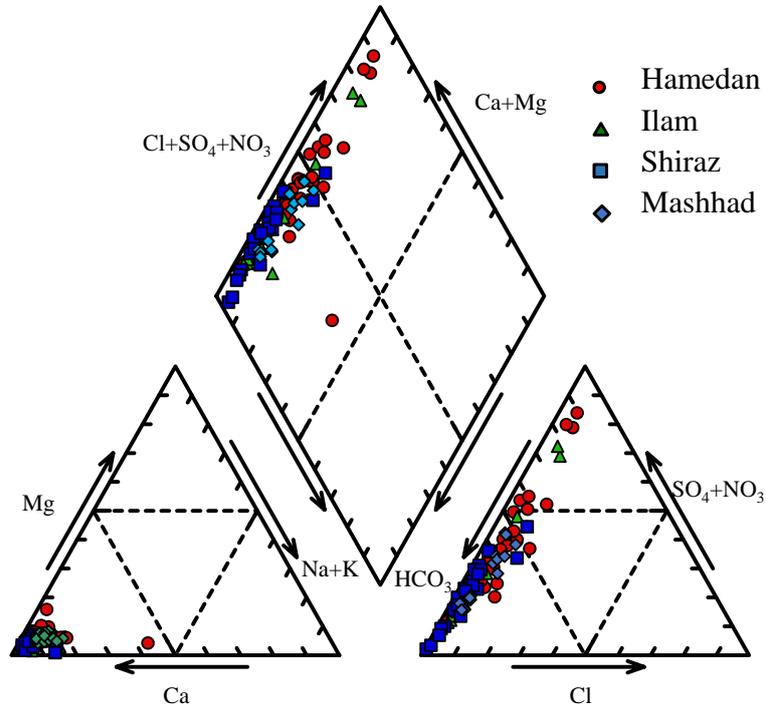


図3 降水（グループ①）のイオン組成比

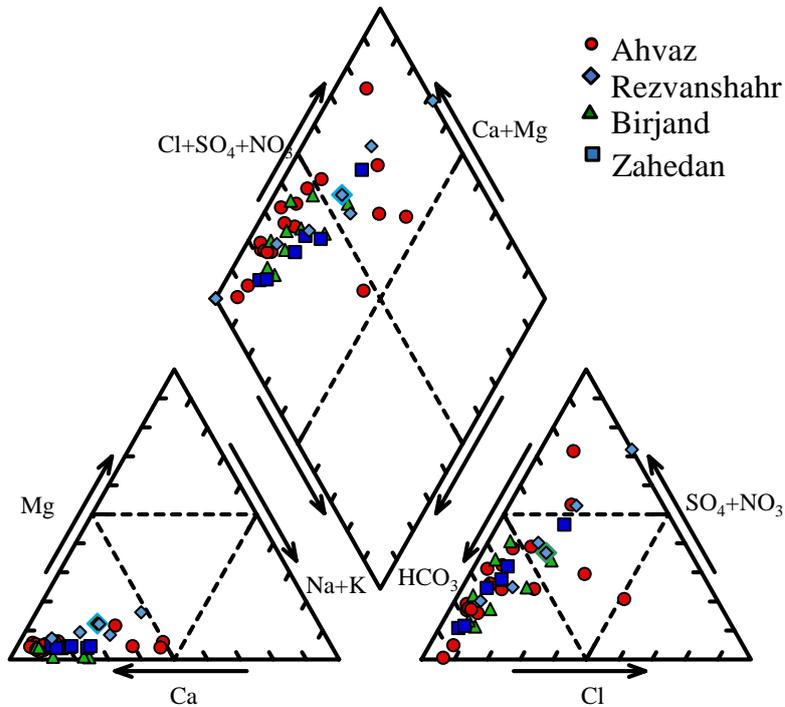


図4 降水（グループ②）のイオン組成比

ごとの変動傾向が似ていた。Ca-HCO₃ 型や Ca-SO₄ 型の降水の水質をもたらす起源物質（方解石 CaCO₃ あるいは石膏 CaSO₄・2H₂O）の違いや、Sr (Ca) の起源物質（海塩、砂漠、人為活動）の違い、地域的・季節的な特徴を反映していると考えられる。2014 年から 2015 年 6 月にイラン西部 4 都市で採取した試料についてはマルチコレクタ型 ICP 質量分析装置によって 0.708 を示すことがわかっているが、今後表面電離型質量分析装置で再測定する予定である。

おわりに

イランの 8 都市（Hamedan, Ilam, Shiraz, Ahvaz, Mashhad, Birjand, Zahedan, Rezvanshahr）で、2014 年 1 月から 2017 年 5 月に採取された降水は酸性から弱アルカリ性であり、イオン組成比がほとんどの月で Ca-HCO₃ 型を示した。Hamedan, Ilam, Shiraz, Mashhad では Ca-(SO₄ +NO₃) 型、Rezvanshahr と Ahvaz では Ca-HCO₃ 型と Na-Cl 型との中間組成を示す月もあった。2015 年 7 月から 2017 年 5 月採取された降水の ⁸⁷Sr/⁸⁶Sr は 0.708 でほぼ一定であったが、表面電離型質量分析装置で Sr 同位体比を測定した結果、Hamedan と Ilam, Shiraz の間で、また Ahvaz, Birjand, Zahedan の間で同じような月ごとのわずかな変動傾向がみられた。Ca-HCO₃ 型の降水の水質をもたらす方解石 CaCO₃

の起源の違いを反映していると考えられるが、今後未測定の試料について検討を進めていく。

謝辞

本研究で使用した降水試料は、新学術領域研究（研究領域提案型）研究領域「現代文明の基層としての古代西アジア文明」（代表：常木晃）計画研究 24101011「堆積物に記録される西アジアにおける第四紀環境変動の解読」（代表：安間了）を使って採取したものである。また、Sr 同位体比測定は、総合地球環境学研究所の同位体環境学共同研究事業の支援を受けておこなった。ここに謝意を表します。

参考文献

- Ahmady-Birgani, H., Mirnejad, H., Feiznia, S. and McQueen K. G. (2015) Mineralogy and geochemistry of atmospheric particulates in western Iran, *Atmospheric Environment* 119, 262–272.
- Hojati, S., Khademi, H., Cano, A. F. and Landi, A. (2012) Characteristics of dust deposited along a transect between central Iran and the Zagros Mountains, *Catena* 88, 27–36.
- Kamani, H., Mohammad, H. Sahari, G. H., Jaafari, J. and Mahvi, A. H. (2014) Study of trace elements in wet atmospheric precipitation in Tehran, Iran, *Environmental Monitoring and Assessment* 186, 5069–5067.

イラン北西部アリ・サドル洞窟のつらら石の U/Th 年代、¹⁴C 年代、炭素・酸素安定同位体比

堀川 恵司¹・南 雅代²・安間 了³

¹富山大学学術研究部理学系 ²名古屋大学宇宙地球環境研究所

³徳島大学社会産業理工学研究部

はじめに

石灰岩が分布する地域では、雨水が地中に浸透し、母岩の石灰岩が溶解することで、地下水の通り道に鍾乳洞が形成されることがある。雨水は、土壌や石灰岩母岩を流下する過程で CaCO_3 飽和水となり ($\text{CO}_2 + \text{H}_2\text{O} + \text{CaCO}_3 \rightarrow \text{Ca}^{2+} + 2\text{HCO}_3^-$)、土壌中よりも二酸化炭素分圧の低い鍾乳洞内に達すると、脱ガスによって、鍾乳洞内に様々な石灰岩堆積物を沈殿させる ($\text{Ca}^{2+} + 2\text{HCO}_3^- \rightarrow \text{CaCO}_3 + \text{CO}_2 + \text{H}_2\text{O}$)。speleothem (ギリシャ語の *spelation*: cave と *thema*: deposit に由来) と呼ばれる鍾乳洞に見られる二次堆積物は、主に (1) 洞内の天井から下方に成長するつらら石 stalactites (ギリシャ語 *stalaktós*: dripping)、(2) 洞内の床面から上方に伸長する石筍 stalagmites (ギリシャ語 *stalagmós*: dropping)、(3) 洞内の壁面・床面に沈殿形成される flowstones の3つのタイプに区別される。このうち、石筍は、つらら石やフローストーンと比べ、内部の層構造が比較的単純に見えるため、炭酸塩部分の酸素同位体比から、陸上の降雨情報を読み取る研究によく利用されている (e.g. Dykoski et al. 2005; Kano 2012)。ただし、speleothem の形成は、連続的に起こるわけではないため、ターゲットとする時代をカバーする speleothem 試料を得るのは難しい。また、洞

内での炭酸塩の沈殿速度は、土壌 — 洞内の二酸化炭素分圧差が大きいほど、速くなるため、土壌中の二酸化炭素分圧が高い湿潤温暖な気候下では、石筍の成長速度が年 mm オーダーと比較的速く、寒冷気候下では成長速度が年 0.1 mm 以下と遅くなる。したがって、speleothem から読み取れる環境情報の質 (時間分解能) は、対象とする speleothem が形成された気候条件にも大きく左右されると言える。

本報告では、アリ・サドル鍾乳洞で採取されたつらら石の ¹⁴C、U/Th 年代および炭素・酸素安定同位体データ ($\delta^{13}\text{C}$ 、 $\delta^{18}\text{O}$) を報告し、さらに近年報告されたイラン国内で採取された石筍の化学データについても紹介する。これらの結果を踏まえて、イラン国内の speleothem から読み取れる古環境情報について考察する。

1. 試料および分析

テヘランから西へ約 300 km、標高約 1900 m の山間部に、世界最大の水洞窟で現在観光地となっているアリ・サドル洞窟 (Ali Sadr cave, 35°18'13"N, 48°18'12"E) がある (図 1, 図 2)。共著者の安間は、2014 年のアリ・サドル洞窟の調査で、近隣住民から複数のつらら石の提供を受け、国内に持ち帰った。本研究では、この時に持ち帰っ

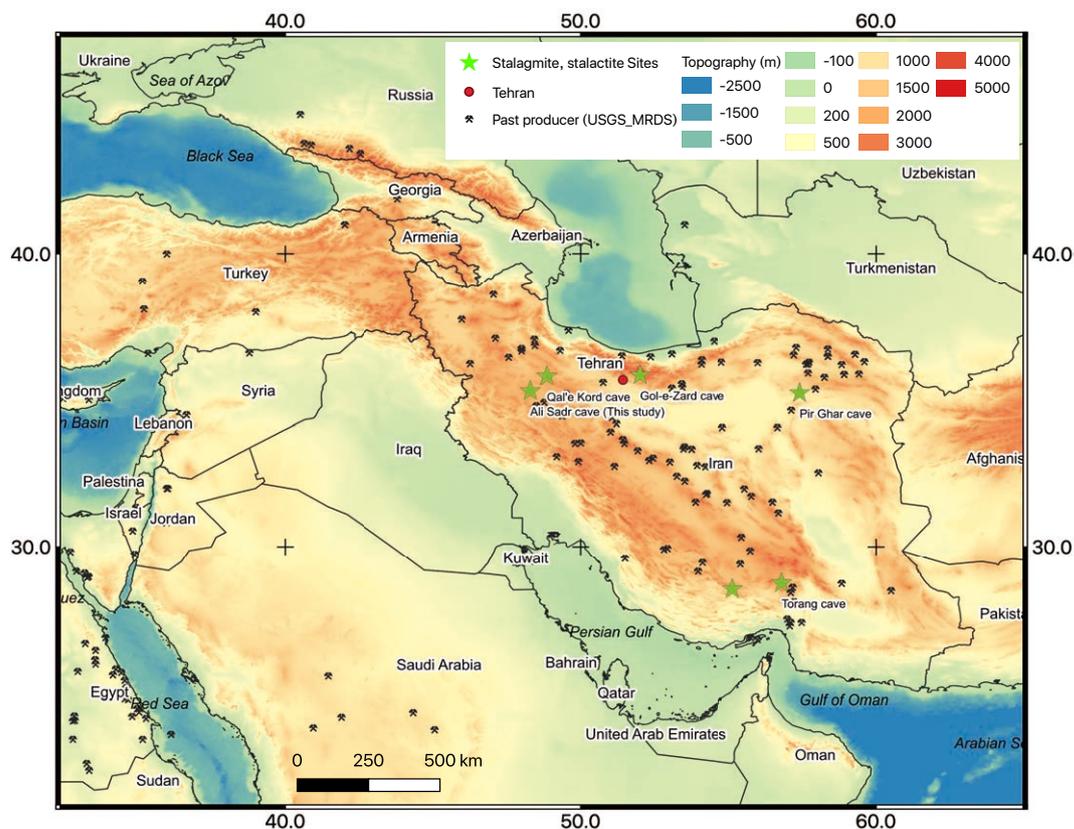


図1 中東地域の地形図。星印は、アリ・サドル洞窟およびイラン国内で石筍の酸素同位体比データの報告がある鍾乳洞。過去に開発されていた鉱物資源サイト (<https://mrddata.usgs.gov>) も併せて示した。

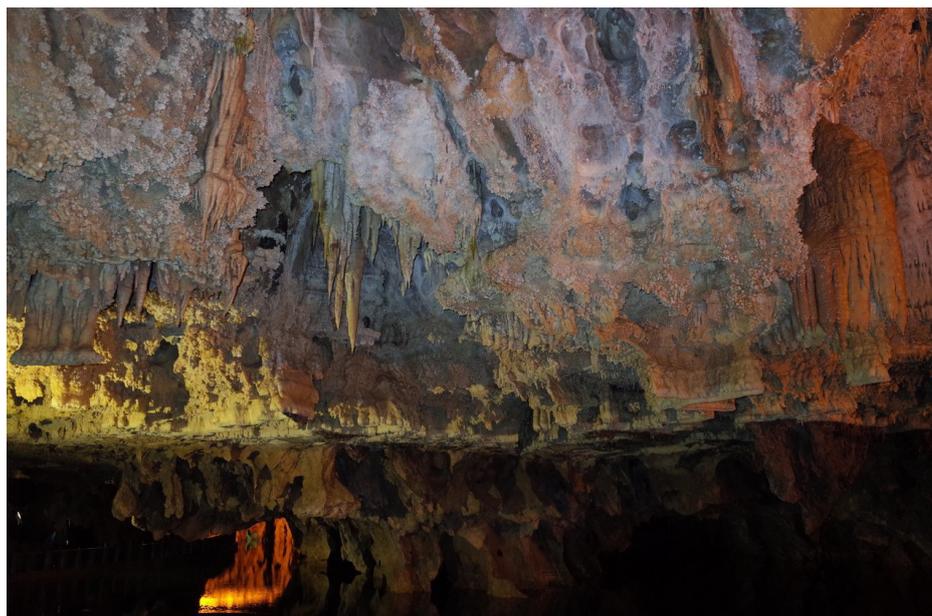


図2 アリ・サドル洞窟の内部の写真。写真中央部につら石が見える。

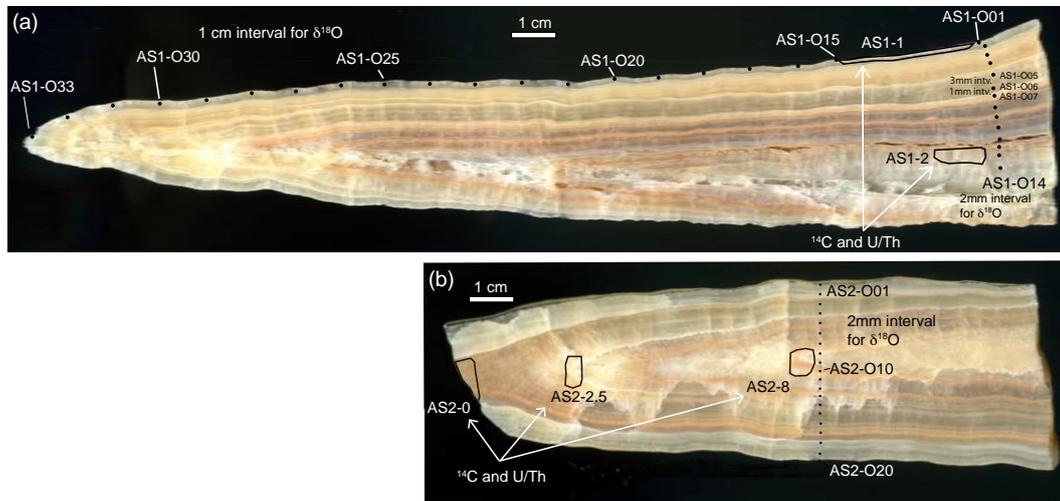


図3 アリ・サドル洞窟つらら石試料の断面写真：(a) つらら石 AS1、(b) つらら石 AS2
(黒点は試料掘削ポイント、白字は試料 ID)

たつらら石のうち、2つのつらら石について分析をおこなった（図3：AS1 長さ 23.4 cm、AS2 長さ 13.8 cm）。

イラン西部からトルコまで伸びるザグロス造山帯には、石灰岩が広く分布している。また、イラン北部のアルボルズ山脈にも石灰岩が広く分布しており、ザグロス造山帯地域およびアルボルズ山脈地域から、石筍の酸素同位体比データがこれまで報告されている（Wickens 2013; Mehterian et al. 2017; Carolin et al. 2019a,b）（図1）。イラン北西部を含む中東地域では、夏に降水量が少なく、冬に降水量が増大する季節変化を特徴としており（図4）、イラン北西部アリ・サドル洞窟近傍の Qazvid では、3月の平均降水量が約 50 mm 程度で年間最大となり、12月から4月にかけての降水量が年降水量の7割程度を占める。このような降水量変動の特徴から、中東地域の speleothem の酸素同位体比は、冬季の降水情報を持つと考えられている。

本研究で用いたつらら石は、岩石カッターで縦に半割し、試料の片面を研磨し、スキャナーで写真を撮影した。その後、研磨表面をメタノール（精密分析用）で拭い、マイクロドリルを使って、¹⁴C、U/Th 年代および炭素・酸素安定同位体分析用の粉末試料を掘削・採取した（図3）。AS1 試料については、つらら石の最表層の上部から下部（1 cm 間隔）にかけての測線と外側から中心部にかけての測線（2 mm 間隔）で、炭素・酸素安定同位体分析用の粉末試料（約 100 μg）を削り出した（図3a）。AS2 試料に関しては、縞模様にならざるよう、外側から中心部、さらに反対側の外側に対して測線（2 mm 間隔）を設けて、炭素・酸素安定同位体分析用の粉末試料（約 100 μg）を採取した（図3b）。¹⁴C、U/Th 年代用試料は、AS1 の最表層と中心部で、AS2 ではつらら石の中心の上部、中心の中部、最下部でそれぞれ採取した。¹⁴C 年代分析用の試料量は 3.6–10 mg に対して、U/Th 年代用試料は、最大で 5 mm のバンド

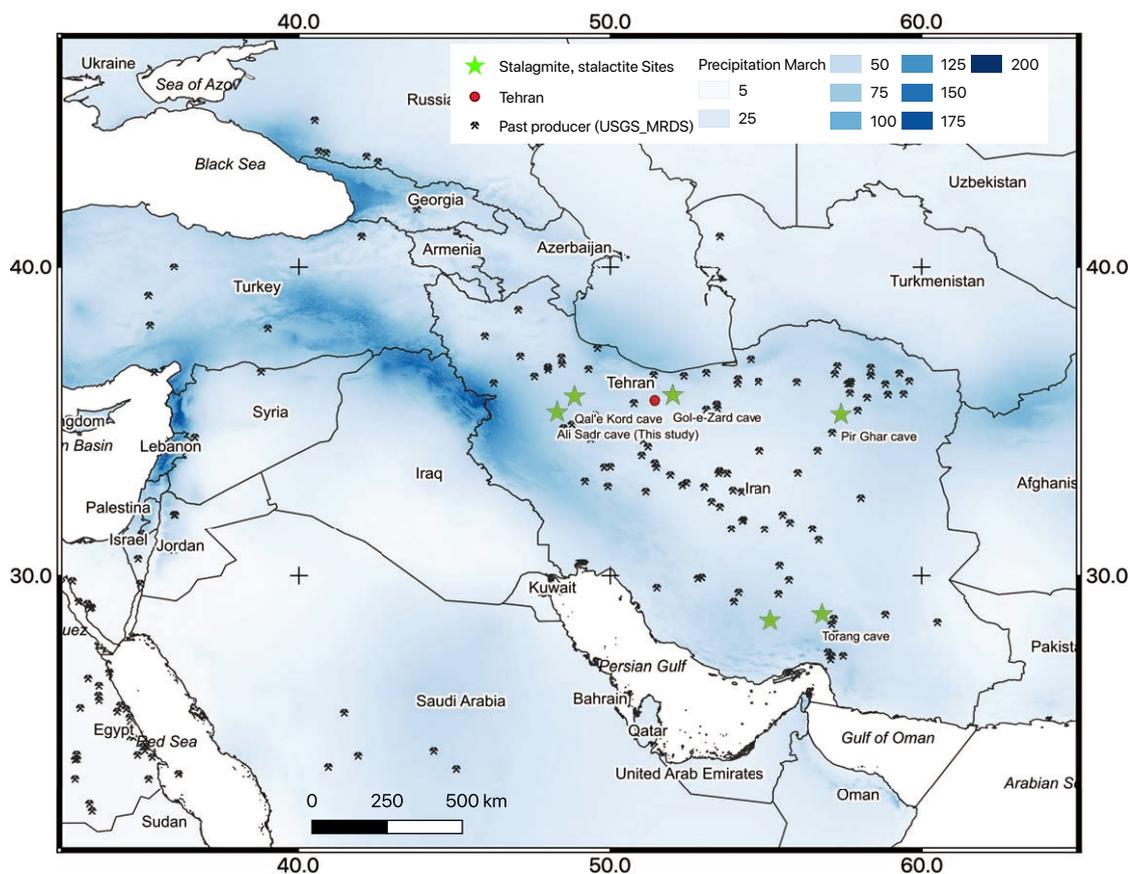


図4 3月の降水量分布 (<http://worldclim.org/version2>)

幅からおおよそ 170–200 mg 程度の試料を削り取った (表1)。

炭素・酸素安定同位体比は、アリゾナ大学に設置されている炭酸塩自動前処理装置 (Keil-III) 付同位体比質量分析計 (Finnigan MAT252) で測定した。炭素、酸素同位体比の分析精度は、それぞれ 0.08‰、0.10‰ であった。放射性炭素 (^{14}C) 年代は、名古屋大学のタンデトロン加速器質量分析計 (High Voltage Engineering Europe 社製 Model 4130-AMS) で測定し (Minami et al. 2015)、U/Th 年代は、オーストラリア・クイーンズランド大学の Nu Plasma HR Multi Collector-Inductively

Coupled Plasma Mass Spectrometer (MC-ICP-MS) で分析をおこなった。

2. 結果と考察

^{14}C 年代を分析した 5 試料のうち、AS1-1 と AS1-2 については、25,700 ~ 25,140 cal BP と 39,950 ~ 38,760 cal BP という年代値が得られた (表2)。一方、AS2 試料の 2 点 (AS2-0, AS2-8) については、バックグラウンドと等しいか、または低い ^{14}C カウント数となった試料で、>43,000 ^{14}C yr BP と見積もられた。AS2-2.5 (3.6 mg CaCO_3) については、38,770±420 (2 σ) ^{14}C yr BP という年代値が得られ

表 1 U/Th 年代、¹⁴C 年代測定用に掘削した試料量

Sample ID	U/Th_sample (mg)	¹⁴ C_sample (mg)
AS1-1	187.2	4.7
AS1-2	174.3	5.1
AS2-0	208.8	10.2
AS2-2.5	178.0	3.6
AS2-8	170.7	5.0

表 2 U/Th 年代、¹⁴C 年代結果。暦年代の計算には Calib7.10 (Intcal13) を用いた
(<http://calib.org/calib/calib.html>)

Sample Name	Sample wt.(g)	U (ppm)	±2s	²³² Th (ppb)	±2s	(²³⁰ Th/ ²³² Th)	±2s	(²³⁰ Th/ ²³⁸ U)	±2s	(²³⁴ U/ ²³⁸ U)	±2s
AS2-0	0.09487	1.3652	0.0015	19.79	0.083	193.17	1.22	0.9229	0.0045	1.1644	0.0012
AS2-2.5	0.09022	0.8393	0.0006	1.22	0.003	2151.6	9.3	1.0272	0.0034	1.1863	0.0017
AS2-8	0.09003	0.6176	0.0005	19.39	0.058	108.92	0.48	1.1269	0.0039	1.1567	0.0019
AS1-1	0.08773	0.19239	0.00015	1.67	0.004	164.59	0.83	0.4708	0.0021	1.7072	0.0024
AS1-2	0.09134	0.2709	0.0002	14.94	0.029	68.73	0.28	1.2494	0.0046	1.1887	0.0021

Sample Name	Uncorr. Age (ka)	±2s	corr. Age (ka)	±2s	corr. Initial (²³⁴ U/ ²³⁸ U)	±2s	Sample weight (mg)	14C age yr	Calendar age (yr BP)	Code
AS2-0	160.7	1.7	160.4	1.7	1.2596	0.0020	10.2	>43,000 BP	-	NUTA2-26600
AS2-2.5	196.7	1.9	196.6	1.9	1.3246	0.0026	3.6	38,770±420 BP	-	NUTA2-26601
AS2-8	297.7	5.5	297.0	5.6	1.3653	0.0052	5	>43,000 BP	-	NUTA2-26606
AS1-1	34.39	0.19	34.25	0.20	1.7808	0.0027	4.7	21,080±120 BP	25,700-25,140	NUTA2-26607
AS1-2	490	30	490	34	1.7627	0.0680	5.1	34,830±240 BP	39,950-38,760	NUTA2-26608

たものの、AS2-0 と AS2-8 と同様、>43,000 ¹⁴C yr BP である可能性が高い。AS2 試料のように、¹⁴C 年代の測定限界（4～5 万年）に近い試料については、年代決定をより正確におこなうために、分析試料量を増やすとともに、厳密なバックグラウンド補正をおこなう必要がある。

一方、U/Th 年代については、AS1-1 と AS1-2 から、それぞれ 34.25±0.20 (2 σ) ka と 490±34 (2 σ) ka という年代値が得られた（表 2）。AS1 の最表

層は、U/Th 年代から酸素同位体比ステージ 3 の後半に相当する 3.4 万年前に形成されたつらら石と推定されたが、中心部の U/Th 年代は、¹⁴C 年代と大きく異なるかなり古い年代となった。この原因として、AS1-2 試料は、ハイエイタスと思われる空隙の内側に位置していることから、この空隙を通じた滴下水の流入によって、¹⁴C 年代値が若くなった可能性が考えられる。

AS2 試料の U/Th 年代については、つらら石中

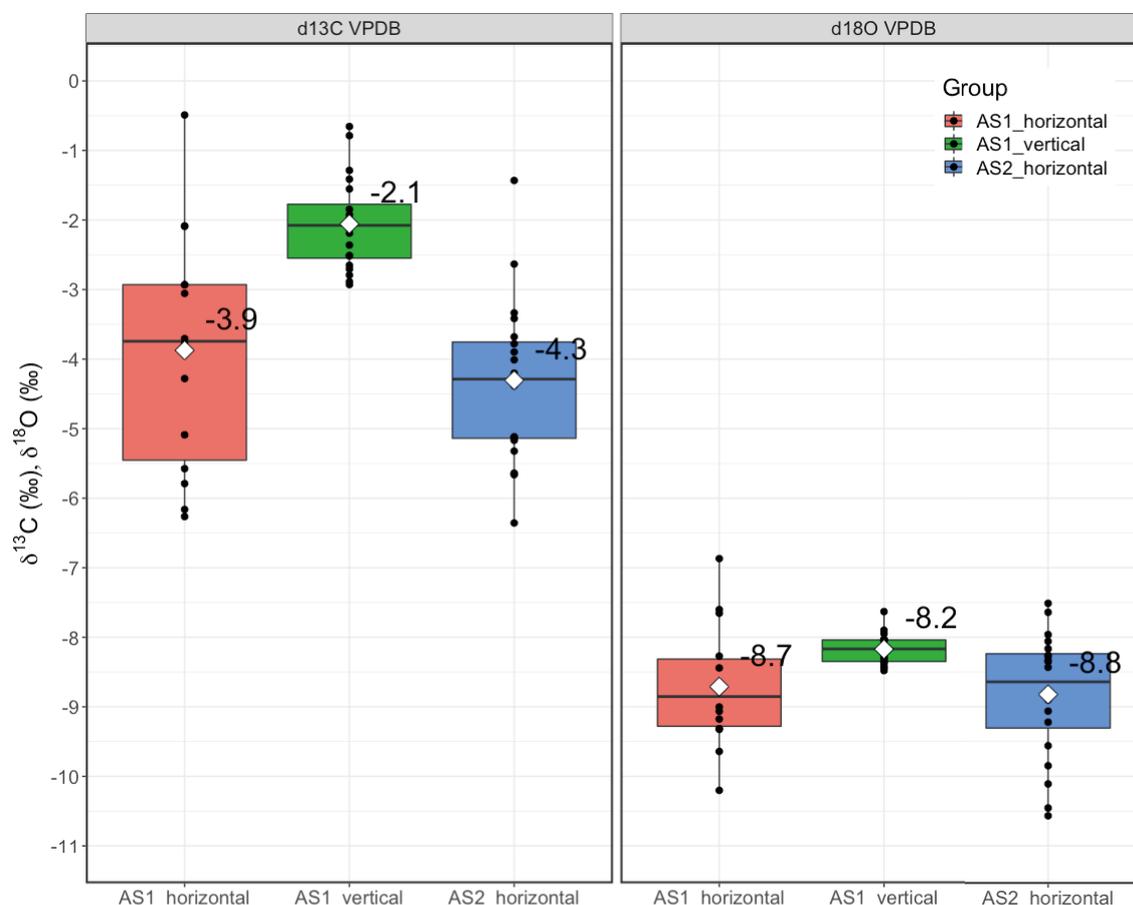


図5 つらら石の炭素同位体、酸素同位体データの boxplot と平均値。

心部の上部、中部、下部で、 297.4 ± 5.6 (2σ) ka、 196.6 ± 1.9 (2σ) ka、 160.4 ± 1.7 (2σ) ka という年代値が得られた。このデータから、AS2 つらら石の平均成長速度は、 $0.58 \text{ mm}/1000 \text{ 年}$ と推定される。アリ・サドル洞窟の近傍 Qal'e Kord 洞窟で採取された石筍の成長速度は年 $0.015 \sim 0.3 \text{ mm}$ 程度であることから (Mehterian et al. 2017)、つらら石の成長速度は同様の環境で形成されている石筍と比べて、2 桁以上遅いことが分かった。この事は、つらら石を使った高時間解像度の古環境復元が比較的難しいことを意味している。

2 つのつらら石の 3 つの測線で採取した計 54 試料の $\delta^{13}\text{C}$ 、 $\delta^{18}\text{O}$ は、それぞれ $-6.4 \sim -0.5\text{‰}$ 、 $-10.6 \sim -6.9\text{‰}$ の範囲で変化していた (図 5, 図 6)。このうち、AS1 のつらら石表層部を上下にサブサンプリングした試料 (AS1_vertical) では、 $\delta^{13}\text{C}$ が $-2.1 \pm 0.66\text{‰}$ (1σ)、 $\delta^{18}\text{O}$ が $-8.2 \pm 0.22\text{‰}$ (1σ) で変動幅が小さかった。一方、成長線に直交するよう、地面に対して水平方向にサブサンプリングした試料 (AS1_horizontal, AS2_horizontal) では、いずれの測線においても $\delta^{13}\text{C}$ で 5‰ 、 $\delta^{18}\text{O}$ で 3‰ 程度の大きな変化を示した (図 5, 図 6)。つ

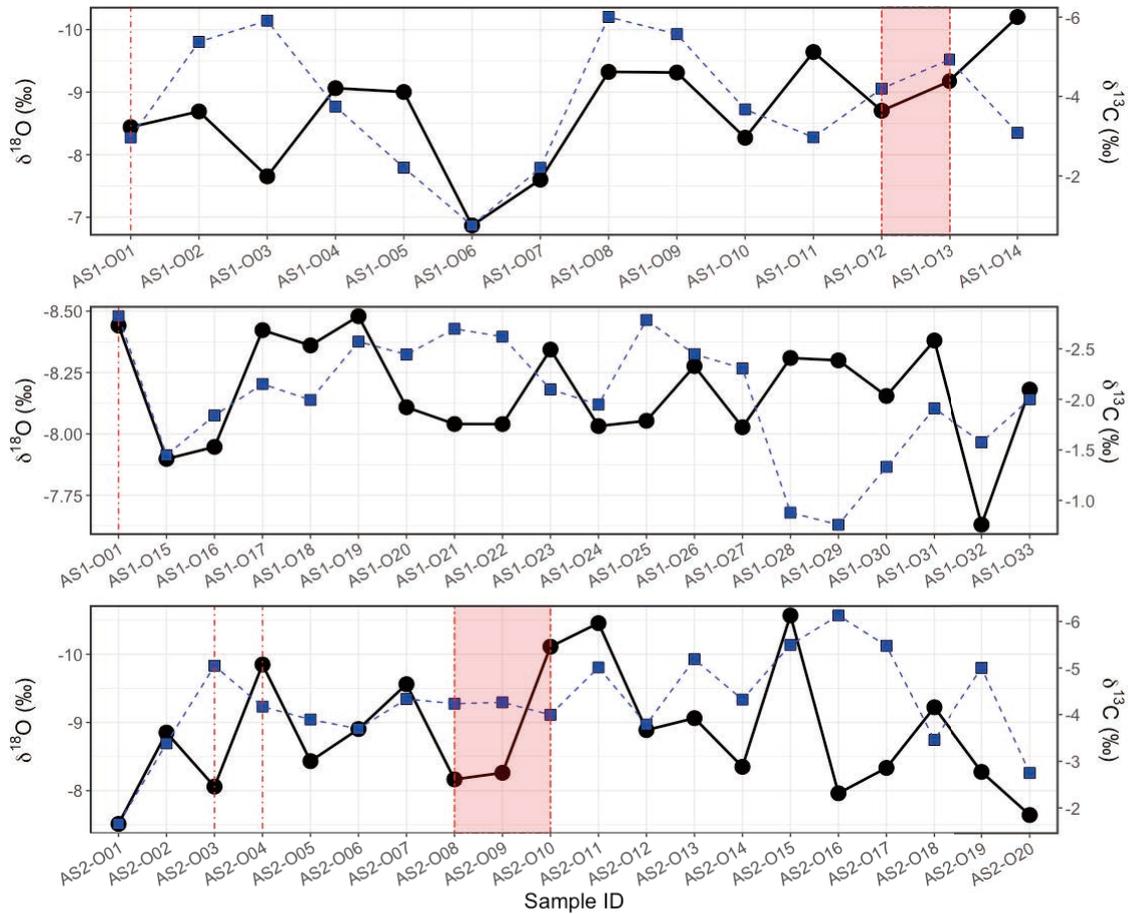


図6 つらら石の炭素同位体（青点線）、酸素同位体（黒実線）データの変動。上から、AS1の外側から内側にかけての測線、AS1の表層部の上から下にかけての測線、AS2の外側から内側にかけての測線のデータ。点線および点線で囲われた範囲は、¹⁴C年代およびU/Th年代を測定した試料に対応する（図3、表2）。

らら石の成長速度が非常に遅いことから、つらら石形成時の同位体分別の議論は慎重におこなうべきであるが、つらら石表層部の $\delta^{18}\text{O}$ データには、下方方向に向かって同位体比が増加する傾向は見られず、 $\delta^{13}\text{C}$ との対応関係もなかったため、つらら石表面での急激な炭酸塩の結晶化に伴う同位体分別はない（あるいは小さい）可能性が指摘できる。この事を踏まえると、AS1_horizontalやAS2_horizontalの外側から内側の測線で見られる同位体比の変動は、炭酸塩形成時期降水の酸素同

位体比が大きく変化していたことに対応すると考えられる。

アリ・サドル洞窟の近傍 Qal'e Kord 洞窟では、44 cm と 50 cm の 2 つの石筍が採取されており、この石筍から酸素同位体比ステージ 1（完新世）の約 2000 年間とステージ 5a-e の約 5 万年間の $\delta^{18}\text{O}$ データが報告されている（Mehterian et al. 2017）。特筆すべき点は、Qal'e Kord 洞窟石筍 $\delta^{18}\text{O}$ データが、北緯 30 度の夏日射量の高い時期に $\delta^{18}\text{O}$ が低くなるよう、同期して変化する点で

ある（-10‰～-4‰）。彼らは、1961年から1981年のテヘランの降水量と降水の $\delta^{18}\text{O}$ データから、降水量の多い冬季に $\delta^{18}\text{O}$ が低下する雨量効果を認め、この観測データに基づいて、石筍 $\delta^{18}\text{O}$ の低い時期（-10‰）が冬季降水量の多い比較的湿潤な気候状態であったと解釈している。一方、乾燥期に対応する時期には、石筍 $\delta^{18}\text{O}$ は大きく増加し、最大で-4‰に達していた。アリ・サドル洞窟のつらら石の $\delta^{18}\text{O}$ は、概ね-8‰～-9‰であることから（図5）、冬季降水量の多い比較的湿潤な気候状態の際に、形成されたものと推察できる。アリ・サドル洞窟つらら石やQal'e Kord洞窟の石筍が全て降水量の多い間氷期に形成されていることから、恐らく、中東地域が乾燥状態にある氷期に形成された speleothem をイラン国内の鍾乳洞で採取するのは難しいのかもしれない。

最後に、テヘラン近郊のGol-e-Zard洞窟では、完新世の3600～5200年前の期間をカバーする長さ18cmの石筍試料が得られている（Carolin et al. 2019a）。この石筍には、石筍の（1）成長量の低下と（2） $\delta^{18}\text{O}$ の増加、（3）Mg/Ca比の増加が、4510年前と4260年前に2回記録されている。著者らは、イラン北西部は、メソポタミア地域から飛来するダストの影響下であり、ダストに含まれるドロマイトが洞窟直上の土壤に沈積し、ドロマイトの溶解によってMg/Ca比の高い滴下水が形成され、そのシグナルが石筍に記録されていると、議論している。彼らの石筍記録は、メソポタミア地域の乾燥化イベントが、それぞれ100年、300年程度続いていたことを強く示唆するため、繰り返し起こった長期的な乾燥化が中東地域の古代文明に大きな影響を与えていた可能性を指摘している。

4. まとめ

アリ・サドル洞窟のつらら石の年代測定と酸素安定同位体比から、つらら石は過去の湿潤期に形成されたと考えられる。また、U/Th年代から、AS2のつらら石の成長速度が、0.58 mm/1000年と推定され、つらら石の成長速度は同様の環境で形成されている石筍と比べて、2桁以上遅いことがわかった。イラン国内の石筍の先行研究の多くは、酸素同位体比ステージ1、3、5に対応する温暖期に形成されたものであることから、氷期の石筍（気候情報）を得るのは難しいと考えられる。

新学術領域研究で対象としている過去1万年間については、Gol-e-Zard洞窟の石筍のように、 $\delta^{18}\text{O}$ だけでなくMg/Ca比などの微量元素比も解析に含めることで、メソポタミア地域の湿潤・乾燥の時代変化を詳細に復元できる可能性が高い。さらに、イランには、ザグロス造山帯地域やアルポロス山脈地域に鉱石を産出する地域が多くあるため、これらの地域で地下資源の開発と金属精錬がおこなわれていた場合、その痕跡が周辺環境（大気、土壌、降水）の変化を通して、近傍の石筍試料にも記録されている可能性もある（重金属濃度やそれらの同位体）。仮に、石筍の平均成長速度が年に0.1 mm程度であれば、こういった古環境情報を10年単位で復元することもできるため、古代西アジアにおける都市の勃興・衰退と気候変動との関わり、あるいは金属資源の利用との関わりを詳細に評価することも可能になるであろう。

上記の研究を遂行するには、対象とする時代を含む石筍試料が必要になるが、良い試料を採取するのが最も難しい。今後、鍾乳洞で新たに石筍試料を採取できるのであれば、まずはより多くの石

筍試料から最表層部の試料を 0.2 g ほどサンプリングし、U/Th もしくは ^{14}C 年代測定をおこなうと良いだろう。その後、分析された最表層部の年代データをもとに、研究対象とする石筍を選定し採取するのが効率的かつ、むやみに石筍を採取しない最も望ましい研究手順になるだろう。

謝辞

つらら石試料は、北海道大学理学研究科技術部薄片技術室の野村秀彦氏に半割していただいた。富山大学都市デザイン学部の石崎康男教授には、つらら石の表面研磨に関して、ご教授いただいた。また、卒業生の小平智弘氏には、試料の研磨をしていただいた。ここに記して感謝いたします。

参考文献

Carolin, S. A., R. T. Walker, C. C. Day, V. Ersek, R. A. Sloan, M. W. Dee, M. Talebian, and G. M. Henderson (2019a) Precise timing of abrupt increase in dust activity in the Middle East coincident with 4.2 ka social change, *Proc Natl Acad Sci U S A*, 116(1), 67–72, doi: 10.1073/pnas.1808103115.

Carolin, S. A., V. Ersek, W. H. G. Roberts, R. T. Walker, and G. M. Henderson (2019b) Drying in the

Middle East During Northern Hemisphere Cold Events of the Early Glacial Period, *Geophysical Research Letters*, doi: 10.1029/2019gl084365.

Dykoski, C., R. Edwards, H. Cheng, D. Yuan, Y. Cai, M. Zhang, Y. Lin, J. Qing, Z. An, and J. Revenaugh (2005) A high-resolution, absolute-dated Holocene and deglacial Asian monsoon record from Dongge Cave, China, *Earth and Planetary Science Letters*, 233(1-2), 71–86, doi: 10.1016/j.epsl.2005.01.036.

Kano, A. (2012) Principles and development of the stalagmite paleoclimatology, *The Journal of the Geological Society of Japan*, 118(3), 157–171, doi: 10.5575/geosoc.2011.0025.

Mehterian, S., A. Pourmand, A. Sharifi, H. A. K. Lahijani, M. Naderi, and P. K. Swart (2017) Speleothem records of glacial/interglacial climate from Iran forewarn of future Water Availability in the interior of the Middle East, *Quaternary Science Reviews*, 164, 187–198, doi: 10.1016/j.quascirev.2017.03.028.

Minami, M., Kato, T., Horikawa K. and Nakamura, T. (2015) Seasonal variations of ^{14}C and $\delta^{13}\text{C}$ for cave drip waters in Ryugashi Cave, Shizuoka Prefecture, central Japan. *Nucl. Instr. and Meth. in Phys. Res., B*, 362, 202–209.

Wickens (2013) *Geochemistry and petrography of speleothems from Turkey and Iran: Palaeoclimate and diagenesis*, PhD thesis, University of East Anglia.

イラク国北部 Jarmo 遺跡およびトルコ国南東部 Hasankeyf 遺跡出土の 石器材黒曜石の化学組成と原産地推定

安間 了¹・常木 晃²・三宅 裕²

¹徳島大学社会産業理工学研究部 ²筑波大学人文社会系

はじめに

2018年までのイラク国北部 Jarmo 遺跡発掘調査および2019年までのトルコ国南東部 Hasankeyf 遺跡の発掘調査において出土した黒曜石製石器の化学分析を現地でおこなった(図1)。2018年度の年次報告で報告したイラク国北部 Qalat Said Ahmadan 遺跡出土の黒曜石化学組成データと合わせて、新石器時代の肥沃な三日月地帯北部における黒曜石利用について考察する。

カッパドキアを中心とする中部アナトリア地方、チグリス・ユーフラテス川上流域の東部アナトリア地方とその北方のアルメニア地方ではアラビア半島の衝突に伴う第四紀火山活動が広く認められる(図1)。これらの地域で多産する黒曜石の化学組成は数多くの報告があり、原産地推定のためのデータベースは揃っているとよい(図2、Campbell and Healey 2016; Chataigner and Gratuze 2014a, b; Frahm 2012, Frahm et al. 2016;

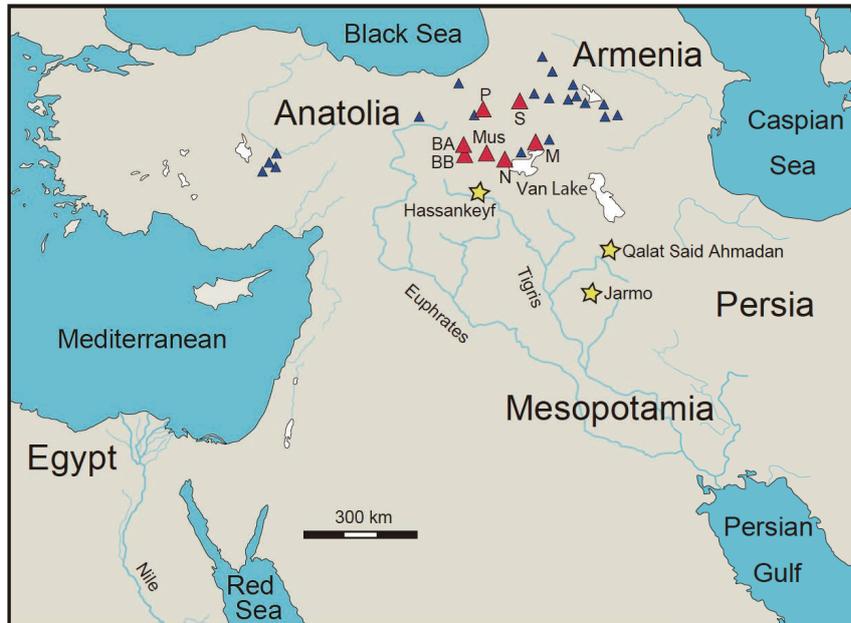


図1 アラビアプレート衝突帯外縁部の黒曜石を産する第四紀火山の分布と黒曜石組成を測定した遺跡。赤三角は比定された黒曜石産地、青三角はその他の黒曜石産地を示す。(BA & BB: Bingöl A & B, M: Meydan Dağ, N: Nemrut Dağ, P: Pasinler, S: Sarikamis)

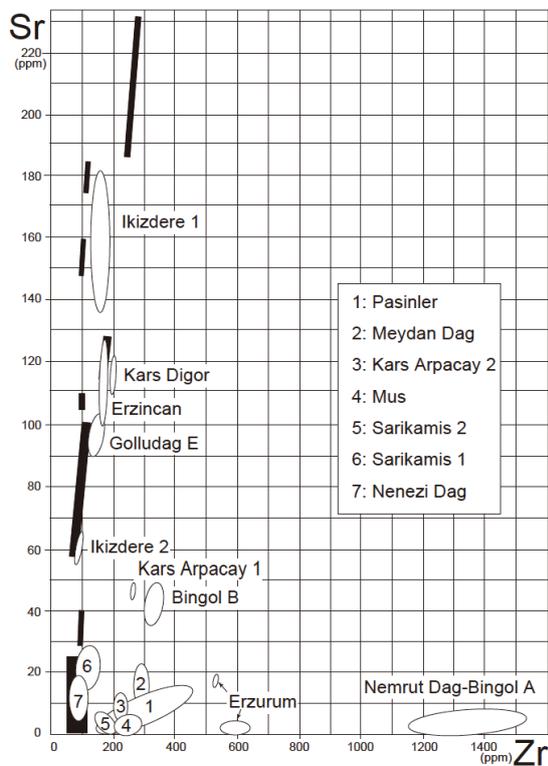


図2 アナトリア地方産（白抜き）およびアルメニア地方産黒曜石（塗りつぶしボックス）の化学組成幅

Poupeau et al. 2010)。

石器として出土する黒曜石の化学分析は、さまざまな分析手法や分析機器の普及とともに、主に大学・博物館などに収蔵されたコレクションを対象におこなわれ、大きな成果をあげてきた (Maeda 2009; Campbell and Healey 2016; Nishiaki et al. 2019 ほか)。一方、最近では出土品の国外持ち出しの規制が強まっており、とくに西アジア地域の場合には政治的な混乱と相俟って、すでに外国の大学・博物館に収蔵されている試料を用いる以外には、精度の良い化学組成分析をおこなう機会ほとんどない。このため、安間ほか (2019) はイラク国北部 Qalat Said Ahmadan 遺跡 (Tsuneki et al. 2019) から出土した石器を保管しているスレイマニヤ博

物館に可搬型蛍光 X 線分析装置 (pXRF) を持ち込んで化学組成分析を試みたところ、原産地推定に耐えうる結果を得た。ここでは、イラク国北部 Jarmo 遺跡 (Tsuneki et al. 2019) およびトルコ国南東部 Hasankeyf 遺跡の発掘調査 (Miyake et al. 2012) により出土したものの、国外への持ち出しが困難な黒曜石製石器試料の現場化学分析結果を報告する。

1. 研究方法

Jarmo 遺跡出土試料を保管する Slemani 博物館および Hasankeyf 遺跡出土試料を保管する Hasankeyf 博物館附属宿舎において可搬型蛍光 X 線分析装置 (pXRF) Olympus VANTA VCR-CCC 型 (Rh ターゲット・4W X 線管) をもちこみ、124 点の Jarmo 出土試料、199 点の Hasankeyf 出土試料について研究室の一角を使って測定をおこなった。この機材では、加速電圧 10 kV の Beam 2 で Mg、Al、Si、P、S、K、Ca、Ti、Mn の濃度を、加速電圧 40 kV の Beam 1 で Ti、V、Cr、Mn、および Fe よりも重い 23 の元素の濃度を測定することができる。Slemani 博物館では発掘時にバケツごとに分離・洗浄した黒曜石製石器試料の表面の汚れを水道水と歯ブラシで落とし、エタノールで表面を拭き取ったうえで自然乾燥させたものについて測定をおこなった。表面に白色の炭酸塩あるいは硫酸塩鉱物が付着している場合、これが少量でまばらに分布する場合は歯科用のスクレーパーやピンセットなどを使用して除去し洗浄したうえで測定をおこなったが、多量に付着して測定に影響があると判断した場合には、測定はおこなわなかった。Hasankeyf 宿舎では、白色鉱物を酸で溶かして洗浄した後分析をおこなった。試料の厚みが 1 mm を越えないものについても、分析可能な

面積が確保できる場合には、注をつけた上で測定をおこなった。

Slemani 博物館でおこなった測定の照射時間は Beam 1 が 20 秒、Beam 2 が 30 秒で、試料の不均質性や分析の繰り返し測定精度を確認するため、大きい試料では測定位置をずらしながら、小さい試料では同じ位置で、1 試料につき 3 回の繰り返し測定をおこなった。Hasankeyf 宿舎でおこなった測定の照射時間は Beam 1 が 60 秒、Beam 2 が 120 秒で、繰り返し測定はおこなわなかった。測定の精度と精度を確認するため、産業技術総合研究所が配布する火成岩標準試料 (JB-2 玄武岩; N=70、JA-1 安山岩; N=62、JA-2 高マグネシウム安山岩; N=57、JR-2 流紋岩; N=66、JG-1 花崗岩; N=61、JG-2 花崗岩; N=69 および JGb-1 斑れい岩; N=77) および堆積岩標準試料 (JDo-1 ドロマイト; N=107、JLs-1 石灰岩; N=81、JLk-1 湖成堆積物; N=34、JSd-1, 3 河川堆積物; N=33, 21) の繰り返し測定を、試料の分析の合間に適宜おこなった。

測定は X 線遮蔽ワークステーションに照射口を上向きに設置した VANTA を用いておこなった。容器につめた粉末状標準試料の測定はプロレンフィルムを通しておこなっているため、分析条件を整えるために石器材黒曜石試料についても X 線照射口のうえにプロレンフィルムを敷いたうえでおこなった。黒曜石試料の厚みが測定値に与える影響について、1 mm 以下の薄い試料では Al や Si など軽い元素の濃度に影響を及ぼすことがある。これらの元素濃度から、あきらかに異常値と考えられるデータは削除した。

2. 結果

2-1. 繰り返し測定

この報告では Sr, Zr, Fe, Mn を用いて原産地推

定をおこなったので、Beam 1 の照射時間を 20 秒に設定したときのこれらの元素の繰り返し濃度測定結果を報告する。カタログデータではこれらの元素の検出限界の目安は 5 ppm 以下とされているが、今回の測定では照射時間を短く設定しているため、実用的な検出限界は元素ごとに大きく異なった。

もっとも検出限界が小さいのは Sr で、8 ppm 含有する JR-2 試料で 66 回計測したうち検出できなかったのは 2 回だけであった (図 3)。20 秒照射時の実用的検出限界は 10 ppm 程度と考えられる。データのばらつきも比較的小さかったが、100 ppm 以上の濃度を持つ標準試料では、推奨値よりも 10 % 程度高い濃度を示した。今回測定した黒曜石試料の Sr 濃度は 0 ppm から 60 ppm の間であるが、この濃度範囲では推奨値との乖離は小さく、繰り返し測定の標準偏差は 60 ppm 含有する試料で 13 % 程度 (± 8 ppm) である。Zr については 33 ppm 含有する JG-2 試料では全ての測定で検出されたが、10 ppm 以下の 2 試料では検出されない確率が高かった (図 4)。Sr に比べてデータのばらつきが大きいものの、平均値としては推奨値に近い値が得られた。現場で測定した黒曜石試料の Zr 濃度は 100 ppm から 1400 ppm の間である。この濃度範囲でもっともデータのばらつきが大きかった JG-1 試料の標準偏差は 26 % であった。Fe については、5000 ppm 以上含む試料については精度良い測定が実現されている (図 5)。いっぽう、数百 ppm オーダーの試料については、検出されないか、推奨値よりも非常に小さい値を示した。今回測定した黒曜石試料の鉄濃度は 2 ~ 4 % であったが、この濃度範囲であれば標準偏差は 4 % 以下の精度で測定されている。Mn については 120 ppm 含有する JG-2 試料では全ての測定

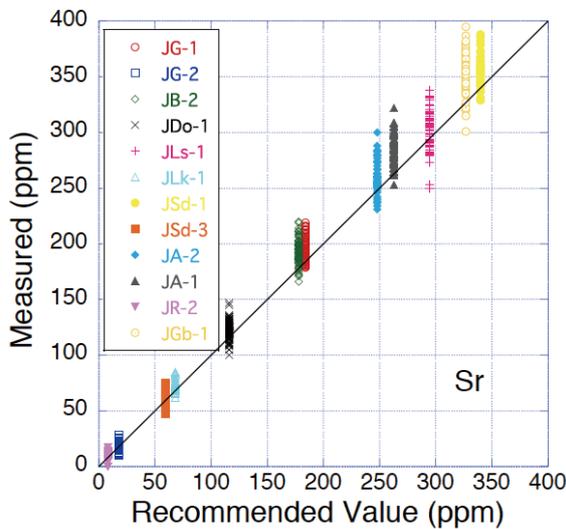


図3 粉末状標準試料のストロンチウムの繰り返し測定結果。横軸に推奨値をとっている

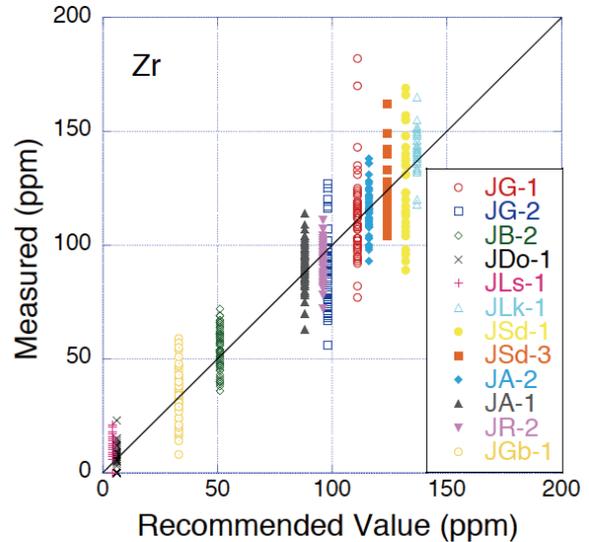


図4 粉末状標準試料のジルコニウムの繰り返し測定結果

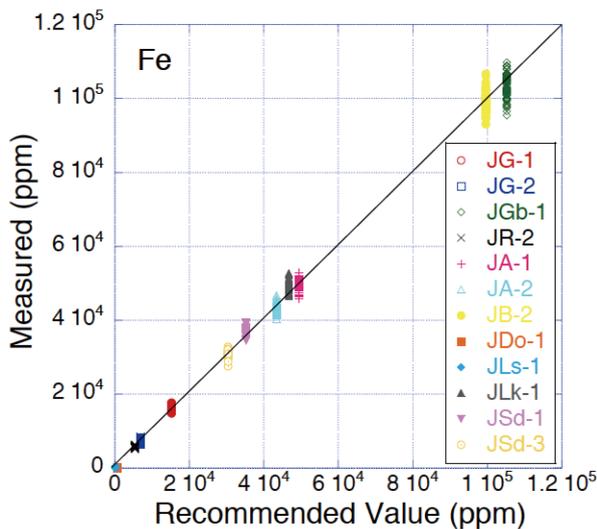


図5 粉末状標準試料の鉄の繰り返し測定結果

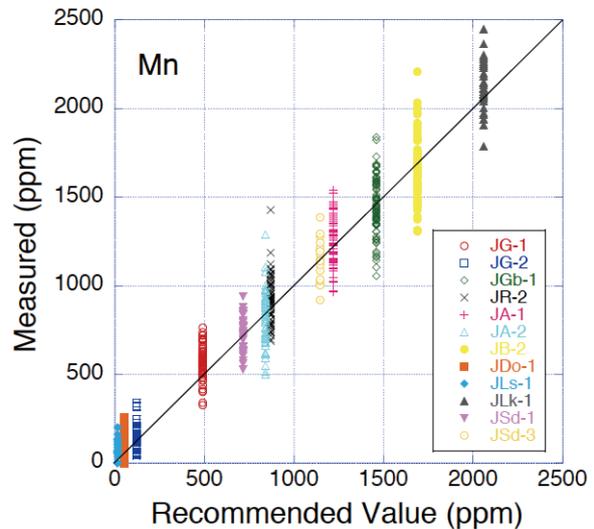


図6 粉末状標準試料のマンガンの繰り返し測定結果

で検出された（図6）。一般にデータのばらつきが大きいものの、平均としては推奨値に近い値が得られた。今回測定した黒曜石試料の Mn 濃度は 400 ~ 600 ppm で、この濃度範囲での繰り返し測

定標準偏差は 17 % 程度となった。

後述するが、黒曜石試料を測定したときには、より良い繰り返し測定精度が得られた。ガラス体の黒曜石と粉末状の標準試料の状態の違いによ

てこのような差が出ることも考えられ、黒曜石の繰り返し測定の際の誤差については、ガラス体標準試料を作成したうえで、今後さらに研究を重ねる必要がある。

2-2. 石器材の黒曜石

Jarmo 遺跡出土石器材黒曜石に関しては、1 試料につき 3 回の繰り返し測定をおこなった。Zr と Sr の繰り返し測定精度は粉末状の標準試料の場合よりもよく、Sr は 40 ppm 以上、Zr は 250 ppm 以上の試料でほとんどの場合 6% 未満であった。検出限界に近い Sr 濃度をもつ試料では、0 ~ 4 ppm の範囲で推移したが、濃度が 5 ppm を越えると、3 回の繰り返し測定すべてで Sr が検出された。

黒曜石原産地の識別図としてよく用いられる Zr-Sr 散布図上で、Jarmo 遺跡出土および Hasankeyf 遺跡出土の石器材黒曜石は、ともに 10 ppm 以下の Sr 濃度と 1000 ppm を越える高濃度 Zr をもつグループに属するものが大半を占めた (図 7)。その頻度は Jarmo 産で 80%、Hasankeyf 産で 98% であった。これまでに公表されている論文の黒曜石原産地データ (図 2) と照らし合わせると、このグループの産地としては Nemrut Dağ あるいは Bingöl A の可能性がある (図 1)。

高濃度 Zr 黒曜石のデータだけを選び分けて、それらの組成を Fe-Mn 散布図上にプロットすると、Hasankeyf 出土高濃度 Zr 黒曜石のほとんどと、Jarmo 出土高濃度 Zr 黒曜石のほぼ半数は左下側のクラスター中にまとまる。(図 8)。この

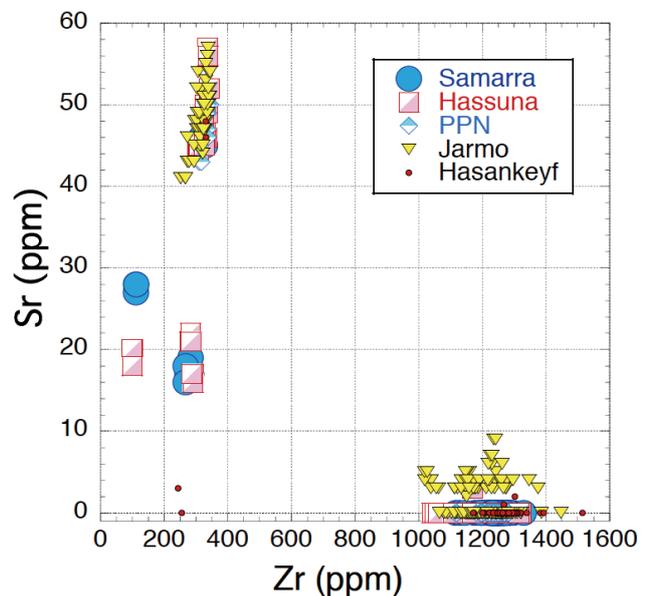


図 7 Hasankeyf および Jarmo 出土石器材黒曜石の Zr-Sr プロット：Qalat Said Ahmadan 出土黒曜石は先土器新石器時代、ハッスーナ期、ハラフ期の時代ごとにプロットしている。

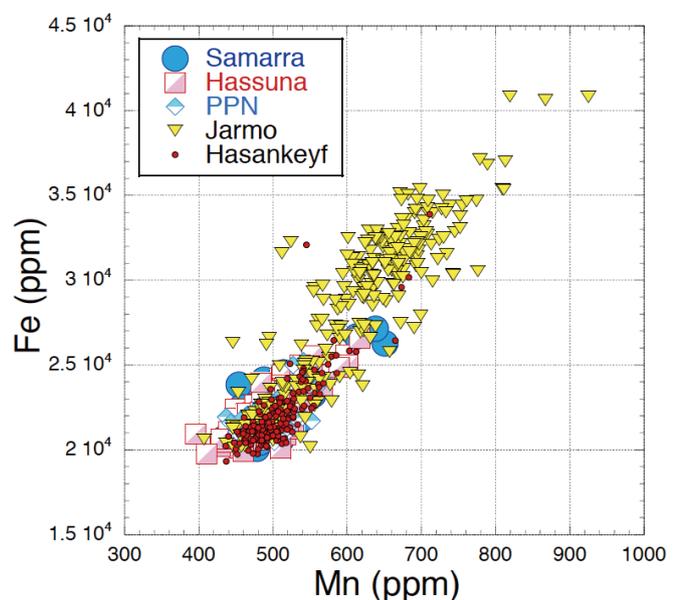


図 8 Hasankeyf, Jarmo および Qalat Said Ahmadan 出土石器材黒曜石の Fe-Mn プロット

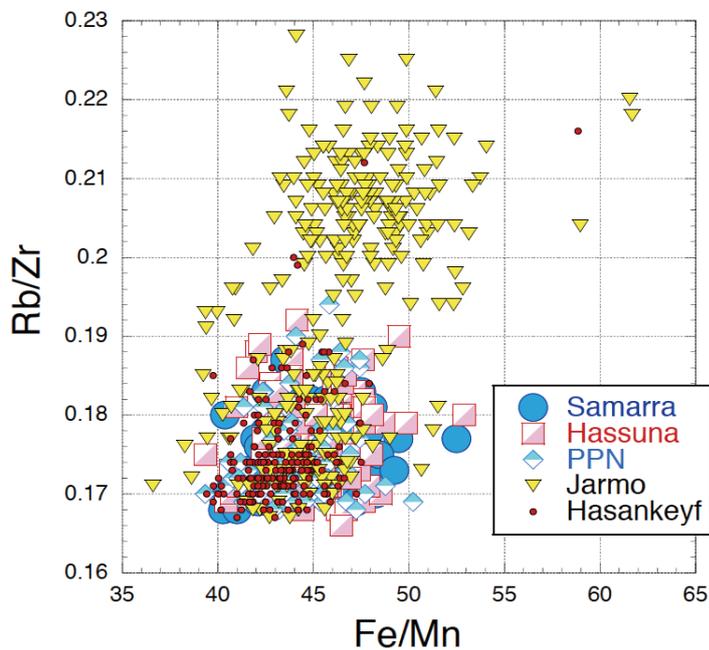


図9 Hasankeyf, Jarmo および Qalat Said Ahmadan 出土 石器材黒曜石の Rb/Zr-Fe/Mn プロット

クラスターは右肩上がりの直線上に伸びており、結晶分化作用あるいはマグマ混合による組成バリエーションを持つ同一マグマ起源の黒曜石産地から得られたと推測できる。一方、Jarmo 出土高濃度 Zr 黒曜石のほかの半数は、散布図の右上に、やや異なる傾きを持つ直線上を中心にプロットされるため、異なるマグマに起源をもつ黒曜石産地から得られたものと考えられる。

Bingöl A 産高濃度 Zr 黒曜石が高い Fe/Mn 比 (40~60) と Rb/Zr 比 (0.175~0.22) を持つのに対して、Nemrut Dağ 産黒曜石はより低い Fe/Mn 比 (25~50) と Rb/Zr 比 (0.17~0.19) を持つことが知られている (Carter et al. 2013; Campbell and Healey 2016)。Hasankeyf 出土および Jarmo 出土高濃度 Zr 黒曜石の Rb/Zr 比および Fe/Mn 比をとってプロットすると、高 Rb/Zr 比・高 Fe/Mn 比を

持つグループと低 Rb/Zr 比・Fe/Mn 比のグループに分けることができ (図9)、前者は Bingöl A 産、後者は Nemrut Dağ 産に比定することができるようである。仮に Rb/Zr 値 0.195 で分けて統計を取ると、Hasankeyf 遺跡出土の石器材黒曜石の 96% (191 試料) と Jarmo 出土黒曜石の 36% (45 試料) は Nemrut Dağ 産で、Hasankeyf 出土黒曜石の 2% (4 試料) と Jarmo 出土黒曜石の 44% (54 試料) は Bingöl A 産であると推定できる。Jarmo 出土の Bingöl A 産黒曜石は、表層部に多い傾向が見られた。

Jarmo 出土黒曜石の残りの 20% すべてと Hasankeyf 出土黒曜石の

1% (2 試料) は、300 ppm 程度の Zr と 40 ppm を越える Sr 含有量をもつグループに分類される。このような組成を持つ黒曜石は、Bingöl B とよばれる火山地帯に産することが知られている (図2)。Hasankeyf 遺跡では Bingöl 系黒曜石の利用はごく限られているようであるが Nemrut Dağ と Bingöl とも遺跡とは最短距離にある黒曜石原産地で、近隣の黒曜石を利用していたことが確かめられた。Hasankeyf の残りの 1% は 250 ppm 程度の Zr と 10 ppm 以下の Sr 含有量をもつ黒曜石で、これらは組成的には遺跡近郊の Mus あるいはより北方の Pasinler 産の黒曜石などに比定しうる (図2) もの、濃度の低い部分での判断であるので、個々の産地を判別しきれる精度が得られているかは疑問の余地が残る。遺跡からの距離が最短である Mus 産と考えるのが合理的であろう (図1)。

3. 考察

Hasankeyf 遺跡では Nemrut Dağ の黒曜石をほぼ専一的に使用していたこと、Jarmo 遺跡では Nemrut Dağ 産黒曜石と Bingöl 系黒曜石の両者を利用してことが推定された。ほかにも Qalat Said Ahmadan 遺跡からは 300 ppm 程度の Zr と 30 ppm を越えない Sr を含む Meydan Dağ 産黒曜石と、Zr が 100 ppm 程度で 30 ppm 以下の Sr を含む北東アナトリアの Sarıkamis 1 産あるいはアルメニア産と考えられる黒曜石が見いだされている（安間ほか 2019）。Qalat Said Ahmadan 出土石器材黒曜石の化学分析値を年代ごとに再検討すると、先土器新石器時代末には Nemrut Dağ 産と Bingöl B 産黒曜石のみが利用されていたが、ハッスーナ期にはこのサイトに出現する全てのグループの黒曜石が利用されたこと（図 7）、サマツラ期からハラフ期にかけて黒曜石の多様性は収束し、ハラフ・ウバイド期には Meydan Dağ 産黒曜石が多用されたことがわかる（安間ほか 2019）。

一方、Hasankeyf 遺跡から得られた 14C 年代は先土器新石器時代（9,500 ~ 9,000 cal. BC）を示し（Miyake et al. 2012）、Jarmo 遺跡からは JII-N トレンチで土器新石器時代（7,300 ~ 6,650 cal. BC）の ¹⁴C 年代が得られている（Tsuneki et al. 2019）。Carter et al. (2013) は Hasankeyf 遺跡西方 40 km に位置する Körtik Tepe で、PPNA 期には Bingöl 系および Nemrut Dağ 産黒曜石が利用されていたことを報告した。

Hasankeyf 遺跡では Bingöl 系黒曜石の利用はごく限られているようであるが、これらの知見を総合すると、Nemrut Dağ および Bingöl B 産黒曜石は先土器新石器時代には Körtik Tepe や Hasankeyf 遺跡から Qalat Said Ahmadan 遺跡にかけての地域で広く利用されていたようである。この時代には

500 km の距離を越えてスレイマニヤ北部まで南東アナトリア産黒曜石がもたらされていたことになる。土器新石器時代になっても、Jarmo 遺跡では Nemrut Dağ 産および Bingöl 系の黒曜石のみが利用されていた。北側の Qalat Said Ahmadan 遺跡では、同時期にはすでに Van 湖北方からの黒曜石ももたらされていたが、これらは Jarmo までには到達しなかったようである。

本報告では先行論文に報告された分析値の補正のしかたや使用した機材の違いによる差は考慮せずに比較をおこなっている。また、現在知られている黒曜石原産地の限られた試料の分析に基づく組成バリエーションとの比較であるので、これらの点についてはさらに詳細な検討が必要である。信頼できる原産地推定をおこなうためのもっとも直接的な方法は、原産地試料と出土石器材試料を同じ機材とルーチンを用いて測定することである。その実現のためにはそれぞれの黒曜石産地試料のライブラリーを構築する必要があるし、未報告の黒曜石産地を求めて地道な地質調査を継続していく必要がある。それぞれの黒曜岩溶岩の噴火年代を決定することも重要であろう。また、信頼できる検量線をひくためにガラス体標準物質を整備することは喫緊の課題である。

謝辞

筑波大学人文社会系の前田修博士には原稿を読んでいただき、最近の黒曜石産地試料の化学組成データの提供を受けました。また、データの解釈に関わる非常に有益なアドバイスを頂きましたことに感謝いたします。本研究で使用した Olympus 社製 pXRF VANTA は、科学研究費補助金（基盤研究 B）17H04493「アッシリア浮彫の石材分析から挑む産地同定と復元」によって購入しました。

研究代表者の大阪学院大学渡辺千香子准教授に感謝いたします。

参考文献

安間了・前田修・常木晃 2019「イラク国北部 Qalat Said Ahmadan 出土の黒曜石製石器の化学組成と原産地推定」『2018-2022 年度文部科学省科学研究費補助金 新学術領域研究（研究領域提案型）「都市文明の本質」2018 年度研究成果報告』149-154.

Campbell, S. and Healey, H. 2016 Multiple sources: The pXRF analysis of obsidian from Kenan Tepe, S.E. Turkey, *Journal of Archaeological Science: Reports*, 10, 377-89.

Carter, T., Grant, S., Kartel, M., Coskun, A. and Ozkaya, V. 2013 Networks and Neolithisation: sourcing obsidian from Körtik Tepe (SE Anatolia), *Journal of Archaeological Science*, 40, 556-569.

Chataigner, C. and Gratuze, B. 2014a New data on the exploitation of obsidian in the southern Caucasus (Armenia, Georgia) and eastern Turkey, part 1: Source characterization, *Archaeometry*, 56, 25-47.

Chataigner, C. and Gratuze, B. 2014b New data on the exploitation of obsidian in the southern Caucasus (Armenia, Georgia) and eastern Turkey, part 2: Obsidian procurement from the Upper Palaeolithic to the Late Bronze Age, *Archaeometry*, 56, 48-69.

Frahm, E. 2012 Distinguishing Nemrut Dağ and Bingöl obsidians: Geochemical and landscape differences and the archaeological implications, *Journal of Archaeological Science*, 39, 1436-44.

Frahm, E. 2017 First hands-on tests of an Olympus VANTA portable XRF analyzer to source Armenian obsidian artifacts, *International Association for Obsidian Studies Bulletin*, 58, 8-23.

Frahm, E., Schmidt, B. A., Gasparyan, B., Yeritsyan, B., Karapetian, S., Meliksetian, K. and Adler, D. S. 2014 Ten seconds in the field: Rapid Armenian obsidian sourcing with portable XRF to inform excavations and surveys, *Journal of Archaeological Science*, 41, 333-48.

Frahm, E., Campbell, S. and Healey, E. 2016 Caucasus connections? New data and interpretations for Armenian obsidian in northern Mesopotamia, *Journal of Archaeological Science: Reports*, 9, 543-64.

Maeda, O. 2009 *The Materiality of Obsidian and the Practice of Obsidian Use in the Neolithic Near East*. PhD thesis. University of Manchester.

Miyake, Y., Maeda, O., Tanno, K., Hongo, H. and Gundem, C. Y. 2012 New excavations at Hasankeyf Hoyuk: a 10th millennium cal. BC site on the Upper Tigris, Southeast Anatolia, *Neo-Lithics*, 1/12, 1-5.

Nishiaki, Y., Maeda, O., Kannari, T., Nagai, M., Healey, E., Guliyev, F. and Campbell, S. 2019 Obsidian provenance analyses at Göytepe, Azerbaijan: Implications for understanding Neolithic socioeconomies in the southern Caucasus, *Archaeometry*, doi: 10.1111/arc.12457.

Poupeau, G., Le Bourdonnec, F-X., Carter, T., Delerue, S., Shackley, M. S., Barrat, J-A., Dubernet, S., Moretto, P., Calligaro, T., Milic, M., Kobayashi, K. 2010 The use of SEM-EDS, PIXE and EDXRF for obsidian provenance studies in the Near East: a case study from Neolithic Çatalhöyük (central Anatolia), *Journal of Archaeological Science*, 37, 2705-2720.

Tsuneki, A., Rasheed, K., Watanabe, N., Anma, R., Tatsumi, Y., Minami, M. 2019 Landscape and early farming at Neolithic sites in Slemani, Iraqi Kurdistan: a case study of Jarmo and Qalat Said Ahmadan, *Paléorient*, 45, 2, 33-51.

研究項目 C01 「中世～現代の西アジア都市」

計画研究 05

中世から近代の西アジア・イスラーム都市の
構造に関する歴史学的研究

近世イランの王都の中のキャラバンサライ

— 『イスファハーンのキャラバンサライ案内』を中心に —

守川 知子

東京大学大学院人文社会系研究科

17世紀のイスファハーンは、サファヴィー朝（1501–1736年）第5代君主シャー・アッバース（在位1588–1629年）の遷都により、国際商業の要の都市として大きく発展した。近世期の国際商業網に組み込まれたイスファハーンには各地から多くの商人が訪れ、彼らによって様々な商品が取り引きされた。本稿では、サファヴィー朝末期に著されたペルシア語史料『イスファハーンのキャラバンサライ案内 (Dar Dānistān-i Kārvānsarāy-i Isfahān)』を中心に、王都イスファハーンの商業空間を再検討する。

1. イスファハーンの都市型キャラバンサライ

ペルシア語の「キャラバンサライ (kārvānsarāy)」は「キャラバン (隊商)」と「サライ (館)」を組み合わせてできた語である。キャラバンサライの本来の意味である「隊商宿」としてはほかに、ギ

リシア語由来のフندوق (funduq) やペルシア語の「家」から派生したハーン (khān) という呼び方もある。西アジアのキャラバンサライは隊商が通過する街道上に建設されるのみならず、都市の中にも存在する点に大きな特徴がある。街道上であれ都市内であれ、その構造はほぼ同じであるが、都市内に建設されるキャラバンサライのほうがやや小ぶりであり、宿泊施設としての機能に加えて、倉庫や卸売店舗として用いられることが多かった¹⁾。1670年代にイスファハーンに通算で3～4年滞在していたフランス人宝石商のシャルダンによると、イスファハーン市内にある都市型キャラバンサライの構造および機能は、上階は通常商人が泊まるための部屋であり、階下は店舗か倉庫として利用され、宿泊室は前室と寝室からなり、前室は奥行きがおよそ2.5 m (8ピエ)、寝室はその1.5倍から2倍の奥行きで、暖炉があり、扉以外には窓はなく、また、隊商宿の裏側と周囲

1 イスファハーンの商業空間については、19世紀後半が中心であるが、市場空間（バーザール）を常設店舗・工房、キャラバンサライ、広場の3つの側面から検討した坂本（1999）「イスラーム都市の市場空間とイスファハーン」が詳しい。建築学的な検討を含めたバーザールの構造および機能については、Gaubé and Wirth (1978)の専著 *Der Bazar von Isfahan* においてきわめて網羅的かつ包括的に論じられている。また、イラン国内の街道上のキャラバンサライについては、それぞれの写真と平面プラン図を載せた *Kārvānsarāhā* (2005) や Kiyani and Kleiss (1995) *Kārvānsarāhā-ye Īrān* が参考になる。近年では、Bryce, O’Gorman and Baxter (2013) “Commerce, empire and faith in Safavid Iran” が hospitality や material culture といった新たな切り口でイスファハーンの都市型キャラバンサライについて論じている。

には馬小屋があり、馬丁らが料理するための暖炉がある。そして「大きな隊商宿には、普通、卸売商人しか泊まらない」というものであった²⁾。

シャー・アッバースがイスファハーンへの遷都を決意したのは1590年ごろである。当初、王宮は金曜モスクのある旧広場のそばにあったとされるが³⁾、大規模な都市計画により、袋小路が多く手狭な旧市街を離れ、王の広場（ナクシェ・ジャハーン広場）の西側に移転された。経済発展を促すこの都市計画の主眼のひとつは、王の広場と王宮を中心とする新市街と旧市街をバーザールで結ぶことであった。全長2 kmに及ぶバーザール通りには、常設店舗やキャラバンサライや工房が軒を連ね、異国や国内各地方からの商品や職人らによる手工芸品がまとまって並んだ。シャルダンは、バーザールについて次のように述べる。

「バーザール」という語は「市場」を意味し、店舗だけがある屋根で覆われた大通りをこのように呼ぶのである。最も広いものは、14、5歩の幅がある。じつに素晴らしいバーザールがいくつもある。多くは煉瓦で建てられ、ヴォールト屋根で覆われている。丸屋根で覆われているものもある。日光は、屋根にある大きな通風孔と市場を横切る道を通して差し込む。かくして、いつもイスファハーンを端から端まで、足を濡らさず、雨風を避けて横切ることができるのである。不便な点は、このようなバーザールの多くには、すこぶる狭いところがあり、そこが絶

えず混み合っているので、通り抜けるのにずいぶん苦勞することである⁴⁾。

また、「屋根付きの街路であるバーザールには、店舗しかなく、夜間には人氣が絶える。誰もそこに住みはしないし、見張りもしない」とも述べており⁵⁾、バーザールが日中のみ営業する商業空間であり、夜間は人通りが絶える様子がうかがえる。それゆえ、遠隔地からの商人たちが宿泊するキャラバンサライは通りに面することは少なく、通りから数メートルほど中に入った場所に建てられることが多かった。

イスファハーンのバーザール通りの起点となるのが、「皇帝」を意味する「カイサリーエ（Qayṣariya）」である。これは王の広場の北側にあり、ヴォールト天井の「門」のごとき建物であった。シャルダンによると、この門を入ると、

イスファハーンで最も大きくかつ豪華なバーザールが始まる。ここでは贅沢な織物が売られている。このバーザールはヴォールト天井で覆われている。中央は大きな円の形をしており、バーザールのヴォールト天井と同じく非常に高い唐草模様の丸天井で覆われている⁶⁾。

さて、このようなバーザール街区という商業空間の中で、サファヴィー朝期の王都イスファハーンのキャラバンサライはどこに位置し、どのような特徴が見られるのだろうか。

2 シャルダン『イスファハーン誌』（羽田編）、26-27頁。

3 Blake (1999) *Half the World*, pp. 15-27. ただし、Blakeの図示する仮王宮の位置（Map 9, p. 103）に疑念がないわけではない。サファヴィー朝期のイスファハーン王宮について詳細に論じた Babaie (2008) は、他都市の宮殿建築やサファヴィー朝以前のイスファハーンについて詳述するが、シャー・アッバースの仮王宮については何ら言及していない [Babaie (2008) *Isfahan and Its Palaces*, pp. 30-64, 65-78]。

4 シャルダン『イスファハーン誌』（羽田編）、13頁。

5 シャルダン『イスファハーン誌』（羽田編）、5頁。

6 シャルダン『イスファハーン誌』（羽田編）、44頁。

2. 『イスファハーンのキャラバンサライ案内』試訳

『イスファハーンのキャラバンサライ案内 (Dar Dānistān-i Kārvānsarāy-i Isfahān)』は、イスファハーンにある 42 軒のキャラバンサライを紹介する⁷⁾。紙を継ぎ足した 3 m 近い巻物に 174 行にわたってナスターリーク体で書かれている。ペルシア語は平易であるも推敲の跡は見られず、重複や書き損じも多い。何らかの覚書のために記されたものであろうが、動機や執筆年は不明である⁸⁾。本稿では以下にその試訳を載せ、42 軒のキャラバンサライを地図に落としした。なお、図 1 は Gaube and Wirth (1978) をもとに作成したものであり、図中の数字は『案内』の試訳に付した番号に対応している⁹⁾。図 2 の地名はすべて『案内』に現れる商人の出身地や商品の産地である。

イスファハーンのキャラバンサライ案内

1) 王^{シャー}のキャラバンサライは、カイサーエ (皇帝の市場) の四つ辻 (chahārsū) の中にある。造

幣所の向かいである。このキャラバンサライはシャー・アッバース大王が建設した。このキャラバンサライには小さなティームチェ——ティームチェとは小さなキャラバンサライのことである——があり、上下階に 100 近い部屋がある。このキャラバンサライには商人がたくさんやってくる。たとえばタブリーズやアルダビールの商人らがいる。ここには上層階 (bālā-khāna) があり、大勢の金細工師 (zar-gar)、七宝細工師 (mīnā-tarāsh)、宝石類を研磨する彫金師 (ḥakkāk) がいる。タブリーズやアルダビールの商品 (matā‘)、タブリーズの製品 (kār)、カズヴィーン産の織物 (qaṣab)、タブリーズ製の緋 (dārā‘ī)、キリム絨毯 (gelīm) といったアルダビール製の商品、アルダビール製の敷物 (jājīm)、アルダビール製のショール (shāl) がここで売られる。また、イスファハーンの商人たちで、このキャラバンサライに部屋を持っている者もいる。どんな商品であれ、欲しいものがここにはある。「商人王 (malik al-tujjār)」はこのキャラバンサライに常駐してい

7 “Dar Dānistān-i Kārvānsarāy-i Isfahān” は、大英図書館に所蔵される幅約 14 cm、全長約 275 cm の巻物である (British Library, MS. Sloane 4094)。この史料は 1978 年に Gaube and Wirth によって初めて紹介され、ファクシミリ版とドイツ語訳が出された [Gaube and Wirth (1978) *Der Bazar von Isfahan*, pp. 261-285]。その後、1992 年に Kayānī がペルシア語校訂テキストを紹介したが、端の切れたマイクロフィルム版を用い、重複や不詳の単語を避けて恣意的に省略・改変しているため、同校訂は参照するにしても注意が必要である。

8 この史料の執筆年について、大英図書館所蔵ペルシア語写本カタログでは「おそらく 18 世紀」とされるが、Gaube and Wirth (1978) は、同史料にザンド朝期 (1751-1794 年) の建造物への言及がなく、1722 年のアフガン侵攻によるイスファハーン陥落からザンド朝まではイスファハーンでは何ら建設活動がなされなかったことから、18 世紀説を否定する。一方、宰相サールー・タキー (在職 1633-1645 年) やシャー・アッバース 2 世 (在位 1642-1677 年) によって建設されたキャラバンサライへの言及があることと、1670 年代にイスファハーン市内に数年間滞在したシャルダンの記述と著しく近似していることゆえに、『案内』の執筆年を「1670 年代」と推定している [Rieu (1966) *Catalogue of the Persian Manuscripts*, Vol. 1, p. 432; Gaube and Wirth (1978) *Der Bazar von Isfahan*, p. 23]。

9 青地の数字は現在も建物の位置が明らかなものを示し、緑地の数字は建物が現存しておらず名称も残っていないが、おおよその場所が推定されるものを示している。推定の根拠には、シャルダン、タヴェルニエらの旅行記に加えて、Gaube and Wirth (1978)、Blake (1999) 等を用いた。なお、『案内』にあがるキャラバンサライの中で場所が不明なものは、No. 17、29、39、40 の 4 軒である。

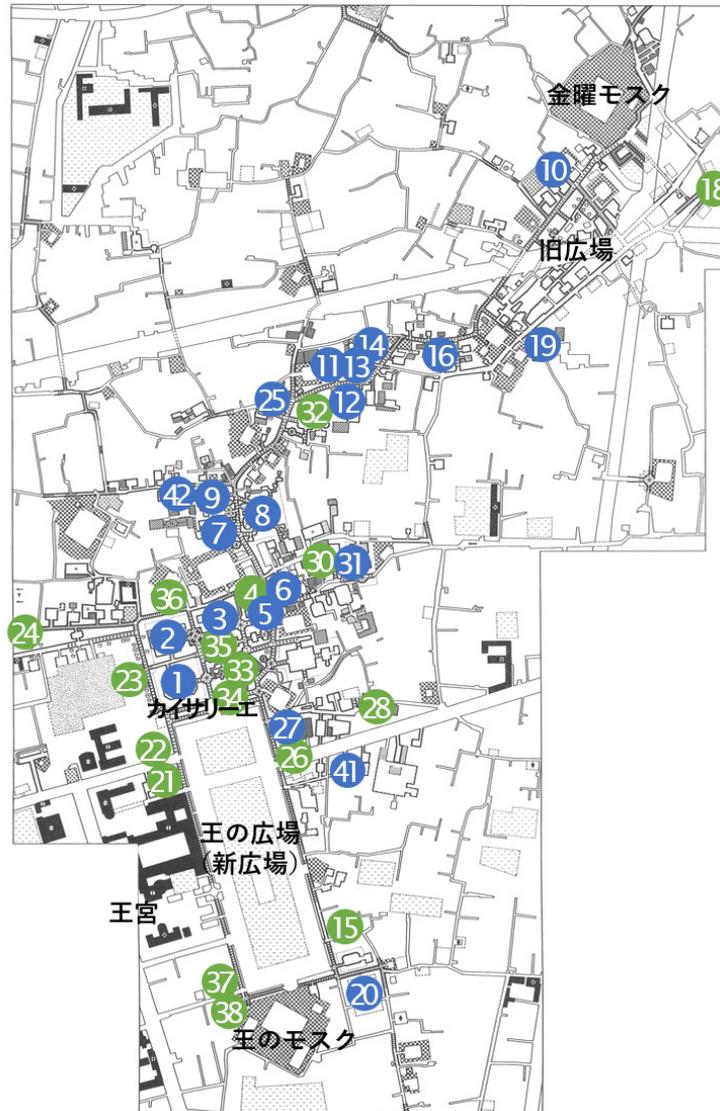


図1 イスファハーンのキャラバンサライ

る。キャラバンサライの中にあるティームチェには、財力のあるインド人 (Hindū) がたくさんいる。このキャラバンサライには夜ごと3～4人の門番がおり、毎晩警備をしている。

タヴィーレ
2) 厩舎のキャラバンサライ。厩舎は王のキャラバンサライの隣にある。このキャラバンサライに

は主にインド人がいる。このキャラバンサライにいるインド人は主にインドからの布地 (pārcha) を売っている。インドからもたらされる布地類は彼らが売り買いする。厩舎のキャラバンサライには2つの扉がある。扉の1つはカイサリーエに通じ、もう1つは更紗商人 (chīt-furūshān) のバーザールに通じる。

表1 キャラバンサライ一覧

	名称	後世の名称[1924 年市街図]
1	王のキャラバンサライ (Shāh)	[Chīt-sāzhā]
2	厩舎のキャラバンサライ (Tavīla)	Chīt-sāzhā
3	ムヒッブ・アリー・ベグ・ララのキャラバンサライ (Muhibb ‘Alī Beg Lala /Lala Beg)	Sang-tarāshhā
4	ザクロ売りたちのキャラバンサライ (Anār-furūshān)	--
5	アラブ人たちのキャラバンサライ (‘Arabān)	Ḥājī ‘Alī Naqī ?
6	マフムード・ベグのキャラバンサライ (Maḥmūd Beg)	[Moḥammad Šādeq Khān]
7	羊頭料理人たちのキャラバンサライ (Kalla-pazān)	Fakhr
8	カズヴィーン人たちのキャラバンサライ (Qazvīniyān)	Golshan
9	伝令長官のキャラバンサライ (Jārchī-bāshī)	Jārchī-bāshī
10	アルデスタン人たちのキャラバンサライ (Ardistānīhā)	Ardestānīhā
11	[ニームアーヴァルドの] キャラバンサライ	Ṭālār
12	マハーバード人たちのキャラバンサライ (Mahābādiyān)	Mīrzā Kūchek
13	死骸殺し人たちのキャラバンサライ (Murdār-kushān)	Morvārīd-keshhā
14	ナタンズ人たちのキャラバンサライ (Naṭanziyān)	Mīr Esmā‘īl
15	皮なめし人たちのキャラバンサライ (Sāgharīchiyān)	--
16	アッバースのキャラバンサライ (‘Abbās)	Āqā
17	バーヴァーナート人たちのキャラバンサライ (Bāvānātiyān)	?
18	アラブ人たちのバーザールのキャラバンサライ (Bāzār-i ‘Arabān)	--
19	ゴザ織り人たちのキャラバンサライ (Būriyā-bāfān)	Būriyā-bāfān
20	油搾りのマクスードのキャラバンサライ (Maqsūd-i ‘Aṣṣār)	[E‘temād al-Tojjār]
21	祖母のキャラバンサライ (Jadda)	--
22	合法のキャラバンサライ (Ḥalāl)	--
23	シャー・アッバースの娘のキャラバンサライ (Dukhtar-i Shāh ‘Abbās)	--
24	ホラーサーン人たちのキャラバンサライ (Khurāsāniyān)	--
25	ハーンサール人たちのキャラバンサライ (Khwānsāriyān)	Khwānsārīhā
26	パラーンチャーリーのキャラバンサライ (PRANChYLY)	--
27	アリー・クリー・ハーンのキャラバンサライ (‘Alī Qulī Khān)	--
28	ホージャ・マフラムのキャラバンサライ (Khwāja Maḥram)	--
29	ヤール・バーバーのキャラバンサライ (Yār Bābā)	?
30	前財務長官のキャラバンサライ (Mustawfi-yi sābiq)	Hendūhā?
31	サールー・タキーのキャラバンサライ (Sārū Taqī)	Sārū Taqī
32	ダルガズィーン人たちのキャラバンサライ (Dargazīniyān)	--
33	ラル人たちのキャラバンサライ (Lāriyān)	--
34	ヤズド人たちのキャラバンサライ (Yazdiyān)	--
35	カーシャーン人たちのキャラバンサライ (Kāshiyān)	--
36	銅細工師たちのキャラバンサライ (Mis-garān)	--
37	王の屠殺場と王の家畜小屋のキャラバンサライ (Sallākh-khāna-yi shāh va Murgh-khāna-yi shah)	--
38	[馬具職人たちのバーザールの] キャラバンサライ	--
39	ザマーン・ベグ・ナーズィルのキャラバンサライ (Zamān Beg Nāzīr)	?
40	アバルクーフ人たちのキャラバンサライ (Abarqūhiyān)	?
41	ベグデリーのキャラバンサライ (Begdīlī)	Begdīlī
42	象のキャラバンサライ (Fīl)	Fīl



図2 商人の出身地・商品の産地

3) ムヒップ・アリー・ベグ・ララ（師傅）のキャラバンサライは、「ララ・ベグのキャラバンサライ」として知られている。このキャラバンサライには金細工師や宝石商人たち（javāhir-furūshān）、真珠商人たち（murvārīd-furūshān）がいる。春のおひつじ宮の月や赤い花や黄色い花の時期に、このキャラバンサライの中で売買される。このキャラバンサライでは一団の人々が真珠（murvārīd）に穴をあける。このキャラバンサライは、シャー・アッバース大王の時代には、ターバン用布地（mandīl）や良質の布地といったヒンドウスターンからもたらされる商品が荷下ろしされていた。現在では金細工師や宝石商人がこのキャラバンサライに [いる。] 50 近い部屋が上下階にある。上階の部屋にはインド人たちが居住している。大半

は織物商（bazzāz）や布地商（pārcha-furūsh）である。

^{アナール・フォルージュ}
4) ザクロ売りたちのキャラバンサライ。アルデスターンからやってくる商品——たとえばアルデスターンの町からもたらされるザクロ（anār）やザクロ・シロップ（rubb-i anār）——は何であれ、このキャラバンサライの中に荷下ろしされる。このキャラバンサライは「ザクロ売りたち（anār-furūshān）のキャラバンサライ」として知られる。このキャラバンサライでは、ザクロやザクロ果汁（shīra）以外のものは何ひとつ売買されない。このキャラバンサライの商品はザクロとザクロ・シロップである。

5) アラブ人たちのキャラバンサライは、ザクロ

売りのキャラバンサライの隣にある。バグダードからくる商品がこのキャラバンサライで荷下ろしされる。真珠やイエメン産メノウ ('aqīq) や琥珀 (kahribā)、サンゴ (marjān) のようにバフラインからくる商品は、このキャラバンサライで荷下ろしされる。バグダードの商品や、バグダードの亜麻布 (katān)、靴 (kafsh)、外衣 ('abā)、馬の背に敷く馬布 (dagdagī)、礼拝用敷物 (jā-namāz) などがこのキャラバンサライにあり、売り買いされる。

6) マフムード・ベグのキャラバンサライは、ザクロ売りのキャラバンサライの向かい側にある。ヨーロッパ人のイギリスの商館 (khāna-yi Inglīs) の裏手に位置している。このキャラバンサライで荷下ろしされる商品は、カズヴィーンの米 (birinj)、マーザンダラーンからもたらされるスイレン米 (birinj-i nīlūfar) [であり]、ケルマーンの商品、アバルクーフの商品、マシュハド製の碗 (kāsa)、杯 (piyāla)、受け皿 (na'lbakī) がこのキャラバンサライで売買される。ケルマーンの商品、碗、皿 (būshqāb)、受け皿、大皿 (ṣaḥn-i buzurg)、ティーポット (qūrī)、壺 (martabān) がこのキャラバンサライで売買される。このマフムード・ベグのキャラバンサライに荷下ろしされる他の商品は、ウズベキスターンの商品が時にもたらされ、このキャラバンサライで荷下ろしされる。ウズベク (Uzbek) の商品は敷き布団 (tushak) [もしくは麝香 (mushk)] とサマルカンドの紙 (kāghaz) である。商人たちはサマルカンドからやってくる。彼らの商品については既述した。

^{キャラバン}
7) 羊頭料理人たちのキャラバンサライ。マフムード・ベグのキャラバンサライよりも上のほうにあ

り、伝令長官のモスクに近い。これは「羊頭料理人たち (kalla-pazān) のキャラバンサライ」と呼ばれている。かつては羊頭料理人たちがこのキャラバンサライにいた。現在では、ギーラーンからくる商品がすべてこのキャラバンサライで荷下ろしされる。魚の燻製 (māhī-yi dast-pīch)、マス (māhī-yi surkh)、オレンジ (nāranj)、人々が外套 (qabā) をつくる薄手の布 (tafšīla) といった品々がこのキャラバンサライで手に入る。羊頭料理人たちのキャラバンサライの商品については既述のとおりである。

8) カズヴィーン人たちのキャラバンサライは伝令長官のモスクに近い。このキャラバンサライでは、カズヴィーン製の織物や女性が着用するカズヴィーン製の柄物下着 (zīr-dāmanī-yi naqsh) がここで売買されている。このキャラバンサライは「カズヴィーン人たちのキャラバンサライ」として知られている。

^{ジャールチャー・パーシー}
9) 伝令長官のキャラバンサライは、カズヴィーン人たちのキャラバンサライの向かいにある。伝令[長官] (jārchi[-bāshī]) のキャラバンサライでは、シーラーズのユダヤ教徒 (Juhūd) の商人らがここで自分たちの商品を広げ、売っている。シーラーズの商品は、[染料用の] 紅木 (chūb-i bagham)、乾燥ショウガ (zanjabīl-i khushk)、コショウ (filfil)、シナモン (dārchīnī)、ナデシコ (qaranfal)、アカネ (rūnās)、カルダモン (hil)、コーヒー (qahva) である。シーラーズのユダヤ教徒の商人たちは、あるいは別の方角からやってきて、伝令長官のキャラバンサライに滞在し、自分たちの商品を売る。他のキャラバンサライに泊まることはできない。また、他のキャラバンサライ [の項] で記載

される品々は、伝令長官のキャラバンサライで自分たちの商品として売ることはできない。これはシャー・アッバース大王が定めた規則である。

10) アルデスターン人たちのキャラバンサライ。ザクロ売りのキャラバンサライの他に、[アルデスターン人には] 別のキャラバンサライがあり、リネン布 (mithqālī)、麻布 (karbās)、裏地 (astar)、女性が着るチャードル (chādūr) がこのキャラバンサライで売り買われる。

11) [ニームアーヴァルドの] キャラバンサライは、ニームアーヴァルド [街区] のくぼ地に建てられている。このキャラバンサライでは、コムの人々やコムの人々やコムの人々が積み荷を広げている。彼らの商品はコムの人々の石鹼 (sābūn) やコムの人々の麻布である。このキャラバンサライはシャー・サフィーの母后が建てた。カーシャーンやビードゴルと呼ばれるカーシャーンの村からの人々や、ナタンズやミーラーゲルド村の商人たちが [やってくる。] 大粒レーズン (mavīz) や赤いレーズン (kishmish-i surkh)、カーシャーンのスモモ (ālū) などの乾物 (khushka-bār) や、カーシャーンの村のひとつであるマハッラート産の絨毯 (qālī) がこのキャラバンサライにはある。

12) その向かいには、マハーバード人たちのキャラバンサライがある。マハーバードはカーシャーンの村のひとつである。その村では住人はみな織物職人 (jūlah) である。麻布を織っている。マハーバードの人々の商品は麻布である。マハーバードの裏地は有名である。乾燥アンズ (zardālū) や乾燥スモモがマハーバードからもたらされる。

13) さらに先には、^{モルダール・コシュ}死骸殺し人たちのキャラバンサライがある。すなわち、ロバやラクダや馬を殺し、その皮を売っている。「死骸殺し人たちのキャラバンサライ」の意味は次のとおりである。馬やラクダが死んでいる場所はどこであれ、「死骸殺し人 (murdār-kush)」と呼ばれる人々の一団がいる。死んだ馬、死んだラクダ、死んだラバがいると、彼らはそれらの皮を剥ぎ、死骸の皮を売る。死骸の肉や骨は、ゾロアスター教徒 (Gabr) たちのハザール・ダッレ (千の谷) の荒野に向けてラバの背に載せて運び、ハザール・ダッレに捨てる。すると、カラスたちが集まってくる。王の気分が乗るならば、[王は] 狩りに出る。死骸殺し人たちは傷ついたラクダか、傷ついたり用済みとなった馬を1頭購入して殺す。その肉をダルヴィーシュたちが買う。この [キャラバンサライ] を「死骸殺し人たちのキャラバンサライ」と呼ぶ。

14) ナタンズ人たちのキャラバンサライ。ナタンズの人々やナタンズの商人たちがこのキャラバンサライに滞在する。このキャラバンサライは、ミール・イスマーイール・カフヴァチー (コーヒー係) がシャー・アッバース大王の時代に建設した。キャラバンサライに荷下ろしされるものは何であれ、ナタンズの商人たちが荷下ろしする。彼らの荷は、乾燥させた大粒レーズンや乾燥木の実 (maghz)、乾燥グミ (sinjid)、麻布、ナタンズのリネン布である。

15) ^{サーガリーチー}皮なめし人たちのキャラバンサライは靴縫いたち (kafsh-dūzān) のバーザールの中に位置している。皮なめし人たち (sāgharīchiyān) はラバの皮や馬の皮をなめす。馬やラバの皮以外、他の皮はなめさない。皮なめし人たちがこのキャラバン

サライの中にいる。このキャラバンサライの中で皮をなめしている。赤や緑や黄やオレンジといったどんな色でも望む色に染め上げる。

16) アッバースのキャラバンサライは、旧広場のそば近くに位置している。このキャラバンサライには織物職人がいる。麻布を織っている。大きくて古いキャラバンサライである。シャー・アッバースの時代より前に、ザフルマール・スルターン・アラシュルーという男がいた。彼はその地の帝王であり、ひどいことをたくさんおこなった。シャー・アッバース大王が彼を殺した。

17) バーヴァーナート人たちのキャラバンサライ。これは「ミールザー・ヘダーヤトのキャラバンサライ」として知られている。大きなキャラバンサライである。このキャラバンサライでは、シーラーズやバーヴァーナートの商品が広げられる。シーラーズの商品は水タバコの瓶 (shīsha-yi qaliyān)、シーラーズの大瓶 (qarāba)、ナツメヤシ (khumā)、レモン水 (āb-i limū)、オレンジの花の蒸留水 (‘araq-i bahār)、オレンジやレモン [の蒸留水?]、生ナツメヤシ (rutāb) ——すなわち新鮮なナツメヤシ——であり、[これらは] 箱詰めされる。レモン水のガラス瓶や、未成熟ナツメヤシ (khumā-yi kharak) ——すなわち熟していないナツメヤシ——はシーラーズの商品である。また、バーヴァーナートの商品である青レーズン、黒大粒レーズン、「王たちのナツメヤシ」と呼ばれる黒ナツメヤシ、油 (rawghan)、バーヴァーナートのブドウ・シロップ (dūshāb) がこのキャラバンサライで売られている。これらはバーヴァーナートやシーラーズからもたらされる。バーヴァーナートはシーラーズの村のひとつである。

18) アラブ人たちのバーザールのキャラバンサライ。旧広場の近くにある。このキャラバンサライにはマハッラートの人々が滞在する。マハッラートの商品は、木皿 (khān) や絵柄入りの盆 (khāncha-yi naqqāshī) である。マハッラート産の絨毯はここで売り買いされる。絨毯を織るジュエカーンの人々がここにいる。

^{ブーリヤーバーフ}
19) ゴザ織り人たちのキャラバンサライはゴルバル街区のほうにある。このキャラバンサライにはゴザ織り人 (būriyā-bāf) がいる。よって、このキャラバンサライの商品は葦でできたゴザ (būriyā) である。イスファハーンには、このキャラバンサライ以外にはどのキャラバンサライにもゴザはない。モスクやハンマーム (公衆浴場) に敷くゴザは、このキャラバンサライにある。

王の広場にあるキャラバンサライについて

^{アッサール}
20) 油搾りのマクスードのキャラバンサライ。このマクスードは富豪であった。シャー・アッバース大王は、彼を「父」と呼んでいた。この油搾り (‘aṣṣār) の男はこの辺りに 10 から 12 軒の店舗やキャラバンサライを保有していた。現在ではすべて荒廃している。今述べているこのキャラバンサライは油搾りのマクスードが自らの財で完成させたものであり、シャー・アッバースに献上した。イスファハーンにはこのキャラバンサライやバーザール (bāzārgāh) よりも美しいものはない。おそらくはイラン全土でも比類なきものである。このキャラバンサライは王の広場と庭園 (bāghāt) の近くに位置している。このキャラバンサライの中にはティームチェがある。このキャラバンサライの奥にもティームチェが設けられている。キャラバンサライの部屋には、ラールやホルムズ、ホ

ヴェイザ、ドウラク、ベフベハーン、ネイリーズの商人の一団がいる。ルールの人々の商品は、シーラーズ方面からのコーヒーやタバコ (tunbākū) [であり]、ナツメグ (jawz) やクローヴ (mīkhak) といった生薬 (‘aqāqīr) [原語 ‘aqāqīl]、発酵ショウガ (zanjabīl-i parvarda)、発酵ウコン (zurunbād)、[発酵] ユカン (āmula)、発酵ミロバラン (halīla) がこのキャラバンサライに持ち込まれる。シャー・アッバースはこのキャラバンサライを自身の娘に下賜した。現在では王室のものとなっている。

21) ^{ジャッデ} 祖母のキャラバンサライ。このキャラバンサライには2つの扉がある。1つは広場の方角にあり、もう1つは宰相であったサールー・タキーが建てたバーザールの四つ辻の方角にあり、庁舎 (daftar-khāna) へ向かう。広場へ向かうこちら側には四つ辻とバーザールがある。バーザールには、アルメニア人 (Armanī) やムスリム (Muslimān) からなるロンドン織り (ラシャ) 商人 (lundra-furūshān) やロンドン織り縫い師たち (lundra-dūzān) の一団がいる。彼らは店舗をもっている。四つ辻の両側には2つのティームチェが建てられ、アレppoからやってくるアルメニア人たちがこのティームチェにいる。でんでん太鼓 (jaqjaqa)、眼鏡 (chashmak)、ガラスや真珠の装身具 (jaqqa) といったアレppo産の製品がこれらのティームチェにある。四つ池 (chahār-hawz) やバーザールの方角にある扉のほうでは、店で水タバコの瓶を売っている。扉のところにある2つのティームチェは互いに向かい合っている。それらのティームチェでは、インドからの商人であるスィッディーキーたち (Siddīqiyān) の一団がいる。このスィッディーキーたちはインドのスナナ派である。祖母のキャラバンサライには、ヒンドウスター

ンの商人や [スィンド地方の] 織物商 (parācha)、インドの富豪たちの大半がここに滞在する。バンダレ・アッバースを通ってもたらされる商品はいずれもこの場所に荷下ろしされる。タバコがこのキャラバンサライに入ってくる。このキャラバンサライはサールー・タキーの宰相時代に建設された。祖母のキャラバンサライでは、ムスリムやムルターン人の卸売商人や、スナナ派の商人がここで荷を広げる。彼らの荷はインドの商品からなる。たとえば、ターバン用布地やスィンド (SYND) の商品、インド産の多色織布 (al[ī]jja)、様々な混紡絹布 (alacha-hā)、藍 (nīl)、氷砂糖 (nabāt)、[発酵] ユカンや発酵ミロバラン、発酵ショウガ、上質の布地 (ajnās-i tafāriq)、インド産の捺染更紗 (chīt-i qalamkār) がこのキャラバンサライにある。他にはシーラーズや境域からのタバコが持ち込まれ、祖母のキャラバンサライの中で用いられる。それぞれの部屋の中には、他のどこにもいないほど裕福な商人たちがいる。このキャラバンサライは、インドの商人やアルメニア人や [スィンド地方の] 織物商らで多大な利益を上げている。

22) ^{ハラール} 合法のキャラバンサライは、ナクシェ・ジャハーン [広場] の方角にある。小シャー・アッバース [2世] が自身の名で建てた。これを「合法 (ハラール) のキャラバンサライ」と名付けたのは、シャー・アッバースが合法的な金でこのキャラバンサライを [建てるよう] 命じたからである。王の食事や衣服はこのキャラバンサライの賃料から賄われる。このキャラバンサライにはルームの商人たちがいる。彼らの商品は、イスタンブールの紙やクルシュ貨 (qurūsh)、銀 (nuqra) などである。

23) シャー・アッバースの娘 [のキャラバンサライ]

イ]。[シャー・アッバースの娘とは] ミール・アブドウルアズィームの妻のことである。銅細工師たち (mis-garān) のバーザールの裏手にある。このキャラバンサライにはカラダグの商人たちがいる。商品は、ジョージアやロシアからの女奴隷 (kanīz) や男奴隷 (ghulām) である。このキャラバンサライの中で売り買いされる。他のいかなるキャラバンサライでも黒人や白人の女奴隷や男奴隷は販売されない。王の命令はこのようになっている。

24) ホラーサーン人たちのキャラバンサライは、染物師たち (rang-razān) のバーザールの突き当たりにある。2つのキャラバンサライがある。1つは古く、1つは小シャー・アッバースのときに建てられた。ここの商品はホラーサーンの商人ら [が扱っており]、プハラの皮革 (pūst)、ジャームのフェルト (namad)、マシュハドのフェルト、[薬草の一種である] イワオウギ草 (taranjabīn)、プハラのスモモ、ホラーサーン産の敷物や絨毯、サンザシ (shūr-khisht)、ホラーサーン製の粗フェルト (yāpūnchī) がこのキャラバンサライで売り買いされている。半処理 (nīm-ras) の青皮革、半処理の赤 [皮革]、半処理の黒 [皮革] がこのキャラバンサライで売り買いされる。

25) ハーンサーン人たちのキャラバンサライは、大工たち (durūd-garān) のバーザールの中に位置している。ハーンサーン人の商人たちがこのキャラバンサライに滞在する。彼らの商品は乾物である。乾燥大粒レーズン、「カラスの頭 (sar-i kalāgh)」、「ワイン蒸し (mey-pukht)」、黄ブドウ・シロップ (dūshāb-i zard)、乾燥アンズ——これを「ケイスイー (qaysī) (アプリコット)」と

呼ぶ——、「太陽の種 (tukhm-i shams)」を乾燥させたもの——それを「アームーザイナディー (ĀMWZYND'YY)」と呼ぶ——、「ハーンサールのリンゴ」と呼ばれる大きな赤リンゴ (sīb)、「ハーンサールのよだれ (āb-i dandān)」と呼ばれる大きくて青いナシ (gulābī) である。さて、「ワイン蒸し」は [次のようにつくる。] ブドウから採るシロップ (shīra) を十分に濃厚になるまで釜の中で煮詰め、小麦粉 (ārd) をその中に入れる。[氷菓の一種である] ファールレーデ (pālūda) のようになるまで [しっかりと] 煮詰め、細かく分けて (pāra pāra) 太陽にさらすと乾燥する。アーモンド (bādām) やクルミ (gardū) の実をいくつかその中に入れる。それを「アーモンドのワイン蒸し」や「クルミのワイン蒸し」という。そのほか、甘いナシを2つに分け、その中にクルミの実を入れる。そして乾燥するまで太陽にさらす。それを「カラスの頭」と呼んでいる。ハーンサーンの商人たちはまさにこれらの商品を扱っている。

26) 天幕づくりたち (lavvāfān) のバーザールの入り口にキャラバンサライが1つあり、それは「パラランチーリー (PRANCHYLĪ) のキャラバンサライ」として知られている。シャー・アッバース大王の時代には、ルーム人たちがここで荷を広げていた。シャー・アッバース2世が合法のキャラバンサライを建設すると、ルーム人やルームの商人たちは合法のキャラバンサライで荷をほどくようになった。

27) アリー・クラー・ハーンのキャラバンサライは飾り房編み師たち ('alāqa-bandān) のバーザールの中にある。このバーザールにはムルターン人たちがいる。四つ辻にはティームチェが2つあ

る。このバーザールの奥にもキャラバンサライがある。小さなキャラバンサライのことをティームチェという。これらのキャラバンサライはすべて、布地商のインド人たちが滞在している。ムスリムたちはこのバーザールやキャラバンサライにはいない。ここでは良質の布地が見つかる。

28) シャー・サフィーの師傅 (lala) であったホージャ・マフラムのキャラバンサライは、オランダ商館 (khāna-yi Vūlandīs) の近くにある。このキャラバンサライにはヤズド人たちが滞在し、ヤズドのキャラバンがやってくる。このキャラバンサライでは彼らの商品——良質である——が売られる。商品は、ヤズドのザクロ、イチジク (anjīr)、バラ水 (gulāb)、混紡絹布、薄手の布である。

29) ヤール・バーバーのキャラバンサライ。このキャラバンサライにはインド人たちがいる。広場の肉屋たち (qaṣṣābān) の屠殺場がそこにある。

^{ムストウフィー}
30) 前財務長官のキャラバンサライは、キャッレ・ミナルの足元近くにある。このキャラバンサライには裕福なインド人たちがいる。主に商人たちである。商品を買ひ、他の都市へ売りに行く。

31) サールー・タキーのキャラバンサライは、キャッレ・ミナルの足元にある。ここのキャラバンサライでは更紗職人たち (chīt-garān) が働いている。

32) ダルガズィーン人たちのキャラバンサライ。ダルガズィーンからのヨーグルト (māst) がもたらされ、ここで売られる。このヨーグルトは春にもたらされる。

33) ラール人たちのキャラバンサライはカイサリーエの裏手にある。このキャラバンサライでは、薬種商 ('attār) の卸売商人たち (bundārān) が店を構えている。

34) ヤズド人たちのキャラバンサライ。このキャラバンサライでは主に金持ちの織物商たちが部屋をもっている。金糸織り (zar-baft) や、金糸入り (zar-tār) のターバン用布地といった良質の商品や欲しい布地はどのような種類であれ、このキャラバンサライで見つかる。このキャラバンサライはカイサリーエの中にある。このキャラバンサライは、オランダ商館の裏手にあるものとは異なる。他のヤズド人たちはそことカイサリーエの中で商品を [扱っている?]

35) カーシャーン人たちのキャラバンサライは2つのキャラバンサライである。1つは「カーシャーン人たちの古いキャラバンサライ」として知られており、もう1つは「カーシャーン人たちの新しいキャラバンサライ」として知られている。イギリス商館の近くにある。どちらのキャラバンサライにも、金糸織りや混紡綿布 (qutnī)、混紡絹布、薄手の布、4ギヤズ [布] (chahār-gazī) といったカーシャーンの商品がある。

^{メス・ガル}
36) 銅細工師たちのキャラバンサライは銅細工師たちのバーザールの近くにある。このキャラバンサライは病院 (dār al-shifā) の裏手にある。病院はキャラバンサライ様式であり、病人や狂人がそこにいる。イギリス商館の裏手にある。

37) 王の屠殺場と王の家禽小屋 [のキャラバンサライ] は王宮の裏手にある。このキャラバンサライ

イには、王宮用に殺される羊や、帝王の台所で消費される鶏たちがこのキャラバンサライにいる。

38) 別のキャラバンサライが馬具職人たち (sarrājān) のバーザールの中にある。ここでもまた、ヤズドの人々が自分たちの商品を広げている。このキャラバンサライの商品はヤズド産の裏地やヤズドのイチジク [であり、それらの商品] が売り買いされる。

39) ザマーン・ベグ・ナーズィル (監督官) のキャラバンサライは [従者のワクフの (vāqifa-yi nawkar?)] 家の扉のところにある。このキャラバンサライには、境域からやってくるあらゆる品物がこのキャラバンサライにある。

40) アバルクーフ人たち [のキャラバンサライ] は同じくこの大きなキャラバンサライの裏手にある。このキャラバンサライではアバルクーフ製の壺 (kūza) やアバルクーフ製の碗や杯が持ち込まれる。

41) ベグデリーのキャラバンサライは、シャイフ・アル=イスラームのミールザー・アリー・レザーの屋敷の中にあり、MHAYA のムルターン人たちがいる。

42) 象のキャラバンサライ。かつて象が繋がれていた。

3. 小括

以上が『イスファハーンのキャラバンサライ案内』の試訳である。当然のことながら、ここに記されるのは、当時のイスファハーンのキャラバンサライすべてではない。たとえばシャルダンは隊商宿の数を 1802 軒とし、19 世紀後半のイスファハーンの収税吏は『イスファハーン地誌』(1877 年)の中で、キャラバンサライを 95、ティームチェ (小さなキャラバンサライ) を 30、合わせて 125 軒と記す¹⁰⁾。このように数の上では不十分なものであるとはいえ、『案内』からはいくつか新たに読み取れる点がある。

第一に、サファヴィー朝下の都市型キャラバンサライもまた、「隊商の宿」という宿泊機能だけではなく、特定商品の卸売りの場でもあり、むしろこの後者の機能で広く知られていたという点である。サファヴィー朝の王都であったイスファハーンでは、舶来の布地や宝石類のみならず、ザクロやゴザといった比較的廉価と思われる商品にいたるまで専用のキャラバンサライが存在した。その際、ムルターンやアレppo、イスタンブール、サマルカンドといった遠方の諸都市に加えて、シーラーズやヤズド、カズヴィーンなどのサファヴィー朝領内の主要都市と、さらにはイスファハーンから 100 ~ 200 km 圏内の都市や村落からの出身者専用のキャラバンサライが複数確認される (出身地名を冠したキャラバンサライは、No. 5、8、10、12、14、17、24、25、32、33、34、35、40 の 13 軒を数える)。すなわち、都市型のキャラバン

10 シャルダン『イスファハーン誌』(羽田編)、183 頁; Tahvildār, *Jughrāfiyā-yi Isfahān*, p. 30. シャルダンのあげる数字は極端に多いため、隊商宿だけでなく店舗数をも含んでいるのかもしれない。一方、19 世紀末にイスファハーンの新ジュルファー街区に暮らした Höltzer は、およそ 30 軒近いキャラバンサライの名称をあげている [Höltzer, *Persien vor 113 Jahren*, pp. 16-17]。また 1924 年作成のイスファハーン市街図では、拡大した市内各地に商業施設としての「サライ (Sarāy)」が見られることから、市域の拡大・交通手段の変容などを背景に、19 世紀から 20 世紀にかけてキャラバンサライはその役割を変化させていったと考えられる。

ラバンサライとは、国内外を問わず「同郷の者たちが集まる場所」であり、その者たちが持ち込む専門の商品・特産品を扱う「専門店」であったと言える。ゆえに、イギリスやオランダの商館は、『案内』において「家 (khāna)」として言及はあるものの「キャラバンサライ」には含まれていない。おそらくはそれらの商館は彼らの扱う商品の卸売りの場ではなく、また自由に往来するヨーロッパ人の数も限られていたためであろう¹¹⁾。

第二に、イスファハーンの主要なキャラバンサライの立地を見ると、イスファハーンの外からもたらされる“外来品”を扱うイスファハーンの商業空間は、旧広場周辺、バーザール街区内、王の広場（新広場／ナクシェ・ジャハーン広場）とカイサリーエ周辺、という3つの区域から形成されていたことが明らかとなる。そうではあるが、図1から明瞭に読み取れるように、『案内』にあげる42の主要なキャラバンサライの大半は、王の広場周辺と、同広場と旧広場を結ぶ新設のバーザール街区内に集中しており、旧広場周辺に位置するキャラバンサライはごくわずかである。ただし、旧広場周辺のキャラバンサライ (No. 10、16、18)には、マハッラートやアルデスターンなど、伝統的にイスファハーンと交易があったと思われる、イスファハーンより北方かつ比較的近接した諸都市のキャラバンサライが残っており、またこれらのキャラバンサライで扱われる商品は麻布や木製の皿や盆といった昔ながらの品々であることから、17世紀後半にあっても、この地域が庶民

街として賑わいを博し、伝統的な役割を担い続けたことが推察される¹²⁾。他方、シーラーズなど南方の諸都市の商人が集うキャラバンサライ (No. 20) が王の広場の南側に位置する点は、都市と交易路の関係において象徴的である。また、王の広場とカイサリーエ周辺では、ムスリム・非ムスリムを問わず、インド、アレppo、イスタンブールからの商人やアルメニア商人といった多国籍・多宗教の商人たちによって、金糸銀糸を用いた高価な布地や織物、宝石類、奴隷などの希少価値の高い舶来品が扱われていた。これらの卸売商（とりわけ織布を扱うインド系の商人）は相当裕福な商人として、君主の宮廷に隣接する王の広場周辺を拠点として国際交易に携わっていたのである。

『イスファハーンのキャラバンサライ案内』に見える42のキャラバンサライからは、王の広場から旧広場にかけての商業地区は多様な人々が行きかう十字路として、イスファハーン、ひいてはサファヴィー朝の繁栄を支えていたことが如実に読み取れる。国際都市イスファハーンで取引された商品や専門の品々を扱う商人や職人については稿を改めて検討するが、最後に、シャルダンの都市型キャラバンサライの記述をもって小稿を締めくくりたい。

ペルシアの大きな町の隊商宿やバーザールは、それぞれ特定の職業の人々か同じ場所出身の人々のために充てられている。遠い地方の人を探そうとする時には、その人の町か地方の名のついた隊商宿に行きさえすればよい。そ

11 シャルダンは、イギリス商館は「会社の別荘」として利用されるのみでほとんど人がいなかったことを伝えている [シャルダン『イスファハーン誌』(羽田編)、66頁]。

12 19世紀後半には旧広場こそが定期市が開かれる場として重要であり、露天商が店を出し、誰もが参加可能な蚤の市が開かれ新鮮食料品が売られていた [坂本 (1999)「イスラーム都市の市場空間とイスファハーン」、50頁]。

ここで確実にその人を見つけることができる。いない場合もその人がどこにいそうかがわかる。というもどきに泊まるかは各人の自由だからである。日常生活に必要なもので売買されているものについても同様である。あらゆる職種、あらゆる商品のバーザールがあり、あらゆる品の、そして、ペルシアにやってくる世界中のあらゆる国の商人たちのための隊商宿がある¹³⁾。

参考文献

[1924 年イスファハーン市街図] Sultān Sayyid Rizā Khān, *Naqsha-yi Shahr-i Isfahān*, 1342 AH., Facsimile edition, Tehran: Sahāb.

シャルダン (1996) (羽田正編) 『シャルダン 『イスファハーン誌』 研究 —17 世紀イスラム圏都市の肖像』 東京大学出版会。

“Dar Dānistan-i Kārvānsarāy-i Isfahān”, British Library, MS. Sloane 4094.

Höltzer, Ernst (1975) *Persien vor 113 Jahren*, Tehran: Kultur-und Kunstministeriums Zentrum für die Persische Ethnologie.

Tahvildār, Mīrzā Husayn Khān (1963) *Jughrāfiyā-yi Isfahān: Jughrāfiyā-yi ṭabī‘ī va insānī va āmār-i aṣnāf-i shahr*, Ed. by M. Sotūde, Tehran: Chāpkhāne-ye Dāneshgāh-e Tehrān.

Tavernier, Jean-Baptiste (1679) *Les six voyages de Jean Baptiste Tavernier*, Paris.

Akhzārī ‘Alī (2015) *Bāzār-e Eṣfahān az Saljūqī tā Ṣafāvī*, Isfahan: Sāzmān-e Rafāhī-ye Tafriḥī-ye Shahr-dārī-ye Eṣfahān.

Babaie, Sussan (2008) *Isfahan and its Palaces: Statecraft, Shi‘ism and the Architecture of Conviviality in Early Modern Iran*, Edinburgh University Press.

Blake, Stephen P. (1999) *Half the world: The Social Architecture of Safavid Isfahan, 1590-1722*, Costa Mesa: Mazda Publishers.

Bryce, Derek, Kevin D. O’Gorman and Ian W.F. Baxter (2013) “Commerce, empire and faith in Safavid Iran: the *caravanserai* of Isfahan”, *IJCHM*, 25(2), pp. 204-226.

Gaube, Heinz and Eugen Wirth (1978) *Der Bazar von Isfahan*, Wiesbaden: Dr. Ludwig Reichert.

Iida-Sohma, Miki (2008) “The Textile Market in Istanbul and Bursa in the First Half of the Seventeenth Century: An Introduction”, *Mediterranean World* (『地中海論集』) 19, pp. 161-197.

Kārvānsarāhā (2005) *Ganjnāma*, Vol. 17, Ed. by K. Hājji Qāsemī, Tehran: Shahid Beheshti University.

Kayānī, Moḥammad Yūsef (1992) “Mo‘arrefī-ye yek noskhe-ye khaṭṭī-ye Mūze-ye Britāniyā – Kārvānsarāhā-ye Meydān-e Naqsh-e Jahān va Bāzār-e Eṣfahān”, *Athar*, Vol. 13, No. 21, pp. 144-151.

Kiyani, M. Y. and W. Kleiss (1995) *Kārvānsarāhā-ye Īrān (Iranian Caravanserais)*, Tehran: Cultural Heritage Organization of Iran.

Rieu, Charles (1966) *Catalogue of the Persian Manuscripts in the British Museum*, The British Museum, Vol. I.

坂本 勉 (1999) 「イスラーム都市の市場空間とイスファハーン」 佐藤次高・岸本美緒編 『市場の地域史』 山川出版社、16-52 頁。

13 シャルダン 『イスファハーン誌』 (羽田編)、61 頁。

マムルーク朝時代のインターブ

—アイニー兄弟の「自己語り」を通して—

中町 信孝

甲南大学文学部

はじめに¹⁾

「境域」(thughūr、単数形 thaghr) という言葉は、初期イスラーム時代の「イスラームの家 (dār al-Islām)」と「戦争の家 (dār al-ḥarb)」との対立における、両勢力の境目を意味する。具体的にはウマイヤ朝、アッバース朝とビザンツ帝国との境界領域であった北シリアと東南アナトリアー帯を指す²⁾。これらの地域は 11 世紀以降、中央ユーラシアに源流を持つテュルク系遊牧民のアナトリア進出に伴い、アナトリアがイスラーム化、テュルク化したことによって、イスラーム国家とビザンツ帝国との「境域」ではなくなった。しかしこれ以降も北シリア・東南アナトリアは、言語的・文化的な「境域」として、西アジアの歴史において重要な役割を果たし続けた。

筆者は、これまでマムルーク朝期の歴史家アイニー al-'Aynī, Badr al-Dīn Maḥmūd (1361–1451 年) の 2 つの年代記『満月の歴史 *Ta'rīkh al-badr fī*

awṣāf ahl al-'aṣr』と『真珠の首飾り *Iqd al-jumān fī ta'rīkh ahl al-zamān*』の文献学的研究を通じて、アイニーがアラビア語とトルコ語という 2 つの言語、2 つの文化的素養を利用しつつ、マムルーク朝宮廷で高い地位を得ていたことを指摘してきた (中町 2009, 2014)。たとえばアイニーは、君主の求めに応じてハナフィー派法学書をアラビア語からトルコ語に「書き直した」し、またアラビア語が不得手な君主のためにトルコ語で歴史の講話をおこなったりもした。

アイニーの保持する多文化性、バイリンガル性は、彼の出身地である東南アナトリアの都市インターブ³⁾が有していた「境域」としての性質に由来していたことは想像に難くない。本稿では、マムルーク朝時代におけるインターブが、いかなる意味で「境域」であったのかを考察する。

オスマン帝国に征服されるまでのインターブについて情報を得ようとするならば、年代記や人

1 本稿は、2019 年 10 月 27 日に開催された計画研究 05 の第 12 回研究会における筆者の発表「境域都市としてのインターブ：マムルーク朝時代を中心に」の内容を元としている。研究会の席上ではさまざまな有益な指摘や助言をいただいた。そのすべてを本稿に反映させることはできなかったが、他日さらなる改善を加えた研究の公表を期したい。

2 境域について、太田敬子 (2009: 88–93) は、「境界域」という言葉でこの地域をとらえ、その歴史的位相を考察している。

3 現代トルコ語でこの都市は「ガズィアンテプ (Gaziantep)」と呼ばれるが、本稿では一貫してアラビア語の呼称の音写である「インターブ」を採用する。

名録、地理書、書記典範、旅行記などの叙述史料に頼らざるを得ない。あいにく、アインターブについて中心的に扱うような「地方史」史料は存在しない。しかし、先述のアイニーは自らの年代記において「自己語り」的な記述（エゴ・ドキュメント）を多く残している⁴⁾。さらにアイニーの実弟シハーブッディーンもまた、アイニーの年代記を书写、編纂する傍ら、自らの「自己語り」をその史書に書き込むなどしている。これらの記述を通じて、彼らの目を通した当時のアインターブの様子をうかがうことが出来るのである。また、オスマン帝国時代には、検地帳や法廷文書など豊富な文書史料が残されており、そうした後代の史料を用いた研究から、マムルーク朝時代のアインターブの姿を遡及的に再構成することも可能であろう。

1. アインターブとは

まずは、前近代のアインターブについての情報を整理しよう⁵⁾。

1-1. マムルーク朝成立以前

アラビア語圏では古くからさまざまな地理書が著されてきたが、アインターブについての情報を伝える最も古い地理書はヤーカート・ハマウィー Yāqūt al-Ḥamawī, (1179-1229) の『諸国集成 (*Muʿjam al-buldān*)』である。ヤーカートはアインターブを次のように記述している。

アインターブ、堅固な要塞 (qalʿah) にしてアレppoとアンティオキアの間的小村 (rustāq) である。かつてはドゥルークと呼ばれたが、ドゥルークとはその周りにある小村である。現在はアレppoの行政区 (wilāyat Ḥalab) にある (Yāqūt, *Muʿjam al-buldān*, 4/176)。

「カルア (qalʿah)」とは「城塞」を意味することもあるが、ここでは「要塞、砦」の意味としてとるべきだろう (図1)。12世紀末～13世紀初頭の時点でのアインターブは未だ「小村」と呼ぶべき小さな集落であり、「アレppoとアンティオキアの間」という位置の描写も不正確である (図2)。またドゥルークとは、古くからこの地域の首邑として知られた町であるが、ここではそのドゥルークもまた「小村」とされている。

アイユーブ朝末期からマムルーク朝初期にかけて書記官を務めたイブン・シャッタード Ibn Shaddād, ʿIzz al-Dīn, (1217-1285) の記述をみてみよう。

アインターブ、山間の堅固な要塞で、郊外と小村を持つ。サージュール川はその近郊から発し、果樹園や粉ひき小屋を有する。昔はドゥルークの一部であったが、ビザンツ帝国は351年 (西暦961-962年) にドゥルークを占領した (後略) (Ibn Shaddād, *al-Aʿlāq*, 2/109-113)。

イブン・シャッタードもヤーカートと同様に、アインターブを「要塞」「小村」という語で呼んでいる。サージュール川とは、ユーフラテス川に流

4 日記や自伝、回顧録など、著者自身について語られた史料のことを、自己語り史料、あるいはエゴ・ドキュメントと呼ぶ。本稿で依拠するアイニー兄弟の事例は、日記や自伝には該当しないが、著者、あるいは書写者による自己言及 (一人称叙述) という点で、自己語り史料の一つと見なす。西アジア・イスラーム地域の自己語り史料の研究史については、オスマン朝の事例がメインではあるが秋葉2018を参照。

5 アインターブについての基本的な情報は、M. Canard, “AYINTĀB,” *Encyclopaedia of Islam, new ed.* および Darkot and Dağhoğlu, “AYINTAB,” *Islam Ansiklopedisi* 参照。



図1 現在のアインターブ要塞（筆者撮影）

れ込む小さな川の名前である（図3）。この記述から、アインターブがユーフラテス川の支流の流域に属し、その水利を利用して果樹や小麦の栽培がおこなわれていた様うかがえる。

また、イブン・シャッタードはより古い時代におけるこの町の歴史を伝えている。961-962年にビザンツに占領されたとあるが、それ以前はイスラームの領域であった。以下要約すると、ビザンツ帝国領となったのちは、十字軍の時代にはエデッサ伯の支配を受け、その後再びビザンツ領となった。そして1153年にザンギー朝のヌールッディーンが征服し、以後アイユーブ朝、マムルーク朝に引き継がれた。

1-2. マムルーク朝成立以後

マムルーク朝時代の書記典範の記述によれば、当時のアインターブは、アレppo州の管轄下に置かれていた (Ibn Nāzīr al-Jaysh, *Kitāb tathqīf*, 101; al-Qalqashandī, *Ṣubḥ*, 7/173)。また14世紀前半のハマールの支配者アブー・アルフィダー Abū al-Fidā'を見ると、アインターブがこの時期までに大きく発展していたことがうかがえる記述がある。

アインターブの町はたいへん美しい町 (baladah) で、そこには堅固な岩盤に築かれた要塞がある。水と果樹園が多く、その近隣の拠点となっている。そこには立派な市場があり、商人や旅行者が集まる。アレppoから

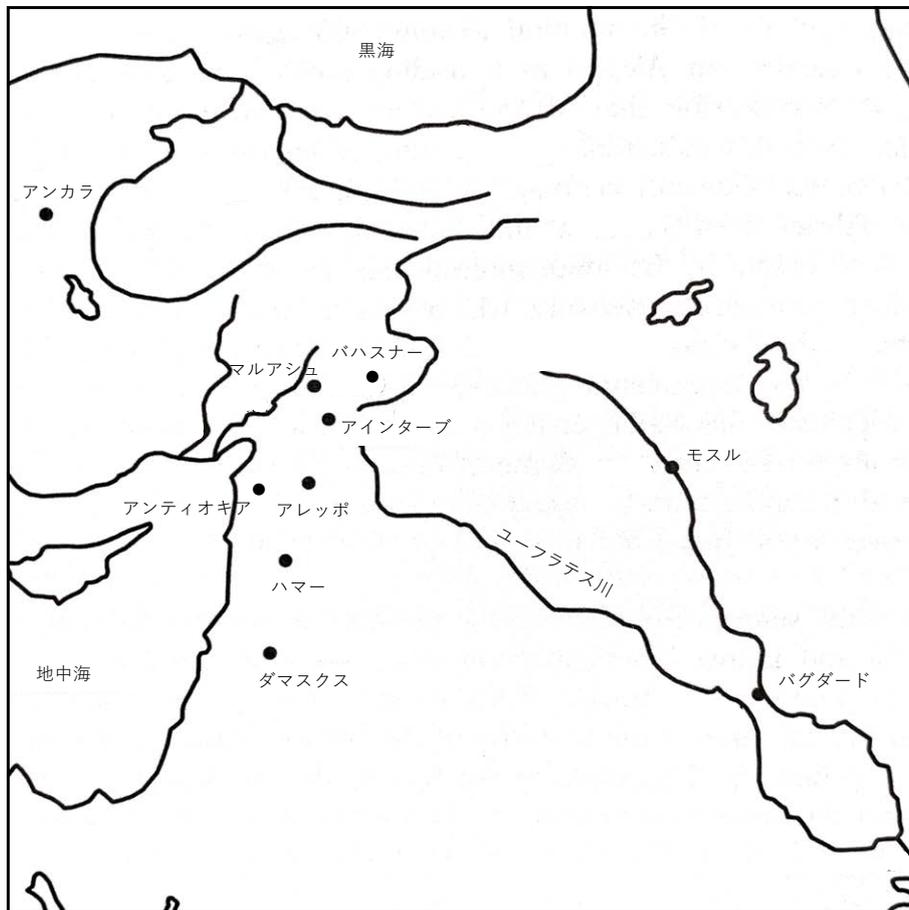


図2 アインターブ周辺広域図 (Canbakal 2006 より筆者作成)

北に3日行程である。アインターブのそばにはドゥルークというすたれた砦があり、サラディンやヌールッディーンによる征服の逸話がある。またアインターブはカルアト・ルーム (Qal'at al-Rūm) から南におよそ3日行程にある。アインターブとバハスナー (Bahasnā) の間も同じである。アインターブはバハスナーの東南にある (Abū al-Fidā', *Taqwīm*, 268-269)。

ここではアインターブは小村ではなく「町 (baladah)」と呼ばれ、「商人や旅行者が集まる」「立派な市場」を有すると記されているのである。

なお、14世紀前半の有名な旅行家イブン・バットゥータは、アインターブには足を運ばなかったものの、アナトリアのさまざまな都市を訪れていた。彼が残した当時のアナトリア社会に関する情報は非常に詳細であるが、それをアインターブにもそのまま当てはめることが出来るかどうかについては後ほど検討する。

とはいえ、マムルーク朝時代のアインターブはモンゴル軍やティムール軍の度重なる西アジア侵攻の被害も受けており、それぞれ短期間ではあるがその統治下に入ることもあった (1271年、

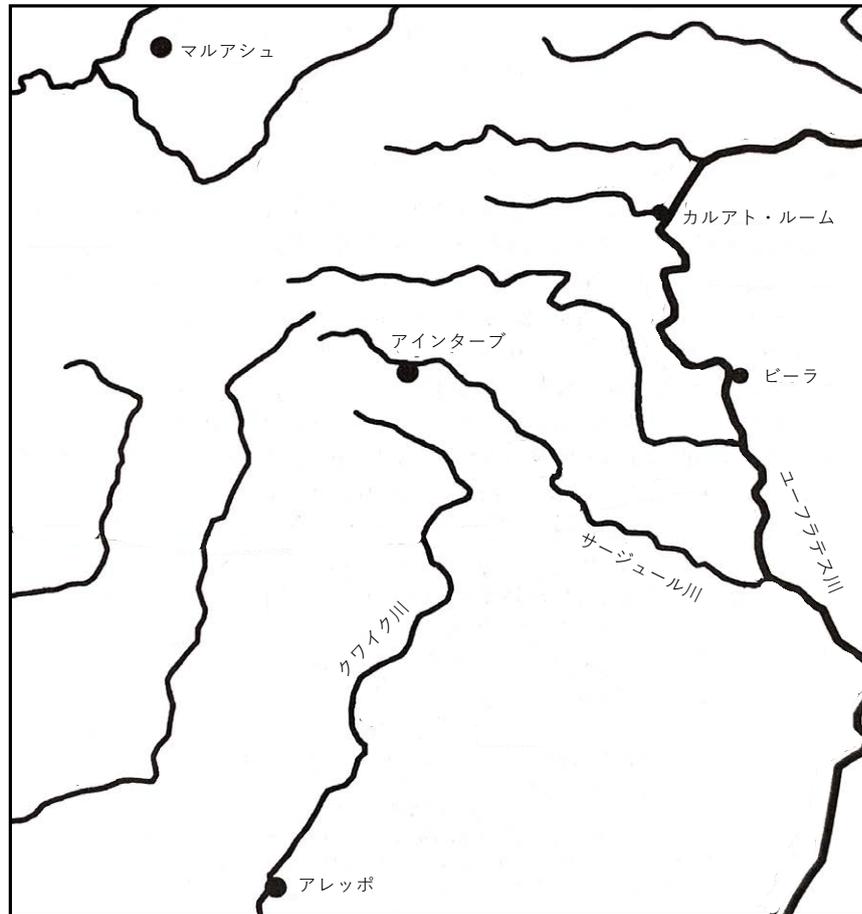


図3 アインターブとサージュール川 (Canbakal 2006 より筆者作成)

1280年、1400年など)。15世紀に入るまでマムルーク朝の領域にあり続けたが、1420年にはカラコユンル朝、その後ズルカドル侯国の支配下に入り、1515年にはマムルーク朝の滅亡に先立ってオスマン帝国の領土となった。

オスマン期のアインターブは、当初はシャーム(シリア)州の一部であったが、1522年以降マルアシュ州に組み込まれた。しかし、財務組織の上ではその後もアレppoの徴税対象地域として留まった(清水 2003)。

オスマン時代になると、様々な文書からアイ

ンターブの人口や住民構成が分かる。オスマン時代の法廷文書を分析したジャンバカルによれば、1536年のアインターブには1865世帯が暮らしていたが、1574年になると2988世帯になる(Canbakal 2006: 27-28)。またオスマン時代の住民構成は、ムスリム、アルメニア人、クルド人からなるが、ムスリムとされた人々がいかなる民族(言語)集団であったのかは分からない。さらに都市の周辺には、定住民の数に倍する、遊牧民たちが暮らしていたという。これらから、これより前のマムルーク朝時代におけるアインターブの都市人

口は、1万人を超えることはなかったものの、さまざまなエスニック集団からなる社会が構成されていたと考えられる。

2. アイニー家からみたアインターブ

歴史家アイニーがアインターブで生まれたのは1361年、その時点でアインターブはマムルーク朝領域内の一地方都市として長年にわたる統治を受け続けていた。にもかかわらず、アインターブの持つ「境域」性が、ウラマーとしてのアイニーのキャリアに大きな影響を与えていたと考えられる。ここでは、アイニーとその実弟シハーブディーンの「自己語り」的記述からアイニー家の来歴を再構成し、それを手がかりにアインターブ社会のあり方を考察したい⁶⁾。

2-1. アナトリアのイスラーム化

アラビア語の人名には、その人物の父、祖父、曾祖父と、直系男性親族の名前が連なる「ナサブ」と呼ばれる部分がある。アイニーはナサブを含む自らの名を、以下のように記している。

Badr al-Dīn Maḥmūd b. Aḥmad b. Mūsā b. Aḥmad b. Ḥusayn b. Yūsuf b. Maḥmūd al-'Aynī

彼のナサブには、本人の名であるマフムードに続いて6世代にわたる先祖の名前が連なっており、そのいずれもがムスリム名である。この6世代前の先祖マフムードが、アイニーにとって遡りうる最も古いムスリムの祖先とすることになる。ここで大胆に推測するならば、アイニーの一族は6世代前に始めてイスラームに改宗し、それ

以前はムスリム名を持たない非ムスリムのトルクメン遊牧民か、ギリシア系のキリスト教徒であったと考えられよう。仮に1世代の間隔を30年として計算するならば、6世代前の先祖であるマフムードの生年は180年前、すなわち1180年頃となる。この時代はルーム・セルジューク朝のクルチ・アルスラン2世（1155-1192年）の長い在位期間中にあたり、アナトリア全土でのイスラーム化が進展していた時代である。

2-2. マムルーク朝中のアインターブ

アイニーの自己語りを遡ると、父からの伝聞として、祖父ムーサーのことを伝える箇所がある⁷⁾。それによると祖父ムーサーは、はじめアンカラに住んでいたが、その父のアフマドとともにアレppoに移住し、さらにその後「その町が良い町であり、恩恵と優しさがあり、空気が良く水がきれいであるため」にアインターブに移住したとある。713/1312-1313年と、731/1329-1330年にサージュール川の監督官を務めていたとの記述があるが、後で見ると、アイニーの父アフマドが1320年頃にアレppoで生まれているので、1312年の時点ではアレppoに在住していたのだろう。またこの祖父は、「カーディーのカマルッディーン・ウマル・シャーフィイー Kamāl al-Dīn 'Umar al-Shāfi'ī の命令で、法官代理と裁決記録を勤めた」ともある。このカーディーの情報は他の史料には見当たらないが、おそらくはアレppoにいるシャーフィイー派のカーディーの管轄下で代理として働いていたのであろう。

6 アイニーの出自、および、祖先については中町 2009: 55-60 も参照。

7 Al-'Aynī, *'Iqd al-jumān*, MS Veliyyudin 2394, p. 6; MS Ahmet III a17, fol. 61a.

次に、アイニーの父アフマドのことは見てみよう⁸⁾。彼は 784/1382 年に死亡した時点で 60 歳超であったと伝えられるため、1320 年前後に生まれたと考えられる。

祖父がカーディー代理であったのに対し、父アフマドはカーディーとなったと明記されている。ただしそのカーディー職は、アレppoに在るカーディーの「管轄下に (tahta yadi-hi)」あったと明記される箇所がある⁹⁾。シャーフィイー派カーディーのアフマド・ブン・ウマル・ハマウィー Ahmad b. 'Umar b. Muḥammad al-Ḥamawī なる人物である¹⁰⁾。どうやらアインターブのカーディー職の任免はアレppoに在るカーディーがその権限を握っていたようである。

また、父アフマドは旅する知識人たちのパトロンとしてもふるまっていたとの記述がある。後に見るように、アイニーは出身地アインターブにおいて様々な学者に師事するが、その学問的基盤を準備したのは父アフマドであったと言えよう。

3. アイニー兄弟のアインターブ

ここからは、アイニーおよびその弟が経験してきた、アインターブでの知的環境について、彼らの自己語りの記述に基づいて考えてみたい。

3-1. 言語的環境

上述の通り、当時のアインターブ住民がどのような言語を用いていたのかを知ることは難しい。

しかしジャンバカルによると、オスマン帝国時代のアインターブ法廷ではトルコ語が主要言語として用いられていたという。このことは、アレppoの法廷でアラビア語が用いられていたのと対照的である (Canbakal 2006)。行政区分のうえでアインターブが、当初シャーム州に置かれながら後にマルアシュ州に移管されたこととも考え合わせると、アインターブとアレppoとの間には住民の言語的エスニシティの点で目に見える違いがあったのではないだろうか。

ここでイブン・バットウータの『旅行記』にある興味深い記録を見てみたい。彼がイズニク近郊のある集落を訪れた際に出会ったある「法学者」についての記述である。

我々は、そのアヒーたちの一人の所有するザーウィヤに滞在した。我々が彼にアラビア語で話しても、彼は我々のことが理解出来ず、彼の方が我々にトルコ語で喋っても、我々の方はそれを理解できなかった。そこで、彼は「法学者さんに頼みましょう。彼ならアラビア語が分かるので……」と言った。そこで当の法学者がやって来て、我々にペルシャ語を喋った。そして、我々の方はアラビア語で喋ったので、我々のことが理解できなかった。……そこで、彼は「この人たちは古いアラビア語をお話しなさるが、一方の私は新しいアラビア語しか分からぬ」と、彼らに言ったのである¹¹⁾。

このエピソードの中では、地元のアヒー（後述）

8 Al-'Aynī, *Ta'rikh al-badr*, MS Süleymaniye 830, fol. 128a; Ibn Ḥajar, *Inbā' al-ghumar bi-anbā' al-'umar*, 1/264; Ibn Taghrībirdī, *al-Manhal*, 2/231.

9 Al-'Aynī, *Ta'rikh al-badr*, MS Süleymaniye 830, fol. 165b.

10 Ibn Ḥajar, *al-Durar*, 1/227 (no. 583).

11 Ibn Battūtah *Rihlat*, 171.: 訳文は、イブン・バットウータ 1996–2002: 3/315–316 を参照。なお、訳文を一部改めた箇所がある。

たちの話すトルコ語、「法学者」と呼ばれる人物の話すペルシア語、そしてイブン・ハットウータがその当時唯一話せる言語であったアラビア語との、3つの言語が登場する。14世紀のアナトリアでは、これら3つの言語が並行して用いられるマルチリンガルな社会であったことがうかがえる。

それでは、アイニー自身は自らを取り巻く言語環境について、どのように記しているだろうか。アイニーの著書『満月の歴史』には、以下のような記述がある。

長老ジブリール・ブン・サーリフ Jibrīl b. Ṣāliḥ は私にとっての長老であり師であった。私は彼のもとで……787年頃、アインターブのシャラフィーヤ学院で学んだ。彼は朝の礼拝から正午まで授業のために座り、彼のもとでアラブとアジャム（‘Ajām）の学生が70名学んでおり、私も彼らとともにあった¹²⁾。

ジブリール・ブン・サーリフはアイニーにとってクルアーン解釈学と法学を学んだ師であるが、787/1385-1386年と言えばアイニー自身はすでにアインターブを離れて遊学の旅に出ている頃であり、その年にアインターブで学んだというのはつじつまが合わない。それゆえ、この記事載せている写本の書写者である弟シハーブッディーンが、書写の際に自らの体験を書き込んだものと考えられる¹³⁾。つまりこの記述はアイニー自身で

はなく、弟シハーブッディーンの目を通した当時の学院内の描写なのである。

注目すべきは「アラブとアジャムの学生」との表現である。このように「アラブ」と併置される「アジャム」とは、広義にはアラビア語以外の言語のことを指し、狭義にはペルシア語を意味する。どちらの意味で取るにせよ、シハーブッディーンは非アラビア語話者の学生とともに学院で学んでいたことは確かであるし、同じような言語環境を兄アイニーもまた経験したと見なせるだろう¹⁴⁾。アイニーが若年時より多言語環境に身を置いて学んでいたことは間違いなく、その点では当時のアインターブはイブン・ハットウータが見た他のアナトリアの都市と同様の社会であった。

3-2. ウラマー・ネットワーク

アイニーとその師匠たちとの関係については、すでに拙稿で論じたことがある¹⁵⁾。その論旨を要約すると、アイニーのアカデミック・キャリアは、郷里アインターブでの第Ⅰ期、北シリア・東南アナトリアを中心に各都市をめぐる第Ⅱ期、カイロ、ダマスクスで過ごした第Ⅲ期に区分でき、第Ⅰ、Ⅱ期にはアナトリア・イラン出身のハナフィー派ウラマーに師事していたのに対し、第Ⅲ期には法学派問わず高名なハディース学者に師事していた。

本稿において重要なのは、第Ⅰ期の師匠である。

12 Al-‘Aynī, *Ta’rīkh al-badr*, MS Süleymaniye 830, fol. 202a.

13 書写者であるシハーブッディーン（アフマド）が原テキストに独自情報を加筆していたことについては、中町 2012: 39-42 参照。

14 なお、シハーブッディーンが『満月の歴史』を要約しながら執筆した別の年代記、『流星の歴史 *al-Ta’rīkh al-shihābī wa’l-qamar al-munīr fī awṣāf ahl al-‘aṣr wa’l-zamān*』にも、師ジブリールの逸話が載せられており、ここでは「アラブとアジャムとトルコ（Turk）の学生」という表現になっている。Shihāb al-Dīn, *al-Ta’rīkh al-shihābī*, MS Selim Aga 837, fol. 141b.

15 詳しくは中町 2009、特に p. 61: 表 1 参照。

アインターブでアイニーが師事した学者たちは、必ずしもアインターブの出身ではなく、バグダード、カズウィーン、スルマラー（トビリシ付近の地名）など東方の諸都市の地名ニスバを冠する者や、「ルーム地方」「東部地方」から来たと書かれている者が多い。また、アレppo、ダマスクス、カイロ等、マムルーク朝領域内の大都市で勉学を積んだ者もあれば、アイニーが学んだ後でこれらの大都市に向かう者もあった。すなわち、これらのほとんどの者は一時的にアインターブに滞在していたに過ぎないということになる。ここには前述のアイニーの父アフマドによる、知識人たちへのパトロン活動が大きく影響をもたらしていることだろう。

また、これらの師匠たちのほとんどがマムルーク朝で編纂された人名録にエントリーがないと言うことも注目される。例えば、第I期の師匠たちの中でアイニーが最も敬愛すると語っているサルマーリー *‘Īsā b. Khāṣṣ b. Maḥmūd al-Sarmārī*、アイニーに数多くのアラビア語文法書を教授したハリール・アインタービー *Khalīl b. Aḥmad b. Muḥammad al-‘Ayntābī*、そして先に見たアイニー弟の記述から、多言語の学生たちを教授していたことが分かるジブリール・バグダーディー。これらの人物はいずれも、カイロに行くことなく亡くなっており、マムルーク朝で高い地位に就いたことも確認されない。

彼らがマムルーク朝の人名録に記載されていないのは、彼らがウラマーとしての資質の点で劣っていたためであろうか。否、限られた情報から分かるのは、彼らがカイロを頂点とするウラマーの

ヒエラルキーにおいて周縁的な存在であったということであり、必ずしも彼らの資質が劣っていたとは言えない。むしろ、彼らはマムルーク朝のウラマー社会とは異なるウラマー社会に属していたのではないだろうか。

3-3. アヒーとスーフィズム

当時のアナトリアの独特の現象として、「アヒー」を長とする若者集団フィトヤーン (*fiṭyān*、単数形 *fatá*) の存在がある。すでに紹介したように、イブン・バトゥータの『大旅行記』には彼がアナトリア旅行中にアヒーに出会ったとする記述がたびたび登場する。家島彦一によれば、彼が描写するアヒーとは、ザーウィヤを建設して若者集団にスーフィー修行のための集会の場を提供する宗教指導者、あるいはスーフィー教団の長であり、服装はスーフィー修行者と同じくぼろ服（ヒルカ）をまとっていた。アヒーおよびフィトヤーンは、当時のアナトリア地方のほぼ全域で活動していたという（家島 2017）。

アイニーの時代のアインターブにも「アヒー」と呼ばれる人物がいたことが確認できる。アヒー・マフムード・アインタービー *Akhī Maḥmūd al-Ayntābī* は、アイニーが直接師事したわけではないが、アイニー弟の自己語りとしてその年代記に伝記が収録されている¹⁶⁾。

彼は公正で寛大な人物であり、ザーウィヤ (*zāwiyah*) [での活動] とフトウツワを実践した。毎晩 100 名を超す貧しい者たちと、自らの労苦による食事を共にしていた。…アインターブの町の *ḥammām al-Ṭashlāmī* のそばに、

16 なお、Quatremère はかつて、アイニーの年代記にこの人物が登場することを指摘していたが、「アヒー」をアラビア語の「我が兄弟」と理解し、歴史家マフムード・アイニーにはマフムードという自らと同名の兄弟がいたと誤認している (Quatremère 1837-1845: 1/2/221)。

自らの財産で美しいザーウィヤを建て、所有するブドウ畑、果樹園、農地から多くのワクフを設定した。神が彼に報いますよう。毎週金曜の夜には彼の道場で集まり (ijlās) を催し、そこにはウラマーや学識者、貧者や公正な者たちが、神の名を唱え、クルアーンを読み、知識を探求し、伝承を語った。その後様々な料理と肉の (出る) 盛大な宴席となり、さらにその後、果物の日には果物が (ふるまわれた)。このアヒー・マフムードは料理や肉を手ずからつかみ取り、満腹になっても無理矢理皆に食べさせるのであった¹⁷⁾。

ここではアヒーが自らのザーウィヤで催す「集まり (イジュラス)」が、唱名 (ズィクル) やクルアーン朗唱、ハディース伝達などイスラーム的知識の伝達がおこなわれる場として描かれると同時に、慈善目的の宴席——そこでは出席者に無理矢理料理を食べさせるというやや滑稽な描写もある——として描かれている。

実はこれと似たような記述は、アイニー弟自らの自己語りとして別の箇所にも登場する。1417年、シハーブッディーンがダマスカスに住んでいた頃の記述である。

私の大きな家をザーウィヤ (zāwiyah) として、高貴な知識を聞かせるために友人や同郷人を集め、彼らに歴史や征服譚、預言者伝を、神のため、信徒への忠告として語った。その晩、私は彼らへ施しとして自分の財産から、胡椒飯と甘い飯、ザクロの粒、そして最後はスイカをふるまった。彼らは心ゆくまで食し、中

には料理や飯を家に持ち帰る者までいた。私は彼らのために3ヶ月間説教をした (wa'aztu)。その後夏が来ると、彼らは夜には眠くて座っていられなくなり、私が読誦している (aqra'a) のに彼らは眠ってろくに聞いていなかったが、私は放っておいた¹⁸⁾。

ここに描かれている、自邸をザーウィヤとしてイスラーム的知識の伝達をおこなったという点、それとともに慈善目的の宴席を開いたという点は、上述のアヒーによる行為と共通するところがある。またこの行為の受け手が「友人や同郷人」であるのも、シハーブッディーンが故郷アインターブでおこなわれていた宗教的実践をダマスカスにおいて模倣していたことを窺わせるのである。

もう一つ、アイニーのスーフィズム (tasawwuf) の師であったナーシルッディーン・アーガー Muḥammad Nāṣir al-Dīn Āghā al-'Abṭīnī についても触れたい。この人物にアイニーはカイロで師事したが、サハーウィーの人名辞典によれば彼はトルクマンの出身であり、カイロにおいてはマンスリーヤ病院の監督官をしていた¹⁹⁾。アイニーはこの人物について、以下のような記述を残している。

彼こそは私にズィクルの指導をし、スーフィーの流儀にのっとってヒルカ (khirqah) を着せてくれた人であった。彼は私に以下のように書いてくれた。曰く、「わが師が私にズィクルの指導をしヒルカを着せてくれたが、我が師とはシャイフ・アミーヌッディーン・ムハンマド・ハルワティー Amīn al-Dīn Muḥammad al-

17 Al-'Aynī, *Ta'rikh al-badr*, BnF MS, Arabe 1544, fol. 13a; Shihāb al-Dīn, *al-Tarikh al-shihābī*, MS Selim Aga 837, fols. 146b-147a.

18 Al-'Aynī, *Ta'rikh al-badr*, BnF MS, Arabe 1544, fol. 128a. ここでの引用部分もシハーブッディーンによる自己語りの記述であると考えられる。中町 2012: 53-54 参照。

19 Al-Sakhāwī, *al-Daw'*, 6/294.

Khalwafī である。」また曰く、「彼が正しく語るところによると、預言者——神が彼を嘉し平安を与えますように——がアリーにヒルカを与えて「アッラーのほかには神なし、ムハンマドは神の使徒なり」とのズィクルを指導した。そして …」(以下略)²⁰⁾

上に引用した記述は歴史家アイニー自身による自己語りと考えられるが、この記述の直後には再び弟シハーブッディーンによる体験が語られており、アイニー兄弟はそろって同じスーフイズムの学統で教えを受けていたことが分かる。アナトリアのフィトヤーンたちの服装であるヒルカを、このトルクマン出身の師匠から授かるときに、彼らはトルコ語で会話を交わしていたのではないだろうか。また、ナーシルッディーンが自らの師として名前を挙げている人物のニスバ「ハルワティー」からは、アナトリアで流行していたスーフイー教団ハルワティーとつながる人物であることが予想されよう²¹⁾。このように、アイニー兄弟による知の実践には、時にアナトリア的、あるいはトルコ的な色彩が色濃く見られることがあったのである。

おわりに

マムルーク朝時代のアインターブは、モンゴルやティムール朝など遊牧諸国家との境界に近接しながらも、ほぼ一貫してマムルーク朝の支配を受けていた。しかし、アンカラにルーツがあるアイニー家のような集団がアインターブに移住しその地のカーディーとなったという事実からは、この都市とアナトリア地域との深いつながりが見て取

れる。その一方で、アイニー家がアインターブに移り住む前にアレppoを経ていたことや、アインターブで職を得たアイニーの祖父と父がいずれもアレppoの法官の管轄下にあったことは、アインターブとアラブ地域との間の強固な結びつきをうかがわせる。

アイニーとその弟にとってのアインターブの意味を考えるならば、まずは彼らの初等教育時における多言語環境が及ぼした影響を指摘すべきだろう。彼らはアラビア語と非アラビア語——すなわちペルシア語およびトルコ語——の双方が用いられる環境で学んでいた。その後ダマスカスやカイロに居を定めた後も、アイニー兄弟による知の社会的実践のあり方には、ザーウィヤでの集まりや慈善的な宴席の開催、ヒルカの授与に象徴されるスーフイズムの伝承など、アナトリアのフィトヤーンによる実践と重なる部分が観察できる。

以上から、アナトリア地域とアラブ地域という言葉的・文化的に異なる2つの地域の間にあった当時のアインターブの特別な位相が浮かび上がってくる。それは「境域」において両地域を結び、1つの文化的ハブとしてとらえることができるだろう。なお本稿では、カイロを頂点とするウラマーのヒエラルキーとは別のウラマー・ネットワークを想定しているものの、その実像は不明瞭なままである。アナトリアから東方地域にかけて広がるこの時代のペルシア語・トルコ語圏のウラマー社会が、どのような形でマムルーク朝のウラマー社会と関わっていたのかについては、今後の研究の課題としたい。

20 Al-'Aynī, *Ta'riḫ al-badr*, BnF MS, Arabe 1544, fols. 50b–51a.

21 ナーシルッディーンの師がハルワティー教団に連なる人物ではないかとの可能性については、上記研究会の席上で杉山雅樹氏より示唆された。ここに記すことで謝意を表したい。

参考文献

- 秋葉 淳「エゴドキュメント／自己語り史料」
『オスマン帝国史史料解題』東洋文庫研究部イス
ラーム地域研究資料室 Web サイト 2018 年 ([http://
tbias.jp/ottomansources/ego-documents](http://tbias.jp/ottomansources/ego-documents)、2020 年 1
月 31 日閲覧)
- イブン・バットウータ『大旅行記』（イブン・ジュ
ザイイ編 家島彦一訳注）平凡社、1996-2002.
- 太田敬子『ジハードの町タルスース：イスラーム
世界とキリスト教世界の狭間』刀水書房、2009.
- 清水保尚「16 世紀末オスマン朝の地方財務組織
について：アレppo財務組織を事例として」『東
洋学報』85:1 (2003), pp. 21-46.
- 中町信孝「バドルッディーン・アイニーの学問的
キャリア：マムルーク朝ウラマーの一事例」『甲
南大学紀要 文学編』159 (2009), pp. 51-71.
- 中町信孝「マムルーク朝期の非著名知識人のライ
フコース：アフマド・アイニーに関する事例研究」
『東洋史研究』70:4 (2012), pp. 2-67.
- 中町信孝「バドルッディーン・アイニーの職業的
キャリア：マムルーク朝ウラマーの一事例(2)」『甲
南大学紀要 文学編』164 (2014), pp. 237-248.
- 家島彦一「アナトリア世界のトルコ・イスラーム
化」『イブン・バットウータと境域への旅：『大旅
行記』をめぐる新研究』名古屋大学出版会 (2017),
pp. 249-274.
- Abū al-Fidā', *Taqwīm al-buldān (Géographie
d'Aboulféda)*, M. Reinard and Mac Guckin de Slane
eds., Paris, 1840.
- Al-'Aynī, *Iqd al-jumān fī ta'rīkh ahl al-zamān*, MS
Veliyyüdin 2394; MS Ahmet III a17.
- Al-'Aynī, *Ta'rīkh al-badr fī awṣāf ahl al-'aṣr*, MS
Süleymaniye 830; Bibliothèque nationale de France
(BnF) MS Arabe 1544.
- Canbakal, Hülya. *Society and politics in an Ottoman
town: 'Ayntab in the 17th century*, Leiden: Brill, 2006.
- Ibn Baṭṭūṭah, *Rihlat Ibn Baṭṭūṭah fī gharā'ib al-amṣār
wa-'ajā'ib al-asfār*, Beirut: Dār al-Arqam b. Abī al-
Arqam, 2009.
- Ibn Ḥajar al-'Asqalānī, *al-Durar al-kāminah fī a'yān
al-mi'ah al-thāminah*, Beirut, 1993
- Ibn Ḥajar al-'Asqalānī, *Inbā' al-ghumar bi-anbā' al-
'umar*, Cairo, 1989-1998.
- Ibn Nāzīr al-Jaysh, *Kitāb tathqīf al-ta'rīf bi'l-muṣṭalah
al-sharīf*, Cairo: Institut français d'archéologie
orientale du Caire, 1987.
- Ibn Shaddād, 'Izz al-Dīn, *al-A'lāq al-khaṭīrah fī dhikr
umarā' al-shām wa'l-jazīrah*, Damascus: Manshūrāt
wizārat thaqāfah, 1991.
- Ibn Taghrībirdī, *al-Manhal al-ṣāfī wa'l-mustawfī
ba'da al-wāfī*, Cairo, 1989-2009.
- Al-Qalqashandī, *Ṣubḥ al-a'shā fī ṣinā'at al-inshā*,
Cairo, 1963).
- Quatremère, Étienne. *Histoire des sultans mamlouks,
de l'Égypte*, Paris, 1837-1845.
- Al-Sakhāwī, *Al-Daw' al-lāmi' li-ahl al-qarn al-tāsi'*,
Beirut, 1993.
- Shihāb al-Dīn al-'Aynī, *al-Ta'rīkh al-shihābī wa'l-
qamar al-munīr fī awṣāf ahl al-'aṣr wa'l-zamān*, MS
Selim Aga 837
- Yāqūt al-Ḥamawī, *Mu'jam al-buldān*, Beirut: Dār al-
sādir, 1993.

研究項目 C01 「中世～現代の西アジア都市」

計画研究 06

西アジア地域の都市空間の重層性に関する

計画論的研究

オールド・ダマスクスの重層的空間と観光ルート

松原 康介

筑波大学システム情報系

はじめに

近代都市計画は基本的には欧米由来の技術であるが、20世紀にかけて世界的に伝搬し各地域で広く実施されており、西アジア地域も例外ではない。新市街や郊外地といった新規市街地の建設においては、基本的に欧米の計画手法と大差はないものと考えられるが、複雑な歴史的背景をもった旧市街の扱いについては、やはり地域に独自の考え方や手法が検討されるべきであろう。

本稿では、第6班（以下、本班）の成果報告の一環として、本年度に出版された筆者の学術論文（松原 2019）の中から、その歴史的背景すなわち都市空間の重層化の過程分析にあたる部分を抽出して紹介する。その上で、領域を通じて追及されている考古学的・歴史的研究との関係性を示唆しつつ、本班の位置づけ、すなわちいまなお残存している考古遺産、歴史遺産を現代の都市空間においてどう活用していくかという課題を観光の視点から確認する。事例はシリアの首都ダマスクスの旧市街（通称オールド・ダマスクス）である。

ダマスクスでは、フランスの委任統治領となった1920年以降に近代都市計画が導入された。とりわけ、フランス人都市計画家ルネ・ダンジェを筆頭とする都市計画行政機関によって1930年代に導入された都市計画では、旧市街の北西部にフ

ランス人向けの新市街が計画されたが、これは広大な土地と有利な土地取得条件を十分に生かして実現された、広い幅員の道路で区画され沿道にはフランス型のヴィラやアパートマンが並ぶ近代都市であった。

一方、旧市街では行政上は保全の方針がとられたが、新市街を中心に普及した自動車が次第に旧市街へも侵入するようになり、これに合わせて小規模な市街地の破壊も見られるようになっていった。1968年に計画された旧市街計画では、CIAM（Congres International d'Architecture Moderne；近代建築国際会議）の影響を受けたミシェル・エコシャール・番匠谷堯二らによって、自動車の通行を前提とした道路計画を伴う都市改造が提案されたが、70年代に入ってユネスコを中心に反対運動が起こり、計画は中断を余儀なくされている。この68年の都市改造計画では、道路拡幅にヘレニズム期の神殿跡地や広幅員道路を再現するというコンセプトが付与されたため、旧市街における考古学的遺産が直接的に近代都市計画の対象として浮上することとなっていた（Matsubara 2016）。一方、今日のシリアの考古学行政の中心となっている機関 DGAM (Directorate-General of Antiquities and Museums) もまた、エコシャールらによって委任統治期に創設された組織を源流としており、

現在の DGAM 職員も考古学専門家のみならず建築、都市計画の専門家から構成されている。

一般に、歴史都市の保全は様々な意義を持つが、その歴史が長く複雑であるほど、残された痕跡としての歴史都市の様態もまた複雑な、重層的な都市空間として認識される。歴史保全と一口に言っても、実際には、どの時代の都市の様態を保全するのかという判断が求められるのである。特定の遺産に対する学術的価値との関連はいうまでもなく、時には政治的な価値判断が介在することもある。ダマスカス旧市街の近代都市計画史は、今日に残る遺産がいかに現代空間に位置付けられ、また位置付けられなかったかを示す事例である。

以下、旧市街の概念的な都市空間形成史として、特に空間形成の技術や仕組み、及びその空間の特徴と意味に絞って記述していくことにしたい。例えば、ヘレニズム期においてはグリッド型の広幅員街路網を馬車が通行していた。イスラーム期に入ると敷地の細分化が進み、無数の小店舗からなるスークが形成された。この時にヘレニズム遺構の柱や壁等が埋没したのである。そういった意味での空間形成の仕組みと特徴に着目する。そのうえで、都市遺産の現代における位置づけとして、観光ルートである「古典古代の道」の概要を紹介する。

1. ヘレニズム時代の都市空間形成

ダマスカスは、前 334 年から開始されたアレク

サンドロス大王の遠征によってギリシア世界に組み込まれその都市建設活動の舞台となり、前 63 年にローマの支配下に入り、635 年にイスラームを奉じるアラブによって占領されたと概括することができよう¹⁾。ギリシア、ローマ、イスラームのそれぞれが独自の都市形成・都市計画の原理を持ち、その積み重ね、すなわち空間の重層化がダマスカスの特徴とされてきた。このうち、オリエントに伝播したギリシア・ローマ文化は、その連続性からヘレニズム文化と総称される。本節ではこの時期に形成された施設と街路網、門や柱廊などを合わせてヘレニズム時代の空間形成として記述する。

ギリシアでは、前 5 世紀頃に伝説的な都市計画家であるミレトスのヒッポダモスが出て、グリッド型（格子状）街路を発案し、ロドスやピレウス、イオニア諸都市を計画したとされている。実際にはイオニアでそれ以前からグリッド型街路が実現されているし、むしろオリエントに由来するとも示唆されてきた（ペヴスナー 1989）。ダマスカスにおいても、少なくともアレクサンドロス大王の遠征以降には、西の神殿と東のアゴラを核とするグリッド型街路が形成されていたことがよく知られているが、それ以前の様相についても検討する余地はあるだろう²⁾。いずれにせよ、旧市街におけるギリシアからの伝播文化に基づく空間形成として、まずは民主主義の基礎を担ったアゴラ（広場）をあげられる。また宗教的には、ゼウスを頂

1 本稿で言及するギリシア、ローマ、イスラームそれぞれの都市の原理とは、いずれも分析概念であって、よりミクロな視点で実態を追求すれば、多くの既往研究が示してきた通り、歴史的事実としても実際の空間形成においても、固有の様相が見出される。

2 ヒッポダモスの一つの出発点としながらも、ギリシアのみならず、西アジア一帯を視野にいれた、グリッド型都市の系譜学も検討すべきである。例えば、ロドス、ミレトスといったギリシア都市と、ワリード 1 世によりヘレニズム期の職人を動員して建設されたアンジャルの遺跡調査も考えられる。

点とする多神教の神殿が建設された。両施設ともに、グリッド型基盤に収まる長方形の建築物であった。

ローマ時代に入ると、市街地はグリッド型を基本としながら南部に拡張された。半円形のローマ劇場や音楽堂といった市民の娯楽施設が形成されている。ローマ文化の影響として、ギリシア文化の多くが継承されつつも、まずは国教となったキリスト教があげられる。ギリシア神殿は、その建物躯体が継承されつつも、ヨハネを奉じるキリス

ト教会へとコンバートされた³⁾。

これらの都市施設と街路網のより具体的様相を、都市遺産に関する詳細な解説書と通史書で知られるバーズ⁴⁾の市街地想像図(図1)に見ることができる。神殿(Temple de Jupiter)、アゴラ(Agora)、円形劇場(Theatre)、「まっすぐな道(Rue Doroit)」、宮殿(Palais)、古代の城壁(Rempart Antique)、ローマ水道(Aqueduc)の配置が描かれ、グリッド状の街路については、古代ローマの基本的な街路構成に沿ってカルド(Cardo; 南北

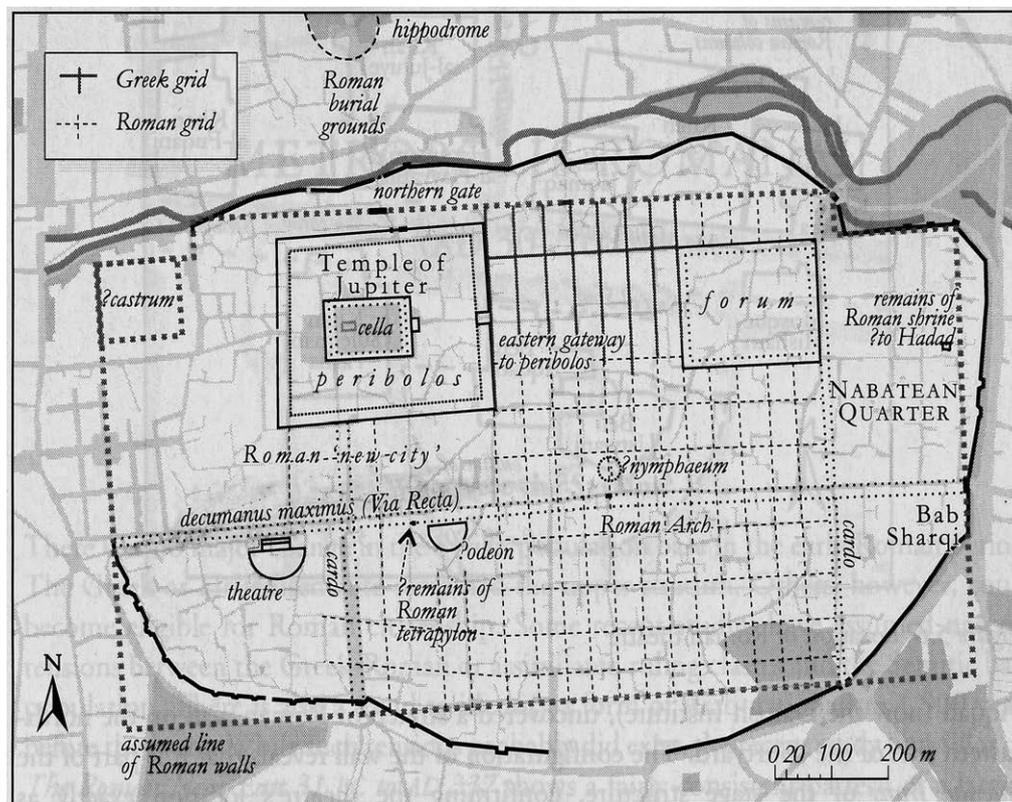


図1 ヘレニズム期の市街地想像図 (Burns 2005)

- 3 元来はアダド(メソポタミアにおける嵐と慈雨の神)を奉じていたが、ギリシア時代にゼウス、ローマ時代にジュピター(ゼウスに相当)を奉じる多神教の神殿となった。ヨハネはイエスの先駆者と位置づけられる聖人(前6年から前2年頃-36年頃)。
- 4 Burns (2005) はソヴァジェの研究を基礎としつつも相対化する視点を持ち、最新の研究の動向をレビューしており膨大な既往研究をまとめて通史としている。

の基幹道路）とデクマヌス（Decumanus；東西の基幹道路）の存在が指摘され、その交差点上に存在する近年の出土物である凱旋門（tétrapyle）、柱廊（colonnade）、音楽堂（odéon）等が描かれている。

こうしたヘレニズム的な空間の特徴は、今日の旧市街の随所にその痕跡を見ることができる。たとえば、柱廊付きの外溝に囲まれた神殿は、現在のモスクの数倍の大きさであったが、外壁の遺構が残り観光遺産とも位置付けられている。アゴラは柱廊に囲まれたヘレニズム時代の会議場であ



図2 ピエトロ・ダ・コルトーナ『パウロの回心』（1631年）

り、市場としても機能したとされているが、今日ではその痕跡はわずかに埋もれた柱廊の一部として見る事ができる。

“decumanus maximus (Via Recta)”とあるのは、上述の「まっすぐな道」と同一であり、デクマヌスを起源とし今日までその直線の特徴を残しているためそう呼ばれる。いわゆる「パウロの回心」（西暦 34 年頃）の場として知られ、これを描いた 17 世紀の絵画⁵⁾には柱廊が描かれている（図 2）。これら主要な街路は、馬車が行きかう中央路と、その両脇の歩廊が円柱の柱廊で境界付けられた列柱道路であり、今日でいう歩車分離を実現していた⁶⁾。パルミラやアパメアといった、ローマ時代の都市でありながらイスラーム期に放棄された遺跡に、当時のおおよその様相を見ることが出来る。

2. イスラーム期における空間の重層化

2-1. 重層化の原論と概況

20 世紀初頭よりドイツとフランスの研究者によってリードされてきたヘレニズム期ダマスクスの考古学的研究を集大成したのは、フランスのジャン・ソヴァジェであった⁷⁾。ソヴァジェは続くイスラーム期に関する研究も精力的におこなっていたが、彼によれば、ヘレニズム期の列柱道路は、イスラーム期以降に柱と柱の間が埋め込まれ壁とされ、店舗も分割されて、空間の細分化が進んだとされている（図 3）⁸⁾。

5 イタリアの画家で建築家ピエトロ・ダ・コルトーナ (1596-1669) の作品 (1631)。

6 例えば、同じくローマ時代に繁栄したシリアの都市でありながら今日では遺跡となっているアパメアにおいては、カルドが全長 1.85 km に渡って存在した。その幅員は 33 m、コリント式の円柱は 1200 本に渡るとされる（神谷 2014）。

7 ソヴァジェはコレージュ・ド・フランスの教授に就任したが 49 歳にして病死し、その研究活動と文化財行政事業がエコシャールに引き継がれている。

8 ソヴァジェは模式図という性格から変化に関わる具体的な年代を示してはいないが、イスラーム初期にあたる 7 世紀以降しばらくはローマ時代の都市計画技術がそのまま用いられていた。例えば上記レバノンの世界

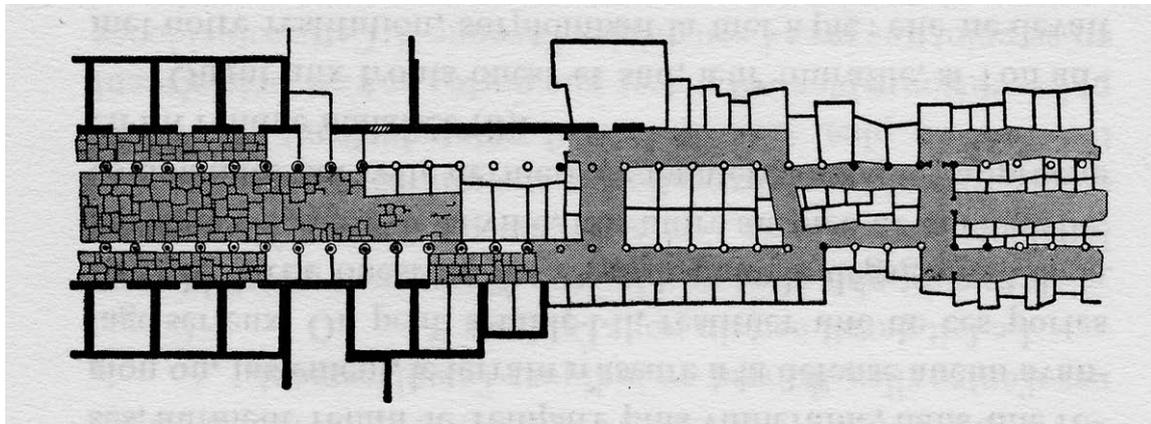


図3 スークの形成過程（左：ローマ時代、右：イスラーム時代）

細分化の要因には商習慣の相違があったと考えられる。ローマ時代の店舗は、少なくとも数人以上によって経営される、比較的規模の大きなものであった。一方、イスラームにおいて、商業は一般的に善行として奨励される。個々の店舗はワクフ店舗⁹⁾であり、元手はなくともやる気さえあれば個人で店舗を借りて商売を始めることができる。店舗は一人が入り込めるだけの大きさがあれば十分であった。細分化の繰り返しによって小店舗が増殖してスークが形成された背景には、イスラームに根ざした社会の仕組みがあったものと考えられる。

こうして、広幅員の道路は狭い複数の街路に細分化され、比較的まっすぐで幅員も広い街路はスークへと改編された。東西南北の大局的な方向性は今日でも残存しており、ダマスクスやアレppoのスークは特に東西方向に長い。後年の自動車に匹敵する大きさの4輪の馬車や荷馬車は、乗り入れできないことはないが、明確な歩車分離は喪

われたためローマ時代のような速度では走れない。基本的には歩行者交通が中心となり、ラクダや馬等が時折割り込む形で輸送がなされたであろう。それは既に今日のスークを彷彿とさせる光景である。スークの後背地では屈曲した路地や袋小路も多く形成され、主として住宅地とされてきた。

2-2. 二大スークとハーンの事例

今日、スークはその規模や形態から、馬車（後年の自動車）の利用を前提としない、歩行者が自由に立ち寄り商談をすることで成り立つ買い物空間である。代表例としてスーク・ハミディーエとスーク・ミドハトパシャがある。前者は旧市街の東北に位置し、神殿の東門に直結していた直線道路に沿って東西方向に形成されたものと考えられる。北側におけるダマスクス城の建設後はその外壁に沿って店舗が張り付くように形成された。18世紀に軸線が更新整備され、商店形態の統一と鉄製天蓋が設置された。今日、450 mに達し最も賑

⁹⁾ 遺産アンジャルは8世紀に建設されたが、その遺跡の特徴はほぼ完全にローマ的なものである。

9) イスラームに則り、売り上げの一部を寄付することで貸し出される店舗。

わう空間である¹⁰⁾。後者は旧市街の東南に位置し、その起源は「まっすぐな道」に遡る。「まっすぐな道」の道路中央に列の店舗群が形成されたことで、並走する2本の街路に変容し、その北側の1本がスークとして発展したものと考えられる。19世紀に更新整備され、500 mに達し天蓋が設けられた¹¹⁾。

スークの形成に伴って建設され、商品流通の中継所の役割を果たしたのがハーン（隊商宿）である。市外からやってくる都市間交易に従事する隊商を迎え入れ、休息させると同時に商品を卸し、末端の店舗へと商品を供給していた。多くが中庭式の中規模建築で、一階がラクダの厩舎、二階以上が商人の宿舎とされる。ダマスクスで現存するハーンの半数以上は18、19世紀の建設と比較的新しく、特にスーク・ハミディーエとスーク・ミドハトパシャの間の一帯に集中して存在した。

ハーンもまた基本的には整形の建物であり、グリッド型基盤への収まりはよかったものと考えられる。

シリアはシルクロード交易の拠点であると同時に繊維産業の中心地でもあった。ヨーロッパへの輸出により繁栄したが、19世紀以降は産業革命によってヨーロッパで自前の繊維産業が成長し、またスエズ運河の開通に伴って交易拠点としての地位を喪うと、商業も衰退した。

2-3. 重要建築の建築と変容

重層化は個別の建築レベルでも進展した。神殿は、イスラーム教徒による占領以後、しばらくはそのままキリスト教会のままであったが、やがて神殿内に小さなモスクが設置されたことで空間の細分化が始まる。ムスリム住民の更なる増加に伴って8世紀に建物全体が大モスクへとコンバートされた。この際、神殿の内壁はほぼそのまま継承され、聖ヨハネ聖堂にあった柱廊はモスクの礼拝室へ移築されている（神谷 2014: 28-29）。こうして、今日のウマイヤ・モスクが創建される一方、巨大な神殿外壁は柱廊とともに小建築物群に飲み込まれ、複数の大門を残して埋没した（図4）。ローマ劇場は宅地化が進み、半円形の外壁をなぞるように形成された街路が2箇所存在し、今日においても遺構の一部が住宅内部で視認できる¹²⁾。

更に、イスラーム期にかけ建設された重要建築



図4 埋もれた神殿の門（1870年頃）

10 アブドゥルハミト一世（在位 1773-1789）の治世に整備された。

11 ミドハト憲法で知られるミドハト・パシャによって整備された。

12 劇場の遺構がやがて宅地化され今日も残存し、街路形態にその名残を残すという事例は旧ローマ帝国地域一帯で広く存在しており、その類例とも位置づけられる。

として、まずダマスクス城が挙げられる。起源はヘレニズム時代に遡るが、13 世紀に対十字軍のために拡充されたものが今日の城である。その他、大小のモスク、マドラサ（神学校）、偉人や聖者の廟、ハンマーム（浴場）、また要人や富裕層の大邸宅（宮殿）といった施設が建設されてきた。これらイスラーム期の建築物は、柱やアーチなどのヘレニズム基盤の一部を流用し、地面や壁面に含んでいる状況を今日でも見ることができる¹³⁾。

3. 観光ルート「古典古代の道」

こうして重層化してきたオールド・ダマスクスの、今日における保全と活用はいかにあるべきだろうか。本節では、その一つの方向性と考えられる観光の視点から、2010 年に策定された観光ルートの一つ「古典古代の道」の内容を紹介し、ルート上で巡ることになるヘレニズム期の遺産の具体的内容を紹介し、その観光資産としての活用可能性を確認しておきたい。

観光ルートとは、地域の観光資源を効率的に回れるよう、自治体や観光関連団体等によって策定されるものである。観光資源には必ずしも知名度が高くないものも多く存在し、これを掘り起こし、より多くの集客を図ることで地域の活性化をもたらすことが期待されている。

ダマスクス旧市街の観光ルートの提案は、MAM¹⁴⁾の事業の一

環としてなされた。出版物として、アラビア語・英語・仏語の3か国語によるルートマップがある(図5)。ルートはテーマ別に設定された6つのルートからなる。「スピリチュアル・ダマスクス」「伝統的スークの道」「古典古代の道」「手工芸品ルート」「旧市街ハイライト」「旧市街の基本(短時間ルート)」の6つのルートそれぞれに、テーマに沿った遺産が数十件記載されており、順路を追って訪問できるようになっている。例えば「古典古代の道」とは主に本稿2節で紹介したヘレニズム時代の遺産を中心に観光するものである。これに対して、「スピリチュアル・ダマスクス」「伝統的スークの道」および「手工芸品ルート」は、内容的に3節で紹介したイスラーム期の遺産を巡るものである。ルート上の各遺産には、名称と遺産種別等を示したプレートが設置されている(図6)。また中途には、ルート毎に次の行き先が矢印で示



図5 観光ルートマップセット

13 例えば、アゼム宮殿は18世紀の邸宅であるが、神殿の外壁南面上に建設されており、エコシャールが発掘調査をしている。

14 MAM(2008)。2010年時点において頒布され、JICAにより日本語版が作成中であった。

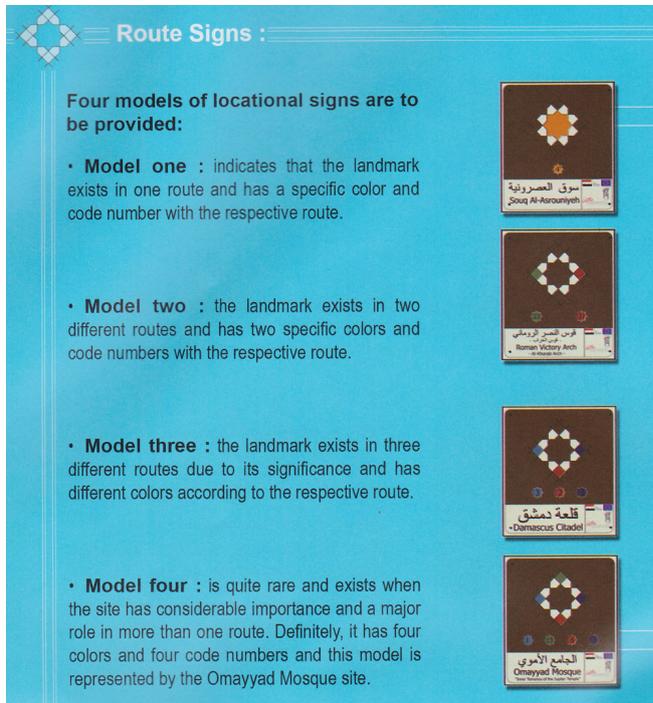


図 6 観光資産アイコン

されている。複雑な構造を持つ旧市街において、観光客それぞれの関心に沿って迷わずに歩けるよう一定の便宜を提供している。

表 1 に、「古典古代の道」（英語版）に基づきその構成要素をまとめた。ごく簡単に述べれば、ローマ起源のトゥーマ門から入ってアゴラを抜け、埋没した柱廊を見ながら神殿に達する。神殿の外壁を半周した後、ウマイヤ・モスクの柱廊やモザイク画を見て「まっすぐな道」に入り、円形劇場、凱旋門を経てシャルキー門から出る、というのが大筋である（図 7）。全体的に、当時の柱が最も多く、アーチ状の門や遺跡等が構成要素である（図 8）。いずれも



図 7 「古典古代の道」全ルート



図8 再構築されたアーチ (撮影：常木晃)

最も古い遺構であるから、それ自体が生きている観光施設とは言い難く、損傷も激しく地味に映るものも多い。しかし、建築物のスケールの大きさと石造建築の重厚な存在感を伝えている点に特徴があるともいえよう。

「古典古代の道」を歩くことは、イスラームを遥かにしのぐ往古のダマスクスの記憶に触れることである。この時、観光客は、オールド・ダマスクスの都市空間の重層性を目の当たりするのである。建築史の基礎的知識があれば、神殿のペディメントを支える柱は古代ギリシアの三様式の一つであるコリント式であることも容易にわかる。観光の意義に、歴史的交流や文化の多様性/多層性の理解を深めることがあるとすれば、「古典古代の道」はまさにその役割を果たしているといえるだろう。

一方で、今日でも盛んな商業活動の空間である旧市街において、これらの観光活用の前提となる、保全・修復もまた大きな課題と考えられる。パルミラやアパミアといった、住まわれてはいない考古学的遺跡とは異なり、現に人が住んでいる都市空間の中の遺産という点で、課題はより広く複雑になるものと思われる。考古学的知見のみならず、建築的・都市計画的知見が要請されるであろう。

おわりに

以上本稿では、オールド・ダマスクスを事例に、西アジア地域の重層的な都市空間の成り立ちを概括するとともに、その現代における活用の事例である観光ルート「古典古代の道」を紹介した。既述のように、この観光ルートは他の5つのルートと合わせて提案されているものであるから、その正確な位置づけはイスラーム期由来の観光遺産との関連において明らかになるであろう。

とはいえ、「古典古代の道」は、単独でも、考古学的・歴史学的知見を観光という現代の営みに直接活かすことの重要性を示唆している。実際、エコシャールと番匠谷は1968年の都市計画において、考古学公園を提案したこともある(図9)。多くの議論を呼んだ68年計画であったが、ヘレニズム時代の遺産を活用するというコンセプトそのものは今日においてもみられるのである(図10)。そこで検討されるべき課題は多岐にわたり、保全と修復はもちろん、都市空間の整備との両立や、地域経済・社会との共生という問題もありえよう。幅広い専門性からの検討も不可欠である。それらを総括した、西アジア地域の「都市の本質」に届くような都市計画学のありかたもまた引き続き追及されるべきであろう。

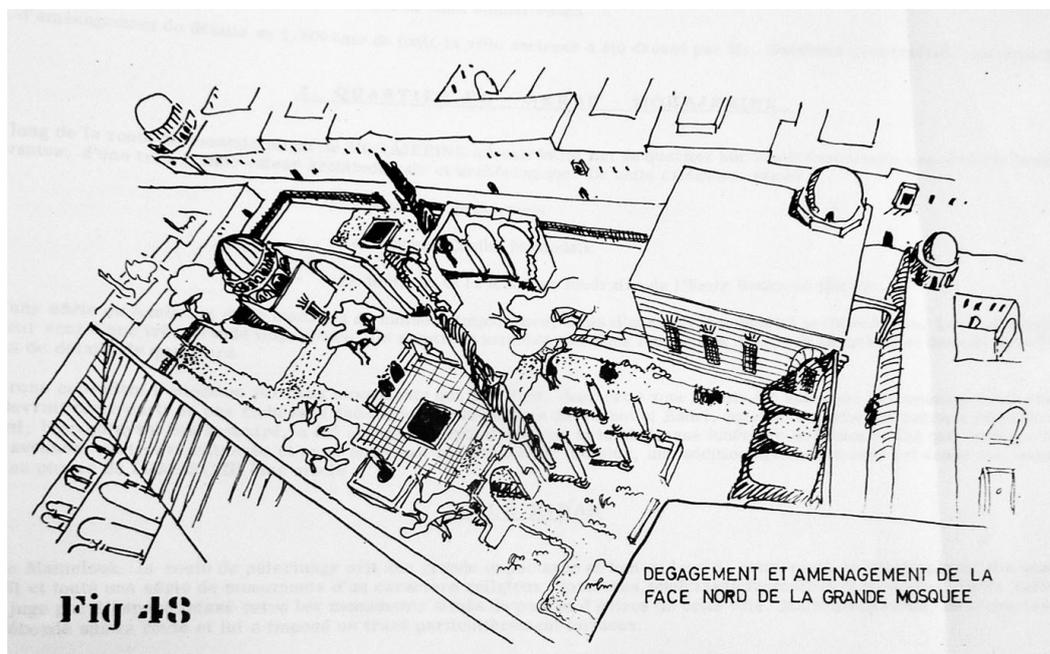


図9 考古学公園イメージ図

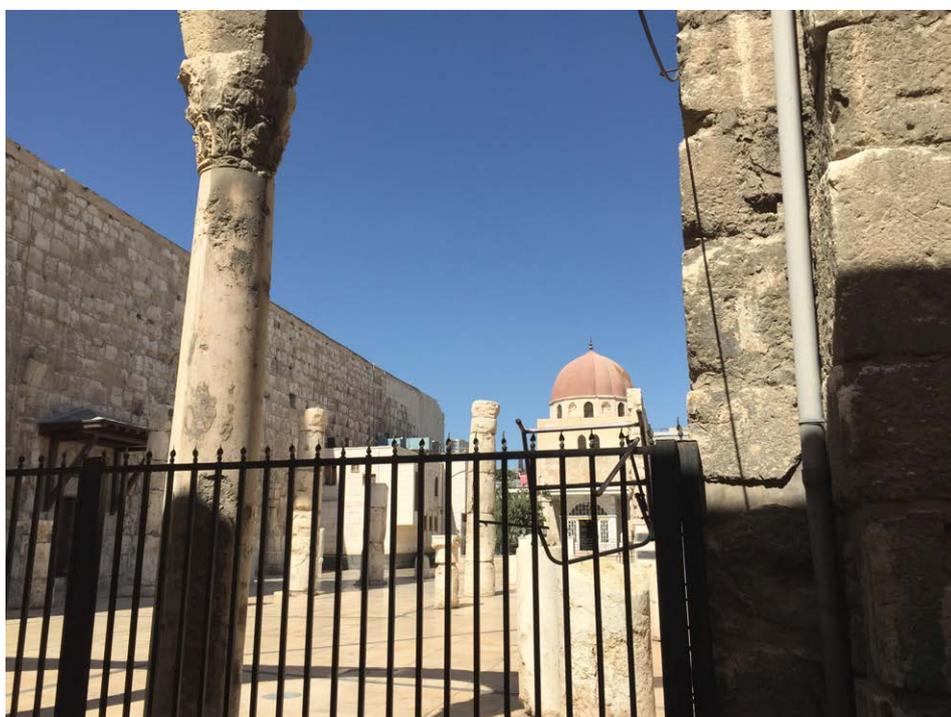


図10 考古学公園現状（撮影：常木晃）

参考文献

Burns, Ross. *Damascus :a history*. London : Routledge, 2005.

Burns, Ross, *The Monuments of Syria A Guide*, I.B.Tauris, 2009.

Florence E. Day, Jean Sauvaget (1901–1950), *Ars Orientalis*, vol. 1 (1954) : 259–262.

MAM, *Visitor Routes in Old City of Damascus*, circa 2008.

Matsubara, Kosuke. Gyoji Banshoya (1930–1998): a Japanese planner devoted to historic cities in the Middle East and North Africa, *Planning Perspectives*, 31-3 (2016): 391–423.

Pierre Merlin et Françoise Choay (ed.), *Dictionnaire de l'urbanisme et de l'aménagement*, PUF, 1988.

Sauvaget, Jean. “Le plan de Laodicee-sur mer”, *Bulletin d'études orientales*, IV, 1935.

新井勇治「ダマスクス 消滅しつつある世界最古の現存する都市」松原康介（編著）『地中海を旅する 62 章 歴史と文化の都市探訪』明石書店，2019, pp. 300–304.

神谷武夫『イスラーム建築 その魅力と特質』私家版、2014.

黒木英充「ダマスクスのウマイヤ・モスク」フィールドプラス、no.19, pp. 6–7.

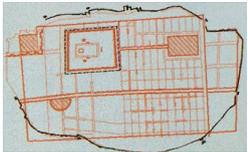
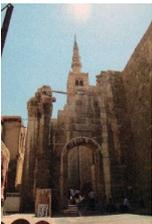
黒田美代子『商人たちの共和国—世界最古のスーク、アレppo』藤原書店、1995.

高根沢均「アパメア 列柱道路を歩いた日」松原前掲著，pp. 307–311.

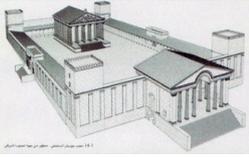
ペヴスナー，ニコラウス『新版 ヨーロッパ建築序説』彰国社、1989, p.20

松原康介「ダマスクス 1968 年計画におけるヘレニズム基盤の再構築事業」都市計画論文集、54-3、pp.630-637, 2019

表 1 観光ルート「古典古代の道」概要

No.	遺跡名称と添付画像	観光案内文（英文記述をそのまま翻訳し転載）
1	トウーマ門 	ローマ時代に、当時の大貴族の名前に因んで名づけられた。ビザンツ時代には門の上に教会が建設された。イスラーム期には、アムロビン・アルアースにより城門としては閉鎖されたといわれる。イスラーム時代にはモスクが建設された。現在に城門は修復され、周辺はロータリーとなっている。
2	アゴラ広場 	シフル・アルタラーの東北側に位置するエリアはハーレド・ビン・ユサイド・ヤードという名で知られた。建築物の痕跡は見つかっていないが、このエリアの名称はPit通りとして知られていたとされる。
2a	柱 	アゴラ広場であったと推定される箇所の境界線上に残存する柱。
3	柱 	アゴラから神殿の東門(ジルーン門)に至る通りの東側にある。この通りはダマスカスの古い地図にも記載されている。
4	ジルーン門 	神殿外壁の東面の門である。ジルーンとは、神殿を意味するアラム語の語根GYRまたはGWRのいずれかの派生語である。ジルーンはギリシア語では家または神殿を意味する。多くの登り階段が、中央の主入り口とその両脇の小さな入口を持つ城門へ続いていた。1948年に、地下4.3メートルからローマ時代の城門の地盤が発見されている。ジルーン門はブリダ門よりもずっと古くに存在した。
5	神殿東門 	神殿の柱廊は3世紀に遡る。ジルーン門から神殿東門までの通りは、かつてジルーン・スークと呼ばれていた。実際、神殿聖域と柱廊はスエイカの末端に位置していた。ジルーンの名は周辺一帯の地名に散見され、6世紀には、東にあるモスクの門にもその名がつけられた。

6	<p>ローマの柱廊</p> 	<p>多くの柱があるため「柱廊通り」と呼ばれている。ジルーン門につながる通りは、古い壁の点在から証明されている。ローマ時代に遡ることがわかっているが、いくつかの壁は住宅の中に埋め込まれている。</p>
7	<p>マドラサ・ルニバディライヤ</p> 	<p>本マドラサの天井や壁面に、ローマの壁や柱の石材が確認できる。東南部の内壁は、神殿の外壁の一部であったとされている。これらの石材がマドラサ・ナスリーヤの建設に用いられた。今日では通りの入口は小さな住宅により包含されている。</p>
8	<p>神殿の外壁</p> 	<p>神殿の外壁は、そのまっすぐな痕跡を確認できる。いくつかの目立つ石はルカイヤ・モスクの近辺に見出され、石材が周辺において継続的に再利用されてきたことが伺える。</p>
9	<p>ファラディス門</p> 	<p>北の門の一つであるアマラ門は、ローマ時代には門を囲む水と庭園が豊富にあったため、楽園(ファラディス)の門と呼ばれていた。アマラ門と呼ばれるようになったのは、ヒジュラ暦8世紀に、周囲の人々がアル・アクナイ建築として使っていたためであり、この名が城門周辺に浸透したものとされる。城門はヌールッディーンとイスマイルの時代に改修整備された。</p>
10	<p>クワトリ邸の3連柱</p> 	<p>クワトリ邸から出土した3連の柱である。邸宅入口に入ると神殿の外壁が見える。</p>
10a	<p>ローマの柱</p> 	

11	<p>ローマの柱(神殿の外壁)</p> 	<p>神殿遺構の一部であった目立つ柱が存在する。外壁は、ザーヘル王のハンマームに見られる。ザヒリーヤ・マドラサの裏には古代の廃墟が存在する。</p>
12	<p>神殿西門</p> 	<p>スーク・ハミディーエとスーク・ムスキエの間にある神殿の西門は、柱廊のある回廊であった。その柱廊は現在でもムスキエ・エリアに存在する。門は3つの入口をもっており、中心が大きく両サイドが小さい。西の扉は、セプティミウス・セウェルスの建設といわれる。</p>
13	<p>神殿の内側の庭</p> 	<p>神殿は、外壁と内部の本堂から成り立っていた。東西方向に長い97m×119mの長方形の外壁によって囲われていた。外壁には、ひさしのドアの中央に開かれたアイヴァーン(イーワーン)も設置されていた。この図面は多くの研究者によって作成され、現在残っている柱や壁などの遺構も記されている。</p>
14	<p>ウマイヤ・モスク北の広場</p> 	<p>ジュピター神殿の建設の際、ローマの柱廊に存在している地理的文脈が参照され、学院が建設された。柱廊はビザンツ時代に神殿の壁の内部と外部を隔てていた回廊として再利用された。 この広場の平面を確定した根拠として、ジャクマキヤ・マドラサとアジジーヤ・マドラサの遺構、および北の壁に迫るミフラーブであった。アジジーヤ・マドラサは、サラディンが埋葬された場所であり、その優れた構造美が庭に映える。今日では観光客のための大モスクへの入口を構成しており、ダマスカスの歴史を語る、Son&Lumiere(観光ガイド組織)の窓口が設置されている。</p>
15	<p>神殿内壁の南門</p> 	<p>ローマ時代の神殿建築の遺跡を明確に示す古典芸術の一つである。内側は大モスクのミフラーブが穿たれている。この門は1983年に発掘され、別の南の入り口がモスクの西側に設置された。</p>
16	<p>考古遺跡エリア (スーク・サガ)</p> 	<p>大モスク南のスーク・サガ(貴金属)に面して、水の精の神殿の跡地が発掘され、その一部を観察することができる。考古総局では現在、このサイトを考古学庭園にすることを計画している。</p>

17	<p>ローマ神殿の部分</p> 	<p>神殿外壁の一部である。</p>
18	<p>ハッヤティーン・スーク (ローマ時代)</p> 	<p>神殿外壁の南西の角にあるスークの入り口は、ギリシア語のガンマ(Υ)のような形状をしている。街路の起源は1世紀後半または2世紀初期に遡る。現在、目に見える南の門は、ハリール(シルク)・ハーンの西側に面し、ハラメイン・スークの南側出口となっている。</p>
19	<p>まっすぐな道 (スーク・ミドハト・パシャ)</p> 	<p>「まっすぐな道」と呼ばれる道はローマ時代から存在し、「長いスーク」と呼ばれることもあったらしい。全長は1500メートル、旧市街で中心の通りであった。通りは、中央の大通りと、両脇における天蓋付きの柱廊によって構成され、柱廊には連続店舗が付随していた。マムルーク時代の総督であるサイフッディーン・ジョクモク王子の名に因んでジョクモク・スークと呼ばれた。1878年に実施されたスークの改修と延長工事を記念して、スーク・ミドハト・パシャと呼称が変わった。その後、フセイン・ナゼム・パシャの命により天蓋は鉄製に変更された。スークは繊維や伝統的服飾品の交易に特化していた。</p>
20	<p>ディッカ・ハーン(柱廊)</p> 	<p>まっすぐな道に面してディッカ・ハーンの柱廊が残存している。「まっすぐな道」の側道にあたる柱廊の柱である。</p>
21	<p>ローマ劇場の一部 (アルニアカ邸)</p> 	<p>本邸宅は、マムルーク時代及びオスマン時代の歴史的遺構を包含しているいくつかの住宅のうち、最も重要な事例である。最新の発見では、ローマ劇場の遺構が発見されている。プロセニウム(舞台開口部)のアーチの一部が、部屋に飾られている。</p>
22	<p>ローマ凱旋門</p> 	<p>カラブ門(壊された門)と呼ばれる。ティムール帝国の都市占領の間に、モンゴル人によって破壊された。1950年に地下4.5mから発掘された。3連の優美なアーチによって装飾されていた。</p>

22a	<p>柱廊群</p> 	<p>スーク・ミドハト・バシヤの再整備事業の際、多くの柱廊の遺構が発見された。</p>
23	<p>シャルキー門 (東門・ローマ門)</p> 	<p>旧市街の東端にあるため東門と呼ばれる。3世紀、ローマ時代早期のルキウス・セプティミウス・セウェルス時代に建設された。635年にハレド・ビン・アル＝ワリードがダマスカスを解放した際には、この門から入った。アッバース朝のアブダッラー・ビン・アリが749年に入場した際も、これに倣った。ヌールッディーン治世には城門は再整備された。1163年、シャヒード(殉教者)・ミナレットが門の上に建設されている。オスマン時代に入り、1582年、ムラド三世によりミナレットは再整備された。</p>

カッパドキア遺跡における ビザンティン壁画の技法材料とヴァンダリズム

谷口陽子
筑波大学人文社会系

はじめに

先史時代からプレ・イスラームの西アジア世界の文化は極めて多様であり、その時期のさまざまな文化的要素が現代の西欧社会の基盤となっているが、これらの物質文化の多様性、材質は多岐にわたっており、製作技法も複雑である。そのため、いまだに自然科学的に明らかにされていない材質や製作技法も多い。したがって、文化遺産の保全といった観点から考えて、その基礎となる材質や製作技法の情報が不足しており、十分な対応がとれないといった現状にある。加工しやすい凝灰岩や石灰岩、日乾レンガによる構造物、といったものが西アジアの都市を形成する建造物や構造物の素材となっており、それらが集合体としてユニークな景観を生み出している。

西アジア諸国においては、過酷な自然環境や戦乱等による被害から、貴重な遺跡の保存修復、緊急保護に対するニーズが極めて高いケースが多く見られる。とくに、西アジア地域においては、日乾レンガ、壁画、粘土板といった未焼成の土製文化遺産や、脆弱な凝灰岩製の遺跡が多いにも関わらず、上記のように、材質や劣化状態に対する情報が不足しているのである。たとえば、塩類風化や凍結融解による構造物の劣化は、西アジアで主要な問題のひとつである。

また、遺跡におけるヴァンダリズムの問題も見過ごすことができない。イスラームの都市景観のなかにプレ・イスラーム期の遺跡を融合するような事例も数多く存在する一方で、プレ・イスラーム期の考古遺跡に対する落書きや破壊行為もまた一方で顕著な問題である。

そこで、本研究グループは、西アジア先史時代からプレ・イスラーム期までの文化遺産を対象とし、その製作技法、材料について自然科学的に明らかにすることを目指しているとともに、それらの保存状態について調査、解析をおこない、保存修復のための基礎データを構築しようとしている。具体的には、シリア、イラク、トルコ、エジプトにおける遺跡構造物、博物館および、カッパドキア遺跡修復事業のフィールドを対象としている。

まず、西アジア考古資料に関する製作技法、材料の調査として、遺跡における可搬型 XRF を用いた非破壊元素分析および、微小サンプルを用いたラボでの高精度分析をおこなっている。さらに、遺跡における文化遺産の保存状態の把握、現象の理解を目指す。トルコ・カッパドキア遺跡などを事例として用い、岩窟や壁画、周辺の地形の変容の事例をシミュレーションするとともに、物質の分析結果や状態マッピングとを連動することで、総合的な遺跡の保存状態劣化要因の解明を

目指したい。これらは西アジア諸国の文化遺産保存への貢献の一環であり、本領域研究の公募研究班とはきわめて密接な関連を持って研究を実施している。

1. カップパドキア遺跡・聖ニキタス聖堂（ウズムル教会）の保存に関する研究会

2019年5月30日に、筑波大学東京キャンパスにおいて聖ニキタス聖堂の保存に関する研究会を開催した。国内から日本、トルコの専門家10名が集まり、微小気象の解析や凝灰岩の撥水強化処理、美術史的など多様な観点から遺跡の重要性、保存上の課題などについて多岐にわたる発表と議論がおこなわれた。

2. カップパドキア遺跡・聖シメオン聖堂の保存

2010年から2016年にかけて、カップパドキア・レッドバレーの聖ニキタス聖堂（ウズムル聖堂）において、岩窟の劣化メカニズムの解明と壁画の保存修復とを、科学研究費と鹿島学術研究財団の寄附金を用いて実施した。

そこで得られた結果を基盤として、岩質と立地環境の異なるパシャバーの聖シメオン聖堂を対象に、さらなる劣化メカニズムの解明と壁画のヴァンダリズムへの対策を目標に据えて、2019年夏からフィールド調査を開始した。聖シメオン教会は、ゼルベの谷に向かう谷筋の単独に存在する凝灰岩の岩塊に作られた教会である。カップパドキアの凝灰岩の固結状態が極めて弱いことは以前から議論されているが、改めて教会の躯体部分の脆弱性が確認された。カップパドキアの雪解け時期の凍結融解の状況について、環境、水分量等のモニタリングから明らかにしていくと同時に、岩石の物

性や強化処理剤の妥当性について検討をおこなった。建造物に付着する微生物、とくに地衣類の専門家としてイタリア・ローマ第三大学のジュリア・カネーヴァ先生に調査していただき、凝灰岩の内部に菌糸が深く根を張っている状況を確認した。その中で、どのレベルの保存状態を目指すのかというのは、生物や凍結融解だけではなく、崩落リスクの防止といった人への安全性、文化遺産の真正性といった複数の要素から判断が必要であることが改めて確認された。聖シメオン教会周辺の微小気象および水移動の解析と、凝灰岩の凍結融解に対する対応策については、伊庭による報告に詳細を述べる。

聖シメオン教会堂の壁画は、石膏を下地としたセッコ技法によって描かれた壁画であるが、その彩色材料は、いくつか人造の顔料が認められるものの、基本的には比較的シンプルなものである。また、壁画下地には藁スサなど年代分析の試料となるようなものが含まれておらず、正確な開鑿年代は今のところはっきりしていない。岩窟は2階構造となっている。天井には十字架のレリーフが作られている。一階東側には祭壇とベンチ、外へ通じる窓が作られている。壁画は現在、後世の落書き、ひっかき傷によって非常に劣悪な状態にある。

ただし、壁画には、10世紀初頭の様式に通じるモチーフが描かれていることから、教会の最盛期はそのころであろうと考えられている。アプシス（後陣）には、玉座に座すキリスト（図像学的にはマイエスタス・ドミニ）、エゼキエルとイザヤを伴う預言者の幻視が描かれる。天井には、コンスタンティヌス、母后ヘレナ、ソロモン、ダヴィデ。東壁北側には、バシリオス、東壁南側には、柱頭に座すシメオンが描かれている。



図1 聖シメオン教会とパシャバー



図2 現代の落書きによる損傷のある教会（聖シメオン）



図3 脆弱な凝灰岩製の教会躯体の損傷（エル・ナザレ教会）

また、南壁（東から西へ）には、シメオンと母、龍を癒すシメオン、蛇を飲んだ女とシメオン、縄とシメオン、シメオンの召命、ライオンの巣の中のダニエル、炉の中の三人の少年がそれぞれ描かれている。西壁（南から北へ）には、パラスケヴィ、エカテリニ、ユリッタ、女性聖人（特定不能）、テオドラ、バルバラ、テクラ。北壁（西から東へ）には、ソゾメノス、クリストフォロス（?）、レオンティオス、グリゴリオス（?）、プロコピオス、ヨアンニス・クリソストモスが描かれている。ニッチには、装飾文様があり、ナルテクスには、聖人が描かれているが未詳である。

聖ニキタス教会の壁画の場合は、抗体抗原反応を利用した ELISA 法や、Nano-LC-ESI-MS/MS 法により、膠着材分析をおこなったところ、壁画の中には、多糖類や膠などタンパク質を含んだ有機

物はまったく検出されなかった。試料の状態から水溶性の彩色であることは確認されているので、油やワックス等の材料とは考えられない。つまり、この教会の壁画は、検出可能な濃度の有機物質を含まない絵具で描かれたものであろうと想定され、その結果、経年の影響により、顔料粒子が物理的に取れやすい状態であるために、彩色層が年々薄くなっているのではないかと考えられた。すなわち、水の関与に対して極めて弱いものともいえるので、保存修復をおこなう際の材料選定の上でも、注意が必要であった。聖シメオン教会の壁画の場合についても、顔料や膠着材の分析を実施する予定である。

聖シメオン教会の壁画の重要な特徴は、いたるところに書かれたいわゆる「落書き」であろう。Hagios Hosios Symeon（聖シメオン）に対するグ



図4 ヴァンダリズムによる聖人の顔面の損傷

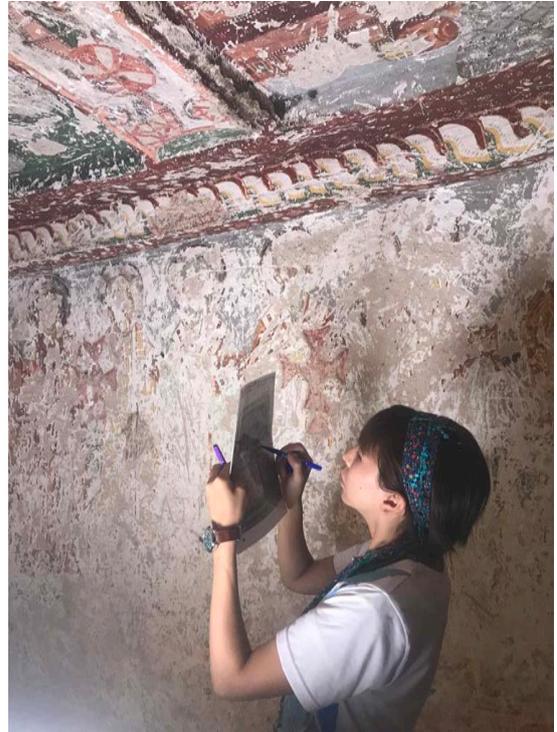


図5 壁画の損傷の記録作業の様子



図6 赤外線を用いた光学調査の様子

ラフィティも含まれている。古典ギリシア語、アラビア語、トルコ語で各種の落書きがなされているが、とくに古手の祈りの言葉などは、かつて聖シメオン教会がこの地で非常に人気の巡礼地であり、多くの信者が訪れたことの証明でもある。一方で、ごく近年になると、車のカギと思われるもので、自分の名前や日付を書き込むような、単なる訪問記念の落書きが増加するようになる。これらの歴史的なグラフィティは記録されていなかったため、写真記録を取った。

聖シメオンに対して、この地に彩色を施した教会堂を設立するためにパトロンがつき、柱上聖人シメオンという独特なスタイルの聖人として中世に人気を博した。壁画の状態が良くないが、奉納時の文字記録などが残されている可能性があり、ヴァンダリズムの保存修復によってそれらが見つかる可能性もある。

確かに、落書きは見苦しく、絵画の鑑賞に対して視覚的に邪魔となることも多いが、歴史的証拠としての価値も高いため、すべて一律に消し去ることは問題であろう。本プロジェクトでは、再処置可能な材料と手法を選択し、壁画の補強や落書きのトーン作業についても必要最小限な介入をおこなうこととし、修復作業をおこなう予定で

ある。また、トルコ側と観光利用と管理の方法についてこれからもモニタリング結果を解析しながら詰めていきたいと思っている。

日本側のメンバーは、私のほか、本科研の公募研究を実施している伊庭千恵美氏（京都大学大学院工学研究科・環境工学）と、協力をいただいている渡辺晋生氏（三重大学生物資源学研究科・凍土学）、柴田みな氏（東京文化財研究所アシスタント・建築設計）、成田朱美氏（壁画保存修復専門家／愛知県立芸術大学）となった。

トルコ側からは、ネヴシェヒール保存修復研究所長の Hatice Temur 氏、修復専門家として Ayça Baştürkmen 氏など若手の専門家が参加してくれることとなった。また、カッパドキアの美術史の専門家、とくにグラフィティの専門家としても知られるネヴシェヒール大学の Tolga Uyar 先生が参加してくださり、トルコ側もベテランと 20 代の若手を揃え、トルコ人の若手専門家育成としても非常に有意義な調査チームの編成となった。

現代のカッパドキアの景観のなかに、ビザンティン期の教会群があり、それらをどのように長期的な視座から保全していくかというのは非常に複雑な問題をはらんでいるため、包括的な取り組みが必要である。

都市におけるモノのエージェンシーに関するノート

—イスタンプルの耐震都市再開発プロジェクトを事例に—

木村周平

筑波大学人文社会系

もしく市区改正計画>に口がきけたなら、たいそう銀座煉瓦街計画をうらやましがったにちがいない(藤森 1990: 220)。

はじめに

本稿は、2018年12月23日に開催された、日本建築学会都市史小委員会のシンポジウム「都市・建築と物質のあいだ」に向けて執筆され、その資料集に収められた原稿を、主催者の許可のもと、一部修正したものである。本稿の目的は、文化/社会人類学(以下、人類学)およびその近接領域の理論枠組みから、都市におけるモノのエージェンシーのありようについて考察することであり、それは、エピグラムに引いた文章から「もし」「なら」を取り去り、それをレトリックとしてではなく「真に受ける」試みでもある¹⁾。

以下では、まず人類学のモノ研究の大まかな流れを辿り、そのうえでトルコ共和国イスタンプル市において2000年代中ごろに展開した「耐震都市再開発プロジェクト」を事例に検討する。

1. 人類学におけるモノ研究略史

人類学の形成は、近代ヨーロッパ王侯貴族の舶

来の珍品を集めた「驚異の部屋」から、学問的営為としての博物学(natural history)へ、そして民族学博物館の設立へ、という流れと大きく関わる(吉田 1990)。19世紀後半、初期の人類学者が大学で得たポストは博物館のものであり、その意味でモノ(民族誌資料 ethnographic artifacts と呼ばれた)への関心は高かった。(西洋のように)自然を征服してそこから自由になることができず、自然による制約のなかで生活を営むとされた諸文化においては、モノは日々の自然との格闘の産物と捉えられる。その意味でモノは当該文化を体現するものであり、モノを集めることは諸文化を再構成し、諸文化の比較を通して人間社会の進化を理解する方法の一部であった。

しかしその後、人類学は社会進化論を捨て、文化ごとの慣習や制度、観念や知識の体系へ関心を移していく。そこでモノは、無形の文化的要素と同じく、一種のテキストとして、手触りや質感を捨象して扱われる。そして人類学という営為は、それらが手がかりに、人間一般の思考システム、ないし文化ごとの象徴やコスモロジーの体系を解読し、再構成するものになった。

だが興味深いことに、人間の思考システムの探

1 本稿の議論については青井 2006 も参照。

究は、その外部、あるいはそれを枠づけるものへの探究へと展開する。そこでふたたび有形のモノへの関心が回帰する。そのひとつが（モノによって形が与えられた）空間である。家であれ、学校であれ、広場であれ、特定の形態や配置をもった空間は、人々の日常的な実践を支えるだけでなく、その思考、態度、行動などを方向づける。逆に言えば、その空間なしには、日々の生は今あるような形では営まれえない。このような空間論はもちろん、西洋社会における権力の技術論と結びついている。だが人類学の研究フィールドでは、そうした空間の構築はしばしば文化や伝統の積み重なりなかで匿名化され、意図をもった特定の作り手は必ずしも措定されない。それゆえか、人類学では、モノを人の意図の媒介ないし表現として捉えるのとは異なる、モノ自体を主題（主体）とする議論が現れてくる。

ここではそうした議論のうち3つを示しておく。1つめはモノの移動（社会的履歴）を追い、時間的／空間的な境界を跨ぐなかでのモノの意味の変容を追う研究であり（Appadurai 1988）、これはグローバル化する消費社会の研究にもつながっていく。2つめは、ある種の生態学、あるいは現象学の議論の影響下に、我々の生における、環境を構成する自然的／人工的なモノとの関わりをプロセスとして捉え直す研究である（Ingold 2000）。そして3つめが、科学技術論（STS）のある一派に影響を受けた、モノに行為主体性（エージェンシー）を見いだす研究である。

この3つめ、およびそこからの展開について、もう少し文脈を補足しよう。技術論においては古くから、技術が社会のあり方を決めるのか、あるいはその逆かという論争がおこなわれてきたが、科学論においても、自然を客観的に観察・記述す

る（べき）科学者がどのような社会的影響のもとにあるのかという社会学的な問いが現れた。この関心から、科学を社会的（≡主観的）な構築物だとする社会構築主義が登場し、文系では影響力をもつも、科学側から大きな批判を受けた。そうした中に現れたのがアクター・ネットワーク論（ANT）である（Latour 2005）。ANTは科学的な論争を通して、新たな説が事実として確定していくプロセスに着目する。科学的な論争では、その説が実験・観察データやすでに確定している事実などと整合性があるか、別の説の方がよりうまく／より広範な事象を説明可能ではないか、等が議論される。この論争は、やや抽象化すれば、その説に諸データや他の命題等がしっかり結びついているか、というネットワークをめぐる争いとして記述できる。ここで重要なのは、ネットワークに結びついている「アクター」（データ、実験技師、実験器具、サンプル、ポスドク、他者の研究成果等）はいずれも、科学者にとってしばしば思いがけないふるまいをする、ということである。実験しても予想しない結果が出てしまうかもしれない。悪いのは器具か、サンプルの集め方か、実験方法か、そもそもの説なのか。そこで科学者を含めたアクター間で様々な試行錯誤がおこなわれる。ネットワーク＝説は、こうした意のままにならない多数のアクターを手懐け、何とかつなぎ止め、そしてできるだけ広げていくことで、より強固で確かなものになっていく（あるいはそれに失敗すれば、説は瓦解する）。ANTはこのような拡張／分解するネットワークの競合プロセスを記述することで、科学の発展を（主観的／客観的説明の境界線をも問い直しながら）捉える。

本稿において重要なのは、このネットワークにおいて重要な役割を果たすアクターが人だけでは

ない（非人間 nonhumans と総称、生物も事物も含まれる）ということである。例えば、ある酵素。はじめはどんな形態か、どんな性質か分からないものが、実験器具や観測装置などを伴う試行錯誤のなかで次第にそのあり方が同定されていき、論文においてある命題（「A は α という性質をもつ」）として提示される。そして論争を経てその命題が事実と見なされるようになり、それが製薬につながっていくが、治験（これは新たなアクターをネットワークに取り込むことでもある）のなかで別の性質が見えてくる（「A は α だが、 β という条件下では…」）、等々。つまり A がいかなるものかは、あくまでその時点でのネットワークの函数なのである。このように ANT の枠組みには、人間と非人間をアクターとして同等に扱うこと、またそれぞれのアクターの性質は関係論的なものであること、が含意される。この、非人間も人間と同等に主語にする（修辞ではなくシリアスに）という記述法が、社会科学においてきわめて異端的で、斬新なものであった点は強調しておきたい。

ANT の、非人間をアクターないし行為主体とする視座は、人類学に新たな展開を引き起こす。科学実践の記述において酵素がアクターと言えるなら、宗教実践の記述において神や精霊をアクターだと言ってもよいのではないか？ 科学のネットワークを追うように、現地人の語り方を「真に受け」（take seriously）、その世界を構成する諸存在のつながりを記述し、それによって近代人の「当たり前」を揺るがせようとするのが、いわゆる存在論的人类学である（例えば Henare et al. 2006）。そこにもいくつかの流派があるが、ここ

ではモノに関わるものとして2つ挙げる。

1つは、人間と非人間を対等にアクターとする方法を民族誌や歴史記述に導入し、それぞれ独自のリズムやロジックをもち、しばしば想定に反してふるまう諸アクター（社会集団、動物、河川、菌類、昆虫…）の相互作用として描き直すものであり、それによって、既存の人間中心の歴史や社会の記述を批判するものである（マルチ・スピーシズ・エスノグラフィ）（Tsing 2015）。

もう1つはアート論と関わる。人類学が伝統的な対象としてきた地域でつくられたモノが、あるものは民具として、別のもは芸術品（いわゆる未開芸術）として欧米に持ち込まれ、現代芸術家に影響を与えつつ、その一方で、「それはなぜ芸術と呼べるのか、そもそも芸術とは何か」という問いを惹起したことはよく知られている。そこである人は欧米で確立した芸術評価の制度を問題にする（クリフォード 2003）。別の人にはラディカルにアートを定義し直す（Gell 1998）。つまり、アーティストが創造するモノがアートなのではなく、そのモノがオーディエンスを感動させたり驚かせたりするという効果を生み出したとき、そのモノはアートなのである。そうした効果を受けた際、オーディエンスはそのモノの背後に、自らに働きかける行為主体——アーティストであれ、神であれ——の存在を仮設推論（abduct）する²⁾。例えば仮面。人を魅了する仮面には作り手がいるが、作り手はイメージと素材に導かれて仮面をつくる。その仮面は踊り手を魅了し、踊り手は仮面にふさわしい身振りをすべく踊り、それがオーディエンスを魅了する（吉田 2016）。ここではモノを介した行為主体から他者への働きかけ、他者を捕

2 アブダクトは C. S. パースの記号論の用語であるが、この用法はやや非正統的である。

えるわざ（アート）が連鎖している。

この議論では、モノは作用因（行為主体）の媒介にすぎないように見えるが、その含意はもっと深い。そこには、いわば人がモノの集積に解体されてしまう見方を含んでいるのだ。これはメラネシアの関係論的な人間観を手がかりにした議論だが、例えて言うなら「立派なお葬式だったということは、あの人は徳のある人だったんだ」と、その人の人となり（あるいは能力）が成果物から遡及的に捉えられる、というものである。人は一人で、ないしすでにある社会関係を活用し、協働的にモノを生み出し、生み出されたモノが「その人」を明るみに出す。そしてそのモノは他者に贈与されることで人々の関係を創出ないし強化し、次のモノを生み出す。そして関係を通して贈与者に別のモノが返ってくる。社会的な関係性の網の目をモノが断続的に行き交うが、そこで人は、モノの行き来を意図して引き起こす主体であると同時に、モノの行き来を通して生み出される、モノが通過・滞留あるは集散するノードでもある。ここに存在するのは、人とモノが混然一体となった流れである。

ひとまず流れを追うのはここまでにし、まとめよう。人類学のモノ研究では、①モノは狭義には人工物をさすが、広義にはモノ＝非人間であり、生物と事物、自然と人工、有形と無形の双方を含みうる、きわめて広いカテゴリーである。②モノのあり方（固さ、脆さ、神々しさなども含めて）はそのモノを取り巻く関係性のなかで形作られる。③しかしモノはしばしば、他アクターに思いがけないふるまいをする（逆に言えば、そうした

ふるまいをし、手懐けなければならぬからこそ、モノは我々の眼前に立ち現れる）。④人類学はそうしたモノと人との関わりを、プロセスを追いかけるように記述することで、モノが人や他のモノに働きかける行為主体性を捉えようとする。

こうしたモノ論から、都市はどう見えるのか。

2. イスタンブルという都市の構築³⁾

人類学的モノ論からのひとつの方向性は、多アクターによる都市の構築プロセスの記述であろう（これは環境史的都市史と近いかもしれない）。都市の長期的ないし短期的な展開を、自然的あるいは人工的な諸アクターの関わりとして捉えること。

イスタンブルではどうか。16世紀のフランス人学者ギリウスがこの町の歴史を振り返って「ボスポラスこそが（…）ビュザンティオンのまことの生みの親である」（フリーリ 2005）と記したように、その旧市街を取り囲む海は、かつては豊かな漁場であり、この町が交易の中継点として、様々な人々が往来しながら栄えることを支えた。加えてこの町が政治的重要性を増すと、町を取り囲むように築かれた城壁とともに、外敵から町を防ぐのにも役立った。ローマ人たちは石やレンガのブロックを使って城壁や町自体を作り上げていったが、彼らが建てた教会や、広場と大通りの一部は、オスマン帝国以降も持続し、現在に至るまで町の基本構造をなしている⁴⁾。とはいえ、こうした建物は地震による被害を受けやすいものであったし、規制にもかかわらず裏道は細く、貧困層が流入してスラムが形成され、犯罪や民衆蜂起の

3 これ以降は、拙稿（木村 2010a, 2010b, 2011a, 2011b, 2013）から再構成したものである。

4 この町で作られた建造物のうち重要なもののひとつに貯水池と給水路がある。水路の建設は2世紀に建設がはじまるが、都市の地形をよく理解した、高い技術力が見て取れるという（Dinçkal 2008; 山下 2003）。

温床となるだけでなく、しばしば火災の原因ともなった (Çelik 1996)。

イスタンブルはトルコを東西に横断する、後に北アナトリア断層と名付けられた長大な断層のすぐ近くに位置しており、歴史を通じて繰り返し地震に襲われてきた。固有のメカニズム、テンポをもち、ふいに人びとを襲う地震を、イスラームにおいては神の業と見なし、「審判の日」と関係づけたり、あるいは人間の罪を神が罰している、と解釈する傾向にあった (Bein 2008)。とはいえ、まったくそれに対して対応がとられなかったわけではない。オスマン帝国時代には、大きな地震が起きるたびに国家による事後的な被災地援助がおこなわれたほか、イスタンブルでは木造家屋の建設が奨励された⁵⁾。しかし木造家屋は逆に、火災のリスクを大きくしてしまう。上述のようにイスタンブルには所謂イスラーム都市的な、細く入り組んだ路地も多く、建物が密集する地域も少なくなかったから、たびたび大規模な火災が発生した。こうしてこの町では火災が起きるとレンガ造の家屋が、地震が起きると木造の家屋が推奨される、という堂々巡りを繰り返すことになる。火災に対しては消防団が組織されたり、オスマン朝末期にはヨーロッパ型の都市計画（道路の拡張や庇の長さの制限など）による対応もとられたりしたが、決定的な解決にはならなかった。

20 世紀半ばになると施政者はイスタンブルの都市構造の改造をおこなうが、より大きな変化は市域の拡大だった。20 世紀の前半、イスタンブルの城壁のすぐ外側の、現在ゼイティンブルヌ区（以下 Z 区）となっている地域は大半がワクフの

土地であり、墓地や宗教施設などはあったものの、ほとんど人が住んでいなかった。しかし 1947 年に工場が作られると、トルコ国内外からも仕事を求めて人が集まってきた。彼らは無人の大地を思い思いに塀で囲み、煉瓦や石を積んで小屋を建て、生活を始めた。職を得ると親族や知人を呼び寄せた。こうして掘っ建て小屋集落は次第に拡大していった。もちろんこれは土地の不法占拠であったが、ワクフの側も彼らを積極的に追い出そうとせず、行政との対立や妥協を繰り返しながら、1980 年代までこうした状況が続いた。1980 年のクーデタのあと実権を握った政党は、1984 年の区制施行と前後して、ワクフから土地を買い、住民に安く売り渡す、ということをはじめた。それによって、不法に居住していた住民は、自ら囲い込んでいた土地の所有者となった。土地の権利を得た人々は、施工業者の誘いに乗って、今度は掘っ建て小屋をアパートに建て替えた。それによってバラバラに住んでいた親族がまとまって暮らすことができるし、余った部屋を売って利益を得ることもできる。このプロセスは 1990 年代前半にかなりの勢いで進行し、掘っ建て小屋はほとんど姿を消し、代わりにまばらな鉄筋と質の悪いコンクリートで構造を作り、それをレンガで埋めたアパート群がその一帯を覆った。

こうして、海、人、木、石、そして地震などの相互作用を通して構築されたイスタンブルは、20 世紀後半の押し寄せる人によって、大局的な見通しをつけられないまま膨張を続けた。そこを、1999 年に大きな揺れが襲った。

5 木材はそれほど遠くない周辺地域から運んでいたようである。しかし建材として高価であり、木で構造を組み、土やレンガで壁を埋めた家屋 (humuş) も多かったという (Tanyeli 2004)。一方で昔ながらのレンガの組積造 (yığma kagir) も残っていた。

3. 耐震都市計画

1999年8月17日、トルコ北西部を震源とする大地震が起き、1万7千人近い死者を出す。この地震を契機にイスタンブルの地震リスクを憂慮するようになったイスタンブル大都市圏市役所は、2000年から2002年にかけて、JICAとともに市内の耐震リスク調査をおこなった。これはイスタンブル市の地震のリスクを、建物と地盤という観点から数値化し、行政の最小単位であるマハレごとに明らかにしたものであった。こうして地震を大地の不安から断片化された土地のリスクへと変換することで、行政は地震をネットワークに取り込み、その対策を「合理的に」おこなうことができるようになる。このプロセスを通じて浮かび上がったリスクの高い区のひとつが、Z区であった。

リスク調査後、大都市圏市役所は、トルコ国内の4つの有力大学と共同し、1年かけてイスタンブルの地震対策の「処方箋」としての「イスタンブル地震マスタープラン」を作成し、地震の4周年記念日である2003年8月17日に発表した。このマスタープランが中心的な対策としたのは、イスタンブルの地震に対して脆弱な建物を建て替えることであった⁶。大都市圏市役所はこの建て替え（都市再開発 *kentsel dönüşüm*）の実施を念頭におき、マスタープランの作成中から、地震リスクが高いとされるZ区をパイロット地区とした都市再開発のための具体的な計画作成プロジェクトとして「Z区パイロット・プロジェクト」（以下PPと略す）を開始した。PPは市役所からその下にある都市計画会社ビナーシュ（仮名）に委託される形で進められた。当初公表された日数は550

日（2003年1月より2004年9月まで）であった。

大都市圏市役所の計画では、このPPで再開発の実現の目途をつけ、そのうえでPPに基づいた再開発——つまり土地を収用して、そこにある建物を建て替えること——に着手することが予定されていた。しかしこの目論見はうまくいかない。PPは終了予定の2004年9月を超えても事業が続き、行政側もそれについて公に情報を開示しなかった。予定より遅れること約1年後の地震の記念日である2005年8月17日、大都市圏市長はメディアに向けて再開発の実施を宣言した。その内容は15カ月の間に、Z区のハイリスクな250棟を建てなおすというものであった。だが市長の宣言にもかかわらず、再開発は着手されず、プロジェクトは外目にはストップした状態となり、そのまま時間が経過し、都市再開発はそのまま立ち消えと思われた。しかし、2007年2月にZ区内の一棟のアパートが突如倒壊するという出来事が起きたことも影響したのか（この出来事は本稿の最後で少しふれる）、約3年経った2008年5月16日、市長は再度、再開発の開始を公表した。内容はZ区のなかの6ha強の区域を対象にした建て替えであった。しかし、その後1年にわたって工事は開始されなかった。だが市長は地震のちょうど10周年に当たる2009年8月17日、3度目の開始を宣言する。そこで開始された工事によって生み出されたのは、よくある高層マンション団地であり、それは2011年に完成した。イスタンブル史の古くからのアクターである地震への初の都市計画的な取り組みは、紆余曲折の結果、ごくありふれた規模の、取るに足らない集合住宅団地建

6 建て替えが選ばれたのは、イスタンブルの典型的な建物が、壁を共有するほど相互に密接した鉄筋コンクリート造のアパートであり、強度を高めるための耐震工事が技術的・経済的に困難だという認識にもとづく。

設へと収束したのである。

ここで、いったん都市としてのイスタンブールからこの計画、特にその「紆余曲折」に注意を移したい。筆者は 2004 年 2 月からイスタンブールでのフィールドワークを開始し、この計画の進行と停滞、方向転換をリアルタイムで見ることができた。こうした遅滞や方向転換は、都市計画においてはよくあることかもしれない。しかしここで指摘したいのは、その予測しづらい進捗のリズムが、筆者だけではなく、行政、住民、都市計画会社スタッフなど、様々な人々に、その時々、不安や驚きなどの感情を惹き起こしてきたということである。言い方を変えれば、この独自の時間性をもち、姿を変えながら進む計画は、行為主体としてイスタンブールの人々の反応を喚起したのである。それゆえ本稿ではこの計画の変遷を図面や各種資料を通じてあつづけるのではなく、行為主体としての計画がいかに人々に働きかけ、翻弄したかを、エスノグラフィックな断片から捉えてみたい。

断片① ゼイネップの不安 (2004 年 5 月)

2004 年 5 月。イスタンブール国際空港に程近い、広い空き地の一角にビナーシュの PP のためのプレハブのオフィスが建っていた。敷地の入口の 2 つの看板には、上に「イスタンブール市役所」、その下に赤地に白抜きでより目立つように「イスタンブール地震マスタープラン Z 区都市再開発プロジェクト」という文字、そして最後に、この都市計画会社であるビナーシュの名前が書かれていた。オフィスは数部屋ずつに分けられ、各部屋では数人のスタッフがコンピュータで図面を作成したり、書類をチェックしたりしていた。壁には大きな Z 区の地図が張られ、棚には書類のバインダーの山に混じって電話帳のような 3 冊組の本が

あり、ハードカバーの表紙には「イスタンブール地震マスタープラン」と書かれていた。

ここで働くゼイネップはもうすぐ 30 歳という女性だ。彼女はトルコ有数の名門校であるイスタンブール工科大の都市計画学科で学んだ。両親が熱心なムスリムで、大学に通う際もスカーフで髪を隠していた彼女は、在学中に大学でのスカーフ着用が禁止され、卒業に非常に苦労した。卒業後、彼女は市役所の交通局で働き始めたが、まもなくトルコを襲った経済危機でリストラにあう。そしてその後しばらくの求職期間を経て、このオフィスで働き始めた。

ここで彼女は、Z 区で都市再開発が実施される際に、計画についての情報を住民が共有するための場所となる「ローカル・ビューロー」のモデル作りのチームの一員として働いていた。「ローカル・ビューロー」は現在計画中の都市計画を「住民参加型」で実施するべきだという EU からの要望に応えるために必要なものだと説明されていた。

しかし、住民参加の達成はきわめて難しい問題であった。なぜなら現行の建築法では、一つの建物の建て替えにはその各部屋の権利者全員の承認が必要だとされていたからである。権利者が細分化している状況で、一棟ずつ賛同を集めて、地区レベルで建て替えをすることなど到底不可能に思えた。そうしたなかで彼女たちは、上役の意向を気にしながら、どのようにすれば全員に正しく情報を伝え、賛同を得られるかについて、手探りで作業を進めねばならなかった。そのためオフィスに出入りしていた筆者は、しばしば彼女から愚痴を聞くことになった。彼女のチームのリーダーである日本人プランナー K 氏の指示が理解しにくく、朝令暮改に思えたこと。「住民参加」のモデ

ル作りが難航していたこと。そして、このオフィスでどうプロジェクトが進められているかの全体像と、最終的な落としどころがわからなかったこと。これらのことが、彼女に、このプロジェクトにおける彼女自身の位置について確信できないという状況を生んでいた。

実際のところ、このプロジェクトは全体としても予定通りに進んでいないように見えた。本来のプロジェクト終了の期日である 2004 年 9 月が近づくと、オフィス内では、様々な動きが現れていた。何人かのスタッフは別のプロジェクトに回され、毎週の定例会議に急にプロジェクト管理のエージェントが現れ、進行を仕切るようになっていたり、大学の研究室のチームや民間会社による売り込みのプレゼンがおこなわれるようになっていた。そのうちに K 氏も「新しい仕事が見つかった」と言い残してオフィスを去ってしまった。さらには、ビナーシュ自体が市側から切られるのではないか、という噂すら、ある程度の信憑性を持って流れるようになった。

こうした状況で彼女は解決を模索した。一方で、K 氏の残した資料を整理してプレゼンし、プロジェクト管理チームやビナーシュ上層部と直接話し合いをするなどして、ローカル・ビューローの作業を積極的に継続しようとした。しかし他方で、筆者に対して、外国、できればイランか日本で大学院に入り直して映画について学びたいなど、彼女の状況から考えて夢想的に見える将来計画について語ったりするようになった。

断片② セルダルの不満（2004 年 6 月）

セルダルはいつも清潔なスーツに身を包み、自信に満ちた礼儀正しさを湛えた男性であった。彼は 30 代半ばと若いながらも、請われて 이스タ

ブル大都市圏市役所の都市計画課長の片腕として働き、郊外の高級団地に妻と一人息子の三人家族で暮らし、毎日車で通勤していた。

彼にとってもやはり、このプロジェクトが予定どおりに進行していないことは不満の種であった。ゼイネップが愚痴を言っていたのと同じ時期、K 氏と筆者と 3 人での昼食の場で「ビナーシュではこの仕事ができないのではないか。このプロジェクトのような大規模な都市再開発は世界に例が少なく、なんとしても成功させて、イスタンブル、およびトルコだけでなく世界に範を示さなければいけない。それなのに…。ビナーシュが働いていないというわけではないが、機能的ではないのだ。そして結果が出ていない」と彼は言い、ビナーシュを、「彼らは現地を知らない」と切り捨てた。彼と別れた後、K 氏は筆者に、このプロジェクトがうまくいっていないために、彼のポストである都市計画課長は市役所内での立場を弱くしているようだ、と語った。

しばらくして、セルダルは市役所側としてビナーシュに介入をはじめた。今いるビナーシュのスタッフだけでは対応できない、というのが彼の見方であり、プロジェクト管理エージェントや、大学教授などの専門家をこのプロジェクトに加入させるようとしたのは彼であった。彼にとって、こうした補強が解決への方途に思えたのである。しかしこうした介入は、プロジェクトの実施の仕方を変化させ、結果として問題も変容させてしまう。結局、彼は望むような成功は得られないままであった。

断片③ ハリルの苛立ち（2005 年 5 月）

ハリルは 40 代の、Z 区内で看板屋を営む男性である。彼はトルコ北部の黒海地方出身で、ずん

ぐりとした体つき、赤ら顔で、普段はおとなしいが、話し出すと熱を込めてしゃべる。若いころから左派的な政治活動に積極的に関わってきたようだが、それについては多くを語ろうとしない。

彼は、しばしば耳にする、市がおこなおうとしている都市計画について、その全貌がつかめないことに不安を抱いていた。まもなく実施されるのではないかと、すでに立ち退きが始まっている、などの噂も流れてきていた。彼は大学で都市計画を学ぶ娘に頼んで都市計画の業界団体に情報を求めたりしたが、規模や内容（立ち退いた住民はどこに行くのかなど）についても様々な噂があり、どれが正しいのかは判然としなかった。しかし彼は、行政の目的は彼ら自身の利益であり、そのために貧しい住民たちの土地を奪おうとしているのだ、と考え、区内でも知人たちと話し合いの場をもっていた。

そんな折、彼は Z 区役所が主催した、住民とプロジェクト側との対話の場となることが予想された、あるシンポジウムに区内の市民団体の代表の一人として参加することになった。

しかし、シンポジウム自体は予想外の展開を迎える。登壇するはずの Z 区長が、シンポジウム開催場所となった大学とのトラブルで都市計画課のスタッフの一人が入場を拒否されたことに激怒し、開会してまもなく退席してしまったのである。ハрилはパネルに残り、聴衆に向かって自らの主張を述べたが、本来それを聞き、対話するはずの都市計画スタッフはそこにいなかった。

4. 計画におけるモノ、モノとしての計画

以上、3つの断片を提示した。この2004年から2005年の時点で、プレハブのオフィスがあり、そこには地図やコンピュータのようなモノが集積

し、ゼイネップのようなスタッフが働いていた。その意味で PP は、都市としてのイスタンブルと同様に、明らかに実在していた。そして計画としての PP は、その前の「マスタープラン」、さらにその前の「リスク診断」を継承していた（ビナーシュのオフィスにある「マスタープラン」の分厚い3巻本は、文字通り折にふれて参照され、モノとしてこの継承を支えていた）。そして「リスク診断」は1999年の地震のみならず、大地の奥深くで、人には知覚できない速度で動き続けるいくつかのプレートと、それが近い将来生み出すとされる地震とのつながりももっており（少なくともこの時点では）、また上述の通り、「リスク診断」は Z 区に存在する建物群や地盤と結びつき、それをパラメータの数値へと変換し、それらと仮想的な地震の揺れとを結びつけて数式を通してリスクを算出し、それを可視化した地図というモノを生み出した。

こうしたつながりが示すのは、いずれも人とモノが構成する計画と都市の、相互包含性である。PP という計画は都市としてのイスタンブルに空間的・歴史的に根をひろげ、その要素の一部となっている。それと同時にイスタンブルという都市は、それを構成する建物や地盤へと分解され、それらは数値化などの操作を通して PP の一部を構成している、ということである。

相互包含する計画と都市は共に、未来に向けては未確定の存在でもある。イスタンブルは地震などのアクターのふるまいを手懐けられておらず、PP は「住民参加」の概念や建築法、さらに Z 区住民などの、必要とされるアクターとの間にまだ十分な結びつきを作ることができていなかった。そのことがゼイネップやセルダルに、これが計画通りの成果物を生み出しうるのかと懸念を抱かせ

ていた。

このような状況において、計画ないし都市を構成するアクターの何がより強固で、何がより脆いのか、という問いに答えるのはそれほど簡単ではない。例えば、Z区を覆う耐震性の低いアパート（都市再開発か地震が起きれば壊れうる）と、ビナーシュのプレハブ・オフィス（プロジェクトが完了するか、市役所がビナーシュを切れば撤去されうる）と、セルダルのマンション（彼が失職すれば彼の手を離れうる、地震では？）は、どれがより強固なのか？ それはあくまでも関係性の函数であり、材質の硬度だけでは測れない。そして当然、この関係論的なありようは、非人間だけの話ではない。セルダルとゼイネップに関して言えば、計画が具体的な成果を生み出していくかどうか、彼や彼女がいかなる能力を備えた人なのか、ということ了他者に明らかにしていく。そのためPPの実現を懸念したセルダルは他のアクターを呼び寄せてPPを強固なものにしようとする一方で、ゼイネップは別のプロジェクトを夢想した。

不確実性をはらむPPは、それぞれの視点に応じて異なる様相を呈する。オフィスにおいて進行中の計画が複数の要素から構成されていることは明らかであった一方で、Z区に建つアパートの中からは、そうは見えない（そもそも市役所とZ区役所の関係すらはっきりしない）。ハリルにとってPPは、地震ではなく、Z区の過去（行政が票という利益のために土地を払い下げた）と結びついた、ひとつの悪だくみなのだ。この都市計画がいかなるものであり、どのような決着がつくのかは、誰も確信をもって語ることはできず、ウェブサイトや書類の上で、あるいは関係者の言葉の

上では明確に示されていたとしても、それはプロジェクトの実態を示しているというよりはむしろ予定や願望に過ぎない。

計画も都市も人とモノからなる。そして計画は都市の一部であり、都市は計画の一部である。だが、こうした視点ごとの様相の多様性が示すのは、あくまでも両者にあるのが部分的な関係性にすぎない、ということだ。都市が計り知れないように、計画も計り知れない。両者はともに、それを現時点で構成する諸要素の集合に還元するということはできない。思いがけないふるまいが現れ、人やモノはそれに反応する。

5. 都市は考える⁷⁾

2007年2月21日。Z区のとあるアパートは、一階部分がカフェになっていて、その日も深夜まで数人の男たちが残っていた。彼らは建物が異様な音を立てはじめるのに気づいた。男たちは慌ててそのアパートに住む人や近隣の人に異変を伝え、ほとんどの人々は退去した。しかし数人が忘れ物を取りに戻った時、アパートは崩壊した。2人が巻き込まれた。人々が集まり、救助作業は翌日まで続いた。

この「思いがけないふるまい」はどういう反応を生んだのか。ある住民は、これは地震だ、と言った。「実は[そのアパートは]前の地震で損傷したらしい。退去するようと言うレポートも受けていたのに住み続けたらしい。だからじゃないか…」。彼にとっては、このアパート崩壊は、7年半も前に起きた1999年の地震の、ひとつの遅延された結末なのであった。他方、Z区の都市計画課の課長補佐はこれに否定的で、「あのアパー

7 この議論についてはコーン（2016）を参照。

トは、金がたまるごとに一階ずつ建て増していった。だからだ」と言った。彼によれば、崩壊の原因は、建築基準を守らず、勝手に建て増していった住人たちにあるのであり、地震ではなかった。そして遠く首都アンカラでは、この倒壊が、法改正までの長いプロセスがかかっていた都市再開発法を国会のアジェンダの上位に押し上げた。イスタンブル大都市圏市役所はこの法案の成立を見越して、都市再開発事業を再開した。

人は他のアクターの思いがけないふるまいを解釈し、反応すし、自らを取り巻く関係性を組み替える。そうした反応が他の人やモノの反応を連鎖的に生み出す。人類学者ベイトソンは、精神を情報が循環するシステムと捉える（ベイトソン 2000）。それは皮膚の中に閉じたものではなく、複数の要素からなり、彼の言う情報——差異を生み出す差異——に応答し、その応答が次の応答を生み、…というように、システムを自己創出していく。だとすれば、都市もこうしたシステムだといえるのではないだろうか。反応の連鎖として、都市という一つの思考システムが作動する。

都市の研究はおそらくこうした思考の一部でもあり、またその「思いがけないふるまい」ともなりうる。そのなかで都市の人類学は、都市で展開する事例を現在進行形で捉え、そこに現れている多様な関係性を追いかけて、そうした関係性のほつれた糸の端を見出し、未来に向けて新たな（あるいは古い）つながりを付け加えようとする。それは都市を形作るモノや確定した事態の帯びる「固さ」を揺さぶり、都市の変化の潜在的な可能性に再び光を当てようとする試みだといえることができる。

参考文献

- Appadurai, A. (ed.) *The Social Life of Things: Commodities in Cultural Perspective*, Cambridge UP, 1988.
- Bein, A., The Istanbul Earthquake of 1984 and Science in the Late Ottoman Empire. *Middle Eastern Studies* 44 (6): 909–924, 2008.
- Çelik, Z., *Değişen İstanbul: 19. Yüzyılda Osmanlı Başkenti.*, Tarih Vakfı Yurt Yayınları, 1996.
- Diñçal, N., Reluctant Modernization: The Cultural Dynamics of Water Supply in Istanbul, 1885–1950. *Technology and Culture* 49: 675–700, 2008
- Gell, A., *Art and Agency: An Anthropological Theory*, Oxford UP, 1998.
- Henare, A., et al (eds.) *Thinking through Things: Theorising Artefacts in Ethnographic Perspective*, Routledge, 2006.
- Ingold, T. *The Perception of the Environment: Essays on Livelihood, Dwelling and Skill*, Routledge, 2000.
- Latour, B., *Reassembling the Social: An Introduction to Actor-Network Theory*, Oxford UP, 2005.
- Tanyeli, U., *İstanbul 1900–2000: Konutu ve Modernleşmeyi Metropolden Okumak.*, Ofset, 2004.
- Tsing, A. L., *The Mushroom at the End of the World: On the Possibility of Life in Capitalist Ruins*, Princeton UP, 2015.
- 青井哲人「多くはうたかたに消え、いくつかは生きて地に降り：都市史の主語は何か」『10 + 1』44: 90–99, 2006。
- 木村周平「われわれの〈つながり〉—都市震災を通じた人間圏から生存基盤への再編成—」杉原薫ほか編『地球圏・生命圏・人間圏：持続的な生存基盤を求めて』京都大学学術出版会 pp.337–364, 2010a。
- 木村周平「イスタンブル、耐震都市再開発プロジェクトの時間性：都市変容の人類学に向けて（<特集>都市に（が）居座ること）」『文化人類学』

75(2): 261–283, 2010b。

木村周平「都市計画、不安、人類学（者）：トルコ、イスタンブールの耐震都市計画の事例から」『九州人類学会報』38: 47–53, 2011a。

木村周平「『揺れ』について—地震と社会をめぐる実験・批判・関係性」春日直樹編『現実批判の人類学：新世代のエスノグラフィへ』世界思想社 pp.121–140, 2011b。

木村周平『震災の公共人類学』世界思想社 2013。

クリフォード・ジェイムズ『文化の窮状：二十世紀の民族誌、文学、芸術』太田好信ら訳、人文書院 2003。

コーン・エドゥアルド『森は考える：人間的なるものを超えた人類学』奥野克己ほか訳、垂紀書房 2016。

藤森照信『明治の東京計画』岩波書店 1990。

フリーリ・ジョン『イスタンブール：三つの顔をもつ帝都』長縄忠訳、NTT 出版 2005。

バイトソン・グレゴリー『精神の生態学』佐藤良明訳、新思索社 2000。

山下王世「オスマン朝イスタンブールの給水施設」浅見泰司（編）『トルコ・イスラーム都市の空間文化』山川出版社 pp.75–89, 2003。

吉田憲司『文化の「発見」：驚異の部屋からヴァーチャル・ミュージアムまで』岩波書店 1999。

吉田ゆか子『バリ島仮面舞踏劇の人類学：人とモノの織りなす芸能』風響社 2016。

オスマン都市史・建築史に関する 2019年の成果報告

川本 智史

金沢星稜大学教養教育部

はじめに

今年度の成果として、複数のテーマに関する研究論文や研究紹介が専門雑誌に投稿・掲載されたので、その内容をかいつまんでここで紹介することとしたい。対象とする時代は15世紀から20世紀までと幅広いが、いずれも都市・建築空間を切り口としてオスマン朝イスタンブルやトルコ共和国アンカラを考察したものである。

1. 1453年コンスタンティノープル＝イスタンブル征服直後の都市政策について

オスマン軍による1453年のビザンツ帝国の首都コンスタンティノープル征服直後より、この都市はオスマン朝の首都イスタンブルとして再建が進められ、16世紀には再び地中海世界随一の大都市として栄華を誇った。ここでは既存の統治システムが消失し、新たな支配者と社会秩序が登場するコンスタンティノープル＝イスタンブルという大都市の征服・復興という過程で、世界史上でもまれな空間的・社会的な都市大改造がおこなわれた。

征服直後よりイスタンブルを首都とすることはメフメト2世によって宣言され、矢継ぎ早に復興策が実施されていった。従来の見解によれば、メフメト2世は自らの建設する帝国を象徴する都と

してイスタンブルを計画し、中央集権国家の拠点となる新首都イスタンブルがここに誕生した。その一方で復興の実態に即してみると、異なるイスタンブル像が浮かび上がる。当時のオスマン支配層にとって都市造りの基本となるのは「栄えた状態にすること」と「人が住んだ状態にすること」であり、新首都でもこの状態を目標とした施策が採択されたにすぎなかった。具体的には、都市インフラ整備と人口回復策というふたつの相互に関連しあう再建計画が進行したのである。いずれもそれまでオスマン朝がアナトリアとバルカンで征服した都市でとられた手法であった。

第一の都市インフラ整備策として、まずはアヤソフィア（ハギアソフィア）などの教会建築の一部がモスクやマドラサへと転用された。これを維持運営するため、スルタンの出資のもと市内中心部には商業施設であるバザールが建設されてワクフ財（宗教的寄進財）として運営されるようになった。これらの施設は賃料によって宗教施設の運用を支えると同時に、市民生活に不可欠なインフラを提供した。その他にも中小のモスクが軍人らの寄進によって建設されて市民生活の中心となったのである。第二の人口回復策として、市内に残された家屋や教会、修道院などの建物は征服に参加したものたちや、領内各地から自発的あ

るいは強制的に集められた移住者にミュルク（私財）として無償で与えられ移住が推奨された。特に高位の軍人や官僚、イスラーム法学を修めたウラー層、神秘主義教団の長老には大きな敷地と屋敷が与えられたとみられ、彼らは自らの名を冠したモスクと商業施設や住居などをワクフ財として寄進して都市空間形成に大きく寄与した。これらのモスクはマハッレ（mahalle）とよばれる街区の中核となる。

以上のような復興策の結果、1477年におこなわれた調査によるとガラタを除いたイスタンブール市内には、イスラーム教徒の戸数 8951 戸、非イスラーム教徒の戸数 5852 戸の合計 14803 戸が存在するまでに人口は回復した。メフメト 2 世が 1481 年に死去したのちも、市内では盛んな建設活動が続き人口が増加した。さらに時代が下って 16 世紀後半にもなると、帝都イスタンブールにはオスマン領各地から移民が押し寄せるようになり、政府はそれまでとは逆に急増する人口への対応に苦慮する事態にまでなった。

本研究ではさらに 1455 年に作成されたイスタンブール検地台帳を分析し、征服直後の定住政策を考察した。ここから、市内中心部の条件のいい場所は当初より有力者らに私有地として下賜され、あるいはスルタンのワクフ地として商業施設が建設されて積極的に開発が進められた一方で、周縁部では空き家が多く残り住民も逃散するという対極的な実態が存在していたことが浮かび上がった。主に金角湾沿いや都市西部の周縁部に位置した逃散者の家屋は、1455 年の地租徴収にともなうスルタンのワクフに編入されたため、その存在が 1455 年検地台帳で浮き彫りとなった。このような地域に住まわされたのは自発的に移り住んだ移民第一陣に続く第二陣であり、その半数以上を

多くが強制移住の対象になったと考えられるバルカン半島出身のユダヤ人を主体とする非ムスリムが占めていた。従属的な立場におかれる人々を無人となったワクフ家屋が多数存在した周縁へと配置する一種の都市計画があったことが検地台帳から明らかにされた。

2. 前近代イスタンブールの海上交通に関する研究

黒海とマルマラ海をつなぐボスポラス海峡を擁するイスタンブールは、古くより海上交通と深く結びつく都市だった。海峡の最南端ヨーロッパ側の半島部を中心市街としつつ、その北には金角湾があって天然の良港となり、湾の北側にはジェノヴァ人居留区を起源とするコスモポリタンな香りが漂うガラタ地区がある。一方のアジア側に目を転じると、現在では住宅地となるカドゥキョイやユスキュダルなどそれぞれに異なる性格をもつ地区が海峡沿いに連なっている。本研究では前近代オスマン期におけるイスタンブールにおける「船」を都市社会史的観点から分析した。

狭隘な海峡の特色は、アジア側とヨーロッパ側の往来を容易にし、前近代より大陸を越える大都市圏の形成に寄与していた。19 世紀以降の蒸気船による大規模輸送以前からも、市民はピヤードとよばれる手漕ぎの小型舟で往来し、乗り合い舟であるペレメも活躍していた（図 1）。波止場間の船賃は手頃な公定価格が定められていたため、アジア側からヨーロッパ側への日々の通勤も可能だったことがわかる。ある程度裕福な海辺に住む市民たちは時に舟を所有していたこと、また漕ぎ手として有期雇用の船頭が存在していたことが 16 世紀の法廷台帳から明らかとなる。さらに上流階級はボスポラス海峡を北に遡った風光明媚



図1 乗り合い舟「ペレメ」

な沿岸部に別荘を所有していたことが 1800 年頃に作成された宮廷お庭番長の台帳から浮かび上がる。市内の邸宅から私有するピヤードに乗っては別荘を訪れ、社交の場としていたことがここからわかる。

さらにオスマン朝の法廷が膨大に残した法廷台帳や各種の記録を繙くと、船と海上交通という都市インフラのハード面だけでなく、営業権委託と冥加金徴収やワクフ財としてのペレメなど、ソフト面でもオスマン朝の行政の網が海峡に張り巡らされ、運営がおこなわれていたことがわかる。16 世紀ユスキュダルの例では、モスクなどの財源としてペレメが存在しており、その業務委託の見返りとして高額の賃料が払われていた。当時の渡し船事業は相当な収益が見込めるもので、一年の業務委託費は舟そのものの価格の数倍に設定されていた。ワクフ以外にも舟の漕ぎ手の身分保障をおこなう中間層が存在していたこと、また一般市民が舟の権利を分割所有するなど、複雑な社会関係が存在していたことが遺産目録などからも浮

かび上がる。

これら「まっとう」な稼業と同時に、舟が売春や飲酒など違法行為の温床となっていたことも史料から読み取れる。舟で男女が同席することを禁じる勅令は 16 世紀にしばしば出ているが、これが一般の乗り合い舟にまで適用されたとは考えにくく、複数の裁判記録を分析すると一種の酌婦を乗せた特殊な舟がボスポラス海峡に存在していたことが判明した。陸にくらべて管理が行き届きにくい海を舞台として、イスタンブルに生きる人々がさまざまななりわいを成立させていたことをうかがわせるものである。

3. 20 世紀前半トルコ共和国成立期の新首都アンカラにおける都市儀礼の考察

1923 年にトルコ共和国が成立すると、独立戦争の根拠地となっていたアンカラが帝都イスタンブルに代わって新首都とされた。長い歴史と伝統を誇るみやこから、アナトリア高原の一地方都市へと権力の座を移すことは、政治・経済面で大き

な動揺を生むだけではなく、首都空間の創出とそこでの都市儀礼挙行という新たな問題を引き起こした。本研究は国父アタテュルクの入市式や戦勝パレード、共和国記念日の祝祭など大規模なイベントをそれがおこなわれた場に着目して分析し、儀礼空間の変遷を明らかにした。

最初にアンカラが都市儀礼の場としてあらわれるのが、1919年のアタテュルク入市である。第一次大戦の敗戦後、崩壊の一途にあったオスマン帝国において抵抗運動を組織したムスタファ・ケマル（のちのアタテュルク）は、同年12月27日にアンカラに入城して運動の拠点とした。この際任侠集団や職工、修行僧らから成るアンカラの市民は一行の歓迎式典を市内外の各所で企画し、都市空間において新リーダーの到来を演出した。実はここでモデルとなっていたのがオスマン帝国末

期イスタンブルでおこなわれた新スルタンの帯剣式であり、市内をパレードして複数の地点で歓待儀礼が開催されたこと、また聖者廟の訪問に代表されるように極めて宗教的なものであったことは特筆に値する。

同時期にはすでにメガリ・イデアを唱えるギリシア軍が西アナトリアに侵入していたため、アンカラはすぐさま最前線に兵士を送り出し、傷病兵や捕虜を受け入れる軍都としての色合いを強める。この際軍事パレードが開催されたのはアンカラ駅から当時の町の中心タシュハン広場をむすぶ「駅前通り」であった（図2）。急ごしらえの都市儀礼の空間となった駅前通りには、独立戦争の勝利後、のちに通りの両側には国会議事堂や迎賓館など国家施設が建設されてなし崩し的に首都の目抜き通りへと変貌していったのである。



図2 旧タシュハン広場の戦勝モニュメント

ところが 1933 年の共和国建国 10 周年記念式典に至ると、式典は大規模化したため、議事堂のバルコニーからアタテュルク以下の首脳陣がパレードを眺めるという素朴な手法はとられなくなる(図 3)。当時の記録映像からはアンカラ駅南側の空き地で、首脳陣臨席のもとパレードがおこなわれていたことが明らかとなった。同時代のドイツやイタリアなど権威主義国家では巨大スタジアムでの大規模集会在頻繁に開催されており、その影響を受けてか 1936 年にはイタリア人建築家の手になるスタジアムがアンカラ駅北側に完成する。以降ここは様々な祝祭や式典が開催される国家的ページェントの場として用いられるようになった。

だが皮肉なことに、ムスタファ・ケマルのため最期の儀礼である 1938 年のアンカラでの葬列

は、駅から駅通りを通過して国会議事堂前に至ってその前に棺を安置するという、往事を彷彿とさせるものだった。市内を棺が巡行する葬儀次第は、1919 年のアンカラ入市式に近いものであり、1920 年代に成立した国会議事堂前の広場を都市儀礼の中心とする手法がここに至って再び採用されたことは興味深い事実である。

4. オスマン建築史・都市史の紹介

山川出版社『歴史と地理』に掲載された拙稿「オスマン建築史・都市史」は、一般に最新の研究事情を紹介するものである。オスマン朝は 6 世紀以上に渡ってユーラシア世界に割拠した巨大国家であり、近年日本においても教育・研究面でその重要性は周知されるようになってきている。文化面でも帝都イスタンブールには高校の世界史資料集でも紹



図 3 大国民議会第二議事堂

介されるようなスレイマニエ・モスク複合体が建設されるなど、特筆すべき発展をみた。だが政治・経済史の分厚い研究成果の共有が進む一方で、オスマン朝の建築・都市文化が日本において十分に知られているとは言いがたいため、ここでの紹介はその第一歩といえるものである。

まずオスマン領に広く見られたモスク・隊商宿・マドラサ・宮殿などの建築類型を紹介し、その中からとくにモスクおよび宮殿の解説をおこなった。中央集権国家オスマン朝では、主要な建設活動は国家の統制・指導下にあり、モスク建設では施主の社会階層に応じて使用することのできる材料や装飾の種類、平面形態が仔細に定められていたことを述べた。一方の宮殿建築では、15世紀後半にイスタンブルにおいてトプカプ宮殿が主宮殿となっており、これがそれ以前の様式を踏襲したものだったことを拙著『オスマン朝宮殿の建築史』の内容を踏まえて解説した。旧都エディルネにあったエディルネ旧宮殿は、1402年アンカラの敗戦後の国家再建期に、君主とイエニチェリ軍団との定期的な謁見儀礼の場として儀礼用中庭を完成させて、後にいたるまでのオスマン宮廷儀礼

とその空間構成の礎を築いたのである。

都市史研究についてはワクフなど多様な社会制度が都市空間に張り巡らされていたこと、また皇子の割礼式や金曜礼拝など、様々な機会に王朝儀礼がイスタンブルにおいて開催されており、帝都をはじめとするオスマン諸都市の多面性を解説した。

参考文献

川本智史「船が買いたい！ 前近代イスタンブルと海上交通」都市史研究 6、pp. 74-83、2019。

川本智史「研究フォーラム トルコ建築史・都市史」歴史と地理 世界史の研究 728(261)、pp. 51-54、2019/11。

川本智史「国父のページェントームスタファ・ケマルと共和国初期アンカラの儀礼空間」、小笠原弘幸編著『トルコ共和国 国民の創成とその変容—アタテュルクとエルドアンのはざまで』九州大学出版会、pp. 97-124、2019。

川本智史「他王朝による征服：オスマン朝とイスタンブルの復興」「都市の危機と再生」研究会編『危機の都市史：災害・人口減少と都市・建築』吉川弘文館、pp. 84-105、2019。

Khiva: An Islamic City

塩谷哲史

筑波大学人文社会系

Historically and geographically, Central Asia can be broadly divided into the northern steppe regions populated with nomadic people, and the southern oases regions populated with sedentary people amidst the vast arid desert. The oases are developed mainly in the basin of the large rivers, such as the Amu, the Syr, the Zarakhsan and others. I would like to consider here the example of Khiva, which is located in the Khwarazm region of the lower basin of the Amu River.

Khiva's origins are said to date back to the first century A.D., but it was in the seventeenth century that it became the central city of Khwarazm. The Uzbek nomads who conquered Khwarazm at the beginning of the sixteenth century founded the so-called 'Khanate of Khiva', centred initially around the city of Urgench in the middle of the Khwarazm oasis. Along with the Amu River's change of course in the 1570s–1580s, Urgench fell to ruin and its residents were forced to move to the north and south of Khwarazm, and Khiva thus grew to become the central city. The city that remains

today, comprised of Ichan Kala, the fortified 'inner castle' designated as a World Heritage Site in 1990, and Dishan Kala, the 'outer castle' surrounding it, first began to take shape in the latter half of the eighteenth century.

In outward appearance, Khiva possesses many of the functions of an Islamic city. This can be defined as 'a city subdivided into city blocks, possessing a bazaar and a place of prayers on Fridays at noon, typified by a mosque' (Sanada 1986: 110–111).

In 1842, a mission from Russia was sent to Khiva, together with the Khivan envoy that was returning from Russia. This Russian mission (led by G.I. Danilevskii) left behind a wealth of maps and written accounts that describe the city as it was before the Russian invasion of 1873, when the Khanate of Khiva became a Russian protectorate. Let us take a look at the map included with the travel diary of Basiner, who was a member of the Russian mission (Fig. 1).

In the inner castle, amidst the city blocks¹⁾

1 At the Institute of Oriental Manuscripts of the Russian Academy of Sciences in Saint Petersburg, there is a list of city blocks and villages that existed within the Khanate. According to this list, the total number of city blocks and villages

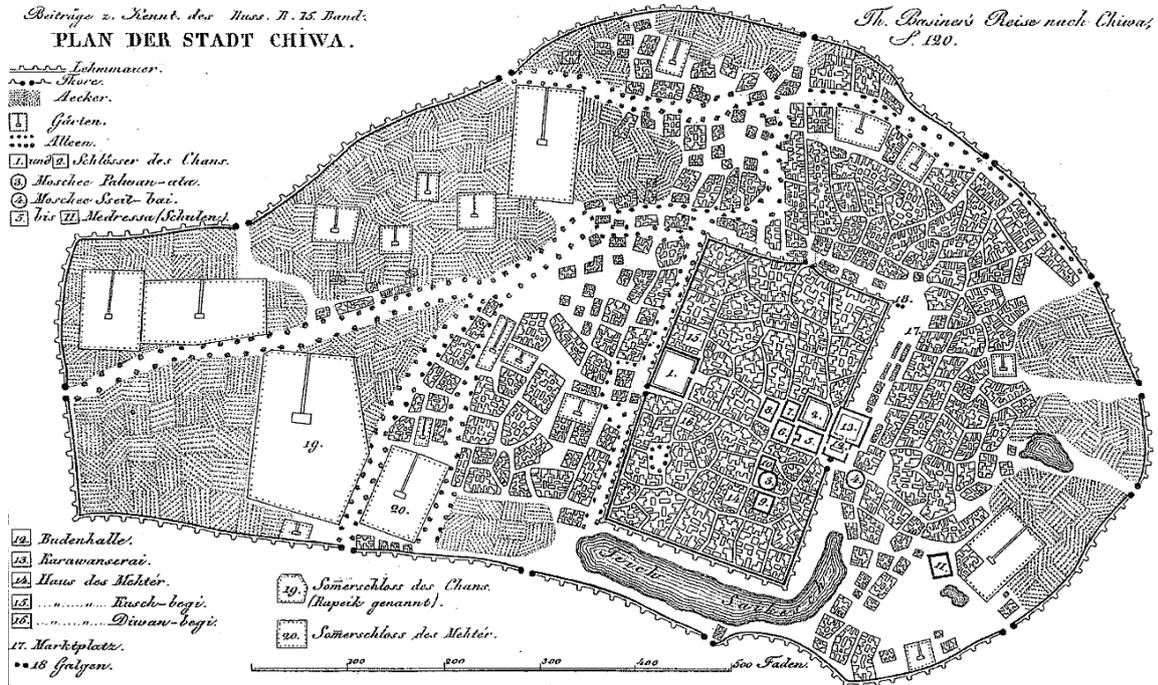


Fig. 1 Map of the city, Khiva (Basiner 1969: 120-121)

divided by winding streets, were the Khan's palace, the residences of the ministers (*mehtar* and *qoshbegi*, equivalent ministries to viziers at the court of the khans of Khiva) and high officials (*divanbegi*, etc.), mosques, and madrasas. Next to the east gate of the inner castle (now called Pahlavan Darvaza, also known at the time as Abdal Baba gate, or Gul Darvaza [flower gate]) was a roofed bazaar, a caravansary adjacent to that, and another bazaar extending along the

walls on the north side. In the outer castle were the summer residences of the Khan and high officials, *baghs* ('gardens' in Persian; refers to residences surrounded with walls, furnished with ponds, houses, vegetable gardens and fruit orchards), and cultivated lands. According to Danilevskii, the population of the inner town was approximately 4,000 people, consisting mainly of high court officials, 'clergy' (most likely '*ulamas*, and teachers and students of the madrasa), and

that drew water from Pahlavan Ata was 203, 130 of which were in Khiva and the surrounding areas (Arkhiv vostokovedov, Institut vostochnykh rukopisei Rossiiskoi akademii nauk, f. 33, op. 1, d. 11, ll. 24-33ob.). In the Soviet period, in a population census conducted in 1928 by the Uzbek Soviet Socialist Republic, the population of the district (*raion*) of Khiva was divided into people living in the city (*gorod*), and people living in the surrounding areas. The city population was 21,270, while in the surrounding areas, there were 181 residential districts (*naseennye punkty*), with a total of 7398 households that had farmland (*Spisok*: 3, 16-19).

merchants. The population consisted mainly of the Turkic language-speaking Sarts and Uzbeks and the Persian-speaking ‘Iranians’ (people who had voluntarily migrated or were brought by force from various regions such as Khorasan and Gorgan under the Qajar dynasty). Also, according to Danilevskii, in the inner castle, there were 2 Khan’s palaces, 17 mosques, 22 madrasas, a caravansary, and approximately 260 shops in the roofed bazaar (Danilevskii 1851: 111–114).

The walls of the inner castle have now been restored to their original state. It is clear from Basiner’s map that the outer castle was also enclosed by walls. Basiner’s map appears to show the traditional central Asian Islamic city of Khiva, but we can see from the chronicles written during that period by the royal court of Khiva, and from interview records from the time of the 1873 Russian military invasion, that the walls of the outer castle were newly built. It was in fact in 1842 when the Russian mission was in Khiva, that the walls were built in preparation for an invasion from Russia or elsewhere (Kun: 51ob.–52). According to the chronicles, the ruler of Khiva at the time, Allah Kuli Khan (reigned 1825–1842), decided to ‘build a large fortress and a high wall around Khiva’. He gathered together craftsmen and labourers, and had construction work started on the eighth day of the month of Rajab, 1258 in the Islamic calendar (15 August, 1842 in the Gregorian calendar) (Muhammad Riza Mirab Agahi: 741ob.).

This was 3 months before Danilevskii’s mission arrived in Khiva. It is often said that Khiva retains the flavour of a traditional central Asian city. This, however, does not mean that the city has remained unchanged since ancient times. Rather, it means that the people who migrated through the oasis, amidst the change of course of the Amu Darya river, exposed to floods and other environmental changes, reached their current location in the latter half of the eighteenth century, and the effort that they put into developing the city can still be felt.

References

- Basiner, von Th. F. J. 1969. *Naturwissenschaftliche Reise durch die Kirgisiensteppe nach Chiwa*, Berlin: Biblio Verlag.
- Danilevskii, G. I. 1851. “Opisanie Khivinskogo khanstva,” *Zapiski Imperatorskogo Russkogo geograficheskogo obshchestva*, V, pp. 62–139.
- Kun, A. L. “Ocherk istorii zaseleniia Khivinskogo khanstva s drevnikh vremen, sostav sovremennogo naseleniia khanstva, administratsiia i goroda,” *Arkhiv vostokovedov*, Institut vostochnykh rukopisei Rossiiskoi akademii nauk, f. 33, op. 1, d. 13.
- Muhammad Riza Mirab Agahi, *Riyaz al-dawla*, Istanbul University Library, Turkic Manuscripts, N. 82, ff. 524b–758a.
- Sanada, A. 1986. “Toshi, nōson, yūboku (Cities, villages and nomadism),” Sato, T. (ed.), *Isuramu: Shakai no shisutemu*, Tokyo: Chikuma shobo, pp. 108–148.
- Spisok naseleennykh punktov Uzbekskoi SSR 1928 goda*, Part I, *Okrug Khorezm*, Samarkand: TsSU UzSSR, 1929.

アンタルヤ旧市街カレイチ (Kaleiçi) における 文化遺産保護をめぐる動き

田中英資

福岡女学院大学人文学部

はじめに

西アジアはその長い歴史のなかでさまざまな文化が興亡してきた。筆者の場合、特にトルコの国土の大部分を構成するアナトリアに残る過去の文化の痕跡が、どのようにトルコ国民国家意識と関係づけられ、トルコ国民の「遺産」とされてきたかについての研究を続けてきた（例えば、田中 2017, 2019）。また、近年ではアナトリアの考古遺跡と、その周辺に暮らす人々との関係性に注目し、トルコにおける文化遺産の保護のあり方とその社会的な影響についての研究にも取り組んでいる（Tanaka 2018）。これらの研究を通して、トルコ各地の遺跡を踏査するなかで、考古遺跡と現代の人々の生活の関わりの多様性にも気づかされるようになった。

現代の都市の多くが人間の集住の長い歴史の積み重なりを土台に成り立っていると考えれば、アナトリアは必ずしも特別な場所とはいえないだろう。ただ、トルコで出会った人々と話していて筆者の研究にかかわることが話題になると、「トルコはどこを掘っても何か出てくるよ」というような話をしてくれる人が多い。実際、掘れば何か出てくる状況だからこそ、国際的な古美術品市場で

の売買を目的とした遺跡の盗掘や文化遺産の国外流出がトルコにおいて文化遺産をめぐる深刻な問題にもつながっていく（参考 田中 2017）。また、トルコではダムや道路といった開発事業と遺跡保護をめぐる問題が注目を集めることもしばしばである¹⁾。トルコにおいて、都市部であれ、地方の農村であれ、そこに残る遺跡や歴史的建造物はその周辺の人々の生活のあり方に深く関わってくる存在といえるだろう。

後述するとおり、トルコでは国内に見つかるそうした遺跡や歴史的建造物は国有の文化遺産とされ、保護の対象となっている。保護された文化遺産を観光資源化して活用する動きも含め、文化遺産とされた遺跡とその土地利用のあり方は、文化遺産保護行政によって制約がつけられているとみてよい。本稿では、こうしたトルコの状況を背景に、文化遺産が人々の生活や都市の変化とどのような絡み合いをみせているか、現在調査を進めているトルコ地中海地方の中心都市であるアンタルヤの旧市街カレイチ (Kaleiçi) を事例に報告する。なお、筆者はこれまで、地中海地域での現地調査の拠点として数回カレイチに滞在したことがある。そして、その際に見聞きしたことがカレイ

1 例えば、ダム建設によるハサンケイフの水没をめぐる問題など（CNN 2019）。

チにおける文化遺産をめぐる動きに関心を持ったきっかけである。ただし、カレイチ自体を調査対象とするのは、2019年12月に実施した現地調査が初めてである。そのため、本報告は主として2019年12月の調査で得られたデータを基にしているが、本稿で使用している写真のなかには、2019年12月以前にアンタルヤに滞在していた際に撮影した写真も含まれる。

1. トルコにおける文化遺産保護制度と人々の暮らしの関わり

トルコにおいては、基本的に国内にみつかると古遺跡やそこから出土する遺物、歴史的建造物は、文化遺産、自然遺産に関する第2863法（*Kültür ve Tabiat Varlıklarını Koruma Kanunu No. 2863*）によって国有財産とされ、トルコ共和国文化観光省内の文化遺産及び博物館総局（*Kültür Varlıkları ve Müzeler Genel Müdürlüğü*）による中央集権的な保全・管理がおこなわれている（Tanaka 2018: 76-77）。ただし、ワクフの寄進によって建設されたモスクやメドレセ、都市部の歴史的建造物は、ワクフ総局（*Vakıflar Genel Müdürlüğü*）が管轄している。また、オスマン帝国期に建てられたイスタンブールの宮殿は、文化観光省の管轄ではなく、大統領府内の国家宮殿部（*Milli Saraylar*）の管轄である。このように、トルコに残る歴史的な建造物すべてが文化観光省に管轄されているわけではない。中央政府による保全・管理がおこなわれるなかで対象によっては管轄の部署が異なるという意味で、そのあり方は中央集権的でありつつも、分節している（Bonini Baraldi et al. 2013: 730-732; Tanaka 2018: 77-78）。

一方、考古遺跡の保存・管理や修復・復元については、考古学や都市計画学、建築学などの専門

家によって構成される国の諮問機関である「保存委員会（*Koruma Kurulu*）」がそのあり方を決定する（Tanaka 2018: 78-80）。保存委員会は、対象となる遺跡の保存範囲（*sit alanı*）を定め、それに等級をつけて保護すべき遺跡の範囲とその土地利用のあり方を制限する。遺跡周辺に暮らす人々にとって、保存委員会がどのように保存区域を決めるかによって日常生活に大きな影響を受けることになる。このことは翻って、考古遺跡がどのような形で存在するかということが、その周辺に暮らす人々の生活に影響を与えていることを意味する。

トルコにおけるこうした文化遺産の保全・管理のあり方をふまえて、遺跡とその周辺に暮らす人々との関係を遺跡と人々の生活の場の位置関係から捉えようと、厳密な場合分けは難しいが、いくつかのパターンがみえてくる。まず、市町村の行政区域の中に遺跡が存在するといっても、住民の居住エリアと遺跡の主要な遺構が残っている部分が遠く離れている場合が考えられる。山中に残る中世ビザンツ時代の教会、修道院跡やエフェソス、プリエネといった都市遺跡のように、居住エリアからかなり離れたところに位置している遺跡は多い（図1）。また、かつての都市の遺構が残る丘のふもとに現代のクヌクの町並みがひろがっているクサントスのように、居住エリアと遺跡が隣接しているといつてよいような近さにある場合も多い（図2）。さらに、ヘラクレイアやアイザノイ、スイデのように、遺跡の上に現代の村があり、遺構の一部が住居の一部になっていることもある。イスタンブールやイズミルなど、古代からの非常に長い歴史をもつトルコの主要都市も、まさにこの遺跡の上に人々が暮らしているケースに当てはまるだろう（図3）。本稿で事例として取り上げる



図1 山中に残るビザンツ時代の
岩窟教会の遺構



図2 クサントス遺跡のふもと
にひろがるクヌクの町並み



図3 イスタンプルの旧市街

アンタルヤ旧市街もそうした古代からの遺構の積み重なりの上に発展した都市である。

2. アンタルヤ旧市街カレイチの歴史的景観保存と観光

トルコ地中海地方の中心都市アンタルヤの名前は、前2世紀のペルガモン王国の王アッタロス2世に由来するとされている（図4）。ペルガモン王国時代からローマ帝国の時代にかけて、重要な貿易港かつ軍港として栄えたという（Orbaşlı 2000: 123）。その後、アラブ人の侵入などで衰退した時期もあるが、13世紀にはセルジューク朝の支配下にはいり、再び港湾都市として発展した。15世紀までにオスマン朝の支配下となり、20世紀初めまではトルコ系の他、ギリシャ系、アルメニア系の住民、少数のユダヤ系住民が暮らす多民族的な港湾都市であった。しかし、第一次世界大戦と、その後のトルコ共和国独立の過程で、キリスト教徒やユダヤ系住民は退去し、ギリシャからトルコ系イスラム教徒が流入している（Orbaşlı 2000: 123）。

アンタルヤの古代以来の港は、険しい崖に囲まれた入り江につくられた。古代からの港を入り江を囲む崖の高台とそこに上っていく斜面に都市が形成され、現在はカレイチと呼ばれる旧市街地区となっている。カレイチとは、「城（kale）の中（içi）」を意味し、一帯が二重の城壁に囲まれていたことに由来する。17世紀にこの街を訪れたエヴィリヤ・チェレビは、アンタルヤの街は80の塔を持つ城壁に囲まれていると記しているが、20世紀に入ってその城壁の大部分は取り壊されてしまった（Muratpaşa Belediyesi 2015: 16）。また、1960年代以降、アンタルヤは急速な経済発展を遂げてきた。その成長は21世紀に入っても続い

ており、トルコ有数の大都市に成長している。特に、現代のアンタルヤは地中海地方の観光産業のハブとして機能している（Orbaşlı 2000: 123）。周辺にケメル、スイデ、アランヤといった保養地が大きく発展しているほか、そうした保養地を目指す観光客向けにアンタルヤ国際空港はヨーロッパ、ロシアの各都市と結ばれている。

カレイチ自体もアンタルヤ市内観光の見所である。かつての城壁の痕跡、ハドリアヌス門（図5）やフドゥルルクの塔（図6）といったローマ時代の遺跡のほか、セルジューク朝期からオスマン朝期にかけて建てられたモスクや霊廟、急な坂道の多い狭い街路に建ち並ぶ伝統家屋も数多く残っており、それらがガイドブックに紹介されている。

このように、古代からの歴史的痕跡が数多く残るカレイチでは、1970年代からそれらの修復、保全、整備が進められてきた。これは、トルコにおける歴史的景観保存が計画的な進められた初期の事例のひとつとされている（Orbaşlı 2000: 124）。カレイチは、1972年に考古学的保存区域に指定されている。現在、カレイチは、保存委員会の許可によって建設工事が認められる第3級考古学的保存区域（*III. Derece Arkeolojik Sit Alanı*）とされている（Tanaka 2018: 79）。また、1973年から1978年にかけて、カレイチ内の歴史的建造物の調査がおこなわれ、保全が必要な登録建造物（*tescilli binası*）がリスト化されている（Urfalıoğlu 2010: 5）。登録建造物に関わる工事については、保存委員会によるさらに厳しい審査を受け、工事の許可を得る必要がある。

行政区分としてのカレイチは、アンタルヤ広域市（*Antalya Büyükşehir Belediyesi*）を構成するムラトパシャ区（*Muratpaşa Belediyesi*）の一部である。また、旧市街北西部から時計回りに南側にむ



図4 アンタルヤ旧市街カレイチ
(2019年12月撮影)



図5 ハドリアヌス門
(2019年5月撮影)



図6 フドゥルルクの塔
(2019年12月撮影)

かって、セルチュク街区 (*Selçuk Mahallesi*)、トウズチュラル街区 (*Tuzcular Mahallesi*)、バルバロス街区 (*Barbaros Mahallesi*)、クリンチュアルスラン街区 (*Kılınçarslan Mahallesi*) と4つの街区 (*Mahalle*) に分かれている。2019年12月の現地調査では、バルバロス街区のハドリヤヌス門からクルンチュアルスラン街区のフドウルルクの塔までを一直線に結ぶヘサプチュ通り (*Hesapçı Sokak*) の、特にクルンチュアルスラン街区側の界隈を中心に聞き取り調査をおこなった。この界隈に注目したのは、伝統家屋を改装したプチホテルや商店などが目立つことや、筆者がアンタルヤを訪れるようになった2010年代以降、歴史的家屋の修復を含めた観光開発が進むなかで、町並みに変化が表れているという印象を持ったからである。また、クルンチュアルスラン街区は、次節でみていくケシッキ・ミナーレがある。さらに、クルンチュアルスラン街区は、トルコ共和国の独立まで非ムスリムの住民が多く住んでいたこともあり、キリスト教徒の退去後にモスクに改装されたかつての教会など、彼らの残した歴史的建造物が残っている点でも興味深く思われた。今後もこの界隈を中心に調査する予定である。

アンタルヤにおける観光産業の発展は1950年代末から始まったとされる (Çimrin 2018b: 7)。カレイチでは、1970年代からトルコ政府によって観光を見据えた史跡や歴史的景観整備が始まった (Orbaşlı 2000: 124)。1980年代半ばには、古代から使われてきた港が修復整備されている (Orbaşlı 2000: 124)。一方、聞き取り調査によると、クルンチュアルスラン街区のヘサプチュ通り界隈では、1990年代の初め頃まで、バックパッカー

向けの安宿が数軒あったにすぎなかった。また、チンゲネ (*Çingene*) の人々²⁾など低収入の人々が多く暮らしていた。さらに、誰も住まなくなり、廃墟化した住宅では薬物の売買や売春など、犯罪の温床となっていたという。しかし、ムラトパシャ区によって、この界隈の観光客向けの整備が2000年代になって始まり、ヘサプチュ通りなどのカレイチ内の通りは、アスファルトや砂利道から石畳に置き換えられていった (図7)。それと合わせて売春や薬物売買などの取り締まりも強化されたことで、治安の改善も進んだという。こうした動きと並行して、この界隈の家屋がホテルやレストランへの転用を目的として買われるようになり、そこに暮らしていた低収入の人々がカレイチの外に次々と引っ越すようになっていったのである。界隈に残っていた歴史的建造物では、転用のための修復が進んだほか、新築される建物も、外観は伝統家屋を意識したデザインで建てられるようになっていった (図8)。このように、2000年代以降のカレイチの観光開発はジェントリフィケーションを伴いながら進んでいったと考えられる。

一方、観光産業は、グローバルな経済情勢や地政学的なリスクなどに左右されるが強い。そして、観光地においても、そこに建ち並ぶ飲食店や商店の間では、流行り廃りがおこり、町並みの雰囲気は常に変化していく。トルコでは、2016年から2018年にかけて、シリア内戦の長期化、イスタンブールやアンカラといった主要都市での大規模なテロ事件の発生による風評被害により、トルコを訪れる外国人観光客の数が激減する状況となった。カレイチにおいてもその影響は顕著であった

2 ロマの人々のことをトルコではチンゲネと呼ぶ。



図7 カレイチの石畳の通り（2019年12月撮影）



図8 修復が進められていた伝統家屋（2012年8月撮影）

という。しかしその一方で、ヘサプチュ通りのクルンチュアルスラン街区の界隈では、この時期にそれまで絨毯屋など観光客向けの土産物店の多くが地元の人々も利用するようなバーや居酒屋へと

くから替える動きも進んでいた（図9）³⁾。結果として、アンタルヤに暮らす若者が、そうした居酒屋やバーを目当てにカレイチを訪れるようになっていった。今回の調査でも、特に週末の夕方以降、

3 確認する必要があるが、ヘサプチュ通りの界隈で絨毯屋を営業していた店主が自分の店を作り替えたり、周辺の商店を買収して居酒屋を始めているという話も聞いている。



図9 絨毯屋が軒を連ねていたかつてのヘサプチュ通り（2012年8月撮影）



図10 居酒屋とバーが軒を連ねる現在のヘサプチュ通り（2019年12月撮影）

ヘサプチュ通りのバーや居酒屋は常に若者を中心とした客でにぎわっていた（図10）。

一方、ここまで述べてきた外国人観光客向けの絨毯屋が軒を連ねていたヘサプチュ通りの境界が地元の若者向けの居酒屋街に変わっていったちょうど同じ時期に、そうした流れとは異なると思われる、文化遺産をめぐる動きがこの境界では起

きている。それは、廃墟化していたモスクの再建事業である。次節ではこの再建事業について報告する。

3. ケシッキ・ミナーレのモスクとしての再建

筆者がアンタルヤを初めて訪れたのは、2002



図 11 再建工事に入る直前のケシッキ・ミナーレ（2017 年 8 月撮影）

年である。その当時から、ヘサプチュ通り沿いの日本語では「折れた尖塔」を意味するケシッキ・ミナーレ (*Kesik Minare*) と呼ばれる廃墟は、ハドリアヌス門などと並んで、カレイチのランドマークのひとつとされてきた (図 11)。歴史的には、この場所はローマ時代のアゴラの一部であり、円形の神殿が建てられていたという。5 世紀には神殿が破却され、その上に教会が建てられた (Çimrin 2018a: 286)。考古学的な調査によると、13 世紀にセルジューク朝の支配下に入った後も、教会として使われていた痕跡が残っている (Muratpaşa Belediyesi 2015: 47)。しかし、アンタルヤがオスマン朝の支配下に入り、16 世紀初頭にはバヤジット 2 世の息子でこの地域の太守となったコルクット王子の命によってモスクに改装され、尖塔が付け加えられた。このことから「コルクットのモスク (*Korkut Camii*)」と呼ばれるようになった。また、金曜礼拝がおこなわれていたことから、「金曜礼拝のモスク (*Cumanın Cami*)」などとも呼ばれていたようである (Çimrin 2018a:

289)。しかし、1895 年にカレイチで起きた大火災により、「コルクットのモスク」は焼失し、廃墟の状態となった (Çimrin 2018a: 289)。特に、尖塔の屋根が欠けた状態になったことから、カレイチの人々は、単に「ケシッキ・ミナーレ」あるいは「ケシッキ・ミナーレ・モスク (*Kesik Minare Camii*)」あるいはと呼ぶようになったという (Çimrin 2018a: 289)。ケシッキ・ミナーレでは、歴史的景観保全計画が進められていた 1974 年に、倒壊を防ぐための修復がおこなわれたほか、2007 年から 2008 年にかけても発掘調査がおこなわれている (Çimrin 2018a: 290)。廃墟の周囲は柵で囲まれ、入り口は施錠されていたため、一般人が内部に立ち入ることはできなかったが、柵越しに廃墟を眺めることは可能で、教会時代の柱の装飾が残っていることなどを視認することができていた (図 12)。また、上述の 2015 年頃からヘサプチュ通りの界隈で進んでいた土産物店街から居酒屋街への転換は、まさにこのケシッキ・ミナーレの廃墟の周辺で起こっていた。ケシッキ・ミナーレの



図 12 ケシッキ・ミナーレに残る教会時代の装飾（2017年8月撮影）



図 13 修復中の「折れた」尖塔（2019年5月撮影）

周辺にも酒瓶を片手に深夜まで語り合う若者の集団もよく見かけていた。

そこで持ち上がったのが、2017年に始まるモスクとしての再建事業である。2000年代の後半から、ケシッキ・ミナーレの廃墟を野外博物館として公開する計画や、モスクとして再建する話が持ち上がったことはあったようだ（Çimrin 2018a:

290）。しかし、これらの動きは、いったんは頓挫している。最終的に2017年にモスクとしての修復をアンタルヤ県が決定し、同年7月からワクフ総局アンタルヤ支局による再建工事が始まった（図13）。なお、再建にあたり、ケシッキ・ミナーレについてワクフ総局は「コルクット王子のモスク（Şehzade Korkut Camii）」という名称を使用す



図 14 修復が完了した尖塔（2019年12月撮影）



図 15 ワクフ総局による再建工事の概要説明

るようになっている。廃墟の周囲に高い工事壁が作られたことで、中がほとんど見えない状況となった。2019年5月7日には、尖塔の屋根の部分の修復が終わり、もはや「折れた」状態ではなくなったことが報道された(Çınar 2019)⁴⁾。12月

の現地調査の時点では、尖塔部分のカバーはすべて外された状態になっていた(図14)。また、ワクフ総局による再建工事の概要説明が、完成予想図なども添えて掲示されていた(図15)。モスクの再建は、19世紀末に出版されたオーストリア

4 筆者は、別の調査で2019年5月初めにカレイチに滞在しており、図13のように工事のカバーがつけられた状態の尖塔の写真を撮影している。筆者がアンタルヤを離れた直後の5月7日に、屋根の部分のカバーが外されたことが報道された。

のポーランド系貴族カール・ランクロンスキの旅記に描かれた図面に基づいて進められているという。また、ローマの神殿、教会、モスク、教会、モスクという変遷をたどった歴史的意義から、そうした歴史を展示する部分も準備され、「博物館モスク (*Müze cami*)」として公開される予定である (Çınar 2019)。

なお、2020年のラマザンに公開を間に合わせる予定で工事は進められてきたが、現地調査において工事関係者に話を聞いたところ、完成は2021年にずれ込む可能性が高いという。ケシッキ・ミナーレの廃墟はモスクとしてカテゴリ化され、ワクフ総局の管轄である。しかし、カレイチ全域は上述の通り、第3級考古学的保存区域に指定されている。そのため、再建工事は保存委員会の承認とともに進められている。特に、工事の進捗とともに保存委員会、工事関係者、ワクフ総局関係者を交えた会合が随時開かれており、そこでの決定に基づいて工事が進められているという。こうした事情で工事は想定よりもゆっくり進んでおり、完成が遅れつつあると考えられる。

いずれにせよ、再建事業が完了すれば、居酒屋やバーから目と鼻の先といった距離でエザーンが鳴り響くことになる。トルコでは通常、居酒屋やバーはモスクからは一定の距離（100 m程度）を置いて営業許可が出されることになっているという。ただし、聞き取り調査をする限りでは、ヘサプチュ通りの場合、モスクが完成したからといって、すでに営業許可が出されているこれらの居酒屋やバーが営業停止になることはないとのことだった。しかし、モスクの再建事業が完了しないことにはこの境界の雰囲気はどのような変化が起こるのか、あるいは起こらないのかといったことは不透明である。「博物館モスク」として異教の

信仰の場であった過去の歴史をどのように展示するのかということに加え、モスクの再建が完了することによる周辺の境界への影響についても注目していきたい。

4. 今後の検討課題 —結びにかえて—

ここまで、現在研究を進めているアンタルヤ旧市街カレイチの歴史的景観保存と観光開発の動向、及びケシッキ・ミナーレのモスクの再建事業についてみてきた。今後、調査研究を継続するにあたって検討していきたい課題は、文化遺産と市場経済の結びつき、イスラームと文化遺産、文化遺産から読み解く都市における複数アクター間のポリティクスの3点である。

まず、カレイチにおける歴史的景観保存は、1970年代以降観光産業と密接に結びついてきたといえる。特に近年では歴史的建造物の修復は、ホテルや飲食店などへの転用を目的に進められている。このことは逆に、カレイチにおける観光産業は、第3等級考古学的保存区域に指定されていることによる「制約」を前提としなければならないと考えることもできる。そうした「制約」を含め、遺跡の存在や文化遺産という価値がどのようにカレイチにおける観光産業のあり方やその背景にある市場経済の論理と結びついているのか、文化遺産と市場経済に関する人類学的な議論も参照しながら考えたい（例えば、Franquesca 2013）。

次に、近年のトルコでは、親イスラム主義的な公正発展党 (*Adalet ve Kalkınma Partisi*) が長期にわたって政権を握るなかで、文化遺産に関してもイスラーム的な過去・歴史が重視される傾向があると指摘されるようになっている (Aykaç 2019a)。例として、イスタンブールのアヤソフィアのように博物館として「世俗化」された歴史的建

造物を再びモスクとしても使用しようとする動きがある（田中 2019: 162）。ただし、ケシッキ・ミナーレのモスクとしての再建は、「世俗的」な博物館という役割を与えられてきた歴史的建造物をモスクに転用しているわけではないことにも注意を払う必要がある。ケシッキ・ミナーレを管轄してきたワクフ総局の立場からすれば、そもそもこの廃墟はモスクとカテゴライズされているからである。その一方で、ケシッキ・ミナーレが文化遺産保存区域であるカレイチに存在したことで、文化遺産という価値が、再建される建造物の機能や使い道を左右しているようにも思われる。特に、この廃墟を博物館とモスクが共存する形で修復するという「博物館モスク」というあり方は注目に値する。モスクとしての再建が進められることになった社会的な文脈をより詳細に押さえていくとともに、再建工事完了後の動きも追っていくことで、宗教と文化遺産をめぐる価値のポリティクスを批判的にみていく必要があるだろう。

最後に、上記のふたつの問題にも関連するが、カレイチの状況からみえてくることは、文化遺産としての遺跡の保護はその担い手たちの利害関心に左右されるだけではないということだ。遺跡から文化遺産保護をめぐる動きをみていくと、遺跡が存在することによって保全・管理のあり方が決まり、土地利用の制約が生まれ、現代の人々の生活に直接的な影響を与えていると捉えることもできる。ケシッキ・ミナーレの再建は、土産物屋街から居酒屋街へと変化したサブチュ通りの町並みに今後どのような影響を与えるのだろうか。カレイチにおける文化遺産をめぐる動向を調査し、検証していく作業を継続することを通して、都市空間における諸集団の思惑をつないだり、切断したりする存在として文化遺産が果たしている役割に

ついて考察を深めたい。

参考文献

- Aykaç, P. 2019a Musealisation as a strategy for the reconstruction of an idealised Ottoman past: Istanbul's Sultanahmet district as a 'museum-quarter'. *International Journal of Heritage Studies* 25(2), pp. 160–177.
- Bonini Baraldi, S., Shoup, D. and Zan, L. 2013 Understanding cultural heritage in Turkey: institutional context and organizational issues. *International Journal of Heritage Studies* 19(7), pp. 728–748.
- CNN 2019「ダム建設で沈む古代都市、10月には立ち入り禁止に トルコ」 8月30日 <https://www.cnn.co.jp/travel/35141898.html> (2020 閲覧)
- Çimrin, H. 2018a *Antalya Kaleiçi: Tarih, Gözlem, ve Anılar*. Antalya: ATSO Eğitim Araştırma ve Kültür Vakfı Yayınları.
- Çimrin, H. 2018b *Antalya Turizminde İlk Adımlar....* Antalya: ATSO Eğitim Araştırma ve Kültür Vakfı Yayınları.
- Çınar, M. 2019 Artık 'kesik minare' değil. *CNN Türk Antalya Haberleri*, 7 May <https://www.cnnturk.com/yerel-haberler/antalya/artik-kesik-minare-degil-990016> (2019年10月30日閲覧)
- Franquesca, J. 2013 On Keeping and Selling: The Political Economy of Heritage Making in Contemporary Spain. *Current Anthropology* 54(3), pp.346–369.
- Muratpaşa Belediyesi 2015 *Kaleiçi Old Town Guide*. Antalya: Muratpaşa Belediyesi.
- Orbaşlı, A. 2000 *Tourists in Historic Towns: Urban Conservation and Heritage Management*. London and New York: Taylor & Francis.
- 田中英資 2019「国民国家トルコとアナトリアの諸文明：イスラム化以前の遺跡をめぐる文化政策」小笠原弘幸（編）『トルコ共和国 国民の創成とその変容：アタテュルクとエルドアンのはざまで』（九州大学出版会）151–173 頁

Tanaka, E. 2018 Archaeology has transformed “stones” into “heritage”: the production of a heritage site through interactions among archaeology, tourism, and local communities in Turkey. *História: Questões & Debates* 66(1), pp.71–94.

The Economist 2013 Erasing the Christian Past: A Fine Byzantine Church in Turkey Has Been Converted into a Mosque, 27 July, <https://www.economist.com/europe/2013/07/27/erasing-the-christian-past> (2019 年 10 月 31 日閲覧)

TRT Haber 2019 ‘Cumhurbaşkanı Erdoğan’dan Ayasofya mesajı’, *Gündem*, 26 March <https://www.trthaber.com/haber/gundem/cumhurbaskani-erdogandan-ayasofya-mesaji-409845.html> (2019 年 10 月 31 日閲覧)

Urfaloğlu, N. 2010 *Antalya Isparta Burdur Evlerinde Cephe Biçimleniş*. Antalya: Suna İnan Kıraç Akdeniz Medeniyetleri Araştırma Enstitüsü.

Fayçal Mokhtari 氏講演

"The Political and social change in Algeria before and after Arab spring"

(議事録)

渡邊祥子

日本貿易振興機構アジア経済研究所

日時：2019年12月14日(土) 15:00～17:00

場所：筑波大学茗荷谷キャンパス 558 講義室

出席者：松原康介(筑波大学)・渡邊祥子(アジア経済研究所)ほか全9名

議事：Fayçal Mokhtari 氏による報告“The Political and social change in Algeria before and after Arab spring”報告(1時間)

質疑応答(1時間)

Mokhtari 氏はまず、アルジェリアの経済政策を歴史的にさかのぼり、社会主義期(1962～1992年)と市場経済に向けた自由化の時代(1992年～)の二期に分けて解説した。社会主義期においては、

「産業化産業モデル」という特殊なモデルに基づき、重工業の発達から連鎖的に農業を含むすべての分野で近代化を進めるという計画が立てられたが、独立後のアルジェリアには熟練労働者が不在であったため、このモデルは失敗に終わった。さらに、歳入をオイルレントに依存し、国営企業と公共事業による計画経済をおこなうという産業構造や、助成金や公務員の雇用、住宅分配等の社会政策で国民の体制への支持を取り付けるという政治慣行が長期間続き、金融市場の欠如も伴って、油価下落時の赤字分を外債によって補いつづけたことで、80年代終盤にアルジェリアは経済危機を迎えた。

1992年以降、アルジェリアは構造調整プログラム(SAP)導入によって経済の立て直しを図るが、内戦による混乱もあって経済構造改革は進まず、2000年代の経済成長も、油価の上昇に由来するものでしかなかった。結局のところ、ブーテフリカ時代(1999～2019年)前半の繁栄は、油価の高止まりに由来するものであり、経済自由化を掲げつつも民間セクターの成長には見るものがなく、公共事業に依存



する産業構造は以前のままであり、公共事業の振興はむしろ腐敗の慣行を助長した。経済改革が進まなかったことにより、2014年夏以降に油価が下がると、アルジェリアは再び経済危機の局面を迎えることになった。

質疑においては、アルジェリアの経済政策について、1980年代前半の一時的な自由化政策のイ

ンパクトや、アルジェリアの現在の財政政策、炭化水素セクターの労働者育成や雇用の状況について講演者への質問が出た。また、アルジェリアの経済活動の多くの部分を占めるインフォーマルセクターの問題も話題になった。さらに、アルジェリアの政治経済状況に対する知識人の責任や役割について、広く議論が持たれた。

2019 年度に開催した研究会・シンポジウム・講演会

A01 計画研究 01 第 5 回研究会

日時：2019 年 5 月 11 日（土）14:00-

会場：筑波大学 東京キャンパス 文京校舎 556 ゼミ室

発表者：板橋 悠（筑波大学）

題目：「骨の化学分析から見る新石器化と都市化 —西アジアと東アジアの事例から—」

C01 計画研究 06 第 4 回研究会「2019 年第 1 回地中海アーバニズム研究会」

日時：2019 年 5 月 16 日（木）19:00-21:30

会場：龍谷大学 和顔館 4 階会議室 3

発表者：Jean-Francois Pinchon

題目：“Candilis and the holidays of the Greater number”

A02 計画研究 03 第 3 回研究会

日時：2019 年 5 月 19 日（日）16:00-17:30

会場：早稲田大学 文学部 戸山キャンパス 39 号館 6 階 第 7 会議室

発表者：馬場 匡浩（早稲田大学）

題目：「ヒエラコンポリスからみる古代エジプト都市」

C01 計画研究 06 第 5 回研究会「ギョウジ・バンショウヤを読む」

日時：2019 年 5 月 23 日（木）14:00-17:30

会場：筑波大学 東京キャンパス 文京校舎 119 講義室

プログラム：

松原康介（筑波大学）“Introduction”

Jean-Francois Pinchon “La fortune critique sporadique de Gyoji Banshoya”

渡邊祥子（日本貿易振興機構アジア経済研究所）“Commentaire et questions par Shoko Watanabe, une historienne de l'histoire coloniale du Maghreb”

C01 計画研究 06 第 6 回研究会

日時：2019 年 5 月 31 日（金）10:00 開始

会場：筑波大学 東京キャンパス 文京校舎 557 ゼミ室

プログラム：

谷口 陽子（筑波大学）「アギオス・ニキタス・スティリティス聖堂（ウズムル教会）の保存に関する調査成果」

伊庭 千恵美（京都大学）「ウズムル教会の微気候と劣化」

佐野 勝彦（ディアドディ）「カッパドキアの凝灰岩に対する強化撥水処置」

菅原 裕文（金沢大学）「アギオス・シメオン・スティリティス聖堂」

A02 計画研究 02 第 4 回研究会「古代西アジア都市の景観と社会」

日時：2019 年 6 月 2 日（日）15:30-18:15

会場：筑波大学 東京キャンパス 文京校舎 432 教室

プログラム：

唐橋 文（中央大学）「初期王朝時代ラガシュの景観と社会」

渡井 葉子（筑波大学）「紀元前一千年紀バビロニアの都市の景観と社会」

三津間 康幸（筑波大学）「セレウコス朝・アルシャク朝時代バビロンの景観と社会」

A01 計画研究 01 第 6 回研究会・日本西アジア考古学会第 24 回総会・大会特別セッション「文明の原点を探る II 筑波大学の西アジア調査から」

日時：2019 年 6 月 15 日（土）14:00–17:45

会場：筑波大学 第一エリア 1D 棟 204 講義室

プログラム

三宅 裕（筑波大学）趣旨説明

常木 晃（筑波大学）「新石器時代のメガサイトとしてのテル・エル・ケルク遺跡」

久田 健一郎（筑波大学）「石器と珪質岩—石器素材理解への地質学的アプローチ—」

有村 誠（東海大学）「テル・エル・ケルク遺跡からみた北西シリアの新石器化—石器製作を中心に—」

前田 修（筑波大学）「西アジアの黒曜石交易と石器文化」

丹野 研一（龍谷大学）「テル・エル・ケルク遺跡の考古植物調査から始まった小麦新品種の開発」

本郷一美（総合研究大学院大学）「『肥沃な三日月弧』北部における家畜飼育の開始と周辺地域への伝播」

三宅 裕（筑波大学）「アナトリアからみる北西シリアの新石器時代」

A02 計画研究 02 第 5 回研究会：国際ワークショップ

“Recent Archaeological Research in Southern Iraq”

日時：2019 年 6 月 22 日（土）13:00–17:00

会場：サンシャインシティ文化会館 709 室（東京都豊島区東池袋 3-1-4）

プログラム：

Kazuya Maekawa (Kokushikan University, Kyoto University) : “Gišša (alleged Umma) in Early Dynastic IIIb Sumer: A new perspective from new documents from the “Umma region””

Haider Almamori (University of Babylon) : “Excavations at two Sumerian and Babylonian cities”

Neshat Alkhafaji (Kufa University) : “Three unpublished texts: Naram-Sin inscription, marriage contract and mathematical text”

A02 計画研究 02・計画研究 03 第 1 回合同研究会：特別講演会

日時：2019 年 6 月 28 日（金）17:00–18:00

会場：筑波大学 総合研究棟 B 110 教室

講師：河合 望（金沢大学）

演題：「古代エジプトにおける都市の景観と構造—新王国時代を中心に— 研究の現状と課題」

A01 計画研究 01・A02 計画研究 02 第 1 回合同研究会「都市文明の本質を探る—西アジアとその周縁—」

日時：2019 年 7 月 27 日（土）13:00–17:30

会場：筑波大学 東京キャンパス 文京校舎 120 講義室

プログラム：

三津間 康幸（筑波大学）「セレウコス朝およびアルシャク朝時代バビロンの都市構造—『バビロン天文日誌』

の記述を中心に—」

小高 敬寛（東京大学）「新石器化から都市化へ—前 6000 年頃のザグロスとメソポタミア—」

千本 真生（筑波大学）「ヨーロッパとアジアの接触—先史バルカン半島における都市化をめぐる—」

上杉 彰紀（関西大学）「都市・交易・地域間関係—インダス文明とアラビア半島の関係を中心に—」

足立 拓朗（金沢大学）「南レヴァントにおける先史時代遊牧民交易と都市」

B01 計画研究 04 第 2 回研究会「古代西アジアをめぐる水と土と都市の相生・相克と都市鉱山の起源」

日時：2019 年 8 月 3 日（土）12:30–17:40

会場：同志社大学 室町キャンパス寒梅館 6 階大会議室

プログラム：

安間 了（徳島大学）「メソポタミア地方における堆積作用と都市の盛衰」

黒澤 正紀（筑波大学）「古代西アジアでの金属利用の歴史」

中野 孝教（総合地球環境学研究所）「スズ同位体比を用いた青銅器産地判別」

浅原 良浩（名古屋大学）「イラン・ザンジャン州の磁鉄鉱—燐灰石鉱床の鉱石および母岩の化学組成と Sr-Nd-Fe 同位体組成」

横尾 頼子（同志社大学）「イランにおける降水の化学組成と季節変化」

南 雅代（名古屋大学）「イランの石筍・トラバーチンを用いた西アジアの古気候復元の試み」

C01 計画研究 05 第 10 回研究会：国際ワークショップ

“Network and Urban Landscape in Historical Perspective:Focusing on Urban Network“

日時：2019 年 8 月 24 日（土）9:30–17:00

会場：American University in Cairo, Main Building, Class 215

プログラム：

Minoru Inaba (Kyoto University) “Trade Network and the Cities in the Indo-Iranian Borderlands”

El Sayed Abbas Zaghlul (National Authority for Remote Sensing and Space Sciences) “Hydrogeology and Water Logging Problem in Egypt’s Deserts, Case Study: Abu Meina Archaeological Site, Burg Al-Arab, Egypt Using Remote Sensing and GIS Techniques”

Nobutaka Nakamachi (Konan University) “From ‘Ayntab to Cairo: The ‘Ulama Network seen from al-‘Aynī’s Autobiographical Descriptions”

Mohamed Soliman (National Research Institute of Astronomy & Geophysics) “Urban Tides of Medieval Alexandria: Evolution Directions and Shrinkage Factors”

Akihiko Yamaguchi (University of Sacred Heart, Tokyo) “Change of Trade Routes and Emergence of Cities in Safavid Iran: Focusing on the Rise of Some Kurdish Towns”

Tomoko Morikawa (The University of Tokyo) “From New Julfa of Isfahan to the World: Armenian Trade Network and a Non-Muslim Quarter in a Capital City”

Sabri Ahmed al-Adl (Misr International University) “Trade Networks in the Mamluks during the 18th century”

C01 計画研究 05 第 11 回研究会：国際ワークショップ

“Network and Urban Landscape in Historical Perspective:Focusing on Urban Structure”

日時：2019 年 8 月 26 日（月）9:00–17:30

会場：“Library of Alexandria, Mezzanine floor: Meeting Room A”

プログラム：

Eman Shokry Hesham (The German Archaeological Institute in Cairo) “The History of Urbanizing Luxor City”

- Nasrah Abd al-Moatagali (National Archives) "Urban Developments of Alexandria in the 18th century"
Naoko Fukami (JSPS Research Station, Cairo; Kokushikan University) "Analysis of Napoleon's Cairo Map"
Magdi Guirguis (Kafrelsheikh University, IFAO) "Reconstructing the Urban History of a Coptic Neighborhood in Cairo in the Ottoman Period"
Takenori Yoshimura (Daito Bunka University) "Sabils in Cairo"
Alaa el-Habashi (Menoufiya University) "Haras and Streets"
Naofumi Abe (Ochanomizu University) "Tabrizi Families in Quarters"
Mohammad Sabri al-Dali (Institute of Arab Research and Studies Cairo) "Villagers in the City from 15th century AD: Cairo as a Case Study"

A02 計画研究 03 第 4 回研究会：国際シンポジウム

日時：2019 年 9 月 9 日（月）13:30–16:40

会場：早稲田大学 戸山キャンパス 36 号館 682 教室

プログラム：

SESSION 1: Amenhotep III and the Theban Temples

Betsy M. Bryan (The Johns Hopkins University, USA) "Amenhotep III and the Mut Temple Rituals"

Hourig Sourouzian (The Colossi of Memnon and Amenhotep III Project) "Amenhotep III and the temple of millions of years at Thebes"

SESSION 2: Amenhotep III and the Theban Necropolis

Melinda Hartwig (Michael C. Carlos Museum, Emory University, USA) "Theban Tombs and Elite Integration in Amenhotep III's Deification Program"

Jiro Kondo (Waseda University) "The Tomb of Userhat (TT47) and the large rock-cut tombs in Thebes under the reigns of Amenhotep III and Amenhotep IV"

Nozomu Kawai (Kanazawa University) "The tomb of Amenhotep III (KV22) and its Funerary Equipment"

A02 計画研究 02 第 8 回研究会：特別講演会

日時：2019 年 9 月 26 日（木）15:00–18:00

会場：筑波大学 プロジェクト研究棟 306/307 西アジア文明研究センター図書室

講師：Uri Gabbay (Hebrew University of Jerusalem)

題目："Akkadian Hermeneutics: The Commentaries of Ancient Mesopotamia"

第 3 回領域全体研究会

日時：2019 年 10 月 26 日（土）12:30–18:30

会場：筑波大学 春日キャンパス 7A106 教室

プログラム：

イントロダクション：山田 重郎（筑波大学）

計画研究 01：三宅 裕（筑波大学）「西アジア新石器時代の集落構造について」

計画研究 02：三津間 康幸（筑波大学）「古代西アジア都市の景観と構造」

計画研究 03：河合 望（金沢大学）「古代エジプトの都市の景観と構造」

計画研究 04：黒澤 正紀（筑波大学）「古代西アジアの自然環境と都市鉱山の起源」

計画研究 05：山口 昭彦（聖心女子大学）「近世西アジアにおける都市景観の変容」

計画研究 06：松原 康介（筑波大学）「イスラーム都市論から現代都市計画へ：都市研究の流れと構造」

C01 計画研究 05 第 12 回研究会

日時：2019 年 10 月 27 日 (日) 10:00–16:00

会場：東京大学 本郷キャンパス 法文 2 号館第三会議室

プログラム：

中町 信孝 (甲南大学) 「境域都市としてのアインターブ：マムルーク朝時代を中心に」

杉山 雅樹 (京都外国語大学) 「15 世紀ヘラートにおけるナクシュバンディーヤのネットワーク」

A02 計画研究 02 第 9 回研究会

日時：2019 年 10 月 30 日 (水) 17:00–18:15

会場：筑波大学 総合研究棟 B110

発表者：Gina Konstantopoulos (University of Tsukuba)

題目：“Within and Without: Assyrian and Babylonian Conceptions of the World and the City”

C01 計画研究 06 第 7 回研究会

日時：2019 年 11 月 3 日 (日) 14:00–17:00

会場：筑波大学 東京キャンパス 文京校舎 557 教室

プログラム：

安田 慎 (高崎経済大学) 「イスラーム文化遺産論試論—観光における宗教の資源化をめぐる」

田中 英資 (福岡女学院大学) 「滅んだ都市と生きている都市の関わり—トルコ西部の都市遺跡保護のあり方を中心に」

A02 計画研究 02 第 10 回研究会・古代オリエント博物館共催：特別講演会

日時：2019 年 11 月 17 日 (日) 15:15–16:45

会場：サンシャインシティ文化会館 7 階 710 室

講師：青木 健 (静岡文化芸術大学)

題目：「サーサーン朝の帝国都市と宗教」

A01 計画研究 01 第 8 回研究会

日時：2019 年 11 月 24 日 (日) 15:00–

会場：筑波大学 東京キャンパス 文京校舎 (茗荷谷) 557 ゼミ室

発表者：常木 晃 (筑波大学)

題目：「西アジアにおける初期の印章と封泥」

A01 計画研究 01 第 9 回研究会

日時：2019 年 12 月 21 日 (土) 15:00–17:00

会場：筑波大学 東京キャンパス 文京校舎 122 講義室

プログラム：

本郷 一美 (総合研究大学院大学) 「ジャルモ出土動物骨 (2018 年) 概報」

前田 修 (筑波大学) 「考古学におけるランドスケープ研究：認識論的アプローチ」

A02 計画研究 02 第 11 回研究会「アッシリアの属国と属州：テル・タバンの遺跡とヤシン・テペ遺跡の調査成果から」

日時：2020 年 1 月 24 日（金）12:30–18:30

会場：筑波大学 東京キャンパス 文京校舎 557 ゼミ室

プログラム：

テル・タバンの遺跡

沼本 宏俊（国士舘大学）「テル・タバンの出土、中・新アッシリアの遺構と土器変遷」

柴田 大輔（筑波大学）「テル・タバンの出土アッシュル・ケタ・レシエル 2 世の記念碑文とその歴史的背景」

ヤシン・テペ遺跡

西山 伸一（中部大学）「考古学から見たヤシン・テペ：新アッシリア時代の拠点都市と属州支配」

山田 重郎（筑波大学）「ヤシン・テペ出土ネックレス碑文」

A01 計画研究 01 第 10 回研究会

日時：2020 年 1 月 25 日（土）15:00–17:00

会場：筑波大学 東京キャンパス 文京校舎 121 講義室

発表者：Fiona Pichon (JSPS Postdoctoral Fellow, University of Tsukuba)

題目：“Use-wear analysis of lithic tools from Dja’ de el-Mughara: Technical activities and cultural traditions during the EPPNB in the Northern Levant (Syria, 9th mill.)”

A02 計画研究 02 第 12 回研究会：特別講演会

日時：2020 年 2 月 3 日（月）13:00–14:30

会場：筑波大学 総合研究棟 B108

講師：伊藤 早苗（上智大学）

題目：「アッシリア帝国の市書記 *tupšar āli*」

C01 計画研究 06 第 8 回研究会：特別講座

日時：2020 年 2 月 18 日（火）10:00–17:00

会場：筑波大学 東京キャンパス 文京校舎 557 講義室

講師：三好 崇弘

目的：「若手養成：Q-GIS 入門講座」

C01 計画研究 05 第 13 回研究会

日時：2020 年 2 月 19 日（水）9:30–17:30

会場：東京大学 本郷キャンパス 法文 2 号館 教員談話室

プログラム：

Tomoko Morikawa (The University of Tokyo) : Opening Remarks

Seiro Hatuta (Tokai University) : “Introductory Overview: What are ‘Cities’ in the Achaemenid, Parthian and Sasanian Periods?”

Yasuyuki Mitsuma (University of Tsukuba) “Citadel of Babylon under Greco-Macedonian and Iranian Rulers”

Yousef Moradi (SOAS University of London) “Rediscovering Sarab-e Murt and its Relation to the Town of Holwan”

Carlo Cereti (Sapienza University of Rome) “The Middle Persian Shahrestaniha-e Eranshahr and the Geography of the Sasanian Empire”

Alisher Begmatov (The Berlin-Brandenburg Academy of Sciences and Humanities) “Cities on the Northern Fringes of the Sasanian Empire and Their Vicissitudes during the Pre-Islamic and Early Islamic Eras”

Manabu Kameya (Hirosaki University) "Early Islamic Military Cities and their Sasanian Background"

Kazuya Yamauchi (Teikyo University) Discussion

C01 計画研究 05 第 14 回研究：特別講演会：

"Rediscovering the Iranian Antiquity: Recent Archaeological and Epigraphical Researches on the Sasanian Sites"

日時：2020 年 2 月 21 日（金）15:00-18:00

会場：京都大学 人文科学研究所 本館セミナー室 1

プログラム：

Carlo Cereti (Sapienza University of Rome) "The Paikuli Project: Researches on Narseh's Monument and Inscription in Iraqi Kurdistan"

Yousef Moradi (SOAS University of London) "Takht-e Soleyman in the Light of Archaeological Excavations: Report of Seasons 2002-2008"

A02 計画研究 03 第 5 回研究会

日時：2020 年 2 月 23 日（日）15:00-17:00

会場：早稲田大学 戸山キャンパス 39 号館 1 階 考古学実習室

プログラム：

内田 杉彦（明倫短期大学）：「新王国時代の文字資料にみられる『居住地』の呼称について」

西本 真一（日本工業大学）：「マルカタ都市王宮における景観と構造」

科研費新学術領域研究

都市文明の本質：古代西アジアにおける都市の発生と変容の学際研究 2 研究成果報告 2019 年度

発行日： 2020 年 3 月 31 日

編集： 山田重郎（領域代表）

発行： 文部科学省科学研究費補助金 新学術領域研究（研究領域提案型）平成 30-34 年度
「都市文明の本質：古代西アジアにおける都市の発生と変容の学際研究」

URL: <http://rcwasia.hass.tsukuba.ac.jp/city/>

〒 305-8571 茨城県つくば市天王台 1-1-1 筑波大学人文社会系 西アジア文明研究センター

Email: rcwasia@hass.tsukuba.ac.jp

印刷・製本： 前田印刷株式会社

2018-2022 年度
文部科学省科学研究費補助金 新学術領域研究（研究領域提案型）
都市文明の本質：古代西アジアにおける都市の発生と変容の学際研究 2
研究成果報告 2019 年度

<http://rcwasia.hass.tsukuba.ac.jp/city/>

